山手樹一郎長編時代小説全集＝13

鳶のぼんくら松

他二編

春陽堂

鳶のぼんくら松 他二編

山手樹一郎長編時代小説全集＝13

春陽堂

春陽堂●390円
0193－200413－3066

山手樹一郎長編時代小説全集＝13

鳶のぼんくら松 他二編

春陽堂

作品案内

文芸評論家　石井富士弥

不公平なことに世の女の子たちは、世間の秩序からはみ出したようなちょっとヤクザっぽい奴、中身は空っぽでもいかにも物憂げでニヒルな顔つきをしているいわゆる〝影のある〟クールな男にイカレてしまう。時代小説の主人公はこういう型の独占だった。

これを裏返したところに山手明朗時代編がある。男伊達に生きる町内の鳶の兄イなどカッコいい見本のようだが、ここでも作者は硬骨ぶりを発揮する。そんな都会人の優越感に挑戦するように三島在のイモ青年、テンポがあわないので〝ぼんくら〟をつけて呼ばれる松太郎を設定した。彼のまっすぐな心情と対照的な都会のはねっ返り娘、踊りの師匠お千加が意地も張りもなくして首ったけになるいきさつこそ、皮肉な人間批評ともいえる。しかし、苦労人の作者は何食わぬ顔で穏やかに生っ粋の江戸世話落語の話術で物語る。――滋味あふれる佳編「鳶のぼくら松」に、同じへそ曲がりぶりで長脇差物を書くとこうなるという心楽しい珍編「ぼんくら千両」を併収！

鳶のぼんくら松　他一編

山手樹一郎長編時代小説全集　13

春陽堂

鳶のぼんくら松　他一編

山手樹一郎長編時代小説全集　13

鳶のぼんくら松　他二編

山手樹一郎長編時代小説全集

13

春陽堂

●編集／解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
伊藤文八郎
風巻紘一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
*永岡慶之助
松永義弘
水野泰治
*本巻執筆者

目次

鳶のぼんくら松……一
ぼんくら千両……二五

鳶（とび）のぼんくら松

やくざの難題

六郷川の中流ですれちがった渡し舟が、春がすみの中をのんびりとこぎ分かれて、一つは草萌える六郷のほうへ、一つはこっちへ客を運んでくる。ちょうど人の出盛る午さがり、川崎のほうの岸には今の舟に乗り遅れた人たちがもう五、六人、うらうらとかげろうになぶられながら、立ったり、しゃがんだり、これものんびりとくつろいだ顔つきで、舟の着くのを待っていた。どこかの眠そうな牛の声が鳴いている。

「やい、なにをしやがんだ」

ふいにかみつくような一喝が、のどかな人々の耳をぎょっとさせた。江戸の大店の主人ともみえる父娘づれの供をしていた十三、四の丁稚が、なんの気もなく道ばたの石をけった。それが運悪く、少し離れてさっきから妙に父娘のほうを見るでもなく、見ないでもなく立ち話をしていたやくざらしいふたりづれの足もとへ軽く飛んでいったのである。そして、当たったか当たらないかわからないうちに、ひとりのほうがおおかみのような目を光らせて、つかつかと寄ってくるなり、丁稚のむなぐらを引っつかんでいた。

「あ、ごめんなさい。親方。すいません。ついしたんですから、勘弁してください」

びっくりして、丁稚は青くなりながら夢中でわびたが、

「なにをぬかしやがる。てめえ、だれに頼まれて、おれに石をぶつけやがったんだ。さあ、ぬかせ。ぬかさねえか」

おおかみやくざはおとなげなく血相を変えて丁稚をこづきまわす。

「違います。頼まれたなんて、ほんとについしたんです。ごめんなさい」

「ばかをいえ、つい出来心で、人のほうへ石をぶつけるやつがあるか。だれかに頼まれたか、それとも、おれになにか遺恨でもあるのか。正直にぬかせ。早くぬかせといっているのに、わからねえか」

あまりにも凶暴にこづきまわされて、丁稚はどうされるかと恐怖に口がきけなくなり、いまにも泣きだしそうな顔だ。

「親分さま」

見かねて、主人が進み出た。

「これはてまえがつれてまいりました小僧で、まことにとんだそそうをいたしました。不調法の段はてまえからも幾重にもおわび申し上げます。どうぞ、このたびのところはごりょうけんなすってくださいまし」

年配も五十に近いゆったりとした人がらで、それが両手をひざのあたりまで下げてのていねいなあいさつである。

「ふうん、こりゃおまえさんとこの小僧か？」

「はい。なにぶんまだ子どもでございまして、つい足が石をいたずらしたくなったものとみえます。どうぞ御勘弁を願います」

「そうか。そうわかってみりゃ、おれも小僧なんか相手にしたってしようがねえ、りっぱにおまえさんのあいさつを受けようじゃねえか」

どすんと突き飛ばされた丁稚を、娘がいそいで助け起こしていた。親が自慢でつれて歩くのだろう。十六、七とも見える、ぽってりと下ぶくれのした、まことにあざやかな下町娘である。

「さっそくお聞きとどけくださいまして、ありがとうございます」

「冗談いうねえ、おれはまだなんにも聞きゃしねえや。おまえ、いい年をして、なんだって小僧なんかをけしかけておれに石をぶつけさせたんだ。それからまず聞こうじゃねえか」

いわゆる難癖をつけるというやつで、理屈もなにもあったものじゃない。

「とんでもない、なんでてまえがそんな失礼な

まねをいたしましょう。まったく、小僧のそそうでございます。どうぞお許しを願います」
「いいや、おれははっきりと納得のいくまで勘弁はできねえよ」
「そこを、まげて、なんとか御勘弁願いとう存じます」
主人はどこまでも穏便に頭を下げるばかりだ。
「岩の字、だんながあんなにあやまっているんだ、おれがひとつ仲裁しようじゃねえか」
うしろで腕組みをしていた色の浅黒い、どこか今戸焼きのたぬきに似た相棒が、のっそりと横から口を出した。
「あ、親分さま、どうぞよろしくお願いいたします」
主人もほっとしたようだし、いつのまにか、いっぱいまわりを取りまいていたやじうまも、いずれ目的は金だろうが、これでどうやら納まりはつくだろうと見ていた。
「いいとも、仲裁はときにとって氏神ということがあらあね」
「はい、お任せいたしますでございます」
「岩、だんなは清く任せてくれるといいなさる。なあ、おまえもそうへそばかり曲げていねえで、どこかそのへんで仲直りに一杯やろうじゃねえか。おれに任せるな、おい」
相手を娘づれとみて、たぬきやくざがおためごかしに持ち出した難題だ。が、主人はさすがに世なれていた。手早く小判を二、三枚紙包みにして、
「親分さま、まことに失礼でございますが、これでどうぞ一杯やってください。本来なら、どこへなりとお供すればよろしいのですが、ごらんのとおり足弱な娘づれ、これから江戸へ帰りますので、せいぜい日いっぱいでございます。かってばかり申しましてあいすみませんが、どうぞお許しを願います」
と、如才なく小腰をかがめて金包みを差し出した。
「へえ、こりゃなんだね、だんな」
「ほんのおわびのしるしでございます」
「ふざけちゃいけねえ、だれがおまえさんに金なんか出せといった。おまえが困っているようだから、見かねておれが仲へはいって、どこかで仲直りをさせてやろうっていってるんじゃねえか。見そこなっちゃいけねえ。さあ、つきあってくんな」
たぬきやくざがせせら笑って、いきなり主人の差し出している手首をつかんだ。
「そんな乱暴な――」
さすがに、主人がさっと顔色を変える間に、
「いいじゃねえか、仲直りだ、さあ行きねえ」
すばやくおおかみやくざが左へ回って、左の手首をつかむ、むりにもひったてていこうというのだ。あまりのあくどさに、娘も、丁稚も、見ていたやじうまさえはっとしたとき、のっそりとその悪党たちの前へ行って立って、
「おまえさまたち、よくねえりょうけんだなあ」
あきれたようにふたりの顔をまじまじとながめた男がある。めくらじまのあわせをじんじんばしょりにして、紺のももひき、草履がけ、どう見ても水のみ百姓のせがれといった身なりだが、からだつきのがっしりとした、案外むじゃきな顔をした若者である。

あだっぽい女

「なんだと――」
見るなり、おおかみやくざが主人の手を放して、威嚇するように凶暴な目を光らせながらつめよった。
「さっき小僧さんのけった石をおれ見ていたけれど、おまえさまの足には当たらなかったようだぞ」
相手はけろりとしていってのける。
「よけいな口ばしを入れるねえ。だれだ、てめえは」

「おれは箱根の向こうの三島の百姓で、松太郎というもんだがね、当たりもしねえ石を、やれぶつけたの、仲直りのと、それは難癖をつけるというもんだ。あんまり弱い者いじめをするもんではねえ」

「やい、てめえのいうことはそれだけか」

「うむ。それだけだよ。悪いことはしねえもんだ」

たかがまのぬけた田舎者めとのんでかかっていたのに、その田舎者がこなまいきにも、人を教えさとすようなことをいうのである。すごんでいたおおかみやくざはたまらなくなったとみえ、

「なにをぬかしやがる、この田吾作め」

けんかっぱやい身構えでむなぐらを取るなり、右のこぶしをかため、ぽかぽかと頭をなぐりつけようとした。が、相手はもっそりしているように見えて、思ったより敏捷に、ひょいとその手を受けて、つかみ止めて、

「乱暴してはいけねえだ。そんな無法するから、けんかになるだ」

と、しごく落ち着きはらっている。

「放せ、こんちくしょう」

「放せばまた打つだろう」

「くそっ、もう承知できねえ」

おおかみは相手を振り切ろうとして、猛然と身をもみ、けたおし、ねじ倒そうとあばれだしたが、松太郎はおおかみの動くままに振りまわされながら、両手だけはがっしりと放さない。

「兄貴――」

と、おおかみがとうとうたぬきに救いを求めた。

「ようし、このやろう」

たぬきが血相を変えて、うしろから飛びかかろうとした。

「だめなこった」

松太郎が油断なく、おおかみを盾にとって身をかわす。

「やろうっ」

「だめなこった」

足もとから旋風のように砂ぼこりがまきあがって、やじうまがげらげらと笑いだした。

「ちくしょう、たたっきってやる」

たぬきはかっとなって長脇差を引き抜いたが、結果は同じことで、きるとなればおおかみもいっしょにきらなければならない。

「あぶねえ、兄貴、あぶねえ」

「ばかやろう、早くころがるんだ」

そうかと気がついて、岩が自分からあおむけにひっくりかえろうと身をそらしたとたん、松太郎が手を放して、おおかみの長脇差の柄を握ったから、おおかみはおもいきりひっくりかえって、したたか頭をぶつけたらしく、うーむと目をまわしてしまった。

「来るかね、兄貴さん」

松太郎はおおかみの長脇差をさげて、にやにや笑っている。やろうっ、とたぬきは刀を構えたものの、相手があまりにもゆうゆうとしているので、しかも仲間はのびてしまったようだし、ちょいとかかっていけない。こういう連中は、たいていものはずみで強くなって、夢中だから人はきれるが、相手が強いとわかると、すぐおじけがつくと見てとったから、

「兄貴さん、もう仲直りをしようや」

と、松太郎はもちかけた。

「なんだと、このやろう」

「仲直りに、一杯やらねえかね」

「今になって、なにをぬかしやがる」

「まあそうおこんねえで、あれを見るがいいだ。かんじんのけんか相手は、もう渡しに乗って川のまん中あたりだ」

見ると、なるほど、いま中流をこいでいく渡し舟の中に、さっきの小町娘の緋鹿の子の結綿がしきりにこっちをながめているようである。

「おれのような貧乏人を相手にしたって、一文にもなんねえからな。もうけんかはよすべえ」

「なんだってめえ、つまらねえじゃまをしやがったんだ。くそおもしろくもねえ」
「まあいいから、兄貴さん、早くその自分でかってにひっくりかえったおじさんの介抱をしてやんなよ、ひどく頭をぶったようだからね」
次の舟で六郷を渡った松太郎は、なんだかおかしいような、ふにおちないような、妙な気持ちだった。すっかり闘志を失ってしまったらしいたぬきやくざは、倒れているおおかみやくざのそばへのこのこといって、しっかりしろ、岩、と抱き起こしたが、岩は青い顔をして、かわいそうなほどぐんにゃりしている。しようがないというように、たぬきやくざはそれを河原のほうへひっぱっていって、なにくれとめんどうをみてやっていた。そんなところはそうたいして悪党とも思えないが、いったい何が目的で、あんなあくどいまねをしたのだろう。金なら、相手はちゃんと心得て小判を包んでいるんだから、あのときすなおに受け取りそうなものだ。
松太郎にはどうにもわからない。
わからないといえば、あの町人もさんざん人にほねをおらせておきながら、ひと言の礼もいおうとはしないで、さっさと渡しに乗っていってしまった。おれが負けると、あとがまためんどうだとでも考えたのだろうか。礼などいわれたくて飛び出したわけではないから別に腹はたたないが、あんまり現金すぎるようで、少しあじけない気がするのは事実だ。
そんなことを考えると、こっちが律儀すぎるなと思ったりして、歩いていると、
「もし、にいさん」
ふとうしろから声をかけられた。見ると、あねさまかぶりに紺がすりの道行き、結いつけ草履という、旅慣れたようなひどくあだっぽい女で、同じ渡し舟に乗り合わせていたから、顔はよく見知っている。それがにっこり笑いながら、なれなれしく肩を並べてくるのだ。
「なんか用かね？」

「いいえ、別に用ってこともないけれど、お強いんですね、おにいさんは」
そうだ、この女、たしかあのけんかのときも、ずっとやじうまのうしろに立っていたっけ、と思い出す。
「見ていたんかね」
「ええ、初めからおしまいまで」
「もの好きだな、女のくせに」
あまりせじっけもない松太郎だから、遠慮なくいってにこりと笑う。
「ごあいさつですね。でものの好きってのは、にいさんのほうでしょうよ」
世慣れているらしく、女も負けていない。
「そういえば、少しおせっかいだったかな」
「ええ、とんだおせっかい——。ほんとうは、あそこへあんたが飛び出しちゃいけなかったんです」
「へえ、どうしてだね」
「あそこへ飛び出すために、わざわざふたりの憎まれ者に金をやって、あの筋書きをこしらえた人がちゃんと別にいたんですもの。ほ、ほ、その人の顔が見てやりたかった」
女はおもしろそうに笑いだすのである。
「たまげたなあ。ほんとうかね、それは」
「たぶん、まちがいないと思うわ。にいさんはあのとき、うしろのほうに深編み笠をかぶった着流しのお侍のいたのに気がつかなかった？」
「そういえばいたな。おれ、侍のくせに、なんで早くロをきいてやらないんだろうと思っていたんだ」
「あれはね、あだ名を業平粂三、本名、石上粂三郎っていう、評判の悪御家人なんです。男っぷりがいいのを種に、女をくいものにしているやつだから、きっとあの親娘と連れになってひと仕事するために、あんな筋書きを書いたんでしょうよ。だから、もう少しふたりにいやがらせをさせておいて、そこへ飛び出す、ふたりをみごとに取って投げて親娘に恩を売ろうと待っ

ていたのに、ひと足先へにいさんが出てしまったんですもの、きっと、あんた恨まれてるわよ」

「その侍、たしかあの親娘といっしょの舟だったが、だいじょうぶだろうか」

急にそれが心配になりだす人のいい松太郎だ。

「ほっときなさいよ、人があぶない思いをして助けてくれたのに、礼もいわないで、自分たちだけ逃げ出すようなやつ、どうなったっていいじゃありませんか」

女はさばさばといってのけて、

「ほんとうは、あたし、だんなのやり方にも少しおこってるんです」

とつけ足した。だから、わざわざこうして話しかけてくれたんだろうか。これも相当におせっかいな性分らしいと、松太郎はちょいとおかしくなった。

口げんか

「そうもいかねえんだろう、業平粂というやつが悪いやつなら、またなんか悪さするだろうからな。かわいそうだよ」

「案外、あんた苦労性なのね」

「おれが苦労性なら、ねえさんは薄情の性かな」

「まあ、憎らしい」

女はいやというほどひじでわき腹をこづきながら、

「ああわかった。あんた、あのきれいな娘さんにほの字なのね。だから、もう一度助けてやって、あのかわいい口からお礼がいってもらいたいんでしょう」

と、ひやかすような憎まれ口をたたく。口もたっしゃだが足もたっしゃな女で、春風に緋縮緬をなぶらせながら、さっきから平気で男の足並みに歩調を合わせている。やがて、大森に近く、このへんはもう江戸へひとまたぎだから、

街道に人足が絶えず、行きあう目が、このそまつな田舎者と、おもいきってあだっぽい女が、口げんかをしながら肩を並べていくので、みんな珍しそうにながめて通りすぎていく。

「ああ、おれもわかった」

松太郎はわざととぼけた声をあげた。

「何がわかったの、にいさん？」

「よすべ、ねえさんのひじ鉄砲は痛いもんな」

「いわなけりゃ、もっと大きなひじ鉄砲を覚悟するんだね」

「そんなら、同じことだからいうかな。あねさんこそ、おれにほの字ではないのかね」

「しょってるわ、この人――」

「違ったかな」

「おきのどくさまみたいなものね」

「それじゃ、ごの字のほうかな」

「なあに？　そのごの字ってのは」

「とてもべっぴんだしさ、口も足もたっしゃだしさ、だから、ことによるとごの字――」

「なんだえ、田舎っぺのまぬけ」

いきなり、どすんと、力いっぱい突き飛ばされてしまった。さすがにおこってしまったらしく、そのままさっさと足早に歩きだす。もうふり返ってみようともしない。

あんまりなれなれしいので、どうかと思い、女ごまのはえだろうといわぬばかりにからかってみたら、おこってしまった。おこるところをみると、そう悪い女でもないらしい。

道はやがて大森海岸へ出て、はるか青い海の向こうに房総の山々が薄くかすみ、行くてに近く、京橋から深川一帯の甍が、ぼうっと花曇りの空の下にながめられた。

おや、あれが江戸かなと、はじめて松太郎はびっくりして目をみはる。これはたいへんだと思った。

実は、あの江戸のどこかに生みの親がいるというので、こんどはじめて三島の在から出てきた松太郎なのだ。いま、その江戸の町をはるか

海の向こうに見て、あの空の下にまだ見ぬ実の親たちがいると思うと、妙に胸がわくわくするような、しかし雲をつかむような話だから、あ広くてはなおさらのこと、一生かかっても、とてもめぐり会うなんてむずかしいかもしれない、とそんな気もしてくる。

「おまえの実の親は、江戸のお旗本だから、この産衣を証拠に捜してみるがいい」

このあいだおふくろが死ぬとき、意外なことを言いだしたのだ。それは今から二十二年まえの春、箱根を下った三島の宿はずれの道ばたで、若い旅の侍夫婦が泣きむずかる赤ん坊を間にして途方にくれていた。通りかかったおふくろが、どうなさいました、と聞いてみると、若い母親の乳が出ないのだという。

「失礼ですが、ちょっと貸してごらんなさいまし」

おふくろはちょうど同じくらいの赤ん坊に死なれたばかりで、その墓まいりの帰りだった。

十年ぶりとかではじめてできた男の子だったとかで、あきらめきれないし、乳が張ってくるたびに泣きたくなるときだったので、その赤ん坊に乳をあてがってみると、その子はむさぼるように吸いつき、飲むだけ飲むと、安心したようにすやすやと眠ってしまった。

そのかわいい顔をながめて、若い侍夫婦はほっとため息をついている。おふくろもおもわずため息が出た。これが自分の子だったらと思うと、もうほしくて、死んでも放したくなくなってきたのだという。

それとなく見ると、若い夫婦はけっして豊かな旅ではないらしく、身なりもほこりじみているし、母親のほうは美人ではあるが、苦労に負けたか、ひどくやつれてみえる。

「どちらまでおいでになるんです?」

おふくろは聞いてみた。

「長崎までの旅です」

「それはまあ、たいへんですねえ」

そして、三人は道ばたへ並んで腰を降ろしたまま、またしてもおもいおもいにそっとため息をついたという。

「この赤ん坊、お乳がなくて、そんなむりな旅をしたら死んじまう。わたしにあずけてください。たいせつに、たいせつに育てますから、帰るときまで、わたしに預けていってください、お願いします」

おふくろは赤ん坊ふびんさと放したくなさで、突然言いだした。失礼だとか、無礼だとかそんなことも考えるいとまはなく、しっかりと赤ん坊を抱きしめて、ほろほろ涙が出てしようがなかったという。

若い侍夫婦はちょっと顔を見合わせていたが、どっちからともなくうなだれてしまった。長い不如意な旅、赤ん坊の命、そして出ない乳、そんなことを考えると、せつなくて、さぞ思い迷ったことだろう。

「しの、お願いいたそう」

しばらくたって、夫のほうがやっと決断がついたように妻にいった。

「はい」

と答えて、若い妻は急にたもとを顔へあてた。

「たいせつにします。きっとたいせつにします。わたしは小田原在の百姓甚作という者のうちですから、いつでもたずねてください」

おふくろは三島在の百姓甚兵衛という者の女房だったが、もう一生赤ん坊は返したくないので、おもわずうそをついていたという。

「拙者は江戸の旗本のせがれですが、子細あって勘当の身だから、姓名は許していただきたい。この子の名は松太郎、おことばに甘えて、江戸へ帰れるときがまいるまでお預けいたす」

あらためて夫があいさつをしたが、おふくろはそれさえ半分しか耳にはいらなかった。どんなことで、母親のほうが、女だから急に心変わりがしないともかぎらない。それが心配で、

「たいせつにします。きっとたいせつにします

から」
もうそわそわと立ち上がっていた。
「あ、坊や――」
びっくりして、若い母親がすがりつき、もう一度抱きたいというように、眠っているわが子の顔にほおずりして、容易に放そうとしなかった。
「坊や、かんにんして、悪いおかあさま」
道ばただから、声をかみ殺して嗚咽するのを、いつまでもみれんだぞ、しの、と夫がしかって腕をつかみ、もう行ってくれ、とおふくろに目顔で知らせたその若い父親の目にも、涙があふれるように光っていたという。
「あたしはねえ、松や、おまえが孝行してくれたんで、ほんとうにしあわせだった。おまえは天が授けてくれた子なんだ、ああ、ありがたい、と思うたびに、おまえのほんとうのおかあさんのあのときの心を思い出して、申しわけない、あたしは人さまの子をだまし取りした、いまにおわびします、と神さまにあやまっていた」
とうとう、そのときがきたんだから、わたしが目をつぶったら、もう田も畑も家もいらない。少しばかりだが、それを金にして、江戸へ行って、実の親たちを捜し、ひと目無事なおまえの顔を見せてあげておくれ、死んだおとっつぁんも、それはちゃんと承知していたんだから、と、たんすの奥にそのまま洗ってしまってあった唐子人形を染め出した水色羽二重の産衣を出してくれた。
「おっかあ、いまさらなにをいうんだ」
あんまり突然な話なので、そのときはぼうぜんとして、とても本気にはなれなかった松太郎だ。
が、その母が墓になってしまい、もうだれも親身になってしかってくれる者も、喜んでくれる者もないと、身にしみてわかってみると、急に生みの親たちが恋しく思い出されてきたからふしぎである。で、はたしてそんな話だけで実の親たちが捜し出せるものやら、出せないものやら、とにかく家のしまつをすっかりつけて、住み慣れた三島を立ってきた松太郎である。
江戸の旗本といったところで、一口に八万騎というくらいだから、産衣一枚で捜そうっていうのがむりかもしれない。半分はそうあきらめながら、海の向こうに薄がすむ江戸の空ばかりながめて歩いていると、とんと前の女のやわらかい肩に突き当たってしまった。みなぎるような脂粉の香がぷんと鼻をかすめたので、ああそうだっけ、おれはさっき女をおこらせていたんだ、とすぐ思い出し、
「ぶつかってごめんなせえまし」
「いやな人――、なにをぼやぼやしてんの」
「だから、おれ、あやまっていたんだよ」
「そんなことじゃない。まだ気がつかないのかしら、ぼんやりしてるのねえ」
女がそっと指さすほうを見て、あれえ、と松太郎はやっと目をみはった。やがて海岸がつきて並木道へかかるあたり、深編み笠の着流しの侍が、さっきのだんなと連れ立って歩き、そのうしろから少し離れて、あの小町娘の緋鹿の子の結綿が、丁稚と並んでかげろうに燃えていく。
「かわいそうに、とうとう食いつかれちまったわ。どうしようねえ」
女はもうおこっていたことは忘れてしまったように、じっと松太郎の顔を見上げるのである。

鈴ガ森のおせっかい

「ねえさんはあのだんなを知っているんかね」
松太郎はふしぎそうな顔をした。
「知ってるわ。あれは両国横山町の大黒屋利兵衛という大きな呉服屋さんのだんなで、あのお嬢さんはお糸さん、年は十七、ひとり娘だから、お婿さんを捜してるんです」
そのだんなとつれだって話しながら行く深編み笠、着流しの侍は、あだ名が業平粂、本名石上粂三郎という悪御家人だと教えてくれたのも

この女だし、田舎者の松太郎には、このあだっぽくて、人慣れがしていて、ご の字とからかわれておこるくらいだから、腹黒い女とも思えないが、なんでもよく知っているのがどうもふしぎなのである。

「あの業平粂とかいう侍にだんなが食いつかれると、どんなことになるんだえ?」

「そんなことよくわからないけど、お糸さんをたらして傷物にするか、うまく因縁をつけて金をゆすりとるか、どうせろくなことはありゃしません。ごらんなさいよ、業平粂のほうからばかり話しかけて、だんなはただうなずいてるばかりでしょう。あれはだんなもとんだ連れができたと迷惑がっている証拠だと思うわ」

女の目はなかなか細かい。

「そういえば、娘も下ばかし向いて歩いてるな」

「どうお、松さん、あんたもう一度業平粂のじゃまをして、だんなを助けてみない。ことによると、お糸さんのお婿さんになれるかもしれないわよ」

半分はからかっているような口ぶりだ。

「まあ、よすべ」

「あら、ひきょうだわよ。あんた、さっきは、あたしが礼もいわないで逃げ出すようなだんな、ほっときなさいよっていったら、あたしのことを、薄情の性だっていったじゃありませんか。業平粂がこわいの」

「こわくはねえけれど、お糸さんの婿さんにされるのは困るな」

「へえ、あんなきれいな人、どうしていやなんだろ」

「つりあわぬは不縁のもとっていうからね、おれにはねえさんぐらいがちょうど似合いの嫁さまかな」

「あんた、田舎っぺのくせに、ずいぶん虫がいいのねえ」

あけすけに驚いてみせるのだから、この女も相当なものである。

「それほどでもなかっぺ」

松太郎はわざととぼけた顔。

「あんまりばかにおしでない」

「ばかになんかしねえだよ。うんとかわいがってやるだ」

「いい度胸ねえ、あんたは。そんな度胸があるんなら、業平粂をりっぱにやっつけてみせてごらんなさいよ」

「うまくやっつけたら、ねえさん、おれの嫁さまになるかね」

「そりゃ、お手並みを拝見したうえのことだわ」

「あはは、江戸のねえさんは口がうまいからかなわねえ。じゃ、おれひとつお手並み見せるから、ねえさんはかまわずにだんなを連れて逃げてもらおうかね」

「あら、ほんとうにやるの?」

さすがにびっくりした顔になる。その顔へにっこりうなずいてみせて、松太郎はもうさっさと足を早めていた。道はちょうど鈴ガ森へかかって、松林の向こうに春の青い海が見える八ツ(二時)下がりである。少しおせっかいがすぎるかな、とは思ったが、あくどいことはどうも黙って見のがせない性分だからしかたがない。

「もし、そこへ行く深編み笠のお武家さま――」

近づいて声をかけると、その声が大きかったので、みんな一度に立ち止まった。深編み笠はどんな顔をしたかしらないが、大黒屋父娘は丁稚まで、六郷の渡しで一度助けられているから、びっくりしたように目をみはっている。

「わしか――」

「へえ、お武家さまでごぜえます」

松太郎が六尺ばかり離れてもそりと立ち止まる。

「何か用か?」

「失礼でごぜえますが、その深編み笠をちょっと取って見せてくだせえまし」

侍に対して百姓がこういきなり切り出したのだから、これはむっとするのが当然で、

「なにっ」
と、業平粂がおもわず一歩前へ乗り出す。松太郎は遠慮なく一歩うしろへさがった。
「きさまはだれだ」
「東海道三島在の百姓で、松太郎といいますだ」
「その土百姓が、なんで人の顔改めなどしようというんだ」
かんかんにおこりだしたところをみると、これはそうたいしたはらのある悪党ではなさそうだ。
「おまえさまの背かっこう、うしろ姿が、おやじさまのかたき犬上軍兵衛に似ているからでござえます」
「おのれ、無礼な」
業平粂が柄に手をかけてまた一歩出る。松太郎が一歩さがる。早くもひとり立ち、ふたり、三人と立ち止まっていたやじうまたちが、かたき討ちだとよ、とささやきあっている。その間に、さっきの女が大黒屋のそばへ寄っていって、そでを引き、うなずきあって、父娘ともにさっさと逃げ出したところを見ると、まんざらいらぬおせっかいでもなかったようである。と見たから、
「そんなことといわねえで、どうかその笠、取ってみてくだせえまし」
松太郎はいよいよずぶとく出た。できるだけ相手をおこらせて、手間どらせて、その間に少しでも遠くへ父娘を逃がす必要があるからである。
「うぬっ」
業平粂はじだんだを一つ踏んで、この世にもふとどきしごくの土百姓をどうしてくれようかと、深編み笠の中からにらみつけているようだったが、
「おい、もしおれがこの笠を取って人違いだったら、てめえをたたききるぞ。それが承知なら笠を脱いでやる。どうだ」
とつめよってきた。

「人違いだなんて、そんなはずはねえです」
「よし、それなら見ろ」
腹だちまぎれに深編み笠をかなぐり捨てて、きっと柄に手をかけた顔は、むろん石上粂三郎のいきりたった顔で、なるほど二十七、八の、苦みばしったいい男ぶりだ。
「あれえ、違ったな」
「許さん、それへ直れ」
「おまえさまはたしか、業平の粂さんという殿さまでござえましたね」
「よけいなことをいうな」
「かんべんしてくだせえまし。人にはまちがいってことはありがちなもんだ」
「うぬっ」
そのそらっとぼけたようなつらがまえに、業平粂はたまらなくなったのだろう、だっと抜き打ちに飛びこんできたのを、そうくるだろうと待っていた松太郎だから、横飛びに逃げて、
「人殺しい」
すっとんきょうな声をあげながら、江戸とは反対の大森のほうへどんどん駆け出した。

よくおこる女

それから二刻(四時間)ほどたって、うまく業平粂をまいた松太郎は、品川の宿から高輪へかかってきた。
そこの大木戸をはいればいよいよ江戸の内で、田舎者だからまずその人通りの多いことにびっくりさせられる。
「まるでお祭りのようだな」
しかも、その歩き方が、女も男もなんとなくせかせかと気ぜわしく、のんびりしているのは自分ひとりだけのようだ。
もっとも、江戸へはいったら、だれをたずねて、何をしなければならない、という用のある松太郎ではない。当分は馬喰町あたりの宿へ泊まって、ひととおり江戸を見物してから、なにかしかるべき身の振り方をつければいいので、

その点のんきといえばはなはだのんきな、天涯孤独の身なのである。加えて、生来あまりくよくよしないほうのたちだから、はじめて出会った女に頼まれて、平気で命がけの道草もくうので、

「こんなに人間が多くちゃ、とてもあの女に二度とは会えなかろ」

実は、まだどこかで会えるような気がしていたから、別に名まえも聞かずに別れてしまった。すばらしい美人だっただけに、考えてみると、少し惜しい気もするのである。

「松さん――」

大木戸をはいると、ふっと肩を並べてきた女がある。

「あれえ」

松太郎は目を丸くした。今の今、惜しいなあと思った女の顔が、いたずらそうに笑っているからだ。

「ぼかんと口なんかあけて、みっともないわよ」

「けど、たまげたな」

「なにがさ」

「こんなとこに待っていてくれたとこみると、ねえさん、おれのお嫁さまになる気になったかな」

「ひっぱたくわよ」

にらみつけて、つんと横を向く。

「あは、は、まちがったらごめんなせえまし。なにもおれ、むりに嫁さまになれとはいわねえだ」

「あたりまえじゃありませんか。あたしはね、大黒屋のだんなに頼まれたから、しかたなく、あんたを待っていてやったんです。どうかまちがわないでくださいまし」

「それはそれは、ごていねいなごあいさつでございます」

「だんなはね、二度まで助けてもらって、ひと言の礼もいわずに行くのは心苦しいから、お千加、おまえここで待っていて、ぜひ一度うちへ来てくれって頼まれちまったんです。ふだんお世話になってる人だから、いやだとはいえないじゃありませんか」

「すまねえこってございます」

「あんた、行くでしょうねえ」

「せっかくだが、行かねえでございます」

「あら、どうして?――おこったの?」

「おこったのはお千加ねえさんのほうでございます」

「だって、あんた、往来のまん中で、変なことばかり言いだすんだもの」

気がついて、お千加もちょっときのどくそうな顔をしたが、

「でも、いっしょに行ってくれなくちゃ、あたしが困るわ」

と、やっぱり高飛車である。

「会えなかったといえばいいだ」

「じゃ、どうしても、あんた行かないつもり?」

「行かねえです」

「強情ねえ、あんたも。どうしていかないの?」

「行きたくねえです」

「だから、どうしていきたくないのよ?」

「お嬢さんのお婿さんにされると困るもんな」

けろりとして答える松太郎だ。

「しょってんのねえ、あんた」

田舎っぺのくせに、とお千加はあきれて横目でその顔を見たが、男はもうにぎやかな町通りにぽかんと気を取られている。どうも、こっちがいいかげんにあしらわれているようだ。むっとして、

「あんた、あたしをからかう気――。承知しないから」

と、おもわず男のたもとをぐいとひっぱった。

「別にからかっちゃいねえだ」

「なら、ほんとうのことを言いなさいよ。どうして、だんなのところへ行くのいやなのさ」

「ほんとうのことといったら、またねえさんがおこるべ、べっぴんさんは気ぐらいが高くて、わ

がままだからな」
「なんですって」
「礼なんてものは、こっちから行って受けるもんではねえだ。おれは土百姓でも男だからねえ。それに、なにもだんなに礼がいわれたくて、あんなあぶないおせっかいをしたんではねえし、そんなこと、もう気にかけてもらわねえでもいいだよ」
にやにや笑っている松太郎だ。はっとして、お千加が赤くなってしまった。
むろん、だんなはあの男をひっぱってこいとはいわなかった。こんな場合で、途中でぐずぐずしているのはあぶないから先へ帰るが、ぜひあの若い衆をおつれ申してくれ、もし、どうしても先を急ぐようだったら、落ち着く先をよく聞いておいて、けっしてわたしが礼儀知らずに逃げたのではないということをあやまっておいてくれ、と頼まれていたのだ。それをつい心安だてに、ひっぱってでも行くようなロをきいたのは、たしかに相手を田舎者と見くびった自分の思いあがりだった。
案外、この田舎っぺには底意地がある。困っちまったな、とは思ったが、お千加も江戸のいじっぱり女で、いまさら頭を下げるのは業腹だし、といって、どうしても一度は大黒屋へ連れていかなくてはだんなにぐあいが悪い。
「松さん、江戸へ何しにきたの？　見物――」
お千加はそれとなく戦法を変えることにした。
「うむ、見物だ。気に入ったら、ひとつ江戸っ子になってやるべかと思ってね」
「ふ、ふ。あんたならきっといい江戸っ子になれるわ。俠気はあるし」
「ずうずうしくて、おせっかいで、娘っ子にたのまれたらおれはあとへはひかねえな。まず、幡随院長兵衛というところかな」
「さるしばいのね」
やっぱりひやかさずにはいられないお千加だ。
「あはは、おさるの長兵衛か」
「それであんた、だれか江戸に知っている人があるの？　泊めてくれるようなうちが」
「そんなものはねえ」
「じゃ、あたしのところへおいでなさいよ。泊めてあげるから」
「よすべ。御亭主に気をもましちゃ罪だもんな」
「そんな心配いらないわ、あたしはこう見えてもまだ売れ残りなの。茅町で踊りの師匠をしてるのよ。藤間千加っていうんです。年は二十一、どうぞよろしく」
「ああ、踊りのお師匠さんか、どうりで姿がいいと思うた。けど、おれはやっぱりよすべ」
「あら、どうしてさ」
「人気稼業の師匠のところへ、おれのようなようすのいい男がはいりこむと、すぐ浮き名が立って人気にさわるだ」
「いいえ、かえって人気が出ると思うの。お弟子さんたち、みんなよろこんで、きっとにんじんもってきてくれるわ」
「ねえさん、そう口が悪くちゃ、どうしてもおれのほかに嫁さまのもらい手はねえぞ」
「そのお嫁の話だけは遠慮するわ」
「そうはいかねえもんだ。遠くて近きは男女の仲といってな、一つ家へ泊まれば、あんまり近すぎるから、きっとすぐ子どもができるだ」
「ほ、ほ、ひとりでたんとしょってなさいよ」
「あれえ、ねえさんは一度にそんなにたんと子どもを産んで、おれにしょわせる気かね」
「いけすかない、犬じゃあるまいし、いやだったら。山ざるの田舎っぺ」
とうとうお千加はまたおこらされてしまって、大通りでなければ突き飛ばしてやるんだが、それができないから、いいっと憎らしげに白い歯をむいてみせて、さっさと歩きだした。その顔が自分こそ女ざるみたいだろうとは、あとで

気がついたことである。

気にかかる

しかし、人間の相縁奇縁などというものは、まったくふしぎなものである。

その日お千加は、藤沢のおさらいに呼ばれていった帰りだった。妙なことから妙な田舎っぺと道づれになり、むかっぱらをたてて、その田舎っぺの松太郎をおいてけぼりにしたのは芝橋あたりだったが、金杉橋まできて、なんとなくふり返ってみた。はるかうしろから、田舎っぺがきょろきょろと町筋をながめまわしながらぽかんと歩いてくるのが、ちらりと人の間から見えた。

「ざまあみやがれ。あんな薄っとぼけた顔をしていて、あれであたしをくどく色気はじゅうぶんあるんだから、きっといまに追いついてくるにちがいありゃしない」

お千加はそううぬぼれて、もうあとは振り向いてやらないことにした。そして、いま肩をたたくか、ねえさんと呼ぶかと、それを待つような気持ちで新橋まで歩き、少ししゃくだったけれど、あんまり相手が追いついてこないので、もう一度振りかえってみた。こんどはどこにも姿が見えない。

「ふん、わざと人をじらすつもりで、どこかへ隠れたのかもしれない」

だれがじれてなんかやるものかと、こんどはゆっくりと歩いてみた。

が、とうとう田舎っぺは追いついてこず、茅町の第六天社裏の家へ帰りついたのはもう春の宵だった。

「あの山ざる、どうしてああ意地が悪いんだろう」

お千加は妙な気持ちである。それでもまだ、とんでもないときにそらっとぼけてたずねてくるのではないかと、うぬぼれて、心待ちにして、旅疲れがあるから、内弟子のお冬に田舎っぺの若い男がきたら起こしてくれるようにいいつけておいて早寝をしたが、朝までぐっすり寝こんでしまって、目をさまして、お冬に、ゆうべはだれもたずねてこなかったかえ、と聞いてみたら、いいえ、どなたもきませんでした、という返事だ。

「憎らしい――」

してみると、こっちが思うほど、あの田舎っぺは自分のことなど気にもしていなかったことになる。ふだん、男に甘やかされつけているお千加だから、自分の美貌をあんな山ざるに無視されたかと思うと、なんだかくやしい。

いや、ただくやしいだけではすまないのだ。大黒屋のだんなにくれぐれもたのまれていたのだから、きょうはなんとかあいさつをしなければちょっと顔がたたないのだ。

「困っちゃったねえ、あの男がいっていたように、会えませんでした、ととぼけてしまうよりしようがないけれど――」

なんともぐあいが悪い。

そういえば、礼なんかこっちから出向いてうけるもんじゃない、とあの男はわらっていた。六郷の渡し場であのやくざ者ふたりをふらふらとたよりなげにあしらっていたとぼけたかっこうが妙に目に残る。鈴ガ森では業平粂という悪御家人をぬけぬけとしてからかっておもちゃにしていたようだし、それから見ると、あたしに嫁さまになれだなんていったのは、いい道中のうさ晴らしだったのかもしれない。

「しゃくにさわるなあ」

なんだってあのとき、腹なんかたてないで、うまくだまして、家へつれてきてしまわなかったんだろう。どう考えてもこっちの損とはっきり答えが出るだけに、小憎らしい。

「冬ちゃん、あたしちょいと米沢町のうちへあいさつに行ってくるからね」

お千加は起きて、顔を洗うとすぐ、朝飯も食わずに家を出た。お千加の兄の山田屋新五郎は

に組の頭取で、米沢町二丁目に家があるから米二の頭で通るいい鳶職である。

「にいさんいる?」

みがきこんだ格子をあけて、声をかけるなり茶の間へはいっていくと、新五郎はもう外出のはんてん姿で長火ばちの前へあぐらをかき、女房おしのと朝茶をのんでいるところだった。兄とはいっても年が二十近くも違うので、ずっと親がわりに育てられてきたお千加だった。

「なんだ、お千加。格子の外から、女のくせにどなりこんでくるやつがあるか」

「いやだあ、ちゃんと格子をあけてから声をかけたのに」

「ゆうべ帰ってきたんですってね」

兄嫁が目で笑いながら迎えてくれる。もとは深川の芸者で、子どもがないからまだ二十六、七にしかみえないきりっとした女ぶりだ。

「あら、もう知れてるの」

びっくりして、兄と兄嫁の顔を見比べながらすわると、

「悪いことはできないねえ、千加ちゃんにいい男の道づれがあったってことまで、ちゃんとわかってるんだから」

おしのがくすりと笑うのである。

「あらあら、そんなことまで、どうしてだろう」

ぽかんとした顔つきで、兄夫婦の前へ出るとつい子どもっぽくなるお千加だ。

「なあに、今おまえを呼びにやろうと思っていたところだ。ゆうべ、大黒屋のだんなに呼ばれてな、六郷と鈴ヶ森で、二度までおまえたちの世話になったんだってな」

「そうなんですよ、にいさん。相手はあの業平粂なの。あくどいったら……」

「で、おまえ、そのお百姓さんに出会えたのかえ。品川でだんなはその返事を心持ちにしているんだ」

「それがねえ、にいさん、あんまりおかしいんだもの」

「おかしい——?」

「その土百姓がねえ、三島在の松太郎って男なんだけど、いきなりあたしをつかまえて、嫁さまになれっていうんです」

お千加はなんとなく顔が赤くなってきた。恥ずかしいというより、なんといってきのうのことを話していいのか、当惑するのである。

「耳よりの話じゃねえか、おまえもいつまでもひとりじゃいられやしねえ」

「いやだあ、にいさんまで、いくらなんだって、あんな土百姓——」

「けど、なんだぜ、だんなの話じゃ、なかなかはらのすわった男のようだったっていうぜ」

「そりゃ、はらがすわってなけりゃ、往来のまん中で女をつかまえて、嫁さまにしてやるべ、なんていえやしないわ。田舎っぺはずうずうしいからきらいさ」

お千加はぷっとふくれてみせる。

「そんなに変わってる男なの?」

茶をいれてすすめながら、若い女のふくれっつらはあてにならない、といいたげなおしのの目つきだ。

「少し変わりすぎてるわ。人がせっかく、だんながこれこれだと教えてやると、礼なんてものはこっちから出向いてうけるもんじゃない、行くのはよすべ、っていうんです。あんまり憎らしいから、でも、ことによるとだんなはあんたをお糸さんのお婿さんにしたい気があるのかもしれないってからかってやると、いや、よすべ、つり合わぬは不縁のもとということがあるだ、おれにはねえさんぐらいがちょうどいい嫁さまだっぺ、ですとさ」

「そりゃお千加、おまえがからかうからいけねえんだ。どうした、それから」

「お嫁の話はまっぴらだけれど、泊めてあげるからうちへおいでなさいって、そうでもいわなければ来そうもないから、さそってやると、よすべ、遠くて近きは男女の仲だ、一つうちへ泊

まると、あんまり近すぎて、すぐ子どもができたら、ねえさんの人気にさわるべだって。ふうんだ、たんとひとりでしょってなさいよ、ってあたしがおこると、あれえ、ねえさんはそんなに一度にたんと子どもを産んで、おれにしょわせるつもりかって、まじめな顔をしていうんだもの。いけすかない田舎っぺの山ざるって、いいをしてみせて、あたしずんずんきちまったんです」

「じゃ、所もなんにも聞かずにか？」

「だれが聞いてやるもんか、あんなずうずうしい田舎っぺ」

「しようがねえな、おまえにも――」

新五郎はあきれて苦笑する。

「けど、よっぽど変わってんですね、その男も」

おしのはどっちにもつかぬことをいっておく。

話してしまってから、お千加は妙に寂しい。自分ひとりいい子だったようにいったけれど、実は、あの男は自分の器量さえみとめてくれようとしなかった。いままで男にこんなみじめな敗北をしたおぼえがないだけに、くやしいのだ。もう一度出会って、うんといじめてやらなくては、この胸は晴れそうもない。それができないと思うと、たまらなく寂しいのだ。

がらりと玄関の格子があいた。

「頭、いますか。こんにちは――」

なにかうわずったような丁稚の声だ。

「どなた――？」

おしのがいそいで立っていって、障子をあけた。

「おや、大黒屋の吉どんね。どうかしたの？」

「たいへんなんです。お店へ今、きのうの六郷のならず者がふたりで押しかけてきて、店先へすわりこんじまったんです。すぐだんなが、頭に来てくださいって」

「よしきた。吉どん、今すぐうかがいますって、だんなにそういっておくんな。――おしの、羽織を出しねえ」

はんてんの上から羽織を引っかけて、土間の草履をつっかける新五郎、うしろから女房がかちかちと切り火を切る。

「行ってくるぜ。お千加、ゆっくり遊んでいけ」

見送った女たちは、なんとなく顔を見合わせた。きのうのやくざ者というからには、場合によっては、白刃の下をくぐらなければならない、おしのには亭主、お千加には兄の新五郎である。

「ねえさん、あたし、ちょいと行ってみてくる」

たまらなくなって、お千加は兄嫁の返事も待たず表へ飛び出した。やんちゃ女だから、はでなすそをけちらすように、米沢町と横山町とはつい隣だ、大黒屋の前まで駆け出してきて、お千加はあっとおもわず棒立ちになってしまった。

路地の中

江戸へついた第一夜を両国馬喰町の安宿であかした松太郎は、きょうはまず浅草の観音さまへ参詣するつもりで宿を出た。

「江戸は俗に、生き馬の目を抜くと申しましてな、田舎のおかたと見ると、きんちゃく切りやぽん引きがよほどねらいますから、まあ気をつけておいでなさいまし」

親切な番頭に注意されて、礼をいってひと足外へ出ると、このへんは横山町通りから両国の盛り場へ近い繁華な表通りだから、貴賤となく、老若となく、朝から織るがごとき人通りだ。

――驚いたもんだ。これみんなひま人かな。

正真正銘の田舎者だから、松太郎は正直ぼかんと目をみはりながら横山町へかかると、そこの大きな呉服屋の店の前に、いっぱい人だかりがしている。みるともなく看板を見ると、大黒屋と書いてあった。

「あれえ、ここが大黒屋か」

なるほど、大きな店構えである。なにが始まっているんかなと、人がきの間からのぞくと、あきれたことには、きのうの六郷のやくざ者が

ふたり、きょうは旅人姿ではなく、伝法な素袷の胸からまっ白な晒木綿の腹巻をのぞかせて、じろじろとあくたれた目を光らせながら店先へすわりこんでいるのだ。当人たちはひどくすごんでいるつもりだろうが、やっぱりたぬきづらとおかみづらには変わりはなく、きのう六郷川の河原でぐったり青くなったおかみやくざを兄貴分のたぬきやくざがしょぼんと介抱していた姿を思い出すと、松太郎はなんだかおかしくなる。

——きょうはおれ、もうつまんねえおせっかいはよしにすべ。きのうは大黒屋の親子を助けてやろうと思って飛び出して、あとでお千加とかいうはねっかえりの江戸美人にさんざんひやかされてしまった。それに、きょうは自分の店先だから、番頭も小僧もおおぜいいる。それでまにあわなければ、こんなとき役にたってもらうために、日ごろ出入りをさせておく鳶の者だっているはずだ。なにも、田舎っぺの出る幕ではなかんべ、と考えたので、松太郎は見ないふりをして通り過ぎようとした。

その鼻の先へ、からころとやんちゃん下駄を鳴らして、はでなすそをけちらしながら駆けてきた女が、いきなり、

「あら——」

といって、棒立ちになった。きのう六郷から道連れになって、品川までずっとことばがたきになって歩いたおこり虫で、はねっかえりで、少し器量自慢の、藤間のお千加である。

「なあんだ、ねえさんはこの近くだったのか」

松太郎はよく会うと思いながら、あいかわらずぴちぴちとあだっぽいお千加の顔を見て笑った。

「知らない。憎らしい人」

顔を見るなり、もうぷっとふくれて白い目でにらみつける。

「あれえ、そんなに憎らしけりゃ、見ないふりしてさっさと通んなよ」

「こっちへ来て、——おいでなさいってば」

「そうひっぱっちゃ、そでが切れるだよ」

「切れたら縫えばいいでしょう」

こづきまわさんばかりにして、さすがに往来中では人目にたつから、お千加はそこの路地へ松太郎をひっぱってきた。相手がどこか間のぬけた田舎っぺなので、よそ見には女主人にしかられている下男としか見えない。

「松つぁん、どうしてきのう逃げたのさ、憎らしい」

「あれえ、たまげたこという人だ。ねえさんのほうがおれをおいて、ひとりでおこって、ぷんぷん先へ行ってしまったくせに」

「なんで、あとからおとなしくついてこないのよう。あたしに恥をかかせなくたっていいじゃありませんか」

平気でそんなわがままが出るんだから、松太郎の顔はよっぽど甘くできているとみえる。

「だって、おれ、こんな山ざるだもんな、きれいなねえさんといっしょに歩いて、もし御亭主とまちがえられちゃおきのどくさまだ」

「ふうんだ、だれがまちがえるものですか」

「そうじゃねえ。江戸っ子は気が早くてそそっかしいっていうから、水でもかけられちゃつまんねえ」

「ゆうべはどこへ泊まったのさ?」

「すぐそこの馬喰町の旅籠だ」

「どこへ行くところ、きょうは」

「浅草の観音さまへおまいりすべと思ってね」

「あんた今、大黒屋さんの店先を黙って通りすぎようとしたのね」

「うむ。たぬきやくざやおかみやくざのさる芝居なんか見てもはじまらねえもの」

「いくじなし。見ていないで、どうして早くつまみ出してやらないのさ。あのふたりはあんたときのうから因縁つきの間じゃありませんか。敵にうしろを見せるなんてひきょうだわよ」

腕を押さえつけて、かさにかかるようにまっ

正面からにらみつけて、そんなかってなことを言いだすお千加だ。

「そういえば、ねえさんとおれとも不思議と縁があるようだね。おれ、なんだか、ちっとばかし心配になってきた」

「なにがさ」

「もし、出雲のほうの神さまが気まぐれ起こして、ねえさんの御亭主なんかにされたら、それこそ、一生しりに敷かれなくちゃなんねえだろう」

「おこるから、あたし。どうしてそうずうずうしいんだろう」

「おれにおこってもしようがなかんべ。おこるんなら、出雲の神さまにおこるがいいだ」

松太郎はとぼけた顔をしてにやにや笑っている。

「いいから、早くあのふたりをつまみ出してごらんなさいよ。ことによったら、おかみさんになってあげる気になるかもしれないわ」

「ありがとうございます。おればかっ正直だから、そんならまたちょいとおせっかいやいてみるかな」

「けど、あたし、もしそのときおかみさんになりたくなかったらごめんなさいね」

「いいだとも、そのほうが、おれ、一生しりに敷かれねえですむからよっぽど気が楽だ。どうもありがとうございます」

「憎らしい」

ほんとうに憎い気がして、おもわず男の腕を力いっぱいつねっている。痛いっと飛び上がる松太郎をにらみつけて、いくらか気がすんで、おや、ほんとうは、あたし、この男をどうしたいんだろう、とお千加はわれながら変な気がしてくるのだ。

けんかの横どり

「あれえ、ねえさん、あそこにいるのは業平粂でねえか」

路地からひっぱり出された松太郎は、大黒屋の前の人だかりのうしろのほうに、ふらりと着流しのまま立っている悪御家人石上粂三郎を見て、目を丸くした。

「あら、そうだわ。どうしよう」

お千加はどきりとしたように松太郎のたもとをつかむ。業平がこんなところにいるようでは、たぬきやくざとおおかみやくざのいやがらせはただでは納まらない。きのうからの続きで、業平粂はどうしても大黒屋へひっかかりがつけたいから、またふたりを小道具に使っているのだ。おそらく、ふたりにさんざんあくどいまねをさせておいて、ちょうどいいころあいに取り押さえに出ようという筋書きなのだろう。

「いいだよ、ねえさん、そうとわかったら、おれもう一度おせっかいをしてやるべ」

松太郎は急に義憤めいたものを感じてきた。

柄のないところへ柄をすげても、なにがしかの金にしようというのが、かれらの常套手段だが、金が目的ではないのだから、はたしてその日のたぬきとおおかみはあくどかった。

「あっしどもは、きのう、六郷の渡し場で、こちらのだんなと少しわけのある者でござんす。だんなにおめにかかりてえ。すみませんが、ちょいと顔を貸してくれるように、奥へ取り次いでおくんなさい」

これが切り出しで店先へすわりこみ、買い物に来ていたお客をじろじろにらみつけるから、みんな気味悪がって立ってしまう。呉服屋で、客は女が多いから、はいろうと思った者もこんなのがいては二の足を踏む。奥へ取り次ぎにはいった番頭が、いくらかの金を包んできて、あいにく主人は旅の疲れが出ましたものかふせっておりますので、どうぞ御勘弁を願います、これはほんのごあいさつがわりでございまして、と差し出してみたが、

「なんだ、こりゃ金か——ふん、ばかにするねえ、おれたちはこじきじゃねえや、だれが金を

くれといった。主人を出せ、主人を」
と、がんがんわめきたてて承知しない。
奥へ引き返した番頭は、こんどはなかなか出てこない。そのうちに、店の前はいっぱいの人だかりになってしまった。
「やいやい、いつまで待たせやがるんだ。ここんちは店から奥まで一里も二里もあるのか。ふざけやがって、気のきいた飛脚なら、もうとっくに川崎へ着いていらあ。なにをぐずぐずしてやがるんだ」
「それとも、旅の疲れが急に重くなって、だんなは御臨終になったのか。それなら、棺おけをかつぎこんできてやるぜ。そこにいる丁稚、ちょっと奥へ行って見てこい」
かってな悪口を並べたてている。
「どうもお待たせいたしやした、お静かに願いやす」
そこへ、に組の新五郎が、盆の上へさっきの金包みをのせて出てきた。
「おや、なんだ、てめえは――」
たぬきが頭からつっかかるようにあごをしゃくってみせる。
「あっしは出入りの鳶の者で、に組の新五郎という者、よろしく頼んます」
「なんだ、どぶさらいか。どぶさらいなんかに用はねえや、引っこんでな」
こんなけたはずれなのも珍しいので、
「まあ、そう山犬みたいにほえてばかりいねえで、ひととおりは人のあいさつも受けてみちゃどうだね」
新五郎はあきれたように笑いながら、ふたりの顔をながめた。
「ふうむ。てめえが人間なみのあいさつをするってんなら聞いてやろう。さあ、いってみな」
「今もいうとおり、おれは町内のどぶさらいにはちがいねえが、きょうはだんなの名代で、おまえさんたちの応対に出てきたんだ。おまえさんたちがだんなに会いてえって用件はなんだ

ね」
「じゃ、だんなはどうしても、おれたちに会えねえっていうのか」
「そりゃさっき番頭さんから一度返事をしたそうだね。だんなは旅の疲れが出て、あいにくふせっていなさる、きょうのところは御勘弁願いますとね」
「よし、そんなら、おれたちのほうから、だんなの寝ているところへ行こうじゃねえか、案内してくんな。旅の疲れぐらいなら、口もきけねえほどの重病人ってわけでもねえだろう」
「で、だんなにどんな用があんなさるんだね？」
「よけいなことをいうねえ、用はだんなに会ってから話してやらあ」
「そこんとこをひとつ、せっかくおれも名代に出たんだから、顔をたてて、どんな用なんだか聞かせてくれねえか」
「ならねえ。どぶさらいなんかの顔をたてる義理はねえや。ぐずぐずしてやがると、けたおして踏んごむぞ」
「兄貴、かまわねえから、踏んごめ」
そばからおおかみやくざがけしかけるように立ち上がったので、
「なんだと――」
新五郎もおもわず血相を変えて、片ひざ立ちになったとき、
「あはは、おまえさまたち、まだよくねえりょうけんをやめねえだね」
松太郎がのそりと店先へ立って、遠慮のないのら声をあげた。ひと目で田舎者とわかるやぼくさい風体だけに、なかなかあいきょうがある。
「おやあ、こんちくしょう――」
ふたりはきのうちょいと後手を踏まされているうえに、たとえばはでにやっつけてみたところで一文の得にもならない相手だから、苦い顔をせずにはいられない。
「てめえ、またおれたちのじゃまをする気だな」
「なあに、そんな気は別にねえが、あんまりよ

く似た声が聞こえたもんだから、ふらふらと寄ってみただ。そっちのやくざさん、おまえさまもう頭はなおったかね」
「やいやい、黙って通り過ぎねえと、きょうは命がねえぞ」
おおかみやくざがぐいと右手をふところへ入れて、小声でおどしつける。
「命がねえって、おまえさま、おれを殺す気かね。たまげた乱暴な人だな。人殺しかね、おまえさまは」
大きな声を出して、松太郎はにやにや笑っているのだ。
「ちくしょう、てめえおれを甘く見てやがるんだな」
すっとおおかみが一足前へ出る。
「よせ、辰。田舎者なんか相手にするな」
しかたなく、たぬき兄貴のほうが立ってきて、おおかみのそでを引いた。
「それがいいだ。田舎者でも人を殺せば人殺しだからな。悪いりょうけんはやめて、そのへんでおらと仲直りに一杯やるべ。なあ、兄貴さん」
「いいから、おまえは早く消えてなくなりねえ。ここはおまえなんかの出る幕じゃねえ」
「おれが出ちゃつごうが悪いんかね。じゃ、だれかここへ出る約束のお侍さんなんかが、そのへんに待っているんかね」
そらっとぼけて、じろじろ見物のほうをながめまわす松太郎だ。
「やろう、承知しねえぞ」
どきりと顔色を変えて、こんどはたぬき兄貴のほうがふところへ右手をつっこんだ。
「あれえ、兄貴さんもおこったかね」
「行け、行かねえか」
「そんなら行くべ、どこへ行くかね」
「なんだと――」
「おれけんかはあんまり好かねえけんど、ただ殺されてもつまらねえから、どっか広っぱへ行って、はでに殺されてやるべ。どこがいいかな、兄貴さん」
やじうまがげらげら笑いだして、しっかりやれえ、柳原土手がいいぞ、骨はおれが拾ってやらあ、などとかってな半畳が飛び出した。
「ありがとうございます。おれ田舎者で江戸なれねえから、よろしく頼みますだ」
松太郎はそっちを向いてぺこりとおじぎをした。のほうずというか、人を食っているというか、ちょっと類のない神経だ。やじうまどもが喜んで、またしてもどっとわきたつ。
たぬきとおおかみは顔を見合わせて、内心ため息をついたようだが、どうにもひっこみがつかなくなってしまったのだろう。
「ようし、このやろう、柳原土手へ来い」
「望みどおり、はでに突っ殺してやらあ」
いきなり、両方から松太郎の腕をつかみにきた。わざとつかませて、ひったてられながら、
「そんなら行くべ。柳原土手ってのは近いんかね」

けろりとしている松太郎だ。

人殺しいっ

松太郎はおおかみやくざとたぬきやくざに両方から腕を取られて、両国広小路のほうへひったてられていく。やじうまがぞろぞろとそれに続いた。その中に、若くて、あだっぽくて、みずぎわだった器量の女がひとり、はらはらしながら人にもまれている。お千加なのだ。
――だいじょうぶかしら、あの人。
松太郎が案外強いのは、六郷の渡し以来よく知っているから、だいじょうぶだとは思うが、きょうのは、いわば自分がけしかけてやらせたけんかだけに、いざとなると、やっぱり不安になってくる。
――しようがないわ。けんかに負けるような男、あたしきらいなんだもの。
あら、じゃあたし、あの田舎っぺがこのけんかに勝ったら、ほんとうにいい人にするつもり

かしら、と考えてみて、きらいじゃないけど、あんな田舎っぺじゃあね、とその点はまだ少し煮えきらない気持ちのお千加である。

「どうでえ、むてっぽうな田舎っぺじゃねえか」

「まったくさ。景気がよくって、おもしろいにゃおもしろいが、あいつ、いくらか脳が足りねえんじゃねえのか」

「なにしろ、相手が悪うござんすよ。しかも、命知らずがふたりだ。なぐられるにきまってるようなもんですからね」

無責任なやじうまの評判は、同情三分で、あんまりりこうじゃないときめているのが七分らしい。

——なにいってんのさ。ふたりにひとり、弱いと思ったら加勢してやるのが男じゃないか。江戸っ子のくせに、いくじがないったらありゃしない。だいきらいさ。

はねっかえりだから、そんなうわさが耳にはいると、お千加はついかっとなって、男たちの顔をにらみつけてやった。そして、意地でも松太郎に勝ってもらいたいと思う。

のんきなのは、ひったてられていく松太郎である。

「あれえ、えらくにぎやかなとこへ出たね。ここが両国の広小路っていうんかね」

広い道のまん中へ、いずれも小屋がけで立ち並んでいる見せ物小屋、食い物屋、そのどれへも、人がいっぱいごたごたと出たりはいったり、そして道という道に人間があふれながら押し流れていくのだから、田舎っぺの松太郎がけんかを忘れてびっくりするのもむりはない。

「黙って歩け、こんちくしょう」

「そんなにじゃけんにこづくもんじゃねえだ。昔は、敵に塩を送った大将さえある。おれは江戸ははじめてなんだから、道ぐらい教えてくれても罰はあたるめえ」

「なにをぬかしやがる。おれたちはけんかをしているんだぞ、てめえに江戸見物をさせてやっているんじゃねえや」

おおかみやくざが右からがみがみどなりたてた。

「そりゃわかってるがね、なんなら、ここいらで仲直りすべか。おれはあんまりけんかなんか好きでねえだ」

「ふざけるねえ。ぶんなぐるぞ、こんちくしょう」

左からたぬきやくざがひじでぐいとわきっ腹をこづく。

「乱暴するもんでねえだ。こんな人ごみでけんかしたら、往来の人さまが迷惑するだ」

それでなくてさえ妙な取り合わせの、あまり風体のよくない、大の男が三人腕を組んで、どいたどいたと、わがもの顔に人ごみの中を押し分けていくのだ。びっくりして飛びのく者、押しまくられてよろめく者、そのだれもが人にぶつかったり、足を踏んだり、痛えっ、なにをしやがるんだ、まぬけめ、などと往来じゅうがうずをまいて、とんだ迷惑をしているのだ。

「なんだなんだ、つかまったなあすりか」

もの好きなのはわざわざ前へ回って、松太郎の顔をのぞきこむやつがいる。

「すりじゃねえだよ」

松太郎が笑いながら答えた。

「上へゆの字がつくだ」

「なんだって——ああ、ゆすりか、なお悪いや」

「おれじゃねえ、このにいさんたちのほうだ。まちがわねえでもらいますべ」

「こんちくしょうめ、兄貴、おれゃもうかんべんできねえ」

ちょうど、浅草見付外の広場だった。右にいた気の早いおおかみやくざが、いきなり松太郎の胸ぐらをつかんで、ぽかっと横っつらをなぐりつけてきた。それやったと、ついてきたやじうまどもびっくりして飛びのいて、遠まきになる。

「あれえ、ここはもう柳原土手ってところかね」

なぐられながら、松太郎がぽかんとした顔つ

きで聞く。
「なにをぬかしゃがる」
二度めのげんこが同じところをねらってきたが、こんどはそれより早く、たぬきやくざにつかまれていた手を振り切って、
「乱暴するでねえ」
両手で松太郎がどすんと相手の胸を突き飛ばした。いなか相撲では大関を取って、めったに負けたことのない松太郎だ。おおかみやくざはたわいもなく四、五間はね飛んで、どすんと大きなしりもちをついた。
「やろうっ――」
それとみたたぬきやくざが、あわてて横合いから組みついたが、いけない。松太郎の手が相手のからだにかかったとたん、いともあざやかな跳ね腰で、たぬきやくざのずうたいはもんどり打ちながら、おおかみやくざの近くへ落ちていた。それが目にも止まらぬと言いたいほどあんまりみごとな手さばきだったので、やじうまどももあっといったきり、すぐには声が出ない。
が、投げ出されたふたりも、さすがに悪党だった。人前があるから、すぐはね起きて、
「やりゃがったな、やろう」
「やっちまえ、兄貴」
かっこうだけは勇ましく、ふところの匕首に手をかけて身構えたが、いささかどぎもを抜かれたばかりのあとだし、捨て身になってかかっていくほどの気力はどっちにもない。――とみたから、松太郎は、
「人殺し」
わざとすっとんきょうな大声を浴びせかけておいて、承知でけんかをやっている相手からまさか人殺しとどなられようとは思いもかけないから、
「なんだと、このやろう」
ふたりのやつがあっと顔を見合わせている間に、げらげら笑っているやじうまの中へ、すばやく逃げこんでしまった。

くやしい顔

――びっくりしてやがったな、あくどいわりにやくざなんて者は案外知恵のねえもんだ。
浅草橋を渡るまで、駆け出していた松太郎は、別にだれも追ってくる様子はないので、そこから並み足になりながら、けっして悪い気持ちではなかった。とにかく、人の難儀を助けてやったという自負があるからだったが。
けど、おれもよっぽどおめでたくできているようだぞ。また、あの女っ子におだてられて、おせっかいに出たようなもんでねえか。
ふっとそんな気がしてきた。急にてれくさくなってしまった。
考えてみると、お千加という女は、まったく妙な女だ。うぬぼれが強くて、はねっかえりで、口が悪くて、男なんてものはみんな自分にほれるものときめているんだろう。だから、いきなりおれを路地へひっぱりこんで、まるで山ざるあつかいに、かってなことばかりいうんだ。それをまたおれがいい気になって、山ざるの長兵衛をきめこむなんて、あんまり自慢にもならない。
もうよすべ、おれは江戸へさる芝居をしに来たわけではねえからね。こんどあの女に会ったら、そういってやるべ。おれをおだてねえでおくんなせえまし、まだ出世まえのからだだからおれにほれてもらっては困ります、とな。
あの女っ子、どんな顔をするだろうな、と思うと、松太郎はひとりでおかしくなってきた。のんき者だから、二度まで仕事のじゃまをされたたぬきやくざとおおかみやくざがどんなに恨んでいるものか、その背後にふたりをあやつっている業平糸の石上粂三郎がどんなに憤慨してるか、そんなことは少しも考えていない松太郎である。
「松つぁん――」
いいにおいといっしょに、お千加がうしろか

らとんと肩をぶつけてきた。
「あれえ――」
松太郎はきょとんと目をみはる。また会っちまったね、と言いかけたが、これは会ったのではなく、お千加が急いで追いかけてきたのだとは、その汗ばんで上気している顔、胸にはずんでいるいきづかいでわかる。
「追いかけてきたんかね」
たしかにそうらしいから、正直にそういったのだが、
「うぬぼれてるわ、だれがあんたのあとなんか追いかけるもんですか。用があるから、急いで来てやったんじゃありませんか」
と、しかりつけるような白い目をして、この女はどうしても松太郎を山ざるあつかいにしないと気がすまないらしい。
「おれ、うぬぼれてなんかねえだよ。安心して、まあ鼻の頭の汗でもふくがいいだ。いいねえさんがみっともねえぞ」
売りことばに買いことばで、お千加の顔を見るとつい憎まれ口がききたくなるから不思議だ。
「大きなお世話だわ。こっちへおいでなさいってば」
ぷっとほおをふくらして、いきなりたもとをつかむのである。茅町の第六天社の前で、実はそのすぐ裏がお千加の家だった。
「おれ、観音さまへお参りに行くとこだ。そっちへ行っちゃ、道が違うものな」
松太郎はいじわるく動こうとしない。
「いいから、おいでなさいってば。用があるんじゃありませんか」
「ねえさんはどうしてそうおれをひっぱりたがるんだね。ほんとうはやっぱり、おれにほの字なんかな」
「あんたこそ、どうしてそうずうずうしいんだろう。いやんなっちまうな」
「どういたしまして。そんなにおだてねえでください」
ぺこりとおじぎをして、また山ざるの長兵衛なんかにされるのはありがたくないから、松太郎はさっさと歩きだそうとする。
「松つぁん――」
急いでそのたもとをつかんで、お千加は世にもくやしい顔をしたが、
「お願い、――ほんとうに用があるんだから寄ってくださいまし。けっして、お手間はとらせませんから」
と、急によそ行きの顔になって、ていねいに小腰をかがめた。男の心が堅いと見て、そこは敏感な女だから、たまたま戦法を変える気になったのだろう。
「あれえ、困ったな、そんなにごていねいにいわれると、なんだか行ってやりたくなったぞ。おれ、どうも少しおめでたくできているんだな」
若い女との立ち話、というより、痴話げんかとまちがえられそうなからまり方なのだ。江戸のもの好きがまたそろそろたかってきそうなので、松太郎はそれを恐れたのである。
お千加はおこったように、黙って男のたもとをつかんだまま、ずんずん第六天社の裏の路地へはいっていった。
「ねえさん、おこったんかね」
行くとはらがきまれば、またたわいなくこのあばれ馬をからかってみたくなる松太郎だ。
「知らない」
「知らない男を家へひっぱりこんでいいんかね」
「黙ってお歩きなさいってば」
藤間流指南、藤間千加と小さな看板を出したいきな格子造りの玄関だった。その格子をあけて、男を押しこむように先へ押し入れて、お千加はぴしゃりとうしろの戸をしめた。
「お冬ちゃん、お客さま」
奥へどなっておいて、自分は松太郎の前へしゃがみ、わらじのひもへ手をかける。

「おれ、自分でやるからいいだよ」
「じっとしてらっしゃい」
「でも、もったいねえだからね」
ぴしゃりと足をたたかれてしまった。
お帰んなさいまし、と出迎えた内弟子のお冬が、びっくりした顔をしていた。
「にいさん、まだ来ない？」
「ええ、来ていませんけど」
はてな、おれをにいさんに会わせようってのかなと、まさかお千加の兄がさっきの二組の新五郎だとは気がつかない松太郎だ。

お千加の家

お冬に案内されて、縁側から第六天社の境内が見晴らせるこぎれいな二階の座敷へすわって、ぽかんと松太郎が待っていると、まもなくお千加が上がってきた。
「いい家に住んでいるだね。これじゃ、家賃が安くなかんべ」
が、お千加はつんと澄ました顔をして、そこへ行儀よく両手をつかえ、
「いらっしゃいまし。とんだ御迷惑をおかけしてすいません」
しごくおとなしやかなあいさつぶりだ。ちょいと顔を直してきているのが、松太郎にもよくわかる。
「これはこれは、ごていねいなごあいさつで恐れ入りますだ。さて、ねえさま、おれに御用ってのはなんでごぜえましょうか。お聞かせ願えますでごぜえます」
負けずに、松太郎もていねいに両手をつく。
「知らない。どうして、あんたうちへ来るの、あんなにいやがったの」
もうじゃじゃ馬になっているお千加だ。
「いやがったんではねえけど、お近づきがあるわけではなし、おれ、遠慮したです」
「うそばっかし、きのうは品川まで道連れだったし、きょうは大黒屋さんも助けてもらっているし、お近づきがなくはないじゃありませんか。あんまり人に恥をかかせるもんじゃないわ」
「とんでもごぜえません。ほんとうのことというと、おれまだ出世前のからだだから、ねえさんにほれても、ほれられても、困ると思ったです。悪く思わねえでくだせえまし」
からかわれているのか、それともくぎを一本差したつもりなのか、どうも判断のつきかねるとぼけた顔つきである。
「安心おしなさいましだ。だれがあんたなんかにほれるもんですか」
きっぱりと言いきって、もしくぎをさされたんならくやしいと腹がたってきて、
「まちがえちゃ困りますよ。あたしはなにも、あんたなんかに気があるから、うちへ寄ってもらうなんて、そんなもの好きじゃありません。大黒屋のだんなが、ぜひお礼を言いたい、きのうもきょうもお世話になったんだから、どうしても連れてきてくれって、にいさんが頼まれてきたんです。お千加、とにかくひとまずおまえの家へ案内しておいてくれってにいさんがいうもんだから、だから、あたし、あんたのあとを追いかけたんじゃありませんか。男ってすぐほれるだのほれられるのだのってうぬぼれたがるんだから、いい気なもんだわ」
お千加はついぽんぽんやっつけてしまった。そのくせわがままだから、自分がうぬぼれていることには少しも気がつかないようである。
「あれえ、そんなわけがあったのかね」
「あたりまえじゃありませんか。まちがわないでくださいまし」
「ねえさんのにいさんてのは、何をしている人だね」
「さっきの大黒屋さんのお店にいたでしょう。二組の新五郎っていう鳶の者です」
「ああ、それでわかった」
松太郎はにっこりして、もそもそとすわり直した。

「おれ、これで帰らせてもらうべ。どうもおじゃましましただ」
「あら、どうしてさ、松つぁん」
「おれ、きのうもいったとおり、なにも、大黒屋のだんなに礼がいってもらいたくて、あんなおせっかいしたんではねえだ。ことに、きょうのは、ねえさんにおだてられて、おれ自分からおさるの長兵衛をきめこんだので、礼なんかいわれちゃ、かえって顔が赤くなる。恥ずかしいだから、ごめんしてくだせえまし」
大きなおじぎをして、すっと立ち上がる松太郎だ。
「松つぁん、あんた、あたしに恥をかかせるつもり」
お千加の顔色がさっと変わって、中腰になった。
「そんなこと気にしねえでもいいだよ。正直んとこ、おれだだっ子みたいなねえさんとならお友だちになれるが、金持ちはおうへいだから、あんまり好きになれねえだ。田舎っぺでも、男は男だからね。縁があったら、またどこかでねえさんとけんかやるべ」
笑いながら松太郎はさっさと二階を降りていく。
——あたし、少し言いすぎたかしら。
とはすぐ気がついたが、勝ち気で、うぬぼれが強いから、お千加にはあやまってまでもむりに引き留める気には、どうしてもなれない。
「かってにお帰りよ。田舎っぺのくせに」
白い目をして男の足音をにらみつけながら、どうしたのだろう、その目から、急にぽろぽろと涙が流れてきた。

お千加はおこる

「どうして、あの男は、あんなにつむじまがりなんだろう」
お千加はむやみにくやしい。人がせっかく親切に家へ連れてきてやったのに、金持ちは好きになれないから帰るだなんて、あんまりてまえがってすぎる。だいいち、生意気だわ。たとえば、いくら金持ちがきらいにもせよ、人に恥をかかせなくたっていいじゃないか。
ああ、そうか、なんのかんのと理屈はつけても、けっきょくあの男はあたしがほれてやらないものだから、それですねているんだ。すねて、わざとあんなへそまがりをいって出ていけば、きっとまたあたしがあとを追いかけていくと考えているのにちがいない。だれがもう追いかけてなんか行ってやるもんか。田舎っぺのくせに、うぬぼれるのもたいがいにおしよ。おあいにくさま、あたしはおまえのことなんか、はじめっからなんとも思ってやしないんだからね。だから、田吾作はずうずうしくってきらいさ。
くやし涙をこぼしながら、それでもひょっとしたら途中で思い返して、ねえさんが好きなんだ、と案外おくめんなしだから、そんなとぼけたふうをよそおって引き返してきそうな気もして、さっきからしきりに格子のあくのを待っているお千加でもある。
案の定、その玄関の格子ががらりとあいた。どきりとして、そらごらんな、やっぱり帰ってきた。こんなときあわてて出ていったりすると、また甘く見られる、と思いながら、そのくせ足のほうが先に立っていて、まるでころがり落ちるような音をたてながら、二階を駆け降りているお千加だ。
とたんに、玄関の障子があいて、
「どうした、お千加、けがあしなかったか」
心配そうな顔を出したのは、兄の新五郎である。
「あら、にいさんなの」
お千加はあけすけに、ひどくがっかりした顔をする。
「ああ、おれだよ。おまえ、二階からころがり落ちたんじゃなかったのか」
「まさか、——いやだわ」

「いやだわじゃねえや。おっそろしく乱暴な足音をたてるじゃねえか。知らねえ者は、落ちたのかと思うぜ。若い女がみっともねえから、少し気をつけねえ」

苦笑しながら、新五郎がたしなめる。

「で、あのかたはどうした、松太郎さんといいなすったな」

「いないわ」

「いないって、おまえ、呼んどいてくれたんじゃねえのか」

「おこって帰っちまったんだもの」

「おこって――？」

「金持ちはきらいなんだって、生意気ったらありゃしない、田舎っぺのくせに」

「おまえがまた変なことをいったんだろう」

「なんにも、いいやしないわ。あたしはにいさんに頼まれたからうちへ連れてきたのに、あの男ったらいい気になって、おれまだ出世前だから、ねえさんにほれられると困るだ、なんていうんだもの。まちがわないでください、あたしはあんたなんかに気があってうちへ寄ってもらうほどもの好きじゃありませんっていってやっただけだわ」

ぷんぷんしているお千加のいじの強い目に、ぬれたあとがはっきり見えるのだ。

「しようがねえな、子どもじゃあるめえし、そんなことといや、男だから帰るにきまってらあな」

「あたしもう知らない、あんなやつ、憎らしいってありゃしない」

「けど、お千加、松つぁんはおまえが頼んだから、二度までも命がけで大黒屋さんを助けているんだろう、この親切を考えりゃ、少しぐらいの冗談口は、笑って聞いておいたっていいじゃねえか。別におまえを、いやらしくくどいたってわけじゃなしよ」

「違うんです。あいつはあたしのほうからくどかれるのを待ってるんです。いけすかない」

「ふうむ。じゃ、おまえに気があるようなのか」

「あたしがくどいてやらないもんだから、気に入らないんです。田吾作のくせに、うぬぼれが強いってありゃしない」

「そうかなあ。お千加、おまえのほうでも、実は松つぁんがくどいてくれねえもんだから、気に入らないんじゃないのか」

「知らない、にいさんは。あたしだいきらい、あんなやつ」

口ではいったが、心の中を言い当てられたような気がして、たちまちまっかになるお千加だ。そのついまっかになってしまったのが、勝ち気だからわれながら腹がたって、

「にいさん、あたし二度とあんなやつと口はききませんからね、ちゃんと断っておきます」

ぴしゃりといってのけてしまった。

「それもいいだろう。だが、おれは大黒屋のだんなから頼まれてきたんだ。どうしても、松太郎さんを捜して、一度だんなの前へ連れていかなくちゃ義理がすまねえ。たしか、あの人はきょう、観音さまへお参りするんだといっていたそうだね」

「知らないわ」

「あは、は、おれにおこったってしようがねえやな。とにかく、行ってみるとしよう」

笑いながら新五郎はそそくさと玄関を飛び出していった。

人生の意気

「あの女っ子、おれにほれているんでねえかな。くわばらくわばら」

松太郎は蔵前通りのほうへ歩きながら、なんだかすぐったい気持ちだった。なんでもないものなら、まだあんまり縁もない男をつかまえて、田舎っぺだの、うぬぼれてるだのと、あんなにむきになっておこりたくなるはずはない。まったくおかしな女っ子だ。

――せっかくでござえますが、おれまだ出世前のからだだからね。

いい女だけれど、だいいちああ気が強くて、わがままでは、きっとしりに敷かれるにきまっている。おれはなにも江戸へ女っ子のしりに敷かれに出てきたんではねえだからな、と松太郎は思いなおすのである。

「もう女っ子のことなんかさっぱりと忘れべ」

とにかく、なんでもいいから早く働く口をみつけて、うんと働いて、松つぁんはたのもしい男だと、世間から尊敬される人間にならなくては、死んだおっかあに申しわけがない。嫁っ子のことを考えるのは、それからでいい。

「おれにほれているんなら、嫁っ子はあのお千加でもいいだが、そのときは亭主をしりに敷くと承知しねえぞと、よく言い聞かせてやんなければなんねえな」

あれ、おれまたあの女っ子のこと考えたぞ、今さっぱりと忘れようと思ったばかりでねえか、と松太郎は急いで首を振った。

ちょうど蔵前通りへかかって、このへんは西側に札差しの大きな老舗がずらりと並んでいる。やあ、りっぱな町だなあ、とは思ったが、金持ちにあまり執着がないから、別にうらやましい気はおこらない。

「もし、突然で失礼ですが、三島在の松太郎さんでござんすね」

ふいに、うしろから肩をたたかんばかりに声をかけたのは、米二の頭取新五郎だ。

「へえ、おれ松太郎でござえますが。あれ、おまえさまはたしかさっき大黒屋さんの店先にいた頭ですね」

とすれば、これはあの女っ子の兄ということになる。

「そうですよ。米沢町の鳶の者で新五郎といいやす。さきほどは、ならず者をお取りあつかいくだすって、どうもありがとうござんす」

新五郎はなかなか丁重だ。

「とんでもねえこっです。おれ、よけいなおせっかいして、かえって恥ずかしいだ。笑わねえでくだせえまし」

「今はまた妹のやつがなにか失礼なことをいったんですってね。あいつは少し変わっていますんで、どうか気にしないでおくんなさい」

「気になんかしねえです。ほんとうにおれもちっとばかしへそが曲がっているでね、どこへ行っても、女っ子にはあんまりもてねえだ」

「そういや、松つぁんは金持ちがだいきらいなんだってね」

「きらいってわけじゃねえけど、金持ちはたいていわがままで、てまえがってなことばかし言いたがるから、そんなのはおれ好きになれねえです」

「ときに、松つぁん、どうだろう、こんなところで立ち話もできねえ。それに少したのみてえこともあるし、すまねえけれど、ちょっとおれのうちへ寄ってもらえないかねえ」

それとなく用心しながら持ちかけてみる新五郎だ。

「さあねえ、おれ、これから浅草の観音さまへお参りに行くとこだが、——せっかくだけんど、やっぱりお参りをさせてもらいますべ」

やっぱり少し変わっているようである。が、新五郎は世慣れているから、

「じゃ、松つぁん、お参りがすんだら寄っておくんなさるかね」

と、どこまでも下手に出る。

「そうだな、お参りがすめば、別に今んとこほかにきまった用もねえだから」

「そいつはありがてえ。ついでといっちゃ罰があたるだろうが、それじゃおれもお参りかたがた松つぁんを案内していこう。江戸ははじめてなんだってねえ、松つぁんは」

もう肩を並べて歩きだしながら、新五郎は気軽に話しかけていた。むろん、用というのは、大黒屋のだんなに言いつけられて、けっきょくだんなの前へ連れていきたいのだとは読めているが、こう如才なく出られては、さすがの松太

郎も逃げ手がない。
「お千加ねえさんのいうとおり、おれ掛け値なしの田舎っぺです」
「江戸へは見物に出てきなすったんかね？」
「いいや、ひとつうんと働いて、出世してやるべと思ってね」
「なるほどねえ、若いうちはそれくらいの心がけがなくちゃいけねえ。で、なんになるつもりだね」
「それはまだきまっちゃいねえが、なんでもいいだ。まじめに働いて、世の中から、松つぁんはたのもしい男だっていわれるようになりてえです」
「おもしろいなあ。それじゃ、うんと金をもうけて大町人になるとか、剣術の修業をして名人になってみたいとか、そういう出世とは違うんだね」
「いまんとこは、そんなつまらねえものになる気はねえだ。金持ちになれば欲が出るし、剣術使いになって人の頭ひっぱたくのがうまくなったところで、あんまり感心しねえな。そんな高望みしてよけいな苦労するより、早く一人まえになって、おれでできるだけのことを世の中のためにつくしていく、それがまあ、おれの分だと思っているです」
「どうだろう、松つぁん、おれが仕事師だからわが田へ水を引くわけじゃねえが、おまえさんひとつ火消しになってみねえか。諸人が難儀をする火事を消してやる、こんなにてっとりばやく世の中のためになる仕事はねえと、おれは考えるんだがね」
「なるほど、火事ぐらい大きなむだは、世の中にそうねえだね」
「そうだとも。そのむだとたたかって、諸人の難儀を救ってやるんだから、たのもしい男の中にはいるだろうじゃねえか」
「けど、おれは不器用だから、お正月のはしご乗りができるだろうかな」

「なあに、あんな軽わざみたいなまねは、どっちだっていいんだ。たいせつなことは、いざじゃあんとぶつかったとき、火事場で恐ろしい火と取り組んでよ、ひとりでも多くの人の難儀を救ってやる、それがほんとうの鳶職のつとめなんだ。きやりだの、はしご乗りだのってのは、ただ仕事師の表飾りで、うまいのへたのということはありゃしねえ」
自分の職のことだから、新五郎は熱心に説きたてる。
「偉いなあ、頭は。今の頭のことば、おれすっかり気に入っただ」
急に立ち止まった松太郎が、純情だから、すっと目を輝かしてばかでっかい声を出す。
「気に入ったかね、松つぁん」
新五郎もついつりこまれて立ち止まる。
「うんと気に入っただよ、頭。おれ、鳶の者にしてもらうぜ、田舎っぺの仕事師がひとりぐらいいたって、まさか江戸の恥にもなんなかろ、なあ、頭」
「こいつあおもしろいや。ばかに気に入ったぜ、松つぁん」
人生意気に感じるとでもいうか、新五郎がっしりと松太郎の手を握った。
「じゃ、おれを鳶の者にしてくれるかね、頭」
「しなくってどうするもんか。きっと引き受けた」
「そんならおれ、頭に死骸を拾ってもらうべ」
「うれしいことをいいやがる。拾わなくってどうするもんか、ちくしょうめ」
思いきり肩をたたいて、たたかれて、夢中になって抱きついたから、往来の者がびっくりして、あきれて、みんな立ち止まりながらにやにや笑っている。元旅籠町の八幡様の前あたりだった。

ぷんぷんおこり虫

昼を過ぎても、兄の新五郎からなんの音さた

もない。弟子たちにその日のけいこをつけながらも、お千加は少しも落ち着けなかった。

——あの田舎っぺを、にいさんうまく見つけたかしら。こんなにあたしが心配してやっているんだから、見つかったら見つかった、わからないならわからないで、帰りがけにちょっと寄ってくれたっていいじゃないか。

もうあんなやつ、どうなったってかまわない、とりっぱな口をきいておきながら、やっぱり気になって、妙にぷんぷんしたくなるのだから、自分でもおかしい。それでも強情っぱりだから、あたしが心配しているのは、あんな田舎っぺのことじゃない、もし見つからなければ、にいさんが大黒屋さんへ対して顔がたたないだろうと、それを心配しているんだわ、と自分で言いわけをしている。

「かまやしない。にいさんのうちへ行って、ちょっと様子を見てきてやろう」

とうとうがまんしきれなくなって、お千加はさとうちを出た。そして、いかにも用ありげに柳橋を抜けて、両国広小路の雑踏をつっ切り、米沢町の兄のうちの前まで小いそぎに歩いた。

が、そこへ来て、急に足がにぶってしまったのである。考えてみると、にいさん、あの田舎っぺ見つかったの、といきなり聞くのも変だし、そのほかには、別になんにも用はないのだ。それに、もしあの男でも来ているところへ行き合わせたら、もう口はきかないと言いきってあるてまえ、それこそひっこみがつかなくなる。

「困っちまったなあ」

そっと格子の中をのぞいてみて、どきりとしてしまった。皮肉にも、たしかに見おぼえのある松太郎のわらじがそこに脱いでそろえてある。

「やっぱり、見つけて連れてきているんだわ、憎らしい」

連れてきて黙っている兄も憎らしいし、自分のところからは逃げ出したくせに、にいさんにはおとなしく連れてこられている松太郎も憎い。どうしてやろうかしら、と思ったとたん、みえも外聞もどこかへすっ飛んで、お千加はがらりと格子をあけていた。

「どなた——？」

兄嫁の声である。

「あたしよ、ねえさん」

気がたっているから、手荒く玄関の障子をあけると、あけっぱなしのふすまの向こうの茶の間に、酒もりの膳が出ていて、憎らしい松太郎が兄の新五郎と差し向かいになって、にやにや笑いながら大あぐらをかいている。

「あれえ、ぷんぷんおこり虫のあねごが来たぞ」

人もなげに、まっさきに声をかけたのは松太郎だ。

「来たっていいじゃありませんか、ここはあたしのにいさんのうちなんだもの」

お千加も負けてはいない。白い目でにらみつけながら挑戦するように膳の横へいってすわって茶の間の鏡台の前へすわった。

「あら、お師匠さん、お出かけになるんですか？」

内弟子のお冬が、きょうはどうかしているというように、妙な顔をして聞く。

「ちょいと米沢町へ行ってくるから、あとを頼むわ」

「じゃ、けさはお寄りにならなかったんですね」

「寄ったわよ。寄ったんだけど、用が足りなければなんべん行ったっていいでしょう」

なんとなく、自分で気がひけるもんだから、てれかくしに、ついつっかかりたくなるお千加だ。

「そりゃもう、どうぞ、ごゆっくり行ってらっしゃいまし」

お冬はあきれてけいこ場のほうへ逃げていってしまった。

——用がありゃしようがありゃしない。

お千加はもう一度自分に言い聞かせて、さっ

た。

「あんたこそ、金持ちはきらいだってあんなにいばってたくせに、どうしてここへ来たんです？」

「こんなうちは金持ちでねえからね」

「ここは金持ちでなくたって、あんた、どうせにいさんに大黒屋さんのお店へ連れていかれるにきまってるでしょ」

「そりゃいくかもしれねえな。けんど、おれ、金持ちが好きになったわけではねえだ。こう見えても、おれきょうから頭に頼んで火消しにしてもらったでね、町内の鳶の者なら、どこへでも顔は出さなくちゃなんねえからね。よろしく頼みますぞ」

「へえ、あんたが仕事師に、――わあ、驚いた」

お千加はいじの強い目をわざと丸くしてみせる。

「たまげたかね。これから、江戸の火事はおれひとりで引き受けただ」

「大きく出たわねえ。そんな田舎っぺに火事が消せるかしら。あんただいいち、きやりができるの？」

「火事はきやりで消すんじゃなかんべ」

「そりゃそうだけど、お江戸の火事は田舎のと違って気が早いんだから、まごまごしていて、こんがりあぶられちまわないようにするんだわね」

「お千加、たいがいにしておきねえ」

いつまでたっても際限がなさそうなので、新五郎があきれて口を入れた。

「松つぁんはきょうはまだうちのお客さんなんだ。だいいち、おまえはさっき、二度と松つぁんとは口をきかないって、おれにおこったはずだぜ」

「今だっておこってるわ。どうして、にいさん、こんな田舎っぺのつむじ曲がりなんかを組の者にしたんでしょうねえ」

「おれが田舎っぺのつむじ曲がりなら、ねえさんはぷんぷんおこり虫のへそ曲がりだな」

松太郎はついおもしろくて、横から口を出さずにはいられない。ふたりはどうしても、いいけんか相手にできているようだ。

お千加の心配

その晩、松太郎は組の者たちに何人か紹介されたが、だれがなんという名まえなのか、たいていは忘れてしまった。そして、ひどく酔っぱらって、いつどこへ寝かされたかもはっきり覚えていないが、目がさめてみると、ちゃんと新五郎頭の二階へ寝ていた。

――ああ、そうか。おれ、きょうから鳶の者になったんだっけ。

すぐに思い出してわきをみると、自分のほかにふたり若い者がぐっすりと寝こんでいる。ひとりははしご持ちの清次というりっぱな兄貴株で、男まえがすっきりしているのと、口も八丁、手も八丁といったような、ひどく才気走ったところがあって、妙にだれからもけむたがられていたようだ。それが気になったので、名まえを覚えていたのだろう。そういえば、平気でぴしぴしことばがたきになっていたのは、あの負けぬ気のお千加だけのようだった。

もうひとりはまだ駆付で、みんなに留、留と追い使われていたから、ただ留と覚えている。考えてみると、きょうからはその留よりしんまいの身分なんだから、さぞ、松、松とみんなに追いまわされることだろう。

――まあ、しようがあんめえ。物には順てことがあるからな。

松太郎はそっと起き出して、もうお客さまではないのだから、追いまわされないうちに自分から働くつもりで台所へ出ていった。まだ早い朝で、台所では今起きたばかりの飯たきばあやがかまどへ火をたきつけたところだ。

「おはようございます」

「あれ、お客さん、早いんだねえ」

「もうおれお客さんではねえだよ、ばあやさん。きょうからは居候で、駆付の松太郎さんだ。よろしく頼みます」
「居候の駆付なら、さんだけよけいだよ」
江戸まえのばあやに、まずびしゃりと一本やっつけられてしまった。
「あは、は、そんなら、さんなしの松に負けとくべ。ばあやさん、水くんでやるべかね」
「そんな恩にきせるようなことといってないで、水がめがからだったら、黙ってさっさとくむもんだよ。江戸っ子はもっと気がきくもんさ」
「たまげたなあ。ばあさんは江戸っ子かえ？」
「こう見えても神田っ子さ」
「そんなら、ずいぶん気をきかして、さっさと黙って年取っちまったんだろうね」
「ぶんなぐるぞ、このやろう――」
松太郎は手おけをさげて、急いで井戸ばたへ逃げ出した。顔を洗って、大きな水がめをいっぱいにして、
「ばあさん、こんどはおれ、何をやるべか？」
と聞いてみた。
「うちの前の往来をはいて、水をまいて、それから玄関をそうじして、格子をふきな」
「はくのは、かっきり、うちの前だけでいいかね？」
「はきたけりゃ、町内じゅうはいてもいいよ」
「もし、さいふを拾ったらどうすべ？」
「ぶんなぐるぞ、このやろう」
松太郎はまたほうきを持って逃げ出した。うちの前から両隣の分まできれいに往来をはいて、水をまいて、玄関のそうじにかかっているころ、留がやっと起きだしてきた。
「松、早いじゃねえか」
駆付のくせに、さっそく兄貴風を吹かせる。
「早かあねえんだ。もうとっくに、夜が明けているだからね」
「夜の明けるのといっしょに起こされてたまるもんか」

「お百姓は夜の明けねえうちに起きるだよ」
「べらんめえ、こっちとら仕事師だい、肥たごかつぎとは違うんだ」
「留――」
茶の間から、新五郎が叫んだ。
「なんです？　頭あ」
「玄関のそうじはひとりでたくさんだ。てめえは便所のほうをやれ」
「うへっ」
留は首を縮めて、茶の間のほうへ赤い舌を出しながら、おぼえていろというように、松太郎をにらみつけていた。
朝飯がすむと、留は清次に連れられて、どこかの地形に出かけていった。
「頭、おれは何をやるべか」
「おまえはおれといっしょに行ってもらうところがあるんだ。おしの、このなりじゃしかたがねえ。松におれのはんてんを出して着せてやんな」
松太郎は、いままで着ていためくらじまのはかま、小倉の帯、浅黄のももひきを脱がされ、ぴっちりと肉へ食いこむような鳶のももひき、腹掛け、上へに組のはんてんを着せられて、形だけはどうやらいなせな江戸の仕事師になった。
「よく似合うよ、松つぁん」
着つけの世話をやいていたおしのが、笑いながらながめている。案外おっとりとした男ぶりだねえ、と言いたげな顔である。
「困ったな、おれ。えらく窮屈だけんど、これですわれるかな」
松太郎は具合い悪そうにして考えこんでいる。
「なあに、すぐなれっこにならあな。――じゃ、おしの、ちょいと行ってくるぜ」
「行ってらっしゃい」
新五郎が先に立って、松太郎があとから草履をつっかけていると、おしのが急いで神だなか

ら火打ち石を降ろしてきて、ふたりの背中へ切り火をかけてくれた。
「あら、もうにいさん出かけんの」
いきなり、格子があいて、そこへ棒立ちになったのは、茅町のお千加である。もうちゃんと朝化粧をして、子どもが通せんぼをするように格子につかまった姿は、少しやんちゃだが、それだけにいきいきとして、まったくみずぎわだった女ぶりである。
「ばかに早いな、お千加。何か急用でもできたのか？」
新五郎がわざとまじめな顔をして聞く。
「別に用じゃないけど――」
なんとなく、道をあけたくないようなかっこうで、
「へえ、そこの人、どこの仕事師なんだろ、見たことのあるような顔だけど」
と、もうおくめんもなく松太郎にからんでくる。
「おはようございます。おれ神田っ子のほうの仕事師で、こんどこっちの駆付にしてもらいやした」
「わあ、驚いた、いつ神田が沼津のほうへひっこしたのかしら」
「ついきのうのこってございます。まだねえさんとこへはひっこしそば届かなかったかね」
「届かないわ。今ごろ、六郷あたりをぶらぶら歩いてるんじゃない。どうせまがぬけているんだもの」
「そのとおりでございます。こりゃないしょだけど、どうせまのぬけたねえさんのとこへくばるそばだもんね」
「いったね、松ぼっくり。承知しないから」
本気になってにらみつけるので、
「みっともねえ、よさねえか、お千加。おまえがそう通せんぼしていちゃ、更科(さらしな)そばだっていかげんのびちまわあな」
と、新五郎が笑いながらたしなめた。

「どこへ行くのよう、にいさん」
「まあいいやな、上がって茶でも飲んでいな。すぐ帰ってくらあ」
「松ぼっくり、帰ってきたら、うちへどぶそうじに来ておくれな」
やっと、お千加が入り口をあけた。
「行ってやるだから、迎えの駕籠を回しておいてもらうべ」
新五郎のうしろから外へ出たところを、音のするほど背中をどやされてしまった。
「親切だね、おまえさま。帰ってきたら、腰のほうも頼みますだ」
思ったよりがんじょうな背中で、松太郎は痛い顔もせず、そのまま澄まして歩きだした。
「憎らしいったらありゃしない」
お千加は底意地の悪い目をして見送っていたが、
「ねえさん、にいさんはあの人を大黒屋さんへ連れていったんでしょう」
と、急に声をひそめるのである。
「そうらしいわ。まあ、お上がりよ、お千加ちゃん」
おしのは、知っているわよ、というような顔をして、にやにや笑っている。
「いやだわ、ねえさん。あたしそんなんじゃないのよ」
案外きまじめなお千加だ。
「じゃどうだっていうのさ」
「心配だったんです。あの男、とてもつむじ曲がりなんだもの、金持ちなんかだいきらいだっていばっていたから、もしにいさんが困っているようだったら、あたしほんとうにけんかしてやろうと思ってきたの、でも、よくおとなしく行く気になってくれたわね」
ああ、それがあったのかと、おしのははじめてわかり、やんちゃな娘だとばかり思っていたが、やっぱり親身の兄妹(きょうだい)だねえと、おもわずしんみりさせられて、

「いいえ、うちの人は黙って連れだしたようだけれど、そんなに松つぁんはがんこな男なのかねえ」

と、急に心配になってくる。大黒屋はたいせつな出入り先だし、そこで変に恥でもかかされるようなことでもあると、男を売る稼業だけに、新五郎は仲間へも顔が出せなくなるのだ。

「あら、黙って連れ出したの？」

お千加はさっと顔を曇らせて、

「あたし追いかけてみるわ、まだまにあうかもしれないから」

思いたったら待ったなしの強い性分だから、いきなり格子の外へ駆け出した。

大黒屋小町

新五郎は松太郎を連れて、大黒屋の勝手口からはいっていった。どこへ連れていくとは、新五郎もいわなかったし、松太郎は一度兄弟分になって身を寄せた以上、どこへ連れていかれようと、そんなことにけっして文句をつけるような男ではなかった。

「おや、頭、おいでなさい」

台所はちょうど大家内の朝のあとかたづけがひとくぎりついたところで、女中たちといっしょに働いていた三十七、八のりこうそうな女が、目ざとく見つけてこっちへ出てきた。

「おはようございます。——松、あいさつをしねえ、女中頭のお仲さんだ」

新五郎が目くばせするので、

「おはようございます。おれ、きょうから、仕事師のしんまいにしてもらった松太郎でございます。よろしく頼みますだ」

と、松太郎はていねいにおじぎをした。

「おやまあ、すっかり見ちがえるようになりましたねえ」

お仲が目をみはったのは、きのう店先でふたりのやくざ者に連れていかれる松太郎の田舎姿を見て覚えているのだろう。

「へえ、きょうからおれ、沼津のほうの江戸っ子でございますだ」

「口をきかなければ、ほんとうの江戸っ子に見えるんですがね」

ちょいとおしそうな顔をするお仲だ。女中たちがくすくす笑っている。

「せっかくだけんど、おれ、江戸っ子のかがしになるより、やっぱり沼津のほうの江戸っ子にしておいてもらいますべ」

松太郎はけろりとしている。

「お仲さん、だんなはおいでですか？」

新五郎は笑いながら聞いた。

「おいでですよ、ちょっと待ってください」

心得て、お仲は奥へ取り次ぎに走ったが、すぐに出てきて、

「頭、だんながお目にかかりますって、お居間のほうですから」

と告げた。

「松、ここで待っていてくんな」

かってを知っている新五郎だから、お仲に会釈をして、さっさと奥へ上がっていく。

「松つぁん、こっちへ上がったら」

お茶のしたくをしながら、お仲が声をかけてくれる。

「よすべ。頭がここで待っていろと言いつけただからね」

上がりかまちへ腰かけたまま動かない松太郎だ。

「おかたいこと——。おまえさん、おとといも六郷の渡しで、だんなとお嬢さんを助けてくれたんですってね」

「違うだよ。たぬきやくざとおおかみやくざとが、お供の小僧さんをいじめていたから、そんな罪なまねするでねえって、ちょいとしかってやったんさ」

「強いんだねえ、おまえさんは。きのうはあのやくざをふたりとも投げ出したっていうじゃないの」

「違うだよ。自分たちでかってにころんだんさ。ふたりともてんかん持ちかもしんねえな」
「感心だね、おまえさんは」
「あ、ほめられたんで思いだしたぞ、ここんちの水がめはからでねえかね」
「どうしてさ?」
「からなら水くんでやるべ、鳶のしんまいは、気がきかなくちゃいけねえもんだ」
「いいですよ、うちじゃそんなことは、じいやさんの役なんだから」
ばかだかりこうだかわからない、そんな顔つきで、お仲は奥へ茶を運んでいった。
「松つぁん――」
せっせとぞうきんがけしていた下女が手を休めて、いたずらっぽい顔を上げた。
「なんだね?」
「うちのお嬢さん、知ってるでしょう」
「知らねえだよ」
「うそばっかし。――六郷の渡しで助けたくせに」
「助けねえだよ」
「あんたしり曲がりなんだね。あのときだんなといっしょにいたのが、お嬢さんじゃありませんか。とても美人でしょう」
「そういえば、目も鼻もあったようだね」
「しり曲がり――」
「おまえさま、おれのしりばかり気にしていねえで、早くぞうきんがけすますがいいだ。油売っているとすべってころぶだからね」
「大きなお世話だよ。人がせっかくいいこと教えてやろうと思ったのに――いいいだ」
下女がさるのように歯をむいてみせたとき、お仲が帰ってきて、
「お杉さん、それなんのまねだえ」
と、強い目をしてたしなめた。
「違うだよ、お仲さん。このお女中さん、なかなかあいきょうがあるで、おれちょいとかまってみただ。別に、まだ不義しかけたわけでねえ

から、かんべんしてくだせえまし」
「松つぁん、ばかなこといってないで、頭が呼んでるからお上がり」
「へえ」
お仲のあとについて奥へ来てみると、おとい見覚えのある大黒屋利兵衛が、頭といっしょに待っていた。
「ごめんくだせえまし」
「松か――、大黒屋のだんなだ、ごあいさつしねえ」
「今度に組の中へまぜてもらった、松太郎っていう田舎者でごぜえます。お見しりおいてくだせえまし」
ここでは、松太郎もさすがに神妙だ。
「わたしは、大黒屋利兵衛です。口をきくのははじめてだが、松つぁんとはおととい六郷の渡しでおめにかかったね」
「そうでごぜえました」
「あの節は、いろいろと世話になりました。ほんとうなら、事のなりゆきを待って、その場ですぐあいさつをと考えないではなかったが、なにぶん、嫁入り前の娘を連れている、もしものことがあってはならないという、まったくてまえがってな親心で黙って舟へ逃げました。だからといって、ふたりを相手に、おまえさんがどうなってもいいと思ったわけじゃない。これもかってないいわけのようになるが、舟の中でずいぶん心配はしていました。たかが川崎まで、日帰りの遊山だからと軽く見て、頭にいっしょに行ってもらわなかったのが、なによりわたしの油断、とんだ迷惑をかけて、どうかかんべんしてくださいよ」
ことをわけての、はなはだていねいなあいさつである。
「そんなにいわれると、どうもおれ、恐れ入りますだ」
「それに、松つぁんには鈴ガ森でも助けてもらっているし、きのうはまた店へ来てまでやっか

い払いをしてもらっている。よくよく縁があるんだねえ」
「なあに、おれのほうがよくよくおせっかいにできていますだ」
きのうのは、いや、おとといの鈴ガ森のも、お千加にけしかけられて、自分から飛び出したのだから、たしかにおせっかいの部である。それにしても、お千加ってやんちゃ女は、けしかけの名人だと、松太郎はいまさらのように苦笑せざるをえない。
「ところでねえ、松つぁん、おまえさんは茅町のお千加に、礼なんてものは呼びつけてするもんじゃない、だから、金持ち根性はきらいだと言いなすったそうだが、たしかにそのとおりだ。だからわたしは、ここではなんにもお礼を出さないことにする。それでいいかえ」
「けっこうでございます」
「そのかわり、わたしはこう見えても、おまえさんより年が上だ。だから、今後おまえさんの一存でしまつがつかないことがあったら、なんなりと相談しておくれ、わたしにできることなら、きっと力になってあげよう。他人ではない、まあそうだな、おじさんだと思ってもらえばいい。これだけは頭のまえで約束しておきますよ、ねえ、頭、どうだろうねえ」
「ありがとうございます。松、礼を言いねえ。だんなが力になって、おまえを男にしてやろうといってくださるんだ」
新五郎が自分のことのように喜んでくれるのを、
「ありがとうございます」
と、松太郎はとおりいっぺんのおじぎをしただけで、あんまりうれしそうでもない。金持ちの気まぐれとしか考えられないし、人の力にすがって男になろうなどとは、少しも思っていない松太郎なのだ。
「どうした、松、いやにあっさりしているぜ」
「まあ、頭、こんなことは、そのときになってみなくちゃわからない。松つぁんにはやっぱり金持ちのもの好きとしか思えないんだろう」
利兵衛はおだやかに笑っていた。
ひとり娘のお糸が茶を運んできて、しとやかにそこへ両手をついた。緋鹿の子のお七帯を締めて、少し人形めくがふっくらとした面輪の、目のさめるような十七娘だ。
「糸と申します。おとといはどうもありがとうございました」
ぽっとほおを赤らめながらも、しっかり者とみえて、案外はっきりした口のききかたである。
「恐れ入りますだ。おれ、田舎っぺのほうの江戸っ子の松太郎でござえます」
「ふ、ふ、松太郎さんはお強いんですね」
なにか親しみのこもったまなざしだ。
「違うだよ、おら、ちっとも強くねえけど、あっちがもっと弱くできているだね」
「どうぞごゆっくりなさいまし」
茶をすすめておいて、にっこりしながらすっと立っていってしまった。
「頭、おれひと足先へ帰ってもいいかね」
手持ちぶさたの松太郎は無遠慮だ。
「忙しそうだな、松」
新五郎が、しようのねえやつだ、というように苦笑いする。
「忙しいだよ。これから茅町へ、どぶさらいにたのまれていくだ」
「松つぁん、それじゃあすはうちのどぶさらいをひとつたのむよ」
「へえ、承知しましただ。じゃ、まっぴらごめんくだせえまし」
おじぎをして、ひょいと立とうとしたが、ぴったり足へ食いこむような蔦のももひきですわっていたのだから、しびれがきれて立てない。
「ああ、いけねえ。頭、ももひきのやつが、おれの足を食ってしまっただ」
「あは、は、そうあわてねえで、ゆっくりももひきをさすって、早く吐き出してもらいな」

そのむじゃきさを愛するように、にこにこ笑いながらながめている利兵衛である。

あんまりぐずぐずしていては恥ずかしいから、むりにそろそろと廊下へ出て、

「だんな、おれ悪い病気しょったでねえから、まちがわねえでくだせえまし」

まだそんな負け惜しみを言いながら、障子につかまるようにして歩いてくると、

「松太郎さん――」

ふいに、ある部屋の障子が細めにあいて、あたりをはばかるような、お糸の声がした。

「いけねえだよ、お嬢さん」

若い娘との内密の立ち話など、人の誤解を招くもとなのだ。

「いいえ、お人がらを見こんでのお願い。おとっつぁんのことなんですから、一度話だけ聞いてください。あとで長吉を、あの六郷のときの小僧をお迎えにやります。ね、松太郎さん、お願い――」

お糸は必死な顔で、すがりつくように手を合わせて、すっと障子をしめてしまった。

「おや、どうしたの？　松つぁん」

向こうの廊下からお仲がひょいと出てきて、ふしぎそうな顔をした。

「あ、お仲さん、すまねえが、ちょっくら手を借りてえだ」

「どうしたのさ、そんな変な腰つきをして」

「自慢にはなんねえが、おれ、足がしびれて歩けねえだ」

「ふ、ふ、田舎っぺのほうの江戸っ子の仕事師は、たいそう世話がやけるんだね。さあ、肩を貸してあげるから、おつかまりよ」

「やれ、ありがてえ」

一度その肩へつかまった松太郎は、急いで手をひっこめた。

「よすべ、お仲さん。御親切は一生忘れねえだが、こんなまねしてるとこ人に見られて、不義とまちがえられちゃなんねえもんな」

「ばかおいいな。親子ほど年が違うじゃないか、ばかばかしい」

「そうはいかねえだ。お長半右衛門のためしもある」

「なんだか語呂がおかしいねえ、それ、ひっくりかえしじゃないかえ」

「なあに、女のほうが年上だもん、お長半右衛門でよかんべ」

「かってにおしな、口の減らない人だよ」

お仲は、笑いながら台所のほうへ行ってしまう。

「やれやれ、あぶねえこった。おれの足もとがね」

にやりとして、また障子づたいにそろりと歩きだす松太郎である。

春の町

松太郎が大黒屋の台所口から飛び出してみると、そこのかどにお千加が、さすがに踊りの師匠だけあって、すらりとしたいうしろ姿を見せながら立っている。あれえ、どうしてもおれにどぶさらいをさせる気で網を張っているんかなと、早くも見て取ったから、

「お待ちどおさまだっけね」

松太郎はのこのこと近づいていって、平気で肩を並べた。春のひなたに熟れた女のにおいがほのぼのと鼻をうつ。

「なにがお待ちどおさまなのさ、松ぼっくり」

いきなりこわい目をしてにらみつけて、もうけんかごしなのだから、まったくあきれたやんちゃ娘である。

「あれえ、お千加ねえさんはおれを待っていてくれたんじゃねえのかね」

松ぼっくりはぼかんとせざるをえない。

「しょってるわ、あたしはにいさんを待ってるんですからね。まちがえないでもらいますよ」

そのくせ、松ぼっくりのほうへ肩を並べて歩いているんだから、よっぽど変わっている。

「いいお天気だねえ、ねえさん」
「あたしのせいじゃないわ」
「あれえ、ばかに風当たりが強いぞ。こんな日にじゃあんときたら、えらいことになるべ」
「ひっぱたくから」
ひっぱたくかわりに、しりっぺたをいやというほどつねられてしまった。
「痛いっ。――おれ、もうやめにすべ」
「何をやめるのさ?」
「いわねえだ」
「ひっぱたくから」
「いうだ、そんならいうだ。とてもいい女で、おれに少しほの字のようだから、おれ、嫁っ子にロかけべえと思ったんだけど、その娘、どうも手癖がよくねえだ」
「なんですって」
「そのおれにほの字の娘っ子な、すぐおれをひっぱたいたり、つねったり、手癖が悪いから、おれよろいかぶとを買わなけりゃ祝言できねえだ。そんなのよしたほうがいいな、ねえさん」
お千加は知らん顔をして歩いている。なるほど、米沢町へはいったのだ。その下駄屋のかどを曲がれば新五郎頭のうちだが、そっちへ曲がろうともしない。だから、松太郎もそのとおりついていった。町内には知った顔が多いから、みんなお千加にあいさつをしていく。
「お師匠さん、こんにちは――」
「こんにちは。いいお天気ですねえ」
さすがに、お千加も町内の人には至極あいそがいい。いいお天気だって、おれのせいじゃねえだ、とよっぽどからかってみたかったがよした。ひっぱたかれそうだからではない。お千加にあいさつをした人がみんな、ついでにいい女のお師匠さんと肩を並べていく見慣れない若い松太郎をじろじろと見ていくからだ。
おれ、あやしいもんでねえだよ、このとおり、に組のはんてんを着ているだからね。松太郎はそのところに、つんと澄ました顔をしてやる。

――でも、少しあやしいかな。まるで、兄貴の妹のしりを追っているように見えるかもしれねえもんな。けっしてそうではねえだ、まちがわねえでくだせえまし、おれ、に組の鳶の者でしんまいで、お師匠さんは兄貴の妹だから、頼まれてこれからどぶさらいに行くだからね。
やっと町内を抜けると、両国広小路の盛り場だ。いいお天気だから、きょうもどっさり人が出ていて、その人ごみを横切っていくのはひとほねおりだ。うっかり、冗談口なんかきいていられない。
そこを泳ぎ抜けて、床屋横町へ出ると、目前に柳橋が見える。柳橋を渡ると、どうやら歩くのが楽になった。
「松ぼっくり、おまえ、のっけんぼんとした顔をして、どこまであたしのあとを追いかけてくるんだえ」
けんかの早いお千加が、さっそくけんかを吹っかけてきた。よしきた。買ってやるべ。
「おれ、お師匠さんのしりを追っているんじゃごぜえません。どぶさらいに行くです」
「どこのどぶさらいに行くのさ?」
「なんでも、兄貴の妹に、お千加って手の早い娘っ子がいるだ。そこんちへどぶさらいに行けって、兄貴に言いつけられただ。ねえさんはその手癖の悪いお千加っていうあまっ子の家、知らねえかね」
「ひっぱたくから――」
「おっとあぶねえ」
またしりっぺたをつねられないうちに、松太郎はばたばたと逃げ出す。
若い男と若い女がこんなふうに天下の往来をふざけて歩いていて、それが評判にならなければ、ならないほうがよっぽど気が変だ、とはまだ気のつかないのんきな松太郎である。

目ん中の槍(やり)

どぶさらいをやって、家のまわりから縁の下

のそうじまでやらされて、もう帰ってもいいかねと、内弟子のお冬にうかがいをたててもらうと、奥で通い弟子にけいこをつけていたお千加は、ついでに庭の手入れをしていけと言いつけてよこした。

「あれえ、お師匠さん、おれを植木屋とまちがえてるでねえかな」

松太郎はちょいとあきれずにはいられない。

「だって、松つぁんはいままで、田舎でお百姓してたんでしょう」

そういうお冬も、百姓と植木屋をごっちゃにしているようだ。

「ああ、そうか。そんなら、お師匠さん、おれに庭へこえをまけっていうんだな」

「だめよ。そんなものまいたら、お師匠さん、気絶しちまうから」

若い女は、とかくおおげさなことを言いたがる。こえをまいたからといって、そのたびに気絶をするようじゃ、毎日はばかりへははいれないはずだ。

が、土いじりや植木いじりはきらいなほうではないので、ねこの額ほどの小庭だが、常盤木の枯れ葉をふるい落としたり、くもの巣を払ったり、鉢物を土へ移したり、うららと春の日ざしをあびて、聞くともなくけいこ三味線や踊りの足拍子を耳にしながら、のんきに庭いじりをやっているうちに、いつのまにかお昼になってしまったようだ。

「松ぼっくり、御飯にするから、足を洗っておいで」

ひとけいこすましたお千加が、ぞろりと縁側へ立って呼ぶ。

「手は洗わねえでもいいかね、お師匠さん」

松ぼっくりもお千加の顔を見ると、ついロげんかを持ちかけたくなるからおかしい。

「洗いたくなけりゃ、かってにおしな」

「どうせ、お昼から、庭じゅうへこえをまいてやろうと思っていたんだから、手を洗うまえに、

やってしまうかな」

「そんなよけいなこと、だれがしろって言いつけたのさ。くさくってしようがありゃしない」

「ねえさんがくさくっても、植木は喜ぶだ」

「近所迷惑だから、いけないってば。ここは野良じゃない、お江戸のまん中ですからね」

「お江戸のまん中にゃ、はばかりはねえかな」

「きたないから、そんな話およしってのに。ぶんなぐるから」

「あっ、いけねえ」

やつでのほこりをふるい落としていた松太郎は、急いで手の先で目をこすった。ごみが飛びこんだらしい。

「いいきみ——。罰が当たったんだわ」

お千加はうれしがっているようだが、目のごみはなかなかとれない。またたきをするとひどく痛む。

「さあいけねえ。冗談ごとではねえぞ」

松太郎は真剣な顔をして、そっと目をこすっては、あけてみたり、閉じてみたり、そのたびにぽかんと口をあけて、顔をゆがめて、やっぱり痛い。

「なんて顔するのよ。まだ取れないの」

「取れねえだ」

「痛む?」

「まるで目ん中を槍でつかれてるみたいだ」

「おおげさねえ。こすっちゃだめだったら。こっちへ来てごらんなさいよ、見てあげるから」

お千加もちょいと心配になってきた。

「すまねえでござえます」

のこのこ縁側の下へ来た男の顔を押さえつけるようにあおむけて、右のまぶたを返してみると、なにか黒いものが張りついている。

「あったわ、松ぼっくり。待っといで」

といったが、あいにく手ぬぐいがない。お千加はつと顔を寄せて、見当をつけながら、自分の舌の先ですっとぬぐってやった。

「どう、取れた?」

むせるような女の脂粉の香にくすぐられながら、松太郎は神妙にふたつ三つまばたきをしてみて、

「あっ、直った。ありがとうございます」

と、急に明るくなった顔だ。

「いやだなあ、きたない」

お千加は思い出したように、わざと顔をしかめて庭へつばを吐いたが、その実、ちっともきたない気はしていないのだから変だ。

「ねえさんはやっぱり豪傑なんだね」

「どうしてさ」

「おれの槍、舌の先でちょいと取って、吐き出したもんな」

「いったね、松ぼっくり、承知しないから」

それでなくてさえ、男にそんなまねをしやって、なんだか気恥ずかしい気がしていたお千加だから、思わず赤くなって、てれかくしに、前にあった松太郎の両方のほっぺたを、いきなりつねりあげた。

「痛いっ。ごめんなせえまし、もういわねえだ。かんべんしてくだせえまし」

「こえもまかないわね」

「まかねえでごぜえます」

「手を洗うわね」

「手を洗いますでごぜえます」

「なら、早く洗っといでなさいよ」

やっと手を放したかと思うと、どすんと肩を突き飛ばされてしまった。

「ああ、驚いた。まるで巴板額(ともえはんがく)みたいなくそ力、おっと、そうではねえんだ、小野の小町、その小町さまでごぜえます」

松太郎は大急ぎで台所のほうへ逃げ出す。

「人をなんだと思っているんだろう、土百姓のくせに」

口小言を言いながら、ひとりになるとその目がとろんと甘くなってくるお千加だから、われながらまったくどうかしている。

からりと格子があいて、

「こんちは――」

隣近所へ聞こえるような、威勢のいい男の声だ。

おこっている男

「だれ――？　留公かえ」

お千加が玄関へ出てみると、はたして駆付の留吉が、まのびのした顔をして立ちながら、

「へえ、その留吉でござんす」

と、にやにや笑っている。

「いいお天気でござんすね、お師匠さん」

「あたしのせいじゃないわ」

「えへ、へ、たぶん、そうお言いなさるだろうと思ったんだ」

「何か用かえ」

留公なんかとはあんまりむだ口もききたくない、というようなお千加だから、げんきんなものだ。

「用がなけりゃ来ませんや。用もねえのにうっかり顔を出すと、水をぶっかけられますからね」

「なんの用さ、さっさとお言いよ」

「松のやろうがお宅へ来ているでござんしょう」

人間ははんぱでも、一日でも古参は古参にちがいないのだから、留公は大きく兄貴風を吹かせる。

「来てるわよ、松つぁんになにか用なの？」

「ひでえな、お師匠さん、松のやろうにさんをつけて、おれがただの留吉じゃ、つりあいが取れねえや」

「あたしは忙しいんだから、早く用をお言いよ」

つったったまま、お千加は少しも取りあおうとしない。

「そうでござんすかね。なら、言いますがね、頭がひどくおこってるんでさ」

「何をさ――？」

「しんまいのくせにぶらぶら遊んでいちゃ、ちっとも用が足りねえ、茅町にいるにちがいねえ

から、すぐによんでこいってね」
さすがに、お千加もどきりとした。朝っぱらからうちへひっぱってきて、まるでうちの下男かなんぞのようにこき使って放さなかったのだから、これは新五郎に対して、ちょいと気がひけずにいられない。
「帰ったら、にいさんにそういっておくれ。あたしが用があったんだからしようがないって」
わがままなお千加は、それでもまだいばっている。
「どんな用があったんだ、と頭が聞いたら、なんて返事しときましょうかね」
からかい顔の留公だ。
「留兄貴、行くで。その返事なら、おれが頭にいうからいいだ」
いつのまにか裏から回ってきた松太郎が、格子の外に立っていた。
「あら、お昼をたべていけばいいのに」
「お昼はどうせ頭の小言を食うだから、それでまにあわしとくべ。さようなら」
にっこり笑ってみせて、もうさっさと歩きだす松太郎だ。
「やいやい、使いをおいてけぼりにするやつがあるかえ――、お師匠さん、ごめんよ」
留公があわてて飛び出して、あとを追う。
うららうらとのどかな春の町だ。
「松公、おまえあんまりよくねえぞ」
肩を並べながら、留公が話しかけた。
「頭はそんなにおこっていたか」
ほんとうのところ、いい気になってお千加と遊んでいたのだから、松太郎も多少気がかりだ。
「そりゃおまえ、おこるのがあたりまえじゃねえか。庭へこえなんかまきゃ、だれだっておこらあ」
おや、と松太郎は横目で留公の顔を見る。
「てめえまた、うまいとき、目ん中へごみを入れやがったな」
「なんだ、のぞいていたんかね」

どうもそうらしい、とすると、とんだ甘いところを見られてしまったことになる。
「人聞きの悪いことというねえ、だれがあんなおかしなとこをのぞいてなんかいるもんか」
「そんならいいけど、いい若い者が女の家なんかのぞいていると、器量がさがるからな」
「そうだとも、目ん中の槍をなめてもらったり、ほっぺたをつまみあげてもらったり、ちぇっ、ばかにしてやがる、見ちゃいられねえや」
「あれえ、そんなら、残らずのぞいて見ていたでねえか」
「ぶんなぐるぞ、のぞいていたんじゃねえや。節穴があったから、ちょいと目でふさいでやったんじゃねえか。もし、近所のやつにでものぞかれてみろ、すぐに頭の耳へはいって、大騒動が持ち上がら」
なんだか苦い顔をしている留公だ。
「頭はほんとうにおこっているんかね」
どうもそれが気になる。
「おこってるよ、かんかんになっておこってらあ。いったい、お千加ちゃんは、なんのつもりなんだろうな」
「何をだね？」
「とぼけちゃいけねえや、おこってるんだぜ、おれは。どうして、お千加ちゃん、おまえの目ん中の槍なんか、舌でなめやがったんだろうな」
「そりゃ留公さん、師匠はほの字だからね」
こうなれば、松太郎も度胸がすわってくる。
「なんだと――」
ちょうど両国広小路をつっきって、米沢町へかかってきた。そこに〝太十〟というなわのれんがある。その前へ留公は棒のようにつったってしまった。
「留兄貴も案外血のめぐりが悪いだね。お千加はおれにほの字だっていってるんさ」
「ようし、このやろう。ふてえことをぬかしやがる。ちょいと顔を貸せ」
さっさとなわのれんをくぐろうとする。

「だめだ、留さん。おれ、また頭にしかられるだ」
「なにをぬかしやがる。いいから、一杯つきあっていけ」
「おれはよすべ。このうえおそくなって、頭に追い出されると、行くところがねえだ」
「心配するなってことよ。留あにいがちゃんとついているんだ」
「おれ、せっかくだけんど、留あにいより頭のほうがこわいもんな。やっぱりよしにすべ」
「しようのねえいくじなしだな。じゃ、ほんとうのことというけどな、ほんとうは頭がおこってるんじゃねえんだ。頭はきょうは寄り合いがあって、うちにいるもんか」
「なら、だれがおこってるんだね?」
「大きな声じゃいえねえが、清次あにいがひどくおこってるんだ。たいへんだぞ、松、そのわけをよう話してやるから、まあ一杯つきあいねえ」

〝太十〟のなわのれんをくぐる。まだきのう会ったばかりのはしご持ちの清次が、なにをそんなにおこっているんだろう、ちょいとおかしなことになりそうだぞ、と松太郎もいささか気にかかる。

恋がたき

「留あにい、なんだって、清次兄貴がおれのことを、おこってるんだろうな」
太十の片すみへ陣取って一杯やりながら、松太郎は留公に聞いてみた。ちょうど時分どきで店は相当たてこんでいるが、台の一方へ自分たちの城を構えてみると、お互いにはほかの客のことはあんまり気にならないから妙なものである。
「そりゃおまえ、おこるのがあたりきよ。正直んとこ、おれだってちっとばかしお気持ちを悪くしているんだ」
留公は飲みにはいったからには飲まなけりゃ

損だというように、手酌でぐいぐい杯をあおりながら、気むずかしい顔をしてみせる。
「ふうむ、留あにいもねえ。さあ、おれにはわかんねえ」
「ほんとうにてめえわかんねえのか?」
「わかんねえな。おれ、うらない師でねえから、人の気持ちん中までわからねえ」
「さ、それじゃいって聞かせるがな、清次あにいははしご持ちだぜ」
「そりゃ知ってるだよ」
「纏持ちとはしご持ちは、頭の左右の腕なんだ。ことに、清次あにいは男っぷりはいいし、度胸はあるし、よく気はつくし、に組にゃなくてはならねえりっぱなあにいだ。うちの頭だっていちもくおいているんだぜ」
「そうのようだね、おれまだしんまいでよくわかんねえが、頭がいちもくおいているんなら、おれたちは井目ぐらいおかなけりゃなんねえな」
「あたりきよう。つまり、頭にとっちゃ、右の片腕のたいせつな清次あにいだ。しかも、まだひとり者ときていらあ。うまいぐあいに、その頭にゃお千加さんていう妹があって、これもまだきまった亭主はいねえんだ。とすりゃ、だれが考えたって、頭はいまに清次あにいと茅町の師匠を夫婦にする気だろう、ちぇっ、うまくやってやがると思うなああたりまえだろう」
「だれがうまくやっているだね?」
「あれえ、こんちくしょう、わからねえやろうだな。めっぽういい女でよ、踊りの師匠でよ、しかも頭の妹ときているんだ。そんなのをかかあにするなんて、だれが聞いたって、うまくやってるじゃねえか」
「だれがかかあにするんだね? お千加さんを」
「ぶんなぐるぜ、こんちくしょう、清次あにいが夫婦になるんだって、今いったばかりじゃねえか」
「ふうむ、頭がそうきめたんかね」
「なんだと――」

留公はあきれたように目をみはったが、
「ああ、そうか、別に頭がそうはっきりきめたってわけじゃねえが、たぶんそうなるだろうって、おれたちも、清次あにいも、茅町の師匠もみんな考えているのよ。つまり、あとは時の問題というやつかな」
「そううまくいかねえかもしれねえな、きのどくだけんど」
松太郎はもっともらしい顔してみせて、
「なんだと、――なにがきのどくなんだ、松」
「ほかの者はどう思ってるかしれねえが、お千加だけはそんなこと考えていねえようだね」
「おや、このやろう、てめえの口から、お千加とはなんだ、お千加とは」
「ああ、そうだっけ。あにいの前では、お千加ちゃんと呼んでおくべな」
けろりとして笑っている松太郎だ。
「だれの前でだって、頭の妹を呼びすてにするやつがあるか。田舎者はずうずうしくていけねえ。てめえはそういうもの知らずだから、清次あにいに憎まれるんだ。気をつけなくちゃいけねえ」
「どう気をつけるんだね」
「どうもこうもあるもんか、清次あにいは、ちゃんと自分のかかあだときめているのに、どこの馬の骨だかわからねえ土百姓が、横からまぎれこみゃがって、ずうずうしく師匠にべたつきやがる。だれだっておこりたくなるなああたりきだ」
「それで、留あにいもいくらかお気持ちを悪くしていんのかね」
「あたりきよう」
「あれえ、じゃ、留あにいもほんとうはお千加ちゃんをかかあにしたいと、腹ん中で煩悩の火を燃やしているんだね」
「なんだ、そのお盆の火ってのは？」
「きのどくなもんだな、おれ、別にべたついてもらわなくてもいいだけれど、どういうもんか、師匠のほうでおれにべたつきたがるだ。今度師匠によくそういっておくべ。おれにべたつくと、清次兄貴と留あにいがお盆の火になるから、ふたりの見ているまえでよ、けっしてべたつくでねえとな」
「そ、そんなこと師匠にいうやつがあるもんか」
留公が急にあわてだす。
「いうだよ。おれ、まちがって兄貴たちにぶんなぐられちゃつまらねえもんな。だいいち、清次兄貴のお嫁と頭がちゃんと中へ立ってきめたんなら、師匠もおれなんかにべたついちゃ悪いだ。みっちり意見してやるべ」
松太郎は意地が悪い。
「ば、ばかなことをいうねえ。そんなことを師匠にいってみろ、あんなきかねえ気の女だから、大騒動にならあ」
「いくらきかねえ気だって、お嫁はほかの男にべたついちゃいけねえだ」
「そ、そのお嫁ってのは、清次兄貴のほうじゃそう考えているんだが、お千加ちゃんのほうは別にそうときめているわけじゃねえんだ」
「だって、留あにいは今、頭がそうきめて、みんなもそう考えているんだといっていたようだがなあ」
「そ、そりゃおまえ、たぶんそうなるだろうっていう話なんじゃねえか。けど、清次兄貴が気を悪くしているのはほんとうだぜ。だから、おれはそっとおまえに意見をしてやろうと思ったんじゃねえか」
「留あにいも気を悪くしているんだってね」
「そ、そんなことはねえや。そりゃおまえ、おれだって男だから、あんまり気持ちはよくねえけれど、こいつだけはしようがねえやな。松、こんなこと、師匠にはないしょだぜ。お千加さん強いから、ぶんなぐられるかもしんねえからな」
がらにもなく留公はくすぐったそうな顔をして長いあごをなでている。
「いうなっていうんならいわねえから、あにい

もきょうへいの節穴からのぞいたことなんか、あんまり人にいわねえがいいだね」

にやにや笑いながら、松太郎は一本くぎをさすことも忘れない。いくら兄貴ぶってみても、留公はとうてい松太郎の敵ではないのだ。

縁起が悪い

翌日から、松太郎は新五郎のともをして出たり、地形や足場組みのてつだいに出されたり、鳶人足として本格的な修業が始まったので、二、三日はなんとなく忙しいままにかけ違って、お千加とも顔を合わせる機会がなくすぎた。そして、だんだん気をつけてみていると、人のよい留公は、太十以来そうあにい風は吹かさなくなったが、はしご持ちの清次のほうは、役にもたつだけに底意地があって、たしかに松太郎に好感は持っていないようだ。その原因が、もし留公のいうようにお千加にあるのだとすれば、あんまりばかばかしすぎるから、松太郎のほうからも別にきげんを取っていこうとしない。自然、ふたりは毎日顔を突き合わせていながら、めったに口をきくようなこともなかった。

「松つぁん、おまえどうも、清次さんとは気があわないようだね」

女だからあねごはすぐ気がついたとみえ、陰へ回って、そっと松太郎に聞いた。

「そんなことはねえだよ」

「だって、ろくに口もきかないようじゃないか」

「しようがねえだよ。おれが話しかけると、清次あにいはそっぽを向くだ。まさか、そのそっぽのほうへまわって口をきくのも、めんどうだもんな」

「それまでにしなくたっていいけれど、同じ家にいるんだから、なるたけ仲よくしてくれなくちゃ困りますよ」

「気をつけるようにすべ」

しかし、いくら気をつけても、清次のほうでそっぽを向くのだから、松太郎もついロがきたくなくなるのである。

その日は、こんど薬研堀へ新しく建つ大黒屋の寮の建て前へ、松太郎もてつだいに行くことになっていた。たいせつな建て前だから、きょうは、あとから新五郎も出張ることになっている。清次に連れられてひと足先に出る松太郎と留公が、玄関でしたくをしていると、外からがらりとやんちゃに格子があいて、春のにおいといっしょに、明るいお千加の顔が飛びこんできた。

「おや、仕事にいくの、松ぼっくり」

ずらりと三人並んでいるのに、お千加の目には松太郎しか見えないらしく、いきなりその前へ立ちふさがるのだ。もっとも、三日ばかり口げんかをする機会がなかったから、敵もなんとなく物足らなくて、その気で出馬したのかもしれない。さっと一刷毛おしろいをはいた顔がいきいきと闘志にあふれて、食いついてやりたいような赤いくちびるをとがらせながら挑戦してくる。

「茅町のお師匠さん、おはようごぜえます」

清次の前があるから、松太郎はわざとおとなしくあいさつをした。

「へえんだ。それでも感心に、人並みのあいさつを知ってんのねえ」

敵はまったくはりきっているらしい。

「あれえ、ねえさんの目には、おれがさるに見えるかね」

「松ぼっくりに見えるわ。どこへ行くのさ、松ぼっくり」

「薬研堀の大黒屋さんの寮へ、建て前に行くんでさ」

横から留公が、仲間へはいりたそうに口を出す。

「まあ驚いた。建て前だなんて、あんたいつのまに一人まえになったのかしら。生意気ねえ」

それを松太郎の顔ばかり見ながらいって、けっして留公のほうなぞはふり向いてもみない。

「なあに、ほんとうの建て前は、清次あにいたちがやるんでさ。おれや松はまだ下働きだ」
留公が正直に申し上げる。
「なあんだ。じゃ半人まえなの。そんな下働きなら留公に任せといて、松ぼっくりはうちのまき割りに雇ってやろうかな。来るかえ」
「ありがとうございます。まき割りなら、おれ半人まえの仕事してきてから行ってやるべ」
「ほんとうだね」
「おれ、うそはいわねえだ。そのかわり、お駕籠を持って迎えにきてもらうべ」
「いいわ、お弔いの駕籠をまわしてやるから」
「お千加、いいかげんにしろ、男の出がけに、縁起でもねえことをいうやつがあるか」
とうとう茶の間から、新五郎にどなられてしまった。はっとお千加は首を縮めて、赤い舌をぺろりと出す。
「おしの、早くみんなに切り火を掛けてやれ」
「あい。——だめじゃないか、お千加ちゃん。悪い癖だねえ」
おしのが笑いながら立ってきて、かちかちと勇ましく三人に切り火をかける。
「行くぜ。——頭、出かけやす」
それをきっかけに、清次が立ち上がった。
「御苦労だな。おれもすぐあとから行くから」
「頭、行ってきます」
清次のあとへ留公が続く。そのあとから、松太郎が玄関を出ようとするのを、お千加が黙って腕をつかんで留めた。
「ねえさん、ちょいとそれを貸して」
おしのの手から火打ち石を取って、かちかちと松太郎の背中へかけ、
「つるかめ、つるかめ。——ごめんよ、松ぼっくり」
そっと耳もとへささやくお千加だ。
「気にしねえでもいいだよ」
ほっぺたが触れんばかりのお千加の顔へにっこり笑ってみせて、ああいけねえ、あねごが見ていたっけと、おもわず首をすくめながら、
「頭、行ってめえります」
松太郎は急いで玄関を飛び出す。先へ行く留公はふり返って、げんこに息を吹っかけてみせたが、足早な清次はふり返ろうともせず、そのうしろ姿はたしかにむっとしているようだ。
——やいたって、これぱかりはしようがねえだ。おれのせいではねえもんな。お千加のほうがほの字なんだから、どうかかんべんしてやってくだせえまし。
松太郎の足どりは軽い。
しかし、その日はそんな冗談ごとではすまなかった。建て前は大工に鳶の者が協力して、二階建ての骨組みがしだいに進んでいくと、大工は上にがんばって木組みを合わせ、鳶の者は高い梁を伝って、どしどし材木を下から運び上げていく。こつ一つで、重い丸太をまるで箸のように扱い、高いところを大ぜいが自在に走りまわるのだから、あざやかといおうか、勇ましいといおうか、まったくみごとなもので、これにはさすがの松太郎もぽかんと口をあけて、おもわず下からみとれずにはいられなかった。
往来には近所のひま人や、通行の物好きがみんな感心して見物している。
「松、手をあけてぼかんとしているやつがあるか、遊びにきているんじゃねえぞ」
いつのまにかうしろへきた清次が、それでなくてさえ殺気だっているところだから、かみつくような声で頭からどなりつけた。
「へえ」
遊んでいるわけじゃないが、まだ慣れないから、手があくとついぼかんとなるので、あたりを見まわすと、なるほど、だれひとりぼんやり立っているような者はいない。
「おれ、なにをすべ」
「ばかやろう、することがなければ、上へあがってこれを上へ運べ」
「上がるかね」

これはむりだ。まだ鳶の者になって四日にしかならないのだから、とても高いところで身一つのこなしさえつくものではない。が、負けずぎらいの松太郎だから、人にできることがおれにできないこともあるまいと、大胆にも、目の前にかかっていたはしごを、人のやるとおりに登っていった。

「それ、受け取れ」

下から、清次が九尺の丸太を一本突き出す。

「ほい、来た」

力だけは人に負けないから、軽々と受けて引き上げて、さてこわきにかかえて木の上へ立ってみたが、歩くどころか、おもわずへっぴり腰になって、満足に立つことさえできない。

「こりゃいけねえだ。なるほど、むずかしいもんだね」

「ぼやいてねえで、早く運ばねえか。じれってえとんまだな」

「そう急がしたってだめだ。おれ、まだしんまいだもんな」

「どうした、どうした。早くしねえか。へっぴり腰の曲芸なんかして遊んでいちゃいけねえや」

向こうで大工が金づちをたたきながらわめき立ってる。

「ようし、今行くだよ」

思いきって二足、三足歩いた、というより、ふらふらとよろめき出たところを、

「ばかやろう、腰を伸ばせ、腰を――」

下から清次がどなりつけてはしごをゆすったので、それでなくてさえ中心を取りかねていたところだから、

「わあ、いけねえ」

とうとう足を踏みすべらせて、どすんと松太郎のからだはしたたか地上へたたきつけられていた。

薬研堀の虎七

「やれ、びっくりした」

屋根から落ちた松太郎は、したたか腰を地にたたきつけられたが、そこは柔術の心得があるので、別にけがはしなかった。むくりと起きあがって、今落ちてきたばかりの梁をぽかんと見あげている。

落ちた瞬間は、どすんとひどい音がしたので、みんなもひやりと目をみはったが、当人が無事だとわかると、もともと高いところで働くのが稼業の鳶職で、落ちるほうがまぬけということになっているのだから、げらげら無遠慮に笑いだした。

「ばかやろう、いいつらよごしだ」

はしごをゆすった清次は鼻の先でふふんと笑ってみせて、松太郎が落とした丸太をひょいと取り上げるなり、こうするんだといわぬばかり、たっ、たっ、たっと、はしごを一気に登ってみせる。

「なるほどねえ、違うもんだなあ」

それは、往来に立っているひま人も、屋根の上の大工も、おもわず感心したほど水ぎわだった身の軽さで、清次にすれば、だれに感心されるより、ここをちょいとお千加に見てもらいたいところだろう。

それをきっかけにして、ふたたび勇ましい建て前はぐんぐん進んでいく。

「松、どこもけがはしなかったか」

人のいい留公が、わきへどいてまだ腰をさすっている松太郎のところへ来て、そっと聞いた。

「けがはしねえけど、ちょっとびっくりしたな」

「お千加さんにゃ、あんまり見せたくねえところだったぜ」

ひやかすように、留公がにやりとする。

「そうだなあ。お千加にゃないしょにしておいてもらうべ」

「いいとも、色男がだいなしになるからな。いくら出す、松?」

「そうじゃねえんだ。心配して、松っぁん、もう建て前に出るのだけはやめにしておくれって

泣かれると、おれ困るもんな」
「しょってやがらあ、あんなだらしのねえとこ ろを見りゃ、泣くまえに、どんなほれた女だって、たいていあいそをつかさあ」
「女なんて、そんなもんかな。まあ、お千加に聞いてみるんだね」
けろりとしている松太郎だ。
「ぶんなぐるぞ、こんちくしょう。ずうずうしいやろうってありゃしねえ」
留公はぷんぷんしながら向こうへ行ってしまった。
——あは、は。あいそなんかつかされたってかまわねえが、早く高いところに慣れねえと、火事んときに困るぞ。
そう思ったら、松太郎は、まもなく昼休みになって、みんながひとかたまりになり、食後のたばこを出しながらばかっ話に花を咲かせているとき、ひとりでのこのこはしごをあがっていった。
「あれ、あのやろう、なにしに行くんだろう、また落っこってみせる気かな」
「おうい、曲芸はもうたくさんだぞ」
人の悪いのが下からどなって、みんなでどっと笑ったが、松太郎は耳にもかけない。
——なるほど。こいつはむずかしいもんだ。
あんよはおじょず、ころぶはおへたというようなへっぴり腰をして、そろりそろりと横木の上を渡ってみる。高さに慣れないから、よけいあぶなっかしい気がするので、だんだんその目が高さに慣れ、からだの中心がとれてくると、あとは度胸一つのようだ。度胸のほうなら、そう人に負けないきもったまを持っているし、一度落ちて、落ちたってたいしたことはないという自信があるから、三度、四度と梁から棟を渡っているうちに、どうやら足もとがそう気にならなくなり、自然と腰が伸びてきた。
「なんと、こりゃいい景色だぞ」
腰がきまると、二階建てのいちばん高い棟に

立って、はじめて江戸の景色が目にはいった。晩春のよく晴れた真昼だから、下町一帯のかわらの波にからからとかげろうが燃え、西にぽっかりとまだ雪をかぶっている富士山が見え、東には藍色の筑波山が顔だけ出していた。すぐ目の下には、薬研堀から大川を半分ながめられるので、
「はあてね、お千加の家はどのへんかな」
と、つい人情で捜してみたくなる。
「なあんだ、あのやろう、まだあんなとこで高見の見物としゃれてやがる。変わってやがるな」
下では、雑談に花が咲いていた連中のひとりが、思い出したようにそっちを見上げてあきれていた。
「ちょいとごめんよ」
その職人たちのほうへ声をかけながら、のそりと近づいてきたのは、長脇差を一本ぶちこんだ四十がらみの親分ふうの男で、三下奴をひとり供に連れている。普請場とは道一つ隔てた北側に住む、薬研堀の虎七という、あんまり評判のよくないばくち打ちの親分だ。
「こりゃ薬研堀の親分、なんか御用でござんすか？」
すぐに立ったのは清次だ。
「この普請場はたしか横山町の大黒屋さんのだったね」
「そうでござんす」
「おまえさんは失礼だが、大黒屋さんのなんだね」
「へえ、出入りの鳶の者で、に組の新五郎頭の若い者、清次と言いやす」
「おまえさんにいってわかるかどうか、出入りの者だというんなら、一応話を通しておこう。今わきから帰って、通りがかりに見りゃ、この普請は二階建てのようだ。ここへ二階を建てられると、おれの家へはまるっきり日があたらなくなる。あんまり因業なことをしてくれるなと、

大黒屋さんにそういっておいてもらいてえね。二階建ては虎七が不承知だ、たってこのまま普請を続けるんなら、おれのほうにも考えがあると、こういっておいてもらいてえんだ」

多少日当たりの悪くなるのはしようがないが九尺幅の道を一つ隔てているのだから、まるっきり日が当たらないというわけはない。これはあきらかに言いがかりでどうせ目あては金だ、とわかっていて、そんなことをいちいち大黒屋へ持っていくようでは、日ごろ手当をもらっている出入りの鳶の者の顔がまるつぶれになる。

「親分、そのことについては、うちの新五郎がまえに一度うかがって、ちゃんとごあいさつをしたはずでござんすがねえ」

「うむ、そりゃあいさつは受けた。しかし、そのとき二階建てとは聞いていねえ。こっちは平家だと思ったから承知したんだ」

「そいつは親分、ちっとばかし変でござんすねえ」

相手は悪いが、清次も男だから、いうだけのことはいわなければ引きさがれない。とんだ因縁をつけられたもんだと、大工や鳶仲間はひそかにまゆをひそめている。

「なにが変なんだね」

「ごらんのとおり、江戸の町は狭い土地へ軒並み、家が屋根を並べているんだ、北側の家が多少日当たりの悪いのはお互いさまで、ここだって敷地は六十坪足らず、南はやっぱり二階家でござんす。それでもたって二階家は困るとお言いなさるんなら、そのとき、新五郎にはっきりと、どうして念を押してくださらなかったんです。もう棟梁がちゃんと木を刻んじまって、このとおり建て前にかかっているんで。今二階はいけねえとなると、はじめっからやりなおさなくちゃなりません。どうでござんしょうねえ、親分、不用心な原っぱが一つ減って、隣づきあいがまた一軒ふえる。それだけ江戸が繁盛するんだと思ってもらって、ここんところはひとつ、

目をつぶっていただくわけにはいかねえでござんしょうか」

「おまえ、なかなか弁がたつな」

「恐れ入ります」

「鳶の者にしておくなあもったいねえ。香具師になったらどうだ」

「なんだと――」

思いきった暴言に、さっと清次の顔色が変わった。

「あは、は。いくら顔色を変えたって、ここはおまえの家になるんじゃなかろう。おれはただ二階家は日当たりが悪くなるから困るといっているんだ。おまえにかけあっているんじゃねえ、大黒屋にそういっておけ、と取り次ぎを頼んでいるんだ。どぶさらいのくせに、あんまり出すぎた口はきくな」

虎七はせせら笑って、てんで頭から問題にしない。

「なにをぬかしやがる、理屈のわからねえとうへんぼくだ。ここは大黒屋の土地で、大黒屋が自分の金で建てる家じゃねえか。二階にしようと、三階にしようと、だれにことわる必要もねえが、それじゃ近所づきあいに欠けるから、向こう三軒両隣へ一応あいさつしておいたんだ。日当たりが悪くていやなら、かってに目黒の畑のまん中へでもひっこしていくがいいや。無職渡世のくせに、大きな口をききやがる。おい、かまわねえから、みんな、仕事にかかろうぜ」

清次も負けずに、相手を無視しようとする。

「よし、仕事にかかってみな。このうえ一本でも材木を組んだら、おれのほうは、遠慮なくたたっこわしにかかるからな」

「なんだと――」

こうなってはもうどっちも意地で、なんとも血を見なければおさまらなくなってきたようだ。

「清次あにい、そうおこるもんではねえだ」

殺気だって味方が総立ちになりかかったと

き、いつのまに屋根から降りてきていたか、松太郎がのこのこと清次のそばへ出ていった。
「なんだ、松」
「まあいいから、この掛け合いはおれに任せてもらうべ。おれ、仕事がなくて、少したいくつしているだ」
にやりと笑ってみせながら、虎七のほうを向き、
「親分さん、おまえさま、どっちかというと、度胸がありそうだね」
と、平気で話しかけた。
「なにをっ。てめえはだれだ」
虎七が変な顔をして、じろりとにらみつける。
「おれ、新五郎の名代でここへ来ている松太郎っていうしんまいだがね。こんなとこでぐずぐずいっていると、しまいにはけんかになるだ。ふたりっきりで、浜町河岸へ行って話を」
「このやろう、てめえ本気か」
「本気だとも。どっちにけが人があってもなんねえ。こんなことは、話のわかる者どうしが、ふたりっきりで話をつけるにかぎる。それとも、親分さん、おれとふたりっきりで浜町河岸へ行くのはきみわるいかね」
「ぬかしやがったな、やろう。よし、どこへでも行ってやるから、したくをしろ」
「なあに、別にしたくはいらねえだ。見合いに行くわけではねえからね。清次あにい、じゃ、ちょいと親分さんと話をつけに行ってくるから、仕事のほうはよろしく頼みますだ」
松太郎は使いにでも行くようなけろりとした顔つきでことわって、さあ行くべ、とさっさと先に立って歩きだした。敵も味方もまったくあっけにとられた形である。

死んじゃいやだ

それっきり、松太郎はなかなか仕事場へ帰ってこなかった。隣の家でも、虎七親分が帰らないらしく、子分の者が入れ替わり立ち替わり、出たりはいったり、それとなくこっちの様子を見にくる。清次ひとりではどうにも心配がしきれなくなったので、とにかく留公を新五郎頭のところへ走らせることになった。その留公がまもなく引き返してきて、きょうは建て前を中止するから、ひとまずみんなで家へ来てくれるように、という新五郎のことづてを伝えた。むろん、大黒屋のだんなとも相談して、敵の本陣があまりに近すぎるから、まちがいのないようにそう取りはからったのだという。清次も男としてただは帰れないので、ひとりで浜町河岸へ調べにまわったが、そのへんは大きな大名屋敷ばかりなので、なんの得るところもなく、いちばんあとからぼんやりと米沢町へ帰ってきた。
「騒ぐことはねえ。もう少し待ってみろ。いまに松が帰ってくるか、それでなけりゃ、虎のほうからなんかきっとあいさつがあらあ」
長火ばちの前へどっかり腰をすえた新五郎は、騒ぎたてようとする若い者を押さえてたばこばかり吹かしているが、腹の中の心配がつい顔に出て、だんだんむっつりとふきげんになってくるようだ。詰めている清次はじめ、組の者も、大工たちも今は冗談口さえあまり出ない。
——そうだ、茅町の師匠に知らせてやろう。
おせっかいな留公はふと思い出して、こっそり家を脱け出した。しかし、生来人間がおっちょこちょいにでき上がっているから、玄関へ出てきたお千加の顔を見ると、急にためしてみたくなって、まず松太郎が梁から落っこちた話から始めたものである。
「ふうむ。落っこちたの。まぬけだね。しんまいのくせに、生意気なまねをするからさ」
つったったまま聞いていたお千加は、小意地の悪い目をして、顔色ひとつ変えない。ざまあみやがれと、留公は内心うれしくなってしまった。
「でござんしょう。だから、おれが松太郎にいったんでさ。茅町の師匠にゃ、あんまり見せた

くねえつらだなって。すると、あんちくしょうの言いぐさがいいんでさ。うん、お千加が聞いたら——ごめんなさい、あんちくしょうは師匠のことを、ときどきお千加、お千加って、まるでてめえのかかあのように呼び捨てにするんで」
「ぶんなぐってやるから」
「でござんしょう。田舎っぺはずうずうしいから、今のうちに頭からびしゃりと一本くぎをさしといてもらったほうが——」
「よけいなことをいわないで、松ぼっくりがなんていったのさ、そのとき——」
「ちがいねえ、あのやろうったら、お千加にゃないしょにしておいてくれ、心配して、もう建て前へは出ないでくれなんていわれるとおれが困るからって、あんちくしょう、まったくうぬぼれが強いや」
「ばかばかしい。あたしがそんなことというもんか」
「で、ござんしょう。だから、あっしがいってやったんでさ。いいかげんにしておかねえと張り倒すぜって」
「でも、松ぼっくり、別にけがはしなかったのかえ?」
「あのくらいつらの皮が厚けりゃ、けがのほうで顔まけがしまさあ」
「おまえ、わざわざそんな松ぼっくりの悪口をいいにあたしんとこへきてくれたの」
お千加はあけすけにけいべつしたような顔をする。いくら留公でも、これはがまんできない。
「冗談いっちゃ困らあ。これからたいへんな話なんでさ、お千加さん、お茶を一杯くれませんか」
「台所へ行って水を飲んどいでよ」
「ちぇっ、お師匠さんはどうしてそうあいそがねえんだろうな。松のやろうにゃそうでもねえくせに。あっしはちゃんと知ってますぜ」
「何を知ってんのさ」
お千加の目がきらりと光る——、目ん中の槍をなめてやったでしょう、とうっかり口まで出かかったが、いけねえ、それをいうと、こっちのぞいていたことがばれると気がついたので、
「まあ、ようござんすよ、そんなことはどっちでも——」
と、あわてて口をにごした。
「おいいってば、なにを知ってんのさ」
さあたいへんだ。こうなったら、どうしても白状するまで承知しないお千加である。
「まあ、ようござんすよ。それどころじゃねえんだ」
「ごまかす気かえ、留公」
「ごまかしませんや。ほんとうに、それどころじゃねえんです、お千加さん。松のやろうが薬研堀の虎七親分と建て前のことで一騎打ちの勝負に行ったまま、いまだに帰ってこねえもんだから、頭のうちへみんなで集まって、今心配の最中なんでさ」
「なんですって」
さっとお千加が血相を変えた。
「そうれ、ごらんなさい。たいへんでござんしょう」
「どうして、そんな一騎打ちなんかになったの?」
「だから、建て前のごたごたなんでさ」
はじめは清次がうまくまとめようとしたが、てんで虎七が相手にしなかったことを告げ、
「松のやろう、あのとおりのおせっかいでしょう、横からのこのこ飛び出しやがって、おれは新五郎の名代だ、ふたりっきりで話をつけよう、浜町河岸へ行くべって、自分のほうから虎七を誘ったんでさ。けど、いい度胸にゃいい度胸だな。あれ、お千加さん、どこへ行くんです」
と、留公はびっくりした。
「じゃまだから、おどきってば」
その留公をじゃけんに突き飛ばして、そこにあった下駄をつっかけるなり、お千加はもう風のように玄関を飛び出していた。

――どうしよう。あたしが悪かったんだ。けさ、男の出がけにおとむらいだなんて、ごめんよ、松ぼっくり。

お千加はぽろぽろと涙が流れてきた。事件はお昼に始まって、それっきり帰ってこないといえば、今はもうかれこれ八ツ半（三時）だ。ことによると、死骸になって、どこかの河岸に浮いているんじゃないかしら。

「いやだあ。松つぁん、つるかめ、つるかめ」

「そんなことといっても、もうまにあわねえだよ。おれ、おとむらいだもんな」

「いやだったら、そんなこといっちゃ」

「でも、しようがねえだよ。なんなら、お千加ちゃん、おれとおとむらいにならねえかね」

乱髪になった松太郎が、血だらけの顔をしながら、いつものとおりにっこり笑いながら冗談口をきくのである。

「なにさ、松ぼっくり、あんたとなら、どこでも行く」

「あれえ、お師匠さん、やっぱりおれにほの字だったんだね」

「そうよ。好きだわ、好きだわ、大好きだわ。生きていてよ、松ぼっくり、死んじゃいやだ。おとむらいはいや」

おもわず泣きじゃくりが出る。

水ぎわだった女が、泣き泣きすそをあらわに往来を駆け出しているのだから、人がみんなびっくりして、顔を見ていた。

「いやだなあ、どうしてみんな、あたしの顔ばっかりじろじろ見るんだろう」

そして、やっと気がついた。泣いているからなんだ。泣いちゃみっともない。松ぼっくりの恥になる。そうだ、町内はしゃっきりとした顔で通らなくちゃ。

お千加は走るのはやめて、いそいで顔をふいた。歩きながら、手早く乱れた鬢をかきあげ、衣紋も直した。

――これならいいだろう、松ぼっくり。

自分ではちゃんといつもの顔になったつもりで、兄新五郎の格子をあけたのである。

はでなつら

「にいさん――」

がらりと玄関の障子をあけたお千加は、茶の間に組の者や大工たちがみんな集まって、さすがにいつものようなばかっ話一つ出ていないようだ、まるでお通夜みたい、と思い、ああまたあたしは縁起でもないことを考えてしまったと、それを払いのけるように、右手で急いで両方の肩を払うまねをした。

「どうしたんだ、お千加」

長火ばちの前にすわっていた新五郎が、むっつりと顔をあげる。

「松ぼっくりが帰ってこないんですってね」

「ばか、子どもじゃあるまいし、はいってきたらみんなにあいさつぐらいするもんだ」

はっと気がついて、そこへすわって、

「みなさん、おいでなさいまし」

と、すなおにおじぎはしたが、みんながおじぎを返しながら、なんとなく笑っているのをみると、急に腹がたってきた。

「松ぼっくりは、きょうの建て前で、屋根から落っこちたんですってね」

強い目が、つい清次の顔へからんでいく。

「留に聞いたんです」

清次は苦笑にまぎらせるよりしようがない。

「しんまいのくせに、屋根へ上るなんて、まだ生意気なんだわ」

のせるやつのほうが悪いんだとは、やっぱりいえないお千加だ。

「なあに、あの度胸なら、すぐ一人まえになります」

「そんなの、ちっとも度胸なんかじゃありゃしない。むてっぽうっていうんだわ。そんなむてっぽうだから、ひとりで虎七のけんかなんか買って、いまにきっと戸板にのって帰ってくるん

「お千加ちゃん、どうしたんだね、子どもみたいに」

と、あわててうしろから抱き止める。

「いや、いや、放して、ねえさん。ひとりで死んじゃ、松ぼっくりがかわいそうだもの」

「ひとりでなんか殺しゃしない。そのために、みんなでこうやって心配してるんじゃないか。お待ちってば」

だだっ子のようなお千加の狂態を見て、男たちももう黙ってはいられず、けしきばんで新五郎のさしずをうかがったとき、がらがらと玄関の格子があいた。

「あっ、松つぁんだ。そら、ごらんな、お千加ちゃん、松ちゃんが帰ってきたよ」

目ざとく見つけて、おしのが押さえているお千加に言い聞かせるように、はずんだ声をあげる。

「やあ、帰ってきた」

「どうした、松つぁん」

だわ」

たたきつけるような悪態に、事実それを心配している連中なんだから、だれの顔からもさっと笑いの影が消える。

「お千加、くだらねえことをいってねえで、あっちへ行ってろ、女の出る幕じゃねえ」

新五郎が一同のてまえ、苦い顔をしてしかりつけた。

「いやだあ、にいさんは。松ぼっくりは、あたしが、あたしが川崎で拾ってきたんだもの。あたし、これから浜町河岸へ行って、あの人の骨拾ってきてやります」

いっているうちに、ぽろぽろ涙がこぼれてきて、お千加はわれにもなく立ち上がっている。ほんとうに、ひとりで出かける気になってしまったのだ。

「ばか、よさねえか、お千加」

新五郎が立つ前に、女房のおしのが台所から走り出て、

男たちも口々に、おもわず中腰になったが、その声に迎えられて、

「頭、ただいま帰りました。あれえ、みんな建て前はもうすんだんかね」

不思議そうにもそりとはいってきた松太郎は、額に大きなこぶをこしらえ、左の目のまわりは目が細くなるほど紫色にはれあがっているし、くちびるは切れてふくれあがり、まるで顔が違ったような、これはまたさんたんたる御面相になっている。一目見た男たちはあっけにとられて、しいんと息をのんだが、お千加もあまりのことにぽかんとまゆを寄せたまま、とっさには口もきけない。

「どうした、松。はでなつらになってきやがったな」

それでも、とにかく生きて帰ってきてくれたのだから、ほっとして新五郎は顔も明るかった。

「そんなにはでかな、頭。自分でも、おれ、自分の顔でないように厚ぼったい気はしていたけんど、どうりで往来の者がみんな見ていたっけ」

あは、は、と松太郎はのんきに笑いながら、そこへすわりこむ。

「そりゃだれだって見るだろう。薬研堀の虎七といっしょに出かけたんだってな」

「出かけたんです。掛け合いごとは、ふたりきりにかぎる。よく話してやったら、そうか、わかった、そんなら手を引こうって、虎七親分、あっさり引き揚げたぜ」

「あんまりあっさりでもなさそうだな。はじめっから話してみろ。みんなそれを心配して、こうやって頭をそろえているんだ」

「そいつは心配かけてすまねえだ。なあにね、あれからおれ虎七親分といっしょに、人通りのねえ中洲のほうまで行って、親分、いくら金出すべ、と切り出したら、このやろう、ふざけたことをぬかしやがるとたたっ切るぞ、おれは物もらいじゃねえ、とえらく腹をたてるだ」

しかし、松太郎にいわせれば、人の仕事に難くせをつけて、あんないやがらせに出るのは、けっきょくは金が目的なので、物もらいとちっとも変わりはない。けいべつすべきやつだから、はじめからまともに相手にする気はなく、親分、人を切ると自分もただではすまなくなるから、腹がたつんなら、おれとここで相撲を取るべと挑戦した。ばかやろう、と虎七はいよいよおこって、いきなりなぐりかかってきた。虎七は無法者の親分になるだけあって、腕力はあるし、手は早いし、松太郎はぼかぼかとずいぶんなぐられた。それをなぐり返せばけんかになるから、松太郎はけっしてなぐりかえしはしなかった。どこまでも相撲のつもりで、よいしょ、と掛け声をかけては組んで行き、組みつけば多少柔術の心得があるから、どさっと相手を投げ飛ばした。

やろう、やりやがったな、と、虎七はすぐにはね起き、くやしがってぽかぽかとくる。また投げる。精かぎり、根かぎりそれをくりかえしているうちに、ふたりともへとへとになってきた。そうなると、しまいにはなんといっても若さが物をいう。やろう、ちょいと待てと、どろだらけになった虎七がしりもちをついたまま、はあはあ肩で息を切りながら言いだした。

「水をいれるかね、親分」

「うむ、ひと息入れてから勝負をつけてやるから、待っていろ」

「そんなら待ってやるべ」

松太郎は虎七に向かいあって、あぐらをかいた。その顔を、虎七はじろじろにらみながら、

「てめえ、なんだって、おれをなぐりけえさねえんだ?」

と聞いた。

「おれ、相撲は男らしくって大好きだが、けんかはごろつきのやるこったから、どうも虫が好かねえ」

「ふん、生意気なことをぬかしやがる。それじゃいちばん、相撲でいってやるから、そこへ土俵をかけ」

松太郎はいわれるとおりに、石を拾って、そこへ土俵の輪をかいた。その間に、虎七はふんどし一本のすっ裸になって、四股を踏みだす。相手はその気ならと、松太郎もふんどし一本になった。

だが、勝負はしごく簡単だった。やっ、と立ち上がって、虎七が一気に突いて出る出ばなを、ひょいといなして、肩を一つどすんとたたいてやると、相手はあっけなく四つんばいになってしまったのである。

「ちくしょう、またおれの負けかって、親分、苦い顔をしてね、それから黙って着物を着はじめたから、関取、惜しいとこだったね、といってやると、惜しくてもしようがねえ、負けは負けだからな、おれも男だ、もうなんにもいわねえから、頭によろしくいってくんな、といって、あっさり帰ってしまっただ」

けろりとしている松太郎だ。

「ふうむ、じゃ、建て前の文句はもうひっこめるっていうのか」

「そうだろうと思うだ。もし、そうでねえっていうんなら、どうせおれ、これからまたてつだいに行くから、もう一番、相撲取ってやるべ」

「松ぼっくりのばか」

横からお千加があびせかけて、おこったようににらみつける。

「あれえ、おればかかね」

「ばかだわよ。そんなお化けみたいな顔で、外が歩けると思ってるのかえ」

「おれ、顔では歩かねえもんな」

「いけないってば。そんなになぐられて、今夜あたり、きっと熱がでるにきまってるじゃないか」

「そんな気はしねえがな」

「強情っぱり。どうしてあんたはそう血の巡りが悪いんだろう。どこも痛くないの。打ち身っ

てのはたいせつにしないと、あとでかたわになったって、あたし知らないから」
「お千加、つまらねえことをいってねえで、二階へ早く床を取ってやれ。松、きょうはもういいから寝てろ」
新五郎はそういって急に立ち上がった。
「清次、いっしょに行け、薬研堀へ顔を出してみよう」
「へえ」
「みんなはすまねえけれど、一杯やりながら、ここで待っていてくれ。すぐ帰ってくるから。おしの、羽織を出してくんな」
時刻はやがて七ツ（四時）に近かった。

熱の心配

新五郎が清次を連れていくと、茶の間ではすぐ酒が出たので、組の者も、大工たちも、みんな明るい顔をしながら、話はどうしても松太郎のことになる。
「いい度胸だねえ、松つぁんは」
「さっき、お千加さんもいったが、あんなのはむてっぽうっていうのかもしれねえな」
「まったくだ。屋根から落ちたときは、あれえ、に組じゃこんど、わざわざあんな軽わざ師の道化を仕入れたのかとあきれちまったが、虎七を向こうにまわして、親分浜町河岸へ行ってふたりで話をつけべと、にやにや笑っていたときにゃ、やろう、ばかなのかりこうなのかとびっくりしちまった。なにしろ、相手が悪いからねえ」
感心したような、まだあきれているような顔をしたのは、若い大工である。
「おいおい、気をつけて口をきかねえと、おまえ、お千加ねえさんににらみつけられるぜ」
小声でたしなめたのは、いつのまに帰ってきて一座に加わったのか、おせっかいな留公だ。
「へえ、じゃお千加さんはもう松つぁんとなんなのか」

「まだそうきまったわけじゃねえけども、まあ、まんざらでもねえようだと、おれはにらんでいるんだ」
「留公、おまえなにをにらんだんだえ」
台所から銚子を運んできたおしのが、聞きとがめてじろりとにらむ。
「へえ。いいえね、このごろ天井へねずみが出るって話なんで」
「ねこじゃあるまいし、天井のねずみなんかにらんでいなくたっていいから、台所へ行って、おかん番でもおし」
「ちゅう、ちゅう」
留公はぺろりと赤い舌を出して、いそいで台所へ逃げていく。
その二階では、黒いねずみがむりに床の中へ押しこまれて、こぶの上へぬれ手ぬぐいをあてがわれて、白いねずみにせっせと介抱されていた。
「松ぼっくり、まだ熱は出ないかえ」
「あいにくと出ねえようだね。ひとつ、いきんでみべえか」
「ばか、なにいってんのさ」
そのばかという声が、目までぬれ手ぬぐいを押しつけられている松太郎の耳にひどく甘ったるい。
「おまえ、きょう建て前で、屋根から落っこちたんだってね」
「あれ、留公のやつだな」
「だれだっていいから、しんまいのくせに、あんまりなまおしでない」
「なあに、おれしゃくにさわるから、お昼に棟のてっぺんへ上っていって、お江戸八百八町を見おろしてやっただ。いい気持ちだったっけ」
「大きなことをいってるわ。八百八町なんて見えるもんか」
「見えたとも。それから、茅町のほうを向いて、お千加やあいって、おれの叫んだ声、聞こえなかったのかね」

「ぶんなぐるから、お千加だなんて。あたしはまだ、おまえさんのおかみさんになるって約束なんかしたおぼえありませんからね」
「ごめんなさいまし。おれもまだ、お千加なんていうけんかっ早い女をお嫁にすべと考えたことは一度もねえです」
「ほんとうだね、松ぼっくり」
お千加は男の目のぬれ手ぬぐいを放さないようにしてことばに力を入れる。
「ほんとうのことでござえます」
ふくれあがった男のくちびるが笑っている。白い、きれいな歯なみだ。
「うそつき、なら、なら、おまえさっき、どうして留公に、落っこちたことお千加にいうなって口止めしたのさ。お千加が心配するといけないからだなんて、どうしていったのさ」
「あれえ、あのやろう、みんなしゃべっちまったのかなあ」
「お言いなさいってば、どうして留公に、そんなお千加、お千加って、あたしのことを呼び捨てにしたのさ」
「さあ、困ったぞ、これは」
「ごまかさないで、男なら、はっきりいってごらんなさいよ」
男の目をおさえつけているから、お千加は気が強い。
「そんならいうけど、お千加ってのは、おれのお嫁になりたがっている女で、ほんとうはおれもお嫁にすべと思っているかわいい女っ子さ。でも、こんなことは、お千加にないしょにしておいてもらうべ。あの女っ子かんが強いから、おれ、ぶんなぐられると困るもんな」
「ほんとうだね、松ぼっくり」
「あれえ、熱が出てきたかな。おれ、急に耳が聞こえなくなったぞ」
「いやあだ、松ぼっくりは」
むっと女の甘いにおいが鼻に迫ったと思ったら、お千加がぬれ手ぬぐいの上からいきなりほおをすり寄せていた。燃えるような熱いほおである。
「きっと、きっと、おかみさんにしてね」
耳をくすぐるような小さな声である。
「うむ」
「うれしいわ、あたし」
「困ったなあ、おれ」
「どうしてさ」
「頭に隠れてこんな約束をしちゃ申しわけねえだ」
「いやだあ、そんな。——あんた、そんなことって、あたしがきらいなの？」
「好きだよ」
「なら、いいじゃありませんか。にいさんだって、きっと承知してくれるわ」
「でもな、お千加ちゃん、せめておれ、役持ちになんなけりゃ、頭にそんな虫のいいことはいえねえもんな。おれも男だし、それまで待ってくれるかね？」
「待つわ、いつまでも待つわ。でも、うわきしちゃいやだから」
「おれはだいじょうぶだけれど、お千加ちゃんこそ、少しべっぴんすぎるもんな」
「ぶんなぐるから」
そして、ぶんなぐるかわりに、お千加がいやというほど首っ玉へしがみついてきたとき、えへんと、階段の中途でせきばらいをした者がある。みしりみしりとだれか上がってくるのだ。はっと起き直ったお千加は、
「松ぼっくり、まだ熱は出てこないかえ」
と、急によそゆきの声になる。
「おれ、なんだか、とても熱が高くなっちまった」
「うそばっかり——」
お千加はふとんの下の男の腕をすばやくつねって、
「でも、どこか苦しいんなら、お医者を呼んであげようか」

と、声だけはもっともらしい。
「えへん。顔を出してもいいかね、お千加さん」
留公の声だ。
「ばか、なにを気どってんのさ。用があるんなら、さっさとお言いよ」
「用がなけりゃ、あんまり上がってきてえ場所じゃありません。こっちが熱を出しちゃ困りますからね」
留公にしてはうまいことを言いながら、そこへ上がってきて、うさんくさそうににやにや笑っている。

娘緋鹿の子

「用があるんなら、早くお言いよ」
お千加は留公をにらみつけている。早くお言いよではなくて、じゃまだから早く下へ行っておくれよ、と言いたい顔を露骨にしている。
「あいにく、それが、お千加さんに用があるんじゃなくて、松のやろうに用があるんでさ」
留公はわざとじらすように落ち着いている。
「あたしがここにいちゃいえないことかえ」
「なあに、それほどでもありませんがね」
「なら、さっさといったらいいじゃないか」
「いいますよ。おい、松公」
「なんだね、留あにい」
病人くさく寝たままの松太郎は、片一方が紫色にふくれあがった細い目を向けて、にやにや笑っている。しかも、少しやんちゃだが、ちょいと頬のない女っぷりのお千加に、いい気になって看病されているんだから、いくら自分はあきらめている留公でも、これはあんまりおもしろくない。
「おまえ、ほんとにどこか苦しいんか。どうしても、お千加さんについていてもらわなくちゃいられねえほどなんか」
「うむ。おれ、だいぶ熱があるだ」
「こんちくしょう、だいぶ熱のあるやつが、そんなににやにや笑っていられるかえ」

「これ笑っているでねえだ。虫のせいで、顔がにやにやひっつれるだ」
「なぐるぞ、こんちくしょう。甘ったれやがって」
「留公、おまえの用ってのは、病人にけんかをふっかけにきたのかえ」
お千加がくすくす笑いながら、横から口を出す。
「あれえ、お千加さんも虫のせいで、顔がくすくすひっつれるのかな」
「ばか――」
「驚いたなあ。ふたりでにやにや、くすくす、虫のせいで顔をひっつらせておいて、おあとがばかときた」
「留公のはおんなじばかでも、りっぱなばかだわ。ねえ、松ぼっくり」
たった今、夫婦約束をしたばかりだから、松太郎にはとろけるほど甘ったるい目になるお千加だ。
「おほめにあずかって、ありがとうござんす。――やい、松、大黒屋のお嬢さんが下へてめえの見舞いに来ているが、だいぶ熱があっちゃ会えねえだろうな。よし、おれから断ってやらあ。松のやろうの虫のせいで、顔がにやにやひっつってるから、会わねえほうがいいでしょう。食らいつかれるといけませんからね、っていっといてやろう」
留公もいささか意地になる。
「うむ、すまねえが、そういっといてもらいてえだ」
あっさりしている松太郎だ。
「ほんとうにいいのか、松」
「ほんとうにいいよ」
「お店のお嬢さんだぞ。せっかく、てめえの見舞いに来てくれたのに、てめえそれですむと思ってるのか」
「おれ、顔がにやにやひっつってるからね、遠慮しておくべ。なあ、お師匠さん」

「お師匠さん、こんにちは」
お糸はお千加の踊りの弟子だから、そこへ両手をついて、ていねいにあいさつをする。緋鹿の子の緒をかけた、娘島田、同じ緋鹿の子のお七帯、両国小町といわれただけに、お糸は目がさめるようにういういしい十七娘だ。
「いらっしゃいまし。こんなむさくるしいところへ、わざわざ恐れ入りますねえ」
お千加は如才なく、座ぶとんを出してすすめる。
「ほんとにねえ。松つぁんが建て前のことでけがをしたとお聞きになったもんだから、すぐおいでになったんですって。——どうなの？　松つぁん」
そばからおしのがとりなすように、松太郎のほうへいう。
「おれ、ほんとうは、そうたいしたことねえです」
松太郎は正直だ。が、見た目はひどくみじめ

「だって、おまえ、それじゃ悪いじゃないか」
お糸と聞いては、さすがにお千加も冗談にしてはいられない。
「けど、お糸さん、どうしてあんたのけがをしたこと、わかったのかしら？」
「頭が薬研堀へ行きがけに、お店へ顔を出していったんでさ」
なるほど、それは当然そうあるべきである。
「留、何しているのさ。松つぁんは眠ってるかえ」
下から、あねごの強い声が呼んだ。
「いいえ、眠っちゃいません。——それみねえ、しかられちまったじゃねえか」
おもわず首をすくめる留公だ。
「おまえがまぬけだからさ。むだ口ばかりたたいているんだもの」
お千加がにらみつけているうちに、さあ、おあがんなさいまし、というおしのの声がして、お糸を先に、いっしょに二階へあがってきた。

お千加がむきになる。
「ごめんなすって。——おこわい。松にゃあんなこわい顔見せたことねえのになあ。変だなあ」
「なんですって」
「いいえ、ひとり言でさ。聞こえたらごめんなすって」
留公はどかどかと下へ逃げていく。
「しようがないねえ。まるで、餓鬼みたいなもんだから。おかしいでしょう、お嬢さん」
おしのは笑ってみせながら、おや、と思った。ひざの上で、黙ってたもとをもてあそんでいるお糸が、なんとなくため息をついたからである。
「どうかなすったんですか？　お嬢さん」
「いいえ」
しかし、さえない顔色である。そして、
「あたし、またまいります。どうぞおだいじに——」

「頭が薬研堀へ行きがけに、お店へ顔を出していったんでさ」
なるほど、それは当然そうあるべきである。
「留、何しているのさ。松つぁんは眠ってるかえ」
下から、あねごの強い声が呼んだ。
「いいえ、眠っちゃいません。——それみねえ、しかられちまったじゃねえか」
おもわず首をすくめる留公だ。
「おまえがまぬけだからさ。むだ口ばかりたたいているんだもの」
お千加がにらみつけているうちに、さあ、おあがんなさいまし、というおしのの声がして、お糸を先に、いっしょに二階へあがってきた。
な顔つきになっているから、お糸は痛ましそうにまゆをひそめて、
「すみません。うちのことで、そんなけがをおさせして」
と、年ごろだから、それが人前でいえるせいいっぱいのことばなのだろう、ほおを赤らめて伏し目になる。
「松、じゃおまえ、甘ったれて寝ているのか」
留公が無遠慮に横から口を出す。
「おや、おまえまだそこにいたのかえ。よけいなあくたれ口をたたいてないで、台所でもてつだったらどうなのさ、気がきかないねえ」
とうとう、あねごににらまれてしまった。
「へえ」
頭をかいて立ち上がりながら、
「ねえさんやお千加さんが甘いもんだから、松のやろう、いい気になってやがる」
と、聞こえよがしのひとり言だ。
「変なことというと、承知しないよ、留」

だれにともなくていねいにおじぎをして、急に立ち上がったから、おしのとお千加はおもわず顔を見合わせてしまった。

朝っぱら

翌朝、お千加は起きるとすぐ、米沢町の家へ飛んでいきたかったが、こっちにも稼業というものがあるので、そうもいかなかった。

それに、きのうはにいさんが薬研堀から帰ってくるまでというのを口実にして、夕方近くまで松太郎のそばにいて、虎七とのいきさつはうまくおさまったという兄の話を聞いてから帰っている。

「なあに、あくどいやつにはちがいねえが、親分とかなんとかいわれるだけあって、一度話がわかったとなりゃ、思ったよりさっぱりしていた。大黒屋のだんなに話して、こっちからあらためて金を包んでいったのもきいたんだろうが、松にゃまったく感心してやがった。腕っぷしも強いが、よっぽど腹ができていねえとあの口はきけねえってね。おれに任せてくれりゃ、いい親分にしてみせるんだがっていうから、そいつはいけねえ、あれは諸人のために火事とたたかう意気ごみで鳶になったんだって話してやったら、ふうむとうなってやがった」

新五郎はとても上きげんだった。

松ぼっくりがほめられるのはなによりうれしい、虎七がそういっているのなら、あとくされがなくて安心でもある。けがのほうは、当人が寝ているのをいやがっているくらいだから、別にたいしたことはないだろう。

だから、きょうはそんなに朝っぱらから見舞いに行く口実がなんにもない。

「いやになっちまうな。あたしの松ぼっくりだのに、どうしてにいさんやねえさんにこんな気がねをしなくちゃならないんだろう」

お千加は小娘のように恋しくて、会いたくて、じれったくさえなってくるが、それだけにいさんやねえさんに、このごろお千加のやつ少しどうかしているんじゃねえかな、松にほれやがったのかな、なんて思われるのは、勝ち気だからやっぱり恥ずかしい。

小娘といえば、大黒屋のお糸のきのうの様子もなんだか気になる。留公が松ぼっくりとの仲を当てこすって変なことをいったとたんに、ため息をつき、せっかく見舞いに来ていながら、ろくに口もきかないうちにすぐ帰るなんて、どうしたというのだろう。あの娘は松ぼっくりにいちばんはじめに六郷の渡しで助けられているんだから、ことによると、恋わずらいになりかけているんじゃないかしら。だから、留公のいうことなんかまに受けて、いいえ、実はそれがほんとうなんだけれど、座にいたたまれなくなってしまったのじゃないかしら。

「どうしたのかしら、ねえさん、あの娘、少し変じゃない？」

お糸を玄関まで送り出してから、気になるからそっとおしのに聞いてみた。

「そうねえ。なんか気にしたようだ」

それだけはおしのにもわかっているらしい。

「松つぁんに少しなんなんじゃない。あたしたちがそばにいて、ふたりで話ができそうもないもんだから、気に入らなかったんじゃないかしら」

「まさか。そんな気をまわすとこをみると、この娘のほうがあやしいな」

おしのに肩をこづかれて、

「いやだわ、ねえさんは――」

と、千加はちょいと赤くなってしまったが、自分にはどうしても、恋わずらいのなりかけだとしか思えないのである。

――それだと、たいへんだなあ。

冗談ごとではない。お糸が恋わずらいをして、それがだんなにわかれば、だんなからきっと兄の新五郎に話があるだろう。兄にとっては、たいせつな出入り先のお嬢さんのことだから、義

理にせまられて、お千加、あきらめてくれ、というにちがない。

そうなれば、松ぼっくりだって、相手は金持ちだし、あの娘は若くて、器量よしだし、ひょっと、どんなふうに気が変わるかわかりゃしない。

——いやだあ。死んでしまおうか、あたし。

お千加は胸が痛くなってきて、もうがまんができない。どうしても松太郎に会って、どんなことがあってもけっして心変わりがしない、と誓わせるか、それでなければ、すぐ夫婦になってくれるか、二つに一つ、はっきりときめてもらわなくては、落ち着いて稼業にかかる気にもなれなくなってきた。

「お冬ちゃん、あたしすぐ帰ってくるけど、ちょいと米沢町へ行ってきますからね」

恥ずかしいの、気がねだのといってはいられない。お弟子だって、待つのがいやなら、来てくれなくたってかまやしない、という気になって、お千加はいきおいよく立ち上がった。そのまま玄関へ出て下駄をつっかけようとしていると、がらりと表から格子があいて、

「あれえ、お師匠さん、どこへ出かけるんです？朝っぱらから」

と、留公がまのぬけた顔を出した。

「どこへ行ったっていいじゃないか。大きなお世話をおやきでない」

気がたっているから、お千加は頭からやっつける。

「そうでござんすかね。おお、こわい」

留公は首をすくめて、にやにや笑いだす。

「おどきってば。おまえも虫のせいで、顔がにやにやひっつれるのかえ。うすっきみの悪い顔だねえ」

「どうもすいません。きのどくだなあ。お千加さんはなんにも知らねえんだからなあ」

「なんですって——」

はっとお千加は気がついて、

「留公、もしや、もしや、松ぼっくりが悪くなったんじゃないの」

たちまち、顔色が変わってくる。

おせっかい

「まったく不思議でござんすねえ。松のやろうのことってえと、お師匠さんは線香花火のように、すぐぱっぱっと顔色が変わるんだからなあ」

留公はわざと感心したように首を振ってみせる。

「おや、おまえ、朝っぱらからあたしをからかいに来たのかえ」

お千加の涼しい目に、みるみるけんが出てきた。やんちゃで、生一本で、負けずぎらいときているから、かっとなると線香花火どころか、いつ電光に変わって、雷が落ちるかわかったものではない。

「とんでもねえ話で。お師匠さんをからかうなんて、それこそ罰が当たりやす。あっしはお注進に飛んできたんです」

「だから、松ぼっくりがどうしたっていうのさ」

「やっぱり気になりやすか」

「ぶんなぐるよ」

「えへへ、一度、ぶんなぐられてみてえな。——まあ、御安心なさいまし。けさ、松のやろう、もうすっかりいいってんで、てめえから起き出して仕事に出かけるってえのを、きょう一日はうちにいて休めって、頭がむりに留めたくらいなんでさ」

「だから、どうだっていうのさ」

安心はしたが、ありがとうとは口に出したくないお千加である。

「なにを隠そう、それからがちょいとたいへんなんですがね。お茶ぐらい出してくれてもよさそうなもんだな」

留公がいやにもったいをつける。

「お冬ちゃん、台所から、水を一杯くんできておやりよ」

「はい」
内弟子のお冬が笑いながら、それでもちゃんと茶をいれてきてくれた。
「気がきいてるなあ、お冬坊は。いまに、いいお婿さんを世話してやるぜ」
「留さんのような、少しとぼけたお婿さんでしょう。あたし遠慮するわ」
「ちぇっ、はっきりおっしゃりやがる。お千加さん、お茶はここへ腰かけていただいたほうがようござんすね。立ち飲みってほうはねえや」
「好きにおしな」
「へえ、ありがとうござんす」
留公はとうとう玄関先へ腰をおろしてしまった。立ったまま、ふところ手をして、すねたように柱によりかかっているお千加の姿が、つい見とれるばかり奔放な美しさをみせて、ちくしょう、松のやろう、どうしてこう女運がいいんだろうな、おれのほうがよっぽど江戸まえで、男っぷりだってそうちがわねえのになあと、留公はひそかにため息が出る。
「留公、おまえたいへんな話は忘れちまったのかえ」
「忘れやしませんよ、今、お茶を飲んでるんでさ」
「ふ、ふ、ため息をつきながらね」
「ひやかしちゃいけねえ。いまにお千加さんだって、きっとため息がつきたくなるんだから」
「ふうんだ。おまえ、たいそう器用なおまじないを知ってるんだね」
「知ってますともさ。清次あにいたちが、薬研堀のきのうの建て前へ出かけちまったあとのことなんだ。ごめんくださいって、あたりをはばかるような小さな声で、大黒屋のお嬢さんがたったひとりでたずねてきたと思いなせえ」
「お糸さんが――」
なるほど、これはちょいと聞きのがせないから、お千加の目に線香花火が散る。
「で、ござんしょう。あっしもおやと思ってる

うちに、あねごが出ていくと、松太郎さんのお見舞いに来たんですけれどって、お糸さんぽっと赤くなりやがった。お師匠さんの前だが、いいもんでござんすね、あのくらいの年ごろの色気ってやつは。さあおあがんなさいましって、あねごが二階へ案内して、そこはあねごも苦労人だから、すぐ下へ降りてきちまった。だから、二階でお糸さんが松のやろうにどんなにぽうっとなったか、どんな話をしたんだか、おれたちにはまったくわからねえ。わかってるのは、それからふたりっきりで、小半日も下へ降りてこねえことだ」
「うそお言いよ。まだ、朝御飯がすんだばかりじゃないか」
「なあるほど。けど、ただの見舞いにしちゃ、あんまり長すぎるんだ。たっぷり、小半刻（三十分）のうえはぽうっとなっていたんすからでね。いいかげんの火事なら、一軒まる焼けになって、もう灰になっているじぶんでさ」
「それからどうしたのさ」
「それから、まあ、このままあがりっきりにもできねえと、そこは他人のうちだから、いくらか遠慮したんだな、松のやろうに送られて、お糸さん恥ずかしそうに降りてきましたがね。おじゃましましたって、またぽうっとなって、おじゃまはかまわねえが、穏やかでねえのは、あっしのこの目に狂いがなければ、お嬢さんの目に、たしかに泣いたあとがある。どうして泣いたか、お師匠さんわかりますか？」
「わからないわ、そんなこと」
「でござんしょうねえ。実は、あっしにもわからねえ。たいへん長かったようだねって、お糸さんが帰ったあとで、あねごが松のやろうに聞きますとね、やろう、にやにやと顔をひっつらせやがって、苦労はどこにでも絶えねえだねって、おつにからんだことをぬかしやがる。――きいたふうなことをいうねえ、おれたちのほうが階下でよっぽど苦労していらあ、とついあっ

しが横から口を出したばかりに、留、おまえまだ建て前へ行かないのかえ、と、おしいとこであねごににらまれてしまった」

「なあんだ、おまえ建て前へ行く途中、わざわざこんなほうまで、まわり道をしてくれたのかえ」

「なあんだはねえでしょう。これでも、お千加さんの一大事だと思えばこそ、汗をかいてすっ飛んできたのに、驚いたなあ」

「お茶はもういいのかえ、留公」

「ありがとうございます。羊羹なんてものも、またおつなものでございますねえ」

すぐつけあがりたがる留公だ。

「おあいにくさま。うちは栄太楼の親戚じゃないんでね。じゃ、もうさようなら」

「あれえ、はっきりしてるんだなあ。ひでえめにあいやがる」

留公は苦笑いをしながら、とうとう追い返されてしまった。

大やきもち

——どうしようかしら。

お千加は玄関へ立ったまま、どうにも胸がおさまらない。留公のいうことなんか、どこまでほんとうなのかわかったものではないが、朝っぱらから、お糸が松太郎の見舞いに来て、それを兄嫁が二階へとおし、しばらくふたりっきりにしておいたことだけは事実らしい。

——ねえさんもねえさんだわ。

きのうのお糸のことが胸にあるので、お千加はそのふたりっきりというのが、ひどく気になるのである。ただの見舞いなら、なにも小半刻も話しこむ話なんてないはずだ。

「おぐあい、どうなんです？」

「おかげで、おれ、このとおりもう起きているだ。わざわざ、二度も見舞いに来てくれて、ありがとうございます」

「いいえ。早くよくなってようございましたね。どうかおだいじにしてくださいまし」

ここまで話が運べば、だれが考えたって、お糸はもう座を立たなければならないはずではないか。それでもまだ立たないとすると、お糸はきのうのように、長いたもとをひざの上でもてあそびながら、ぽうっとほおを赤らめて、いつまでも黙って伏し目になっている。そして、ときどきかわいいため息をついてみせる。

——さあ、わかんねえぞ、なんだってお嬢さん、あんなため息なんかつくんだろうな、帯が苦しいんかな。

松ぼっくりは困ったような顔をして、人がいいもんだから、

「お嬢さん、帯が苦しいんかね」

と、よけいなことを聞いたにちがいない。

「ちがうの、あたしここがせつなくて」

待っていたように、お糸がつとにじり寄って、男に背中を投げかけ、松ぼっくりの手をつかんで、自分の胸へ押しつけたとする。

くやしいっ。ここまでうまく運んでしまえば、あとは若い男と女だもの、小半刻だって、小半日だって、離れたくなくなるにきまっている。

——どうしてやろうかしら。もう承知できない。お千加は血相を変えて、下駄をつっかけるなり、がらっ、ぴしゃっと玄関から表へ、向こうみずに飛び出した。出会いがしらに、

「あぶねえ」

あやうく、まっ正面からぶつかりそうになった男が、はっと両手でお千加の肩を押さえて止めて、目を丸くする。意外にも、松太郎だった。

「あっ、松ぼっくり」

「なあんだ、お千加ねえさんか。あわくってどこへ行くだね」

「いいから、こっちへおはいんなさいってば」

一瞬棒立ちになったお千加は、気がたっているから、いきなり松太郎のはんてんのえりをひっつかんで、もう一度がらっ、ぴしゃっと男を玄関へ引きずりこんだ。

「たまげたなあ」
「かってにおたまげなさいよ。上がるんですってば」
腕をひっぱって、ぐんぐん二階へ引き上げる。お冬があっけにとられて、目のやり場に困っていた。
「どうかしたんかね、お師匠さん」
二階の六畳のまん中へ引きすえられて、松太郎はぽかんとしている。そのひざへ、ひざを突き合わせるようにしてすわって、
「正直におっしゃい。あんた、帯が苦しくないかって、よけいなことといったんでしょう」
と、お千加は目をつるしあげんばかりの顔つきだ。
「おれ、別に帯なんか苦しくねえだよ」
「あんたじゃないんですってば」
「ああ、お師匠さんが苦しいんか。そんなら、帯でもなんでも遠慮なく解くがいいだ」
「そんな、そんなよけいなことまでいったの、あの娘に。くやしいっ」
どうも、正気のさたとは思えない。むしゃぶりついてきそうにする手を、ひょいとつかんで押さえつけ、
「あの娘って、だれのこったね？」
松太郎にはわからない。
「たんとおとぼけなさいよ、小半刻も二階で、お糸さんとふたりっきりで、いったい何をしてたんですよう」
「あれえ。——そうか、お師匠さん、やきもちやいているんか。あは、は、なあんだ」
「笑ってごまかそうたって、だれがごまかされるもんですか」
「たまげたなあ。こりゃたいへんだぞ」
「男なら男らしくお言いなさいってば。あんたは、あんたは、あたしという女とちゃんと夫婦約束までしておいて、どうしてお糸さんなんかに帯を解かしたんですよう」
「おれ、どうもよくわからねえだ。お糸さんがどこでいつ帯を解こうとおれかまわねえけど、お師匠さんがこんなにすげえ大やきもちの病気があるとは知らなかったもんな」
「なんですって——」
さすがに、お千加はぎくりと胸をつかれる。
「けさお糸さんが来たこと、だれがしゃべったんだね？」
「もういいわ、そんなこと」
まさか、留公から聞いたと正直にいって、あんながら留なんかのいうことをまに受けて、と笑われるのはくやしい。
「そりゃまあ、だれに聞いたっていいけど、あんまりつまらねえこと口走って、もし嫁入りまえの娘に妙なうわさでも立つとかわいそうだもんな」
ひと言もない。お千加はまるでやきもちきつねが落ちたように、しょんぼりとしてしまった。
「実は、おれ、お糸さんからたいせつなこと頼まれて、それで相談にやって来ただが、また病気にさわるといけねえから、その話はもうやめにすべ」
「いやだあ、そんな、そんなみずくさい——」
「そうではねえだ。知らなくてもいいことを聞いたばっかりに、うっかりかっとなってそんなことを口にすると、そのために、人の命にかかわるようなことがないともかぎらねえだ。みずくさくていわねえんではねえ。おれ、お師匠さんによけいな苦労させたくねえから、いわねえことにするだ。わかったかね」
きっぱりとさとすような口ぶりが、いつもの松太郎とはどこか違う。それにしても、つまらぬ女のやきもちが、とんだところへ響いてきたようだ。

けんかの名人

「いじわる、あやまったんだから、もういいじゃありませんか」
自分が悪かったと気がつくと、勝ち気でわが

ままだから、お千加は急にくやしくなってきた。
「いいとも、おれ、別になんとも思っちゃいねえだ」
やきもちをやかれたことに対しては、事実なんとも思ってはいない松太郎である。
「だから、お話しなさいってば、お糸さんがどんなことを頼んだのよ？」
「それは聞かねえがいいだ。じらすわけではねえが、今もいうとおり、よけいなことを聞いたばかりに、苦労してもつまらねえもんな」
「いやだったら、そんなみずくさいこと。どんなに苦労したってあたしは聞かなくちゃ承知しない」
「困ったなあ」
ほんとうは、お千加に相談する気できた松太郎だが、とんでもない大やきもちをやかれて、やきもちはかまわないが、女はとかく口が軽いものだ。そのために、人に迷惑をかけては困ると思い直したのである。しかし、一度言いかけて、それを中途でやめるとなると、お千加が意地になるのもむりはない話だ。
「そんなら、おれ、話してもいいけど、お師匠さん、きっとだれにもいわねえかね？」
「いって悪いことなんか、あたし、だれにもいやしません」
「もし、お師匠さんがそんなこと人にしゃべると、おれ江戸にいられねえから、黙って沼津へ帰ることにすべ。それでもいいかね」
「いいわよ、あたしは黙ってくっついていくから」
「あれえ、そんな話ってねえだ」
こうやんちゃでも困るな、と松太郎はいささかあきれてしまった。
「そんな話はねえだなんてしらじらしい、そんなことがありますか。あたしはあんたのおかみさんなんだもの、どこへだってついていくの、あたりまえじゃありませんか」
冗談ではなく、お千加は本気になってにらみつけているのだ。
「そうはいかねえだ。もし、おれの顔をつぶすようなことされれば、おれも男だから、そのときはもうおかみさんはおことわりだ」
「いつ、あたしがあんたの顔をつぶしたのよう。いってごらんなさいよ」
「だから、つぶしたときはって、ことわっているんだ」
「そんなこと、いちいちことわらなくたって、あたしがあんたの顔をつぶすはずがないじゃありませんか。だいいち、そんな大きな顔、つぶそうったって、あたしの力でつぶせるもんですか、鏡を見てごらんなさいよ」
いやに念を押されたのがくやしくて、お千加はすっかりへそを曲げてしまったのである。
「鏡なんか見ねえでも、おれ、色男にきまっているもんな」
「へえんだ、しょってるわ、そんなひょっとこみたいな口をしてるくせに」
きのうの虎七とのけんかのあとがまだ顔にはっきり残っている松太郎なのだ。
「おれがひょっとこなら、お千加さんはぷんぷんおかめだ」
「ぷんぷんおかめですいませんでしたね。どうせあんたはお糸さんのほうがいいんでしょう。さっさとお帰んなさいよ。いけすかない」
「あれえ、帰ってもいいんかね」
「わざわざことわらなくたって、だれもとめやしないわ。色男ぶるやつなんて、あたしだいきらいさ」
つんとそっぽを向いてしまうのだから、まったく手がつけられない。
「そんなら帰るべ、あとで、どっさり塩をまいておいてくだせえまし」
「大きなお世話だわ」
「女っぷりは日本一なんだけどなあ、どうして、こうけんかっ早いんだろう。こんなのお嫁にしたら、朝から晩まで夫婦げんかしていなけりゃ

なんねえ。くわばらくわばら」
「大きなお世話だったら」
「気にしねえでくだせえまし、これひとりごとだからね。どれ、帰るべかな」
こうこじれてしまってはしようがない。松太郎は立ち上がって、とんとんと階段を降りながら、やっぱりいい気持ちではなかった。
——どこで、あんなけんかになっちまったんだろう。
往来へ出てから、よく考えてみる。沼津へくっついていくまでは、まだよかったんだ。それから、売りことばに買いことばになって、鏡をごらんなさいよから、おかめひょっとこまで飛躍してしまった。どう考えても、お千加はけんかの名人である。
——あれとけんかをしないようにするには、なんでも、はい、はい、ということを聞いているよりしようがないだろう、つまり、しりに敷かれていることだ。
そんなことは男の恥だと、松太郎はおもしろくない。いっそこっちから高飛車に出てやったらどうだろう。
「やい、お千加、なんだって、男に口答えなんかしやがるんだ」
「口答えじゃありません。ひょっとこだからひょっとこだというのがなにが悪いんです。大ひょっとこのくせに」
「こんちくしょう、いっただな」
となると、いきおいあとは張りとばすだけだ。女を張りとばしたって自慢にはならないし、だいいち気の強いお千加のことだから、黙ってなんか張りとばされてはいないだろう。きっとむしゃぶりついてきて、ねこのようにひっかくにちがいない。
——困った女だなあ、やっぱり、しりに敷かれているほうが無事かな。
それでも、別れてしまおうなどとは少しも考えないのだから、松太郎もこのごろよっぽどおかしいのだ。

千加にほの字なのだ。
——まあいいだ。夫婦げんかのことなんか、夫婦になってからでいいだ。

水茶屋の女

それより困るのは、けさお糸から持ちかけられた難題である。大黒屋のだんなには、若いめかけがあるそうだ。こんど薬研堀へ建てるのも、そのお若というめかけの家なのだそうだ。
「おかあさんがいないんですから、おとっつぁんの気に入った人なら、あたしはちっともかまわないんだけれど——」
と、お糸は顔を赤くしていうのだ。
そのお若は、ぜひ大黒屋の後添いになって、おかみさんになりたがっているのだが、これだけはだんなも、あんまり年が違いすぎるので承知しないのだそうである。お糸にいわせれば、それだってお若という女がほんとうにおとっつぁんをたいせつにしてくれるならかまわないのだが、お若はついこの正月まで、浅草の観音さまの境内の水茶屋へ出ていた女だとかで、うしろに悪いやつがついている。
それがそそのかして、お若をむりにも大黒屋の後妻に直し、ちゃんときまったら、利兵衛をなんとかして、大黒屋をのっとろうとたくらんでいるのだ、そういううわさがお糸の耳にはいったのだという。だから、だれにもないしょで、ぜひ一度そのお若の身もとを調べてみてくれ、と頼まれてしまったのだ。
「そのうわさってのは、だれからお嬢さんの耳にはいったんだね」
松太郎が念のために聞いてみた。
「店の和吉が教えてくれたんです。でも、そんなことが知れると、和吉はいつ殺されるかわからないから、黙っていてくれというんです」
「おかしいね。じゃ、お店にも、だれかお若のまわし者がはいっているんかね」
「そうなんですって」

これはたいへんだ。それがほんとうだとすると、この陰謀はなまやさしいものではない。

「ようし、おれがすぐ探ってやるべ」

正義感の強い松太郎は、義憤に燃えてあっさり胸をたたいてしまったが、お糸が喜んで帰ってしまってから、よく考えてみると、この役はけっしてそう簡単なものではない。

だいいち、どこから手をつけていいか、直接お若に会って、おまえさんは善人かえ、悪人かえ、と聞ける問題ではないだけに、どうしていいか見当がつかない。しかも、へたに手をつけると、こっちの命があぶないばかりでなく、和吉にも、お糸にも迷惑がかかるかもわからないのだ。

「えらいことになったぞ」

ひとりではどうしようもなくなると、そこは人情で、夫婦約束までした仲なのだから、だれよりもお千加が相談相手だ。

そう思って駆けつけたお千加と、相手があんまりけんかっ早いもんだから、ついおかめひょっとこになってしまった。

——けど、やっぱりお千加にはいわねえほうがよかったかもしれねえだ。変なことから、お千加まで殺されるようになっちゃたいへんだもんな。

浅草橋を渡って、さてこれからどこへ行ったもんかなと、ぼんやり歩いていると、

「おい——」

ふいに背後から、腰のあたりをこづいたやつがある。

「おれかね」

松太郎がふりかえってみると、豆しぼりの手ぬぐいを盗人かぶりにしたごろつきふうのやつが、

「おまえだ。ちょいとそこまで、顔をかしてくんな」

と、すごい目をして郡代屋敷のほうへあごをしゃくってみせる。

「顔だけでいいかね」

「顔だけでいい」

「顔だけじゃ歩けねえだ」

「なにを——」

「からだがくっついていっちゃいけねえかね」

どうせろくなやつじゃないと思うから、きまじめな顔をして、松太郎はちょいとからかってみる。

「黙って歩け」

ぐいとふところへ右手をつっこんでみせたのは、あいくちをのんでいるぞというおどしだろう。

「わかっただよ、黙って歩けばいいだね」

松太郎はもう絶対に口をきかないつもりで、その男と肩を並べた。

本所の丑蔵

「おい、てめえのところへ、けさ、大黒屋の娘がたずねていったってな」

郡代屋敷の横から柳原土手のほうへ誘いこみながら、人通りが絶えがちになるのを見まわして、そのやくざ者はおうへいに切り出した。

はあてな。すると、このやろうは、水茶屋の女あがりのお若とかいう悪いめかけのまわし者かな。だとすると、よくまあそんなところまで見はっているもんだなとびっくりしたが、むだ口をたたくな、そんなら口をきかねえことにすべ、と、男が一度口にしたばかりだから、わざとそっぽを向いていることにする。

「おい、なぜだまっているんだ、いくら隠したって、こっちにゃちゃんとわかっているんだ。お糸はきのうも、てめえのところへ行ったろう。——きのうはまあ人がいたからいいが、けさは二階でふたりっきりになって、しばらく話しこんでいやがった。いったい、何を話していたんだ。正直に白状しちまいねえ」

「——」

「やい、てめえはおしか、なんだって返事をし

ねえんだ」

たまりかねた相手は、ぐいと松太郎の胸をつかんでこっちを向かせ、食いつくようににらみつけながら、柳の下へ立ち止まった。

「もう、口をきいてもいいかね」

「なにを――」

「黙って歩けっていうから黙っていただが、人がかってにおしゃべりしているのに、こっちだけ黙って歩くってのも、なかなかほねがおれるもんだね」

松太郎はまじめな顔をしている。

「こんちくしょう、張り飛ばすぞ。さっさと白状しねえか」

「いい天気でござえます」

「なにを――」

「これはためしだ。あんまり黙っていたんで、舌がこわばっていると悪いだ。どうか、悪く思わねえでくださえまし」

「てめえも相当なもんだな」

さすがに、相手も少しあきれたらしい。じっと顔を見ながら、急に戦法を変えてきた。

「おい、話はお互いに早いほうがいい。ひとつ、ざっくばらんにかたづけてしまおうじゃねえか。けさ、お糸さんはおまえに、どんなことをいったんだね」

「なあに、たいしたことはねえです。お千加がやきもちをやくほど、先じゃおれにほれているわけじゃねえだ」

「そういや、茅町の師匠は、だいぶおまえに熱いんだってな、うまくやってやがる」

「ありがとうござえます。おかげでまあ、末は夫婦と堅い約束はできたがね、ただ一つだけ心配ごとがあるだ」

「清次が承知しねえだろう。そいつはおまえ、むりもねえぜ。清次のほうが先口なのを、あとからおまえが来て、横取りすることになるんだからな」

なんでもよく知っているやつである。

「そうではねえです、清次あにいはさいわいとそんなけちな男と違うから心配はねえが、どういうもんか、お千加はあんなかわいい顔をしてるくせにけんかっ早くてね、おまけに勝ち気ときているから、夫婦になれば、きっとしりにしかれるだ。あんまりていさいのいい話ではねえ」

「まあ、その話ならまたあとでゆっくり聞こうじゃねえか」

相手はばかくさいというように、変な顔をして、

「そこでさっきの話だが、お糸さんはいったいおまえに、なんというんだね?」

と、水を向けてきた。

「おれ、まだ親分さんの名まえ聞かなかったっけね。おれは沼津在から出てきたもんで、今度に組のしんまいになりたての、松太郎ってもんです。よろしく頼みますだ」

あらためて、ぺこりと松太郎はおじぎをする。名もしらない、どこの馬の骨だかわからない者に、まじめな話はできないという顔つきだ。

「そうか、おれは本所の丑蔵ってもんだ。覚えといてくんな」

「丑蔵親分は、大黒屋さんのお糸さんのおじさんにあたるんでござえますか?」

「そんなものなんかにあたりゃしねえ」

「すると、いとこさんかね?」

「よけいな心配はしなくてもいい、赤の他人だ」

「あれえ、赤の他人が、なんだってそんなに親身になってお糸さんのことを心配してくれるんだろうな」

「ちっとばかりわけがあるんだ」

「どんなわけがあるんでござえます?」

なにくわぬ顔をして持ちかけたが、さすがにその手にはのらなかった。

「やいやい、下から出ていりゃつけあがりやがって、おれがこんなにつきあっているのに、てめえどうしてもすなおにいわねえ気だな」

丑蔵はへびのように目をぎょろりとさせて、

またしてもふところのあいくちへ手をかけてみせる。
「またおこるんかね、親分」
「ふざけるねえ、こんちくしょう」
「ふざけやしねえけど、もし赤の他人がわけもいわねえで親分に、親分さん、ゆうべおかみさんと寝床の中でどんな話したね、って聞かれたら、親分さんはその男に、実はこれこれだったって、いい気持ちになってすぐべらべらしゃべる気になれるかね」
「なんだと――」
負けおしみでぐいと肩はそびやかせてみたが、理づめにされると、丑蔵は返すことばもない。
「どうだろうな、親分さん、お互いにもう一度よく考えてみることにして、ここはおとなしく別れることにすべ」
「よし、それじゃてめえ、お千加がどんなめにあわされてもいいんだな」
こんどはお千加をかせに使ってきた。こういう無知な悪党は、人をおどすよりほかに能がないとみえる。
「つまらねえまねはしねえがいいだ。あれは強い女だから、へたをするとかみつかれるだ」
松太郎はけろりとして笑っている。
おどしにはのりそうもないし、さっきから平気でこっちをからかってさえいるのは、よっぽど度胸がいいのだろう。丑蔵はいささかもてあましたかっこうで、
「おぼえていろ、あとで、泣きっつらをかくなよ」
ひと言すごんでおいて、のそりと新シ橋のほうへ歩きだした。

使いやっこ

――なあんだ、たったそれだけか。
ことによると、一汗かかなくちゃなんねえかな、と覚悟していた松太郎は、ちょいと肩すかしを食った形で、ぽかんとそのふてぶてしいうしろ姿を見送っていたが、考えてみると、やっぱり笑ってすませられる簡単なことではないようだ。
あんな男が、しじゅうお糸の様子までうかがっているとすれば、それはお若のほうになにかたくらみがあってやらせていることだろうし、むろん、ほかにも何人か仲間があるにちがいない。だいいち、お若の悪いひもというのをつきとめる必要がある。おそらく、そいつがこんどの張本人なのだ。
――枝葉なんかどっちでもいい、親玉さえやっつけてしまえば、あとは自然にかたづいてしまうだろう。
が、その親玉をどうして探り出すか、まず、それからくふうしなくてはならぬ。
――待てよ、あの悪党め、お千加に仕返しをするっていっていたが、あんなやつのことだから、ほんとうに何をするかわかんねえぞ。
松太郎は急に不安になってきた。いくらお千加が気が強くても、ああいう悪党に二、三人でかかられては、かみつくひまもないだろう。
――今のうちに、よくいって聞かせて、用心させなくちゃ。
そう気がつくとすぐ、松太郎はもうどんどん浅草橋のほうへ駆け出していたが、その足がだんだんのろくなってきた。お千加とはたった今、けんかをして別れてきたばかりである。
「さっさとお帰んなさいよ、いけすかない」
「そんなら帰るべ、あとでどっさり塩をまいておいてくだせえまし」
男がわざわざそんな憎まれ口まできいて飛び出してきたその口の下から、のこのこと引き返していったら、
「へえんだ、せっかくどっさり塩をまいたばかりだのに、なにしに帰ってきたのさ」
と、なにしろ相手はけんかの名人だ、いきなり頭から浴びせかけてくるにちがいない。

「少し話があるだ」
「仲直りならおことわりするわ」
「そんな話ではねえ、おまえの命をねらっているやつがあるだ」
「大きなお世話じゃありませんか。けんか別れをして、もう赤の他人なんだもの、あたしがだれに殺されようと、あんたの知ったことじゃないでしょ」
あの赤いくちびるをとがらせて、つんと横を向かれれば、
「そんならかってにするがいいだ。けんかおかめのすっとこどっこい」
と、いくらいばってみたところで、引き返したこっちのほうが負けだ。男として、ひっこみがつかない。
困ったもんだなあ。
いや、けんかなんかこっちがまんして、どうかかんべんしてくだせえましと、男を捨ててあやまっても、相手がお千加ならそれでもいいが、命があぶない、とよくわかるように言いきかせるには、お糸との話をすっかりしてやらなくては納得がいくまい。それを打ち明けていいもんか悪いもんか、だいいち、よく考えなおしてみれば、丑蔵の捨てぜりふだって、ことによると、ただのおどしかもしれないのだ。そんな悪党のおどしの手にのって、いきなり女のところへ駆けつけたなんてあとで人に知れると、それこそ二本棒にされて、一生お千加のしりに敷かれるきっかけをこしらえるのと同じ結果になりそうだ。
——やめておくべ、それより、お若の悪いひもってのを捜し出すほうが先だ。
とうとう、川っぷちを柳橋まで来て、やっと決心がついた。で、柳橋は渡らずに、右へ切れて、並び床のほうへ歩きだすと、
「おい、松、いま帰りか」
ひょいと前へ留公が立ち止まって、からかうようにたりと笑った。

「やあ、留あにいか、兄貴は薬研堀の建て前のほうへ行ったんじゃなかったんかね」
「行っていたよ、用があるから駆け出してきたんだ」
留公も、そういえば松も、鳶としてはまだ半人まえだから、使いやっこの役にしかたたないのだ。
「ああ、そうか。ころばねえように駆け出してもらうべ」
「ころびたくっても、もう駆け出さなくてもいいんだ」
「なんだ、用はすんだかね」
「これからすむところだ」
「へえ——」
「へえじゃねえや、おまえに用があるんだ」
「そんなら、早くそういえばいいのに」
「早くそういうから、びっくりたまげるな。頭がかんかんになっておこってるんだぞ」
「なにをおこってるんだね？」
「血のめぐりの悪いやろうだな、てめえのことをおこってるんじゃねえか」
「あれえ、どうしてだろう」
「てめえはいままで、茅町の師匠のうちで何をしていたんだ」
「ちょいと話をしていたんだよ」
「ただ話だけか、おい。ちょいとにしちゃ、少し長すぎるぜ」
「その長いほうのちょいとなんだ。お千加とくると、おれが行くとなかなか放さねえだ」
「こんちくしょう、ぶんなぐるぞ、——と、頭がおこっているんだ。まさか、てめえまだ師匠に手をつけていねえだろうな」
「と、頭が心配してんのかね？」
「そ、そのとおりだ」
「困ったなあ、どうすべ」
「なんだと——」
「正直にいうと、留あにいのまえだけど、きょうも二階で、手をつけてきちまったとこだ」

「あれえ、こんちくしょう」
留公は口をあんぐりあけっぱなしにして、二の句がつげない。

お千加の下駄

「ときに、留あにいさん、おまえ、大黒屋のだんなのおめかけってのを知ってるかね」
松太郎はなにくわぬ顔をして聞いてみた。
「待った、松。てめえほんとうに、お千加さんに手をつけちまったのか。話はそのほうが先だ」
留公は顔色を変えて、まだそっちのほうへこだわっている。なんとも、やけてたまらないらしい。
「おれ、うそをいわねえだ。お千加さんのほうから手をつけたがるんだから、どうもしようがねえだ」
「なんだと」
「あれ、虫のせいかな、お千加さんおれの顔さえ見れば、すぐ胸ぐらとって、ほっぺたつねったり、ひざつねったり、すぐ手をつけたがるだ」
「手をつけるって、てめえのはただそれだけの手か――」
「それだけだよ」
「なあんだ、ちくしょう、気をもませやがる」
留公はやっと安心したようだ。
「へえ、もっとほかに、あにいがそんなに気をもむような手のつけようがあるんかね」
「まあいいや、おれもおかしいと思ったんだ。いくらなんでも、お千加さんが昼間っから帯を解くはずがねえからな」
「そうともかぎらねえようだな。銭湯へ行けば、昼間でも帯を解くだろう」
「ぶんなぐるぞ、こんちくしょう」
「あは、は、そこで、あにい、そのめかけの話なんだがなあ」
「人のめかけのことなんか、おれの知ったことじゃねえや」
留公はおこってしまったらしい。

「ああ、そうか、そうだろうな。大黒屋のだんな、自分が信用した者でねえと、うちわのことはめったに頼まねえ人だってね」
「あたりめえよ。だから、お若さんとこの大そうじのてつだいは、おれときまってるんだ」
ちょろりとのってくるんだから、のせる松太郎のほうがよっぽど人が悪いことになる。
「へえ。じゃ、あにいは信用があるんだな。いい女だっていうでねえか、お若さん」
「そうよなあ、正直にいうと、お千加さんほどじゃねえが、ぽったりとした、ああいうのを男好きのする年増ぶりってんだろうな」
「御殿はどこにあるんだね」
「もとは浅草の馬道の裏長屋にいたんだが、だんなが世話をするようになってから、田原町一丁目の明神さまの裏へひっこしたんだ。とても親切ないい人だぜ」
これはちょいと話がちがうようだ。悪いひもといっしょに大黒屋をねらうような女なら、たとえねこをかぶっていても、よく気のつく女とか、だれにでも調子のいい、りこう者だとかになるはずで、親切でいい人という化けかたにはならないはずだと思う。それとも、留公の見方が浅くて、そんなふうにしか見えないのか。
しかし、これ以上つっこんでうっかりしたことを聞くと、妙にとられて、相手がおしゃべりな留公だけに、どんなことを言いふらされないともかぎらないおそれがある。それに、もう広小路をつっきって、米沢町の町内へはいってきていた。
「留あにい、頭がおれに用があるって、薬研堀のほうかね？　うちにいるんかね？」
「薬研堀だよ。けど、別におまえに用があるっていってたわけじゃねえんだ。ただ――、あのやろう、またお千加のうちへはいりこんでいるとためにならねえ、留、ついでに行って見てこいって言いつけられたんだ」
留公はそんなことをいって、にやりとずるい

顔をする。
「ほんとうか――？」
「ほんとうよう。若い師匠のところへのべつに若い男がはいりこんでいたひにゃ、お千加さんの人気が落ちるじゃねえか」
「と、あにいが考えたんだろう」
「そんなことはねえ」
「じゃ、これからちょいと頭のところへ行って、聞いてみるべ」
「やいやい、つまらねえことを頭にしゃべると承知しねえぞ」
あわててにらみつけたところをみると、やっぱり留公は自分でやきもちをやいて、用のついでに、ちょいとお千加の家をのぞきにいく気だったのだろう。困ったしろものである。
しかし、その留公の口からお若の家がわかったのは、せめてもの見つけものだった。
――ところで、どこから手をつけたもんかな。
町内のかどで留公と別れた松太郎は、家のほうへ歩きながら、すっかり考えこんでしまった。なによりもまず、お若の家を張りこんでいて、悪いひもというやつを突きとめるのが先だとはわかっている。が、それははたして一日ですむ仕事か、二日も三日もかかるようになるか、どっちにしても、根気仕事になるだろう。その間に、本所の丑蔵というやつがお千加にどんなまねをしないともかぎらないし、だいいち、二日も三日も自分かってな仕事に黙ってかかりきるわけにはいかないから、どうしても頭にだけは打ち明けて相談する必要がある。そのほうの相談はかまわないが、そうなると、いきおいちょっぴりお千加との仲を説明しなければならないことになる。
――よわったなあ。
と、松太郎は当惑するのである。
「おれ、別に、お千加さんとはなんでもねえけれど、本所の丑蔵ってやつがいやに気をまわして、もしけさ、お嬢さんとどんな話をしたかいわなけりゃ、お千加さんをただではおかねえっていうだ」
こうあたりさわりなく切り出してみたとしても、
「ふふん、別になんでもねえお千加のところへ、朝っぱらからなにしに出かけたんだね」
と、新五郎につっこまれて、
「実は、そのお若さんておめかけのことを知っているかどうか、それとなく聞きに行っただが、お千加さん変にやきもちやいて――」
このやきもちが口に出ると、ただの仲で女がやきもちをやくはずがないし、やきもちを省略しては、それが目的で行ったお若のことをどうして聞かずに茅町を飛び出すようになったか、話の筋がはっきり通らなくなる。
困ったなあ、と考えこみながら、家の前まできて、ぼんやり玄関の格子をあけると、そこに脱いであるお千加の下駄がはっと目についた。
――あれえ、まだけんかがしたくて追っかけてきたんかな。
とはわざとこじつけてみた冗談で、ほんとうは、お千加も早く仲直りがしたいんだろうと、松太郎は急にうれしくなってきた。

狂態

茶の間へはいると、案の定、長火ばちをはさんで、あねごと話しこんでいるお千加のうしろ姿が、ひどく色っぽく目についた。が、うれしそうな顔を見せるのは男の恥だし、だいいち、あねごの前でてれくさいから、
「いま帰りました」
松太郎は声をかけておいて、さっさと二階へ上がろうとした。お千加もつんと澄まして、その実こっちがむきたくてしようがないくせに、わざとふり返ろうともしない。
「どこへ行ってきたの？　松つぁん」
おしのが笑いながら聞く。もうちゃんと、さっき話が出ているにちがいない。

「ちょっとそこまで行ってきたです」
まさか、茅町へ行ってきたとは言いにくい松太郎だ。
「そこまでって、どこなの？」
「広小路の向こうでごぜえます」
「広小路の向こうは柳橋だね」
「そのもちっと向こうでごぜえます」
「そのもうちっと向こうっていえば、茅町になるけど」
そこまで追いつめられては、もうしようがない。
「その茅町に、とってもけんかのうまい師匠さんが住んでいるの、あねごさん知らねえかね。おれ、そこへちょいと行って、頭からどっさり塩をまかれてきただ」
「うそつき。いつあたしが塩なんかまいたのさ、お祭りのみこしじゃあるまいし」
くるりとお千加が向き返って、にらみつけるのである。
「あれえ、お師匠さんそこにいたんか。おみそれしましたでごぜえます。きょうはいいお天気でごぜえますね」
「知らない。どうせあたしはぷんぷんおかめですいませんでしたね」
「そんなことはねえです。お師匠さんがぷんぷんおかめだなんて、そんなことというやつがいたら、おれが承知しねえだ。どこのどいつだろう、そんなことといったやつは」
「沼津の百姓の松ぼっくりっていう、ずうずうしくてそらっとぼけている田舎っぺだわ」
「はあてな、沼津の松ぼっくりって、どこかで聞いたような名だぞ」
「あたりまえじゃありませんか、あんたなんだもの」
「ああ、そうだっけ、ついうっかりしちまったなあ」
「困った人たちだねえ」
あきれてふたりの顔をながめていたおしの

が、笑いながら台所へ立った。なまじ横から口を出すより、どうせたわいのない子どもみたいなけんかなんだから、ふたりっきりにしておいたほうがいいとでも思ったのだろう。
「とぼけたってだめだわ」
お千加は、まだ松ぼっくりをにらみつけている。
「お師匠さん、にっこり笑ってみねえかね」
ほかに大きな心配ごとがあるから、できれば早く仲直りがしてしまいたい松太郎だ。
「笑いたくないんだもの、いやだわ」
「じゃ、少しくすぐってやるべか」
「いやだってば、どうして、わたしが笑わなけりゃいけないのさ」
「おれね、今度、どうしても、しばらく旅に出なければならねえだ。その旅先で、いつもお師匠さんのおこった顔ばかり思い出すのは、悲しかろうと思ってね」
「うそばっかし――、どこへ行くのさ」
ぎくりとしたようだが、そんなことですぐ弱みを見せるような穏やかなお千加ではない。
「それは、これから頭のところへ相談に行ってきまるだ。ただ、おれの心配なのは、お師匠さんはいい女だから、ほうぼうの山犬がねらっているだ。ことに、本所の丑蔵っていうやくざ犬が、ただじゃおかねえっていっているという話だから、あんまりひとりで飛び歩かないように、どうか気をつけてくだせえまし。これはほんとうに冗談ではねえです」
それとなく、松太郎は、丑蔵という名まえをお千加の耳に入れておく。
「ほんとうに、松ぼっくり、旅へ出る気なの。うそつくと承知しないから」
「うそではねえです。くわしいことは頭に聞いてもらえばわかるように話しておくつもりだけんど、本所の丑蔵ってやつの名まえだけは、忘れねえようにしてもらうべ。そんなら、お師匠さん、いろいろとお世話になって、ありがとう

ごぜえました。どうかたっしゃで長生きしてくだせえまし」

まじめな顔をして、ていねいにおじぎをして、あれえ、と松太郎は気がついた。ここまで芝居が進んでしまうと、いやでも一度、家を出なければかっこうがつかなくなる。

「じゃあんた、ほんとうに、あたしを捨てていく気なのね」

さっとお千加が顔色を変えた。

「これも浮き世の義理なら、しようがねえだ」

「かってにどこへでも行っちまいなさいよ。だれも止めやしないから」

「ありがとうごぜえます。よけいなこったけんど、また塩を一斗ばかしまいてもらいますべ」

松太郎はにっこり笑って立ち上がった。どうせ一度は頭に相談しなければならない。早いほうがいいから、いっそこれから薬研堀の仕事場へ行って、話の段どりをつけて、きょうからお若の見張りにかかろう。よそながら丑蔵の名は注意しておいたし、もう心配はないと考えたのである。

「松ぼっくりのばか」

玄関の障子をあけたとたん、お千加が金切り声をあげて、いきなり背中へ飛びかかってきた。

「あんたは、あんたって人は、どうしてそう人ばっかりいじめたいんですよう」

両手でつりさがるように肩へしがみつき、背中へ顔を押しつけて、泣くだけでは気がすまないらしく、身もだえしながらかみついてきた。

「痛えだ」

「痛けりゃあやまんなさいよ」

「あれえ、それあべこべみたいでねえかね。かみつかれたほうがあやまんのかね」

「あやまんなけりゃいやだったら」

どうしてもかかあ天下になる素質をじゅうぶん備えているお千加だ。

がらりと格子があいて、まともにぶつかった新五郎の顔がこの狂態にびっくり目をみはる。

女の口から

「お千加、いいかげんにしろ。往来からまる見えじゃねえか」

新五郎はさすがに苦い顔をした。往来からまる見えの玄関先で、若い女が若い男の背中にかじりついているところなど、もし近所の者の目にとまれば、たちまち町内じゅうの評判にされる。どうせそのうちに夫婦にしてやろうと考えているのだからかまわないようなものの、まだそうと話がきまっていないのに、うわさのほうが先になってしまっては、お千加が自分の妹だけに、家の若い者のてまえ、しめしがつかなくなるのだ。新五郎が苦い顔をするのも無理はない。

「さあ、困ったぞ」

松太郎もとんだところを頭に見られてしまって、ひっこみがつかなくなってしまった。

その松太郎ののど首へ、うしろから白い手を巻きつけて、とっさにぐいぐい茶の間へ引きずってきたお千加が、

「なにが困るのよう。あんたが、あんたが、あたしを捨てて旅へ出るなんて、そんな薄情なことばかりいうから悪いんじゃありませんか。くやしい」

と、兄の前もかまわず、またしても松太郎の肩へ、力いっぱいかみついた。まったく、正気のさたではない。というより、これではだれが見たって、ただの仲ではないことを、自分から見せつけているようなものだ。

「痛えっ、たまげたなあ」

「痛いように食いついたんだわ。たんとたまげなさいよ」

「頭、すまねえけんど、刺子の古いのをおれにくだせえまし」

こうなっては、松太郎ももう度胸をすえるよりしようがない。

「どうするんだ？　そんなもの」

新五郎は上へあがって、うしろの障子をしめながらきいた。
「お千加さんと話するとき着るです。そうでねえと、おれいまに、からだじゅう傷だらけにされちまうからね」
「にいさん――」
負けずに、お千加が顔をあげた。まだしっかりと松太郎の首っ玉へ両手をからんでしがみついたままなのだから、これもたいした度胸である。
「ばか、いいかげんに、松を放さねえか、女のくせに」
「放したくないんだもの。お願いだから、松ぼっくりと夫婦にして。でなければ死んじまう、あたし」
おもいきっていってのけたものの、いくらだだっ子でもそこは生娘だから、からだじゅうがまっかになったような気がして、かっと男の肩へ顔を伏せ、とたんに、両手が夢中で男ののどをしめつけている。
「苦しい。そんなにのどを絞めちゃ、おれのほうが先に死んじまうだ」
半分はてれかくしの松太郎だ。
「あきれたやつらだ。まあ、そこへすわれ」
新五郎は苦笑しながら、長火ばちの前へすわって、
「おしの、茶でもいれねえか」
と、台所へ声をかけた。
「あい、おまえさん、桜湯のほうがいいんじゃないかしら」
笑いながら出てきたおしのが、そんな気のきいたことをいう。
「おれ、どうも恥ずかしいな」
さすがに、松太郎は頭夫婦のてまえ、堅くなってすわったが、
「やっぱり、ねえさんのほうがわかりが早いわ」
と、お千加は赤くなりながらも、うれしそうな顔を隠そうとしない。

「お千加、いいかげんにしろ。かりにも、兄貴を死んじまうとおどかしたり、人まえで男の肩へ食いついたり、もし、松がそんなあばずれはいやだといったらどうするんだ」
「そんなことないわ。あたしをこんなあばずれにしたのは、松ぼっくりなんだもの」
「だいいち、その松ぼっくりがいけねえ。これから亭主にしようと思う男をつかまえて、そんな言いぐさがあるか」
「なあに、頭、おれ、あきらめているんです」
にこりと松太郎が笑った。
「ふうん。どうあきらめているんだ？　松」
「おれ、一生しりに敷かれる覚悟さえしていれば、まさか命に別状はなかろうと思うだ」
「変なことというのね、松ぼっくり。じゃ、あんた、あたしといっしょになるの、ほんとうは迷惑なの」
お千加がちょいと強い顔になる。けんかっ早いから、ここで一つまちがうと、また火花を散らさなければならない。
「迷惑ではねえです。おれ、どこかのとてもけんかっ早いお師匠さん、ほんとうは、とっても好きでたまらねえから、一生しりに敷かれてもかまわねえです」
「そんなら、女のあたしばかりに恥ずかしい思いをさせておかないで、どうしてあんたからもにいさんに、お千加を嫁にくれって、男らしくひと言頼んでくれないの」
うらめしそうにじっと見つめられて、松太郎ははっとした。やんちゃではあるが、それだけにお千加は真剣なのだ。だから、女の口から夫婦にしてくれなどと、恥ずかしいことがおもいきって言いだせたので、もし男のほうがそれほどでもないとわかったら、この勝ち気な女は座にいたたまらず、すぐに飛び出して、大川へ身投げをしてしまうかもしれない。――うれしい女だなあ、と思ったとたん、松太郎はわれにもなく律儀にすわり直っていた。

「頭、ねえさん、おれまだ組の駆付のくせに、こんなことといって虫がよすぎるかもしれねえけんど、お千加さんをおれの嫁にくだせえまし、きっと、一生たいせつにしますだ。もし、役付きになるまで待てっていうなら、それまで待ちますから、ただ約束だけでもさせてくだせえまし、お願いいたします」

「そうか。おまえにもらってもらえば、おれも安心だが——、なあ、おしの、すぐに祝言というわけにもいかねえだろうな」

新五郎としては、こうなったら早いほうがいいとは思うが、なんといっても、松太郎はまだしんまいだ。それに、組の中にも、お千加を嫁にほしい者が何人かいるし、それをさしおいて妹をしんまいにやっては、組の者もおさまるまいし、世間からも笑われる。なにかここで、松太郎に一手がらたててもらって、ああ、あれなら頭が妹の婿にするのもあたりまえだ、お千加さんはいい亭主を持った、といわれるようにしなければ、だいいち当人が肩身の狭い思いをしなければならない、とそれを心配するのだ。

「そうですねえ。当人どうしさえよければ、世間の口なんかかまわないようなものだけれど、お千加ちゃん、それまで待てるかしら」

思いは同じだから、おしのも笑いながらお千加の顔を見る。

「待つわ、あたし。ねえさんやにいさんがいいというまで、いつまでだって待ちます」

話さえちゃんときまっていれば、もう落ち着いていられるとお千加は思うのだ。

「でも、どのくらい待てばいいの？　にいさん」

「だからよう、松がここで男にさえなってくれれば、にいさんはいつだっていいんだ」

「それまでは、あの、口をきいてもいけないの？　この人と」

「そんなことはねえが、けど、あんまり人まえで肩へ食いついたり、茅町へたびたび呼びつけたりはしねえほうがいいだろう。とかく、世間の口ってやつはうるせえもんだからな」

「そうかしら」

それじゃ、まるで他人みたいだと、お千加はなんだかつまらない。

「ねえ、にいさん、じゃきょうだけこの人に茅町へ送ってもらったっていいでしょう。いろいろ、約束しておきたいことがあるんだもの」

「かってにしねえな」

新五郎は苦笑するよりしようがない。

「お千加ちゃん、おまえさん、まださっきのけんかがしたりないようだね」

若い人たちなんだものと、おしのは色町育ちだけに、取りなすような口ぶりだ。

「あら、もう、けんかなんかしないけど、——松ぼっくり、うちまで送ってきてよう」

「ちょっと待ってもらうべ。そのまえに、頭、ふたりきりで、少し相談してえことがあるだ」

松太郎はあらためて切り出した。

「そうか、じゃ二階へ行こう」

気軽に立ち上がって、なにか不平そうなお千加の顔に気がつき、

「男には男の話があるんだ。ふたりとも、呼ぶまで来るんじゃねえぞ」

と、新五郎はすかさずぴしりと妹の口を封じてしまった。

二度びっくり

「ふうむ、松、そいつはちっとばかしおかしいな」

二階へ上がって男どうし、話が出入り先のうちわに関する密事だから、額をくっつけるようにして、松太郎から大黒屋の一伍一什を聞かされた新五郎は、太いまゆをひそめた。

「なにがおかしいんかね、頭」

「お若って女は、そんな腹黒い女とは思えねえんだ。もっとも、七人の子はなすともなんとやらで、女ってものには、案外ないしょごとが多いから、はっきりしたことがいえねえが、あの

お若は、去年の秋、おれがだんなにたのまれて口をきいて、今の田原町へ一軒持つようになったんだ。おれも口をきくからには、ひととおり女の素姓から、日ごろのことを調べている。その後悪いひもがついたっていうんなら話は別だが、おれの見たところでは、おとなしい女で、だんなもひどく気に入ったらしく、今度薬研堀へ新しく家を建てることになったくらいで、それさえお若はむだだからと、はじめはとめていたという話だ」

「なるほどねえ。頭が自分で素姓を調べたというなら、まちがいはなさそうだ」

「――」

「すると、頭、まさかお糸さんが自分でそんな話をこしらえるとは考えられねえし、お糸さんにそんな話をしたという中番頭の和吉があやしいってことになるだね」

「そうだな。和吉がだれからそんな話を聞きこんだか、まずそれからたぐり出さなけりゃならねえ」

「頭、その和吉ってのは、どんな人がらかね？」

「なかなかしっかり者で、目先がきくから、日ごろだんなにかわいがられている男だ。ことしたしか二十歳だろう」

「本所の丑蔵ってやつも、調べてみなけりゃなんねえだね」

「こうしよう、松。そんな話がお糸さんから出たとすりゃ捨てちゃおけねえから、おれは大黒屋を調べてみる。おまえは御苦労でも二、三日、田原町の家を張り込んでみてくれ。もし、ほんとうに悪いひもがついたとすりゃ、そのひものほうがだんなのるすに田原町へ忍んでくるか、お若のほうからひもに会いに出かけるか、きっとなにか証拠があるはずだ」

だれの考えも同じとみえて、新五郎の思案もけっきょくそこへ落ち着いてきたようだ。

「じゃ、おれ、これからお千加さんを送っていって、早いほうがいいから、すぐに仕事にかかるべ」

「松、ここで男になれるかなれねえかだ、しっかり頼むぜ」

なんとか男になって、一日も早くお千加といっしょになってやってくれという心だ。

「まあ、みていてもらうべ」

松太郎はにっこり笑って立ち上がった。

階下へ降りてみると、お千加がひとりで長火ばちの前へ、せっかちだからいつでも立てるようにしゃがんだまま、つまらなそうに火ばしで灰にいたずら書きをしている。なんともお行儀の悪いかっこうだが、水ぎわだった女ぶりだけに、――あれえ、おれを待ちかねて、ふくれつらをしてやがる、と思うと、まんざら悪い気はしない松太郎だ。

「お師匠さん、さあ帰るべ」

「あら、もう男の話ってのすんだの」

「もうすんだよ」

「遠慮しないで、もっとゆっくりしてくれればいいのに」

じろりと白い目をして、すこぶるふきげんのようだ。あきらかにけんかをふっかけているので、なまじ相手になると、またほんとうのけんかになって、肩へ食いつかれるおそれがある。

「けんかはうちへ帰ってからゆっくりやるべ」

松太郎はかまわず玄関へ出て、さっさと草履をつっかけた。

「ねえさん、おじゃましました」

それでも、台所のおしのに声をかけて、すぐついてくる気にはなるのだから、お千加のやつ、よっぽどおれにほれてやがると、松太郎はまたうれしくなる。

――けど、おなじほれるにしても、お千加のはおおっぴらなんだからりっぱなもんだ。さっき、いきなり頭にはいってこられて、あんなところを見られちまったときは、おれもちょいとまごついたが、お千加のやつは平気で、夫婦にしてくれなければ死んじまう、と居直りやがっ

「なにするんだ、お師匠さん」
「いいから、さっさとおはいんなさいよ」
がらりと格子をあけて、押しこむように男を先へ入れ、うしろの戸をぴしゃりとしめて、
「松つぁん、あたし死んだって、あんたに人のおめかけの番なんかさせませんからね」
と、血相が変わっていた。
松太郎は二度びっくりである。

三度びっくり

お千加は頭との密談を盗み聞きしていたらしい。それでなければ、おめかけの番などということばが口に出るはずはない。
「あれえ、お師匠さん、聞いていたんかね」
「いいから、さっさと二階へ上がんなさいってば」
茶の間では、もうそろそろ昼からのお弟子さんたちが来るころなので、まさかけんかもしていられない。だから、二階へひっぱっていくんだ。
たいした度胸だと、松太郎はいまさら感心する。そのかわり、この度胸でけんかっ早いときているんだから、どうしても剃子だけは手放せない。
——まあ、しようがねえだ。剃子を着て、一生しりに敷かれてやるべ。
さすがにまっ昼間だから、ふたりとも往来ではひと言も口はきかなかった。松太郎は先で、お千加があとで、知らない人が見たら他人としか思えないような顔つきで、澄まして歩いた。
それが茅町の家の前まで来ると、急にお千加が肩を並べてくるなり、
「憎らしいったらありゃしない」
やぶからぼうに、いやというほど二の腕をつねられてしまった。これこそ、まったくびっくりぎょうてんで、
「痛いっ」
松太郎はおもわず飛び上がってしまった。

だろう。このぶんではまた、ただではすみそうもねえだと、松太郎は度胸をすえるよりしようがない。
「お師匠さん、このごろそわそわばかりしていて、ちっともけいこに身がはいんねえだってね、よくねえこった」
同じけんかでも、なるべく大黒屋のことにはふれたくないから、松太郎は二階へすわるなり、わざと亭主づらをしてみせた。きっと、おおきなお世話だわ、とけんかの名人だから、すぐ買って出るだろうと覚悟してかかったのだが、
「そうかしら——」
と、お千加は横へ来てからだを投げかけるようにすわりながら、じっと松太郎の顔を見ている。
「そうかしらではねえだ。稼業にもっと身を入れねえと、せっかくついているお弟子がはなれるだ」
「だいじょうぶよ。これからそわそわなんかしないで、身をいれるから」
「あんまり女が家をあけて出歩くのも感心しねえだ」
「そんなこと、もうしないわ。そのかわり、あんたのほうから、毎日一度ぐらい顔を見せてくれなくちゃ」
なんとなくからだつきまでとろんとなっているお千加を見て、あれえ、と松太郎は三度びっくりだ。これでは、まるっきりけんかにならない。
「いいとも、毎日来て、おれ、どぶさらいをしてやるべ。お師匠さんとこのどぶがいちばんきれいだって、いまにお奉行さまからごほうびが出るようにな」
「まきも割ってくれる？」
「いいとも、毎日まき割って、二階の屋根までつんでやるべ」
「水もくんでくれなくちゃ」
「いいとも、長屋じゅうの井戸がからになるま

で、水をくんでやるべ」
「ふ、ふ、そんなに井戸をからにして、御近所から苦情がこないかしら」
「心配ねえだ、苦情はおれが引き受けるだ。おれたち、こうみえても、もう頭がきめてくれたいいなずけの仲でごぜえますから、どうか水を差さねえでくだせえましていってやるべ」
「だって、井戸がからじゃ、差す水なんかないでしょ。いやな人」
「井戸になかったら、大川へ行ってくんできてもらうべ」
「松つぁん――」
「なんだね」
「あんたほんとうに、あたしをかわいがってくれる？　いつまでも、死ぬまで」
「たまげたなあ」
「あら、どうして？」
「お師匠さんはおれとけんかしにここへひっぱり上げたんじゃなかったんかね？」
「そんなことないわ。せっかく、にいさんがいいなずけにしてくれたんだもの、あたし、きょうはふたりっきりで、しばらくこうしていてみたかったんだわ」
心から安心したような、うれしそうなお千加の顔なのだ。してみると、さっきの邪険なけんまくは、二階へひっぱり上げるまでのてれかくし、つまり半分は、出迎えに出たお冬に聞かせることばだったのだ、ということになる。そういえば、お冬は二階へひっぱり上げられる松太郎を、またかというようにきのどくそうに見送っていたが、お師匠さんのけんまくに恐れをなしたか、いまだにお茶も入れてこない。もっとも、あれからすぐお弟子が来たらしく、階下ではけいこが始まっているから、その暇もなかったのだろう。
「いいお天気でごぜえますね。お師匠さん」
「いや――、ひやかしちゃ」
「ひやかすわけではねえけど、こんなおとなしいお師匠さんを見るの、おれはじめてだもんな。ちょっとまごついているだ」
これでは、まるで松太郎のほうがけんかを待っているような口ぶりだが、
「もう、お師匠さんだなんていっちゃいやだったら、――お千加といってくれなくちゃ」
と、――お千加はまるっきり甘いのである。事ここにいたっては、松太郎もつい甘くならざるをえない。
返事のかわりに、おもわずお千加の肩を抱きよせて、甘いくちびるにくちびるを押しあて、あれえ、留公にこんなとこのぞかれたら事だぞと気はついたが、ここは二階だし、障子はみんなしめきってあるし、やっと安心して、
「お千加、かみなりさまが鳴っても、もう離れねえぞ」
と、ほんとうにそんな気持ちになってしまった。
「うれしいわ、死ぬまで放しちゃいや――」
うっとりと薄目になりながら、やっぱりお千加のほうが熱が高いようである。
「いいだとも、そんなら、このままおとむらいを出してもらうべ」
「いやだあ、おとむらいだなんて、縁起が悪い」
「縁起が悪くても、おれ死ぬまで離れねえだ」
「あたしは、死んだって離れないわ」
抱いて抱かれて、青春というものはこんなにも甘いものかと、せつなくさえなりかけたとき、階下で格子のあく音がして、
「ごめんください」
たしかに、若い男の声だ。
それでも、ふたりはまだくちびるを放さない。
「はい」
けいこをつけていたお冬が、玄関へ出たらしい。
「いらっしゃいまし、どなたさまでございましょう」
「てまえは大黒屋の和吉という者ですが、お嬢

さんはまだこちらへうかがっていませんでしょうか?」

松太郎がはっとお千加を放した。お千加も急いで髪へ手をやる。

「いいえ、おいでになってはいませんけど」

「それでは、お師匠さんにちょいとおめにかかりたいのですが」

松太郎は目で、おれは押入へ隠れると知らせ、お千加が、わかったわ、というようにうなずいてみせる。

「お師匠さん――」

階段の下まで来て、お冬が呼んだ。

「はい、いま行きます」

立ち上がったお千加は、もうふだんの顔になって、とんとんと階段を降りていった。

松太郎は急いで押入の中へもぐりこむ。

階下の声

たぶん、和吉はお糸とここで落ち合う約束があるのだろう、話はむろんお若の悪いひものことにちがいない、と松太郎は見当をつけたのだが、はたしてお千加は、まもなく和吉を二階へ案内した。

「ごめんどうをかけてすみません」

和吉は恐縮しているようである。

「いいえ。でも、お嬢さん、たしかにうちへくるといっていたんですか?」

「はい」

「日ごろ御恩になっている大黒屋さんのことですから、二階をお貸しするのはかまいませんけれど、お若いかたどうし、もしまちがいでもあると、あたしが困ってしまうのですけれど」

「いいえ、けっして、そんな浮いた話ではないのです。なにかだんなのことについて、お嬢さんが心配なことを耳にした、ぜひ調べてもらいたいことがあるから、ここで待っていてくれと、たってのお嬢さんの申しつけなので、用にかこつけて、出てまいりましたようなわけなんです」

「だんなのことですね。どんな心配ごとがおありになるんでしょう?」

お千加はなかなか納得しないようである。もっとも、お出入り先のお嬢さんに二階をあいびきの席に貸したとわかると、大黒屋に対してめんぼくを失するだけではなく、いい家のお弟子さんはひとりもこなくなる。ほんとうなら、頭からことわるところなのだ。

「頭のところへ、このごろ田舎から出てきた若い衆さんがいますね」

和吉が妙なことを言いだした。

「松つぁんのことですか?」

「失礼ですけれど、あの人はお師匠さんのなにかになる人なんですか?」

「いいえ、別にそんなことはありませんけれど――、どうしてです?――」

しらじらしいお千加の声だ。たった今、死んだって放れないと甘ったれていたあとだけに、押入の中の松太郎のほうがくすぐったい。

「そんならいいんですけれど、留さんの話では、たびたびここへくるように聞いたもんですから」

「留公なんかのいうこと、あてになるもんですか」

「そうですかねえ、留さんの話では、あれは田舎者のくせにずうずうしくて、女くせが悪いと聞いたんで少し心配しているんです」

「なにが心配になるんです?」

「お嬢さんは六郷の渡しで、松つぁんに助けられたことがあります。それを恩にきて、お嬢さんのほうでまんざらでもないのか、松つぁんのほうから呼び出すのか、けさもお糸さんはうちへはないしょで頭の二階へ忍んでいって、長い間、松つぁんとふたりきりで話していたそうです。それから帰ってきて、和吉、頼みたいことがあるから、茅町のお師匠さんの二階へ行っていておくれ、と言いつかりましたんで。とても青い顔をしていました。もしや二階で、あの男

に取りかえしのつかないまねでもされたんじゃないかと、これはてまえのかってな考えなんですが、それを心配していますんで」

たいへんなことを言いだす和吉だ。

「じゃ、だんなのことじゃないんですね、お嬢さんの御用ってのは」

すかさず、お千加が痛いところをつっこむ。えらいぞお千加と、松太郎は押入の中でにやりとした。

「いいえ、そのときあの男が、もしおれを大黒屋の婿にしなければ、だんなをなんとかしてしまうというようなことを、ずうずうしいやつですから、お嬢さんをおどかしたんじゃないかと、これもてまえがってな想像なんですが――」

ちくしょう、と松太郎は思い、お千加がおこりださなければいいがなあと心配になったとき、がらがらと階下で格子のあく音がした。

「お師匠さん、もしものことがあると、頭にも迷惑のかかることですから、てまえがよく話をきいてしまうまでは、知らん顔をしていてください。けっして、悪いようにはしませんから」

すばやくささやいたところをみると、和吉というやつはよっぽど悪知恵のまわる男らしい。

「ごめんくださいまし」

階下の声はたしかにお糸だ。

春日遅々

「和吉、なにか用なの?」

まもなく、二階へ上がってきたお糸は、敷居ぎわに立ち止まったようだ。

押入の中の松太郎は、和吉め、うそをつきやがったな、お糸が自分から呼び出しをかけたんなら、何か用なの、と聞くはずはないと聞き耳をたてている。

「まあ、お嬢さん、そんなところに立っていないで、こっちへおはいりなさいませ」

「だって、ふたりっきりじゃ、お師匠さんにおかしいじゃないか」

お糸は生娘の敏感さから、なにか用心しているらしい。至極冷たい声の調子だ。

「いいえ、お師匠さんにはよくいってありますから、心配ありません」

「ここにいたって、話は聞こえます」

「そんなわがままをいうもんじゃありません。男とふたりっきりはいやだといったって、さっきは頭の二階で、あの田舎の若い衆と、ずいぶん長い間ふたりきりじゃなかったんですか」

「――」

さすがに、お糸は返事につまったようだ。

「うっかり悪いやつの耳にでもはいると、それこそ和吉の命がなくなる大事なんです。早くこっちへはいって、そこをしめてください」

一度痛いところをつかれると、娘などというものはすぐたわいなくなるらしい。お糸はいわれるなりにあとをしめて、しぶしぶとそこへすわったようだ。

「すわったわ、大事な用って何さ」

「実は、お嬢さんがけさ、頭の二階であの田舎者と話していたことが、どこからかもうお若の悪いひものほうへ知れてしまったんです」

「まあ、どうしてかしら?」

「ですから、もう少しあのことはだれにもいわないようにって申し上げておいたのに、お嬢さんはすっかりあの田舎者に話しちまったんでしょう」

和吉がうまくかまをかけていく。

「そんなことが、どうして向こうへわかるの?」

「お店に裏切り者がいるんだっていってあるじゃありませんか」

「で、向こうでは、和吉を殺すとでもいうの?」

「てまえばかりじゃありません。あの田舎者だってただではおけないが、それより、もうこうなったからにはいちかばちか、仕事を急ごう、つまり、まずだんなをかたづけてしまえというんです」

「まあ」

「それを防ぐ手は、たった一つしかありません」
「どうすればいいの？」
「先まわりして、悪いやつらを縛らせてしまうんです」
「和吉は知っているんですか？　その悪いひもとかいう男を」
「知っています」
「だれなの」
「それはいえません。うっかりいえば、命がない。いいえ、もうてまえがお嬢さんをここへ呼んだことだって、やつらにもわかってしまったでしょうから、どうせてまえは命がけです。ですから、お嬢さんにはなにもかも話してしまいましょう。そのかわり、和吉にもたった一つ望みがあります。聞いてくれますか、お嬢さん」
「お金――？」
「金なんかじゃありません。てまえは生きるか死ぬかわからないからだなんですからね、金をもらったってしかたがありません」
「じゃ、何さ？」
「わたしは、わたしは、お嬢さんを死ぬほど思っているんです。たった一度でいいから、ここで夫婦になってください」
そうら、本音をはきやがった。たぶん、そんなことだろうと思っていたんだ、すぐ、お糸はなんと出るだろうと、松太郎がおもわずかたずをのんでいると、
「いやだわ、そんなこと」
お糸の返事は、実にはっきりしていた。
「じゃ、だんなが、だんながどんなめにあっても、お嬢さんは――」
「なんだかあたし、それがどうしてもほんとうに思えないんだもの」
しっかり者だとは聞いていたが、なるほど、これはしっかりしている。あのりこうぶっている和吉のやろうがどんな顔をしているか、見てやりたいもんだと、松太郎が押入の中で、にやりとうれしくなったとたん、

「あれ！」
お糸の声が半分で切れて、おそらく破れかぶれの和吉が、けだもののようにおどりかかって、その口を押さえ、手ごめにでもする気だったのだろう。からだをもみあうようなけはいが、ありありとふすま越しに感じられた。
「うぬっ」
がらりと押入の戸をあけるなり飛び出した松太郎は、はたして娘の口を押さえながらのしかかるようにお糸をそこへ押し倒していた和吉の横つらへ、火の出るような平手打ちをひとつくれた。
「あっ」
その一打ちで横っ倒しになったくらいだから、痛いことも痛かったろうが、それより思いもかけないこの伏勢に、和吉はぎょうてんしたにちがいない。
「ちくしょう、て、てめえは」
夢中でびっくり飛び起きるなり、凶悪な形相になりながら、ぎらりとふところのあいくちを引き抜いた。
なによりも、みだれたすそを直しながら、ぼうぜんと目をみはっていたお糸が、和吉のあいくちを見るなり、
「お師匠さあん――」
金切り声をあげて、ころがるように下へ駆け降りていく。
「刃物はよしにすべ」
「なにをっ」
「このうえ、凶状持ちになるには及ばなかろ。それより、早くここを逃げ出して、当分江戸を落ちる分別をするこった」
平気でつっ立っている松太郎を見ると、いくらすごんではみても、まだ十八、九のやせ腕では、どうにも手出しはできかねるのだろう。
「いろ恋は思案のほかというもんな。おれはこんなへたな芝居、なるべく人には内密にしておいてやるだ。他国へつっ走って、もう一度よく

考えて、人生というやつの出直しをやってはどうかね」

「――」

「なにも、若いのにここからわざわざなわつきになってでて、一生を棒にふることもあるめえ」

かっとなったから、あいくちを引き抜いたようなものの、少しでも落ち着いてくると、人間めったに人殺しなどはできないものだ。

「ちくしょう、おぼえてろ」

それがせめてもの捨てぜりふで、出口は松太郎にふさがれているから、和吉はぱっと二階の廊下から屋根へ飛び出し、へいへ移ったとみる間に、路地へすべり降りていった。

「松、やろうは逃げたようだな」

いつのまにきていたのか、階段から新五郎がぬっと顔を出した。

「やあ、頭――」

「おれはお嬢さんのあとをつけてきていたんだが、こりゃとんだお茶番だった」

「つかまえたほうがよかったかね、兄貴」

「なあに、あれでやろうの目がさめりゃ、こんな功徳はねえやな。しかし、たったひとりでこれだけの茶番をしくむなんて、へたはへたながら、いろ恋ってやつはこわいもんだな」

松太郎はちょいと耳が痛いから、

「頭、おれ、お嬢さんを送っていくべ、お店で心配しているといけねえだ」

と、うまくお千加の家を逃げ出す算段だ。

「いや、お糸さんはおれが送っていこう。こうなったら、まさかだんなの耳へまるっきり入れねえってわけにもいくまい」

新五郎はもっともらしくいってから、

「おまえに送らせると、お千加がまたあとでうるせえや」

と、声をひそめて笑った。

松太郎はわざと二階から降りなかった。おりれば、いやでも頭といっしょに帰らなければいさいが悪いし、そんなことをすれば、あとでまたお千加にさんざんつきまわされなければならない。それに、ここへ来ていることがもう兄貴に知れてしまった今となって、じたばた逃げ出したってはじまらない話だ。

兄とお糸を玄関まで送り出したお千加は、二階へ引っ返してくるなり、

「いやだあ、あたし――」

そこにすわっている松太郎のうしろから首っ玉へ抱きついて、不平そうに鼻を鳴らした。

「なにがいやなんだ」

「あたし、そっとにいさんに聞いてみたら、きょうのはおおっぴらにできないてがらだから困るんだってさ」

「そうだとも。こんなことは、若い和吉のためにも、だんなやお嬢さんのためにも、おおっぴらになってうれしい話ではねえもんな」

「だって、てがらがおおっぴらにできなければ、あたしたちはまだ夫婦になれやしない。つまらないわ」

「まあ、もう少ししんぼうすべ」

「いやだったら、――いやっ、いやっ」

ぐいぐいむせっぽいほおを押しつけて、おおっぴらに夫婦になれなければ、内密でも夫婦になってしまいたそうにせがんでいるようにみえるお千加のだだっ子ぶりだ。

春の日はまだ長い。

ぼんくら千両

強情っぱり

師走も押しせまって、あと三、四日で正月を迎えようという日の、どんより曇った雪もよいの昼さがりだった。

「こんにちは――まっぴらごめんくだせえまし」

銚子の喜太郎はやっとたずねあてた柳橋の船宿兼田の油障子をあけて、土間へはいり、店の炉ばたのほうへていねいに小腰をかがめた。

「どなた――」

うす暗い炉ばたにただひとり、ぽつねんと物思いにふけっていたのはここの娘だろう、年ごろ十九か二十、娘にしては少し年増すぎるが、きりっとした目もさめるような下町娘で、喜太郎はこんな器量のいい娘に出会ったのは、生まれてはじめてのような気がする。

その娘の目がじっと喜太郎の身なりを見まわして、急になあんだという表情になった。旅にうすよごれためくら縞の素あわせをしりっぱしょりにして、あさぎのももも引きわらじがけ、からだつきががっしりとたくましいだけに、越後あたりから出かせぎにきた米つき男としか見えない。

「なんか、用なんですか」

「へえ、用がなければきません」

喜太郎は冗談のつもりでにっこりしてみせたが、その返事がまた娘には気に入らなかったのだろう。

「ごあいさつねえ、どんな用なんです」

「おとっつぁんいなさるかね」

「いったい、だれなの、あんたは」

「遠くからきた者でごぜえます」

「だから、どこのどなたってきいてるんじゃありませんか」

「名のってもたぶんわからねえと思うが、銚子の喜太さんといいます」

「その銚子の喜太さんが、うちのおとっつぁんにどんな用があるんです」

「それはおとっつぁんに会ってからいうです。おとっつぁん家にいなさるかね」

「いないわ」

「やれやれ、家出したかね」

「なんですって――」

「あは、は、そんなにおこらなくてもいいです。いまのは冗談なんだから」

「あんた、あたしをばかにする気なの。承知しないから」

自分のほうが先にけいべつしているくせに、娘は目を怒らせてにらみつける。

「腹をたてたかね。こう申しちゃなんでごぜえますが、あねごさんはいい御器量でごぜえますね。わしは感心したです」

「ほんとうにおこるわよ、あたし」

「おこっては困るです。これはほんのおせじなんだから」

「帰ってください、人をばかにして。さっさとお帰りってば」

「あれえ、ほんとにおこったんかね」

喜太郎はもう一度にっこりした。わらうとお地蔵さまのような顔にもなる喜太郎だ。

「おこったんならかんべんしてもらいてえな。けっして悪気があったわけではねえです――あらためてまじめにうかがいますが、ここのおとっつぁん、いつごろお帰りでごぜえましょうか」

「もう知らないってば」

「はあてね、困ったなあ。ほんとにおこったんかね。あねごさんは短気は損気ってこと知らないかね」

「もうたくさん。水をぶっかけてやるから」

「ありがとうごぜえます。そんならちょっとおき申しますが、江戸では人がたずねてきておじぎをしても、おじぎをかえさないのが礼儀で

ごぜえましょうか」
「なんですって――」
「わしは田舎者で、江戸のことはよく知らねえが、これでも遠くからわざわざ用があってたずねてきたです。用がなければ、他人さまの敷居はまたぎません。その客に、おじぎもかえさないで、いきなり頭から、なんか用なんですかとにらみつけるのが江戸のお行儀なんでごぜえましょうかね」
さすがに娘の顔が赤くなった。赤くなってもくやしそうににらみつけているところを見ると、これはよっぽど勝ち気なあねご娘らしい。
「腹がたったら、どうかかんべんしてくだせえまし。わしはまたおとっつぁんが帰った時分に、もう一度おたずねしますべ。おじゃまいたしました」
喜太郎はていねいにおじぎをして、あんまり若い娘をからかっても悪いから、さっさと表へ出た。むろん、娘は、ちょっと待ってください

などとは引きとめようともしなかった。
――たのもしい強情っぱりだな。島吉そっくりだ。
喜太郎は妙に胸があかるい気持ちである。
喜太郎が仙台塩釜の酉五郎親分の家で、江戸の島吉にはじめて会ったのは、この夏のはじめごろであった。喜太郎は銚子の網元灘屋喜兵衛のせがれで、おとなしくしていれば灘喜の若だんなで苦労はなかったが、なまじ剣術や柔術をかじって、腕力に自信のできたのが、いわゆる生兵法大けがのたとえにもれず、博徒を切って土地にいられなくなってしまった。それから二、三年は、やけで、上州から野州を渡世人で歩きまわっていたが、ばからしいと気がついたので、塩釜の酉五郎だんなの家へわらじをぬいでからは、おもに漁場で働かしてもらっていた。
そこへあとからわらじをぬいだのが、江戸の島吉である。島吉が江戸にいられなくなったのも、博徒を切って凶状持ちになったからで、こ

れは、そのまま渡世人になりすまし、房総から常陸、磐城を押しまわって塩釜まで流れてきたのである。身のたけ五尺八寸、堂々たる男っぷりで、腕っ節も強かった。
由来、江戸の人間は田舎へくると、すぐに江戸っ子を振りまわして人をみくびる癖がある。田舎者の喜太郎は、むろん島吉に頭からみくびられていた。が、その時分の喜太郎は、もう半分やくざの足を洗いかけて、自分は漁師の気でいたから、べつに島吉と張り合おうなどとは少しも思わなかった。
それが強情無類の島吉からなんとなく目のかたきにされだしたのは、夏相撲をとってからのことで、
「喜太、もんでやるから一丁こい」
本場の相撲部屋でけいこしてもらったという島吉は、草相撲の大関格で、漁師が多い土地の若者たちも、わざがあるから島吉にはだれもかなわない。
喜太郎は島吉よりひとまわり小さいし、人間ものんびりしているほうだから、島吉にしては弟子扱いのつもりだったのだろう。が、実際にぶつかってみると、そうはいかなかった。喜太郎は漁で鍛えた腕力のうえに、好きでけいこをした柔術も剣術も免許に近い。十番取って十番とも負けると、さすが強情っぱりの島吉が苦い顔をして、
「てめえは生まれぞこないだ」
と、さじを投げてしまった。そのときの島吉の顔を思い出すと、今でも喜太郎はおかしくなる。
読み書きそろばんではじめから喜太郎にかなわない島吉だった。あとに残る島吉のうぬぼれは、股旅で鍛えたけんか度胸と賭場の駆け引きである。ばくち度胸のほうは、もうそのころ喜太郎はあまり賭場へは出入りしなくなっていたので、勝負を決するときはついになかったが、けんか度胸のほうは、酉五郎親分が石巻の佐助

一家にけんか状を突きつけられ、それは仙台の親分たちが仲へはいって手打ちになったが、どうしても酉五郎をけこもうとする腹の佐助は、この盆すぎ、ふいに十三人で塩釜のほうへ切り込みをかけてきた。

ちょうどこっちはおもだった子分たちが留守で家には四、五人しかいなかったが、もっともかれらはそこをねらってきたので、半分は相当名ある旅人を集めていた。それをみごと撃退したのは喜太郎と島吉のふたりで、佐助側は半数以上けが人になって敗走し、とうとう土地を売ってしまった。

そのときも威勢のいい島吉は二、三カ所傷をうけて医者のやっかいになったが、のっそりとさえない喜太郎はかすり傷一つうけず、平気な顔をしていた。どっちかといえば喜太郎のほうが敵を多く倒して、一度は島吉のうしろから切ってかかったやつを横っ飛びにやっつけて助けてもいる。それを島吉はちゃんと知っていて、

「てめえはまったく生まれぞこないだ」

と、あきれかえっていた。

それでもまだ兄貴風を吹かしたい島吉は、おれはこれでも江戸で三人たたっ切ってきた凶状持ちだと、むじゃきな自慢をしていた。喜太郎は自分のことはばからしいからだれにも話したことはないが、銚子のほうから旅人がまわってきて、あいつは網元の若だんなのくせに、土地の悪親分なにがしの賭場へひとりであばれこみ、即死がふたり、けが人を十何人か出したすごいやつだと、はじめて素姓がわかると、

「喜太、てめえはどうしておれのうわてばかり行きゃあがるんだ。いやな野郎だなあ」

と、立つ瀬のないような顔をした。

「心配しなさんな。とても島兄貴にかなわないことがたった一つある。どういうもんか、おれは女にもてたことがねえ」

そういってなぐさめてやると、

「なにをぬかしやがる、女にもてるのが男の自慢になるけえ」

と、口ではおこっていたが、島吉は江戸っ子で、ばかみたいに気まえがよくて、役者のような男っぷりだったから、うわき稼業の女にはすごくもてた。当人もまんざら悪い気持ちではなかったらしく、女と賭場度胸だけはおれのものだというような顔をしてよく喜太郎を遊びにひっぱり出し、兄貴風を吹かせてよろこんでいた。

お相撲勝

とにかく、島吉という男はひどく強情っぱりだったが、悪気というものは少しもなく、むじゃきでさばさばとした楽天家だった。年は一つ上の二十五だったから、喜太郎は兄貴と呼んでいたが、そのおれのほうが腹はよっぽど黒いと、喜太郎はいつも自分でそう思っていた。

故郷銚子を飛び出してから、喜太郎は兄貴とはいちばん気の合った島吉が、一カ月ばかりまえ、ふとかぜをひいたのがもとで、四、五日ほど床につき、あっけなく息を引き取ってしまったのである。生来の酒好きと女にもてすぎて不摂生だったのが、いつのまにかからだにたたっていたのだろう。死ぬまでひどい熱がつづき、うわごとばかり口走っていたが、

「喜太、おれはだめそうだぜ」

と、死ぬまえの日の明けがた、ぽかんと夢からさめたように目をあいて、この三日ばかりそばを離れずに看病していた喜太郎の顔を見あげた。

「なにをいうんだ。寝ぼけなさんな。水でものむか、兄貴」

「うむ」

急須の水を口へ持っていってやると、二口三口うまそうにのんで、ぼんやりと天井をながめている。

「どうした、苦しいんかね」

「夢を見ていたんだ、おやじのな。江戸を飛び出して、足かけ三年にならあ。さんざっぱら親

にも不孝なまねをしたが、おれはてめえで好きかってなことをやってきたんだから、ここで死んでもなんにも心残りはねえ。おれが死んだらな、喜太、すまねえけれど、江戸へ行って、おれの胴巻き中に五十両だけ別にしてあるから、いつかは、おれだって江戸へかえれるときがある、そのときみやげにするつもりで、五十両だけはいつも別にしておいたのよ。すまねえが、その五十両をおやじにわたして、島吉はおもしろおかしく毎日を暮らして、わらって寿命を終わった、自分をふしあわせだなんて、一日も考えたことはなかった、おとっつぁんも、お品も、——お品ってのはおれのたったひとりの妹だ。ふたりともどうか嘆かねえでくれって、ことづけが頼みてえんだ」

「遺言は早いだろう。よしてもらいてえな」

「そうか。もし早かったら忘れてくんな、ひょっとほんとうになったら、たのむよ、喜太。おれは、このうえ、おとっつぁんや妹に、泣いてもらいたくねえんだ。——だからよう、どこへ行っても島吉のやつは、女にはもてたし、金には不自由しなかったし、好きかってなことをやって死んだと、たのむぜ。おやじはきっとおれのことばかり苦労しているんだ。妹のやつがしっかりしているから、おれは安心だが、親不孝ばかりしちまった。申しわけねえや」

喜太郎は自分のことをいわれているようで、おれだっておなじことだ、だれが好きこのんで親不孝がしてえものかと、じいんと胸が熱くなり、

「よしてくれってば、兄貴。おれが意見されるみたいじゃねえか。里心がつくなあ、そんなことといわれるとよ。おたがいに、どんなに里心がついたって、当分は帰れねえ故郷だもんな」

と、そっと島吉の手を握ってやった。

「そのとおりだ。帰れねえおれたちより、どこでどうしているかと、毎日心配している親の気持ちを思うと、おれはやりきれねえ」

「もうよせってのに。愚痴じゃねえか」

ふたりしてぼろぼろ涙をこぼしたのが最後の別れだった。東北の十一月の明けがたは、身にこたえるような寒さだった。

島吉の亡骸は酉五郎親分の菩提寺へ手あつく葬られ、遺言があるから三七忌をすませるとすぐ形見の遺髪に五十両の金を胴巻に入れ、

「きっと、いつでもいいから、もう一度顔を見せておくれよ」

と、親分にいわれて、塩釜を立ってきた喜太郎だった。

——あれが妹のお品にちがいない。

顔もよく似ていた。こっちがついなれなれしくからかったのが悪かったが、いきなりぼんぼんかみついてくるところまで島吉そっくりだ。今ごろ少しは後悔して、それでもまだ人のせいにしながらぷんぷんおこっているだろうと思うと、喜太郎はひとりでおかしくなる。

——また晩にでも出かけていって、からかってやるべ。

喜太郎にはどうかすると、そういう人の悪いところがあるのだ。

もっとも、喜太郎ははじめから島吉との縁などにたよって、兼田へわらじをぬぐ気持ちはなかった。馬喰町二丁目に恵比寿屋金兵衛という上旅籠があって、そこが江戸へ用たしに出るとおやじ灘屋喜兵衛の長年の定宿だった。故郷を出るとき、いきなり江戸へは行くな、二、三年田舎をまわって、ほとぼりをさまし、それから江戸へ出て身を立てろ。江戸へ行ったら恵比寿屋へわらじをぬげ、こっちからたよりをしておくからと、くれぐれもおやじからいい含められている。

——この間にちょっと恵比寿屋へ顔を出してこよう。

こんどは江戸におちついて、なんとか堅気で身を立てる腹の喜太郎なのだ。

浅草橋をわたって、両国広小路を突っ切り、横

山町の通りへはいってくると、その道々どこを通っても、田舎者の目にはごったがえすような雑踏で、ことに暮れも押し迫っているから人の足がなんとなく殺気だってせかせかと早い。のっそりと歩いていると、突き飛ばされそうだ。

——はあてな、ここにもなんか見せ物があるんかな。

一軒の前に黒山のように人がたかっているので、そのうしろのほうへ立ち止まってみると、そこは桐生屋という大きな呉服太物の店先で、客はひとりもいない。たったひとり、やくざふうのがらの悪い大男が店先に腰をかけて、片あぐらを組みながらたばこをふかしている。つまり、それが見せ物なのだ。番頭小僧はみんな片わきへどいて小さくなっている。

「悪いやつにねらわれたねえ、桐生屋も」

中年の職人がひとり、これははじめからのことを知っているらしく、しきりに説明したがっている。

「どうしたんです。あの男は何者なんです」

いま立ったばかりの小商人ふうの男が職人にきいた。

「あれは東両国のお相撲勝という命知らずでね、暮れで金がいるんでさ。そら、あそこに手おけが置いてあらあ。いいあんばいに、ここの店の前を通ると、小僧が水をまいていた。そのまいているほうへわざと出ていったから、どうしても水がかからあね。やい、なんのうらみがあって、おれに水をぶっかけたんだ。てめえじゃ話がわからねえ、主人を出せと、あそこへあぐらをかいてしまったのさ。まあ、一両はどうしてもふんだくられるね。高い水でさ」

「うまい仕事があるもんですね。ちょいと水がひっかかって一両、この節季に一両になるんらら、わたしは頭から水をかぶせられてもいいがなあ」

「そのかわり、へたをすると、暗いところへぶちこまれる」

「あんなやつは早く暗いところへぶちこまれたほうがいいんですがね。人間もあのくらいの命知らずになると、お上でもちょいと手がつけられないんでしょうね。まったく、あの野郎にはどのくらい人が泣かされているかしれません」

わきから小がらな年寄りが義憤をもらしだす。

店では、奥から中年の番頭が、盆の上へ包み金をのせて出てきた。それをお相撲勝の前へおいて、

「親方、ただいまは丁稚がとんだぶちょうほうを働きまして、なんとも申しわけございません。さっそく主人が出ましておわびを申し上げなければならないのでございますが、あいにく少しかぜのきみで伏せております。些少ではございますが、これはほんのおわびのしるしでして、どうぞごきげんをおなおし願います」

と、ものやわらかなあいさつだ。

お相撲勝はひょいとそれを手にとって、中身は一両とすぐわかったが、それでは不服だったのだろう。

「番頭さん、これはなんだえ」

と、どんぐり眼をぎろりとむいた。

「はい、ほんのおわびのしるしでございまして」

「なめちゃいけねえ、やせても枯れてもおれはお相撲勝だ。だれが金をくれといった。物もらいじゃねえや。人をばかにするねえ」

金包みをぽんとそこへ投げ出して、憎いつらつきをする。

「お気にさわりましたらお許しを願います。では、どういうことにいたしましたら——」

「だからよう、主人をここへ出せといってるじゃねえか。なんの遺恨があって小僧に水をぶっかけさせたか、返事によっちゃただはすまされねえ。おい、番頭、おれは平気で人を殺す男だよ。あんまり見そこなうねえ」

むろん、もっと金を出せというなぞだろう。人殺しを看板にして善良な人間をおどしつけて

いるのがなんともつら憎い。
「しばらくお待ちくださいまし」
番頭は困ったように、持ってきた盆を持って、もう一度奥へ引き取っていった。
「憎いねえ、一両じゃ承知できねえんだとよ」
「すると、五両ですかね。あくどいねえ」
やじうまの義憤を耳にするにつけても、持って生まれた性分で、喜太郎はどうにもがまんができない。
「ごめんくだせえまし。少々お通し願います」
人がきをかきわけて、おや、この野郎、うすぎたねえ田舎者のくせに、なにをする気だろうと、変な顔をしているうちに、前へ出てしまった。
店のわきに小僧がおいていった手おけとひしゃくがあって、まだ水が半分ばかり残っている。それを取りあげて、一つ二つ往来へ水をまいた喜太郎は、三つめをふいにお相撲勝の胸のあたりから、ざぶりとぶっかけた。
「あっ、この野郎」
まさかと思っていた勝は、寒中の水だから、ぞっとして突っ立ちあがり、たちまち凶暴な目つきをむき出しにした。
「どうもすまねえです。ついしたことで、かんべんしてくだせえまし。そのかわり、五両お賽銭をあげるから」
どっとやじうまが笑いだした。
「うぬっ、てめえはどこのどいつだ」
「通りがかりの者でござえます。つい手おけを見ると、水をまいてみたくなる性分があるもんだからね。まあ、道楽とでもいいますかね」
「この野郎、おれをなめやがって」
「そんなきたねえつら、ああ、ごめんなせえまし、きたなくはねえが、塩辛そうな親分の顔をなめるなんて、わしはそんな物好きではござえません」
こんな一文になりそうもない田舎者を相手にしてもはじまらないが、ここまで小ばかにされてはもう腹の虫がおさまらなかったのだろう。

「こい、野郎、ひねりつぶしてくれる」
「そうこなくてはおもしろくねえな。じゃ、もっと広いとこへ行くべ」
けろりとしてわらっている喜太郎だ。
「なにをぬかしやがる。目をまわすなよ」
はあっと大きなげんこに息を吹っかけるのへ、
「おっと、待った。ここではいけねえ。あっちへ行くべ。それとも、親方、わしといっしょにあっちへ行くのはおっかないかね」
と、喜太郎はいよいよからかい顔だ。

初げんか

「この野郎、もう承知できねえ」
お相撲勝は、せっかく五両になりかけているのだ、なるべく桐生屋の前をはなれたくない。たかが小力自慢の田舎っぺいぐらい、ひっつかまえて二つ三つ横っつらを張り飛ばしてやれば、べそをかいて逃げだすとでも考えたのだろう。いきなり左手で喜太郎の胸ぐらをつかみにきた。
「おっと、あぶねえ」
ここで相手をのしてしまっては店の迷惑になる。喜太郎はなんとか往来へひっぱり出す考えだから、その手を払いのけて、すばやくあとしざりする。
「野郎っ」
こんどこそと、お相撲勝は大きく踏んごんできた。
「そうはいかねえ」
さっと喜太郎が大きく飛びさがる。
「くそっ、めんどうだ」
お相撲勝はとうとう大手をひろげてばっと組みつきにくる。
「だめなこった」
喜太郎は身軽に横へ飛んで、またしてもすかを食わす。
まるで、土俵の上で大きな相撲が小さな相撲

を追いまわし、つかまえそこねてはひとりで腹をたてているようなかっこうなので、やじうまはげらげら笑っている。

「こんちくしょう、おれをばかにする気だな」

お相撲勝はひと息入れるように突っ立って、血相が変わってきた。

「水にするかね、親分」

相手が突っ立てば、喜太郎も立って、そんなからかうようなことをいう。もうそこはいつの間にか桐生屋の店先を離れて、往来のまんなかへ出ていた。

「野郎っ」

人前でこんなに小ばかにされたのもはじめてだったのだろう、お相撲勝はこんどこそはと死にもの狂いで、力いっぱいおどりこんできた。喜太郎はもういいだろうと思ったから、こんどは逃げない。すっとひと足さがりながら、つかみかかってくる相手のきき腕をひょいと取るなり、

「よいしょ」

肩にかついでみごとな一本背負いだった。

つかまえるほうへばかり気を取られて、すっかり腰が浮いていたところだからたまらない、大きなずうたいで空で一つもんどりうって、

「わあっ」

お相撲勝は二、三間すっ飛ばされ、いやというほど往来へたたきつけられた。

やじうまどもがびっくりして、思わずどっとはやしたてる。

が、さすがは相撲部屋で飯を食っていたことのあるやつ、

「こんちくしょう、やりやがったなっ」

なおもむくりと起き上がったときには、もうふところの匕首を抜いて両手で胸へかまえ、ひょうのように身構えている。おれは平気で人を殺す男だよと、さっき番頭にすごんでいたが、まんざらおどかしばかりでもないらしい。

さすがのやじうまも、しいんと顔色を変えてしまった。

「おっかねえなあ。それだけはかんべんしてくれよ、親方」

喜太郎はのっそり立ったまま、くるならこいというような不敵なつらだましいだ。

「くそっ」

だっとお相撲勝がからだごと突っかけてきた。

「どっこい」

びんしょうな喜太郎は、とっさに体を右へひらいて、空を突いた敵の肩をしたたか平手でたたいたあと、左の足癖を見せたのと同時、

「あっ」

お相撲勝はまたしても虚を突かれて、激しく前へ突んのめっていった。

「やあ、八丁堀がきた」

「定回りのだんなだぞ」

このとき、やじうまの中から、大きな声でどなってくれる者があった。それは喜太郎にというより、お相撲勝をおどかすためのやじうまの声援でもあったのだろう。

が、喜太郎にとっても、いわば凶状のある身だから役人はありがたくない。それに、役人さえくれば、いかにお相撲勝が悪党でも逃げ出すよりはしようがなかろうと見たので、喜太郎はその声を聞くより早く、さっさと人ごみの中へまぎれこみ、あとを見ずに馬喰町のほうへ曲がってしまった。

ふしぎなものである。横町を一つ曲がってしまうと、どっちを見てももうあかの他人の顔ばかりで、ついそこではでなけんかを買ってきたとはだれも知らないから、田舎者の喜太郎のほうなど振りかえっていく者もない。

――なるほど、江戸というところは広いもんだ。

当然のことながら、喜太郎はすっかり感心してしまった。この分なら、自分さえおとなしくしていれば、だれにも凶状持ちだなどとは知れ

ずに住んでいけるかもしれない。
「あれえ、よけいなけんかなんかするんじゃなかったな」
ふっと気がついて苦笑が出る。けんかはよそうと思っていながら、はじめて江戸の土を踏んだきょう、もうさっそくけんかをやっている。これはいったいどういうことだろうと、我ながらおどろく木桃の木さんしょの木である。
「そうだ、もうこんりんざいけんかはよすべ。おれは堅気で身を立てるために、江戸へ出てきたんだからな。ならぬかんにんするがかんにんだ」
喜太郎は歩きながら、自分にいって聞かせた。よく考えてみると、今だってあんな化け物を相手に、なにも自分からけんかを買って出なくてもよかったのである。ならぬかんにんどころか、今のは自分の物好きで、あの化け物があんまりずぶといから、ちょいとからかってみたくなったのだ。まったくおせっかいな性分である。
たとえば、あの化け物が、ただ足にかかった水一杯のことで桐生屋から五両ゆすっていったところで、あくどいにはちがいないが、そのために桐生屋がつぶれてしまうほどの問題じゃない。
一方からいえば、そんなあくどい化け物を退治するために、江戸には南北の奉行所というものがあるので、どっちから考えても自分などの出る幕じゃなかった。
「これからは気をつけます。どうかかんべんしてくだせえまし」
喜太郎はぺこりと頭をさげた。生まれ故郷の銚子を二十で飛び出して、もう足かけ五年会わないおやじさまの顔が、胸の中でじっとせがれのばかを嘆いているように思えたからである。
向こうから小走りに駆け出してきた下女ふうの若いたすきがけの女が、いきなり前で知らない男に頭をさげられたので、びっくりしたように立ち止まった。
「あれえ、悪いことしたな」
「なんか御用ですか」
「いいえ、べつに用があったわけじゃねえですが、——ああ、そうそう、馬喰町二丁目の恵比寿屋っていう旅籠屋を、ねえさんは知らねえでしょうか。知っていたら教えてください」
ついでだから喜太郎はきいてみた。
「恵比寿屋さんなら、この家ですけど」
下女が変な顔をして、前の大きな二階建ての家を指さす。しかも、ちょうどそこが入り口で、上旅籠恵比寿屋という掛け行燈も出ているし、風にはためいている紺ののれんにも屋号が白く染め抜いてある。
「なあんだ。どうもありがとう。おれは田舎者で字が読めねえもんだから」
まの悪いことおびただしい。下女は、くすりとわらいながら、おじぎをして駆けぬけていく。

かんにん袋

「ごめんなせえまし」
油障子をあけて、土間へはいり、曇り日だから薄暗い帳場のほうへ声をかけると、
「へえ」
いそいで中年の番頭が上がりかまちへ出てきた。じろりとこっちの身なりを見て、これはうちへ来るような客ではないと鑑定したのだろう、お早いお着きさまでとはいわずに、
「なんぞ御用ですか」
と、冷淡な顔になった。
「お宅は恵比寿屋金兵衛さん、宿屋さんですね」
むっとしたから、喜太郎はわざときいてやった。
「そうですよ」
「おれは田舎から出てきたんで、見てのとおりわらじをはいているだろう。しばらく逗留させてもらいたいんだがね」

「これはどうもお見それいたしました。せっかくのお客さまでございますが、あいにくきょうは部屋がみんなふさがっていますんで、まことに申しわけございません」

この野郎と思ったが、ふと、ならぬかんにんのことを思い出した。

「ちょっと待ってくださいよ」

喜太郎は左の手のひらをひろげて、右の指でかんにんと書き、それをひょいと口へ持っていってのみこんだ。

「どうかしましたか」

番頭が妙な顔をしてきく。

「いいえね、いまかんにんの丸薬をのんだんです」

「かんにん――」

「そうですよ。ならぬかんにんするがかんにんといってね、おれはこの江戸へ大望があって出てきた男です。たとえ人にどんな失礼なあつかいをうけても、人間すぐに腹をたてるようではろくなものにはなれない。だから、きょうはわらってここを出て、ほかの宿屋さんをさがしますがね、正直なところ、番頭さん、おれの風体はそんなに怪しく見えるかね」

「とんでもない、けっしてそんなわけではございませんので――」

「いや、言いわけなんかしてもらわなくてもいいんだ。番頭さんは稼業から人を見なれている。ただ身なりが悪いから上旅籠の客じゃないと見られたのなら、ほかに宿屋はたくさんあるからかまわないが、目つきが悪いとか、あいつは人相がよくないとか、もしそれだとどこへ行っても宿はとれない。そで振りあうも多生の縁、せっかく口までできいたんだから、教えてもらいたいと思ってね」

喜太郎はもうにっこりわらって、腹の虫はちゃんとかんにんの袋の中へ押しこんでいた。

「いいえ、お人がらがどうのこうのと、そんな失礼な、――あいにく、部屋がすっかりふさがっていますんで、なんともあいすみませんですが」

しきりにもみ手をしながら、番頭は少しもまじめに相手になろうとはしない。つまり、親切心がちっともないのだ。

「わかりました。けっして泊めてくれとはいいません。いずれこんどは台所口のほうからおうかがいしますが、一言御主人金兵衛さんに取り次いでおいてください。灘屋喜兵衛のせがれで、喜太郎というものが、故郷のたよりが聞きたくてたずねてきた。こういってもらえばたぶんわかりますから。――どうもおじゃましました」

そのままふらりと恵比寿屋を出て、ばかにしてやがるとは思ったが、もうあんまり腹はたたなかった。

――さて、どうするかな。

これからすぐ兼田へ行っても、まだ一刻とはたっていないから、おやじさまは帰っていないかもしれぬ。すると、またあの強情っぱりのお品と口げんかになって、追い出されるにきまっているし、そうだ、まだ昼飯を食っていなかった、どこかで飯を食いながらゆっくり考えるとしようと、馬喰町通りをいそぎ足で広小路のほうへ出ようとすると、さっと足もとへ水が飛んできた。なわのれんの前で後ろ向きになってほこりっぽい往来へ水をうっていた女が、いきなりくるりとこっちへ向きを変えたのだ。

「わあっ」

あわてて横っ飛びにはねたが、足の水はよけきれない。

「あら、ごめんなさい」

びっくりして棒立ちになったのは、さっきの紅だすきがけの若い下女だった。

「やあ、おまえさんか。なあに、いいんだよ。ねえさんのおしりばかりに見とれて歩いていたおれのほうがまぬけだったのさ」

ひっかけられた水を五両にしようと悪たれていたお相撲勝とついさっきばかばかしいけんかをしてきたところだけに、喜太郎はなんだか皮

肉を感じる。
「ほんとにすみません。冷たいでしょう」
「こんなもの、すぐかわくよ。ねえさんとこは飲み屋さんかね」
「そうです」
「飯も食わせてくれるか」
「御飯もあります」
「じゃ、ついでだから腹をこしらえていくべ」
「ありがとうございます」
女は如才なくおじぎをして、すぐに店へ案内してくれた。
土間はあまり広くはないが、繁盛する店とみえて、どの台も客が目白押しに並び、おもいおもいに酒をのむ者、飯を食う者、なわのれんだから、客種はたいてい中以下で、掛け取りの番頭、職人、小商人のたぐいが多く、節季でからだは忙しいが、あんまり寒いからちょいと腹へ焼きを入れていこうという連中なのだろう。
——たまげたもんだなあ、江戸というところは、どこへ行っても、人間がいわしのようにうじょうじょしている。
喜太郎はまたここでも感心させられて、ここがあいてますからと、女が教えてくれたあきだるへ、小さくなって腰をおろした。
はじめはみんなに顔を見られているような気がして、なんとなくおちつけなかったが、ちょうしがきて、さかながきて、飲みながらそれとなくあたりをながめると、だれも人のことなど見ているのんき者はひとりもいないことに気がついた。連れがあればその連れと、ひとりはひとりで、みんな自分の前だけが自分の家のように、少しも他人に気がねなく酒をたのしんでいる。
中にはおせっかいなのがいて、両隣へ自分のちょうしで酌をして話しかける者はあっても、一軒おいた隣までは手がのびない。
そして、これだけの人間がかってにしゃべるのだから、がやがやとにぎやかなことはすこぶるにぎやかだが、一つ一つの話し声は気にならないし、耳へもはいらない。
入りかわり立ちかわりするそれらの客を受け持って、飯場へ注文を通したり、できあがったものを客のところへ運んだり、勘定からあとかたづけまで店のいっさいをとり仕切ってまるでこまねずみのように働いているのは、さっきの女を年がしらにして、みんな十五からせいぜい七どまりの少女ばかり、それもたった三、四人でやっているようだ。
——あれで、勘定なんかめったにまちがいもしないんだろうから、慣れってものはこわいみたいなもんだ。
ひとりで感心していると、さっきの女が注文もしないのに、黙って新しいちょうしとさかなを置いていく。水をひっかけたわびというやつだろう。
「すまないね」
べつにただもらう気はないが、その心がうれしいから礼をいうと、ふりかえって、目でにっとわらっていく。
すきっ腹のせいもあったが、喜太郎はあたたかい気持ちで、なんとなく陶然となってきた。
「——あの年で男を知らねえなんて、そいつはちょいとうなずきにくいな」
「ところがよう、お品にかぎって、どうもまだ生娘らしいんだ」
ふっとそんな声が耳についたので、喜太郎は聞くともなく右隣へ耳をひかれる。
「たしか九だろう。二十だったかな」
「九だよ。もっとも、あと三、四日で二十だがね」
そう答えたのは、着物の上から印ばんてんをひっかけた船頭ふうの隣の男だ。
「ふ、ふ、よくそれまで虫がつかなかったもんだな」
にやりと、いやらしいわらいをうかべたのは、三十がらみの縞物の対を着た苦み走った男っぷ

りで、どこか大店の番頭といった身なりだが、この野郎には暗い肩書があると、そこはほうぼうの賭場を歩いてたくさん人間を見なれてきている喜太郎には、なんとなく勘でわかる。ふたりの前にはもう五、六本のちょうしが並んでいた。

「あれでなかなか勝ち気だからな。変なうわさがたつのがこわいんだろ」

「まあいいやな。一度や二度うわきがあったって、悪いひもさえついていなけりゃ見っけものさ」

「そいつはだいじょうぶだ。兄貴の島吉はちょっとすごい男だったが、けんか凶状で土地を売ったんだから、当分江戸へは帰ってこられねえ」

「そうだってな。相手は深川の鉄五郎の身内だっていうじゃねえか」

「うむ。洲崎の賭場で、半助、松蔵、音八、三人ともちょいとした顔の兄哥株だったんだが、相手が島吉じゃしようがねえ。きのどくなのは兼田のおやじさんさ。鉄五郎から島吉に百両の貸しがあると因縁をつけられて、二年がかりで五十両は払ったが、あとにまだ五十両残ってるってわけだ」

「いいか、亀、こっちはしたく金が五十両だ、大店の番頭で、いまは店のてまえ晴れて女房にするわけにはいかないが、そのうちにきっと夫婦になる。それまで毎月の手当が三両、いまの家じゃ近所のてまえいやだっていうんなら、別に一軒持たせてやってもいいんだ。筋書きはわかったろうな」

「わかってるよ。なあに、恨みのある鉄五郎のめかけにされるより、兄貴のほうがましさ」

「勝ち気な娘ならなおさらのことだ。うまくしたてから出て、おやじの苦労をかせに泣き落とすのよ。うまくいったら、今夜てめえの船で連れ出して、浦安で会おう。五十両用意して待っている」

「ふ、ふ、五十両であの娘が身請けできりゃ、

兄貴、七十五日生きのびるだけでももうけものだぜ」

喜太郎は二本めのちょうしを半分ほど残して、ふたりに気づかれないようにそっと立ち上がった。びっくりしているさっきの小女を目で呼んで外へ出て、

「急に用を思い出しちまったんだ。飯はあとでまたきっと食いにくるから、これ預かっといてもらうべ」

「こんなにたくさん、だめだわ、にいさん」

「ねえさんの名、なんていうんかな」

「お咲っていいます」

「お咲ちゃんだね。おぼえたよ。おれは喜太郎っていう田舎っぺだ。またくるからね」

にっとわらってみせて、もうさっさと歩きだす喜太郎だ。

「じゃ、にいさん、待ってますよ」

「おうい」

振りかえって、喜太郎はよく働く小娘に手をふってやる。

おやじさま

——ちくしょう、えらいことになったぞ。

両国広小路を柳橋のほうへ突っ切りながら、喜太郎はまずかんにんと書いた手のひらの字をいそいでロへのみこんだ。そうでもしなければ、あのふたりを待ち伏せして半殺しのめにあわせ、深川の鉄五郎というやつのところへは切り込みをかけてやらなければ胸がおさまりそうもない。

——ならぬかんにんだぞ、喜太さん。

もう一度、喜太郎はかんにんを丸のみにした。いちいち悪いやつに腹たててけんかをしていた日には、せっかく出てきた江戸にも、一日だっていられそうもなくなる。金ですむことは金ですますことだ。

——まにあってよかった。

一方ではその感も深い喜太郎である。もう二、

三日でも来ようがおそいと、お品もおやじさまもとんだ不幸なめにあわされなければならなかった。さいわい島吉の五十両がここで役にたちそうなのは、死んだ島吉の魂がせめて最後の親孝行をしようと思って、おれのからだを使ったにちがいない。

——いいとも、きっと引きうけたぜ、兄貴。

喜太郎は旅の空で、江戸の肉親の上を思いながら、おれはちっともみじめじゃねえ、毎日がおもしろおかしかった、とやせがまんをして、さびしく息を引きとっていった島吉の顔を思い出して、なんとなく目がうるんでくる。

自分の短気からとはいいながら、生まれた土地を売って、いくら会いたくても親にも兄弟にも会えない境涯が、なんで毎日おもしろおかしくなんかあるものか。自分がそうだから、喜太郎はいっそうそれが身にしみるのである。

それにしても、あの番頭ふうをした悪党は何者なんだろう。洗ってみれば、ぬすっとかきんっぽを向いているが、その前にすわっていた島吉をひとまわり小さくしたような年寄りが、じろりとこっちを見ていた。たしかに、おやじの磯吉にちがいない。

「お寒いこってございます」

喜太郎はひと足上がりかまちのほうへ進んだ。

「おいでなさい。冬は寒いほうがけっこうだね」

おや、これはたいへんだ。島吉の負けずぎらいも、お品の強情も、じつはこのおやじゆずりなのかもしれない。

「へえ、これで雪が降ると、なお豊年でございます」

これさえいわないと喜太郎はもっといい男なのだが、

「うれしいあいさつだね。おまえさん、さっき娘に行儀を教えていってくれたそうだが、ありがとうよ」

「どういたしまして。ほんの手みやげがわりでございます」

「若いのにいい心がけだ。名まえも聞かずに帰したというんでね、それじゃ留守の役にたたねえと、いま小言をいっていたところさ。おまえさんもおまえさんだ。いくら口げんかはしても、わざわざ遠方からたずねてきなすったのはわしに用があってのことなんだから、名まえぐらいはいっていきなさるがいい。それでないと、あとで年寄りが、だれなんだろうと、顔を見るまで気をもまなくちゃならない」

ああ、そうだったと思い、

「気がつかねえことをしたです。これからはよく気をつけます、かんべんしてくださえまし」

と、すなおに頭をさげた。

「それで、わしはここのあるじで磯吉っておやじだが、おまえさんはどなたさんだね」

「申しおくれました。わしは奥州塩釜からきた喜太郎という者で、お宅のむすこさんとはしばらくの間、兄弟のようにしてもらっていましたが、ちゃく切りか。人のたいせつな娘を金でおもちゃにしようとしやがる、ちくしょうめ、ただじゃすまねえからそう思えと、またしてもむかむかしながら、喜太郎はもう一度あわてて手のひらのかんにんを飲みこむ。

同朋町を突っ切って柳橋をわたり、川っぷちを左へ切れると、すぐそこに兼田の掛けあんどんが目についた。寒い間じゅうはほとんどひまな船宿稼業である。

「ごめんくださえまし」

喜太郎はさっきのことがあるから、静かに油障子をあけて土間へはいり、足で立って、ていねいにおじぎをした。こんどは、たとえまだおやじさまが帰っていなくても、帰るまで待たせてもらう気だから、なるべくお品と口げんかはしたくない。

「あら、きたわよ。おとっつぁん」

そういうお品の小声がたしかに耳についた。

薄暗い炉ばたのほうへ目をやると、お品はそ

た。その島吉さんからたのまれて、おやじさまにことづてを持ってきた者でございます」
「ふうむ」
一瞬さっと磯吉の目が輝いたが、さすがにあわてた姿は見せず、
「それはどうも、わざわざ遠いところをありがとう。とにかく、上がっておくんなさい。お品、お客人にすすぎをお取りしてな」
と、娘のほうへいいつける。
「あい」
そそくさと立ち上がったお品の白いほおが、たちまち桜色になって、もう目をうるませている。肉親の情の厚いのを目に見せられたようで、
——いけねえ、こりゃつらい使いになってしまった。
と、喜太郎は急に胸が重くなってきた。

形見の金

すすぎを取って、炉ばたへ招じられた喜太郎は、着物のすそをおろして、きちんと磯吉老人の前へすわった。網元の若だんなだから、それだけの行儀はしつけられている。
「ただいまは失礼いたしました。わし、いまいったとおり、こちらの島吉さんと旅先で兄弟分になった喜太郎という者ですが、あんまりいいたよりを持ってきたんではありません」
いいにくいが、いわずにすむことではないから、喜太郎はすぐに切り出した。
「どうせ勘当した野郎だ、いいたよりが聞けようとは思いませんよ、遠慮なくずばりといってもらいましょう」
おやじさまはそのひとことでもう覚悟したらしく、きゅっと口をへの字に結んで、気まぎらせにきせるを取り上げる。
わきへきて茶を入れているお品の白い手が、なんとなくふるえているようだ。
——こんなつらい役とは思わなかった。
喜太郎はなるべく父と娘の顔を見ないように

して、懐紙を畳へ敷き、胴巻の中から二十五両包みを二つ出して、ずしりとそれを並べ、もう一品、戒名を書いた紙にくるんできた島吉の髪の毛を出して、それに添えた。
静かに合掌してから、
「いまわけをお話ししますが、これが島吉兄貴の形見の品です」
と、磯吉の前へ少し押しやる。
「すると、野郎は死んだんだね」
おやじさまはじろりと形見の品に目をやっただけで、手に取ろうとはせず、冷淡にさえ聞こえるような声でいった。
「はい。先月、十一月十七日の明けがたでした」
あっとお品が顔をあげ、それから気がついて、こぼれた茶をいそいで手ぬぐいでふいた。
「どうせ、畳の上では死ねねえ野郎だ」
「奥州の仙台在塩釜に、湊屋酉五郎という網元で親分がおります」
喜太郎はかまわず話しだした。
「わしがそこでやっかいになっているところへ、この春、島吉兄貴がわらじをぬぐようになりまして、だんだん話し合ってみると、すまねえことですが、おなじような親不孝者なんで、仲よくなりました。兄貴は江戸っ子で、負け惜しみは強いが、さっぱりしているんで、親分からもかわいがられましたし、身内の者からも兄貴兄貴と立てられていました。この夏、石巻の佐助という親分が、旅人をまじえた十三人で、酉五郎親分の家へふいに切り込みをかけたことがあります。そのとき兄貴はすばらしい働きをして、かすり傷一つ負わず、敵方を追い散らして、酉五郎親分へは一宿一飯の恩返しはりっぱにすみました」
じつは、島吉は二、三ヵ所勇ましい手傷をうけて、医者の世話になっていたが、すばらしい働きを見せたことにはまちがいないから、無傷ということにいっておく。
「それが先月、ふっとかぜをひいたのがもとで、

ひどい熱が二、三日どうしてもさがりません。親分も心配して、医者にも見せたんですが、やっぱり寿命だったんですね。死ぬまえの日の明けがた、喜太、おれはだめそうだぜ、というんです。つまらねえことをいいなさんな、水でものむかといって、急須の水を持っていってやると、うまそうに二口三口のんで、ぼんやり天井をながめている。苦しいのかときくと、なあに、おやじの夢をみていたんだ。江戸を飛び出して、足かけ三年、さんざ親には不孝なまねをしたが、おれはてめえで好きかってなことをやってきたんだ。ここで死んでも心残りはなんにもない。おれは胴巻の中に、五十両だけ別にしてある。いつかは江戸へ帰れるときもあるだろうと思って、そのときのみやげにするつもりだったんだ。おれが死んだらな、喜太、すまねえが、その五十両を江戸のおやじさまにとどけて、島吉は親不孝なやつだったが、自分ではおもしろおかしく毎日を暮らして、わらって寿命を終わった。ふしあわせだなんて、一日も考えたことはない。おとっつぁんにもお品にも、どうか嘆かねえでくれと――」

わっとお品がそこへ泣き伏すのを見ると、喜太郎はぼろぼろ涙がこぼれてきて、どうにもそのあとがつづかなくなってしまった。男がみっともねえと、奥歯をくいしばって、むりに涙をのみこむ。

磯吉が両方の目を片手なぐりにして、やけにほんときせるを炉ばたでたたいていた。

「遺言なら早いぜ、兄貴。そうか、もし早かったら忘れてくんな。ひょっとほんとうになったら、たのむよ、喜太。妹がしっかりしているから安心だが、おやじさまはきっとおれのことばかり心配している、ほんとうに親不孝ばかりしちまった、申しわけないと、これがやっぱり兄貴の遺言になって、翌日の明けがた息を引き取りました。なきがらは親分酉五郎が手厚く自分の菩提寺へ葬ってくれましたんで、兄貴の三七

忌をすませると、わしはすぐにわらじをはきました。湊屋酉五郎からもくれぐれもよろしくとのことで、これが預かってまいった香典です。お納めなすってくだせえまし」

喜太郎は別の一包みを出して、さっきの分と並べた。

「喜太さん、ありがとうよ。おまえさんの親切、このとおりだ」

負け惜しみの磯吉が、さすがに負け惜しみを捨てて、心からそこへ両手をついた。

「どういたしまして。うれしいたよりでなくて、すみません」

「お品――」

おやじは形見の品へ合掌してから、まだそこへ突っ伏している娘を呼び、

「泣くんじゃねえ。泣いたってしようがあるものか。仏壇におあかしをあげてな、島吉をおふくろのところへ並べてやんな」

そういいつけてから、しゃっきりと立ち上がった。土間へおりて表へ出ていく。

ああそうかと思っているうちに、はたして表から松飾りを倒しているけはいが聞こえてきた。

「喜太郎さん、そんな御用だったとはちっとも知らないもんですから、さっきはほんとうにすみませんでした。許してくださいまし」

お品が目をまっかにしながら、しおらしく両手をつく。

「なあに、あれはおれのほうが意地が悪かったんだから」

あやまられてみると、ちょいとすまない気になる喜太郎だ。

「にいさんは、こんな姿になっちまって」

お品はまたしてもすすりあげながら、懐紙ごと島吉の遺髪を取りあげ、抱くようにして次の間の仏壇へ運んでいく。

――よかったなあ、兄貴。

やっと島吉も家へ帰って、肉親の手で家の仏

壇へ納まった、そこにはおふくろが待っていたんだと思うと、喜太郎もまた涙がこぼれそうになる。

ばくちうちぎらい

「なあ、喜太さん、おれはなにもせがれが憎くて勘当したんじゃねえ。まして、仏になっちまえば、勘当もへちまもあるもんか。けどもよう、世間さまへはそれじゃ通らない。たとえ相手のほうが悪くても、人を二、三人もたたっ切って、世間さまを騒がしているんだ。大っぴらに親の手で通夜、葬式を出してやるわけにもいかねえじゃねえか。今夜はこっそり家じゅうで通夜のつもりにして、野郎も久しぶりで帰ってきたんだ、しばらく家にもいてえだろうから、年が明けて、世間で松でも取れたら、娘とふたりで寺へ送ってやろう。おまえさんは野郎の死に水を取ってくれた縁の深い人だ。何度礼をいってもいい足りねえ。どうか、きょうはそのつもりで、ゆっくりのんでいってください」

席をかえて、茶の間の仏壇の前で、喜太郎は酒を出されたが、少しも酔えなかった。いや、酔わないように杯を控えめにしていたのだ。

「喜太さん、おまえさんはどこの生まれだね」

「銚子の船頭の子です」

「せがれとおなじ身の上だとさっき聞いたが、やっぱり手なぐさみが好きで、ばくちうちとけんかをしたんかね」

「お恥ずかしゅうございます」

「両親はあんなさるんかね」

「おやじさまと弟がひとりあります」

「やれやれ、親不孝なこった。おれはばくちうちは大きらいでね、島の野郎だって、ばくちうちで帰ってきたんなら、こんりんざい家の敷居はまたがせなかったんだ。そんなわけだから、いくらおまえさんがほかならぬ男でも、ばくちうちの間は家へ泊めてあげるわけにはいかない。がんこのようだが、これだけは断っておきますよ」

「そんな失礼な、おとっつぁん」

そばにいたお品がはらはらして、

「なにも喜太郎さんが今もばくちうちだかどうだかわからないのに」

と、とりなすようにいう。

「お品、女は黙っていな。おまえだって、ばくちうちなんかを亭主にすると、おとっつぁんは家へおかねえ。ついでだからいっておくんだ。喜太さん、当てこすりじゃねえよ。おれは島吉のようなせがれを持って、さんざんきょうまで苦労してきた。いっそ憎けりゃこんなにも苦労はしねえ。不具の子ほどなおかわいいのたとえで、一日だってせがれのことは忘れた日はなかった。どこにどうしているか、病みわずらいでもしていやあしねえかと、親ばかさ、自分がかぜ一つひいても、すぐ島吉のことを思い出す。銚子にいなさる喜太さんの親御さんだって、きっとそのとおりだ。考えると、おれは人のことでも胸が痛くなる。なあ、喜太さん、堅気の相談なら、おれはあすの日にでも裸になるよ、かわいいせがれの死に水を取ってくれたおまえさんのことだ、いってみればせがれも同然さ。だが、ばくちうちでいる間はお断りだ。きょうはまあ特別だが、そう思ってもらいますよ」

「御意見、身にしみるです」

少しも歯にきぬを着せないことばが、銚子に三年余り会わないおやじさまを持っている身だけに、じいんと胸へこたえる喜太郎だ。

むろん、喜太郎は塩釜の湊屋へわらじをぬいだときから、賭場の足は洗っていた。こんども江戸では堅気で身を立てる腹で出てきている。が、それはここでは口にしないことにした。いつかはわかることだし、なるべく人のやっかいになりたくない根性っ骨を喜太郎は持っていた。

「そうはいってもな、喜太さん、きょうは特別だ。せがれも久しぶりで家へ帰ってきて、さぞうれしいだろう、ゆっくりのんでいっておくれ」

磯吉は、特別だ、特別だといって酌をして、自分もぐいぐいのみ、とうとうそこへ酔いつぶれてしまった。

「おやじさま、そんなところへごろ寝しちゃ、かぜをひくです」

「なあに、きょうは特別さ。酔ったんじゃねえ、ちょいとくたびれたんだ。すぐ起きるから、今夜はせがれの通夜じゃねえか」

そういっているうちに、もういびきをかきだしたので、喜太郎はそれをしおに、お品に目くばせして、そっと店へ立った。

短日はすでにあかりがほしいほどに夕暮れている。炉ばたへすわると、炭火があかあかと目にしみた。

父親にかいまきをかけて出てきたお品が、

「おとっつぁん、きょうは変なことばかりいって、気を悪くしないでくださいね」

と、いそいでわびていた。

「気なんか悪くしねえです。おやじさまの気持ちはよくわかっている」

「それなら安心だけど――」

「おれ、けっしてお品ちゃんには色目つかわねえから、安心してくだせえよ」

つい冗談口が出た。はっとお品が顔をあげて、夕やみの中にこの娘はほんとうの美人だなと、喜太郎がわらっていると、

「あたしもばくちうちは大きらい」

と、急に意地の強い顔になる。

「ああ、そのばくちうちで思い出したが、兄貴は深川の鉄五郎とかいうばくちうちに百両の借金があって、それをおやじさまが二年がかりで返しているってほんとうかね」

「あら、じゃ、にいさん、ほんとうに鉄五郎から百両借りたっていってましたか」

「いや、兄貴から聞いたんじゃない。きょう変なところで耳にしたんで、きいてみたんです」

「鉄五郎がそんないいがかりをつけてきて、おとっつぁんが二年越し苦労しているのはほんとうです。にいさんは鉄五郎の子分を三人切っている、その香典だと思えばいいっておとっつぁんがいってますけど、ほんとうの気持ちは、鉄五郎のきげんを損じて事が荒だち、にいさんを凶状持ちにしたくない、凶状持ちの名さえつかなければ、いつかもう一度にいさんを家へ呼びかえせると、おとっつぁんはそれだけをたのしみに、向こうのいうなりになっていたんです」

「そうだろうねえ」

「今となっては、そのおとっつぁんの苦労も、みんなむだになっちまったわ――だから、だからあたし、ばくちうちは大きらい」

お品は涙声になって、いそいでたもとで目をふいた。

「どうもあいすみません」

喜太郎はぺこりと一つ頭をさげて、

「まだその兄貴の借金が五十両残っているんだってね」

と、なにげない調子だ。

「あした、あさって、三十日の暮れ六ツ(六時)という約束なので、おとっつぁんはこの店を売ってしまおうかと考えていたようです」

「兄貴の五十両がまにあってよかったなあ。せめてもの親孝行ができて、兄貴もきっとうれしいだろう」

「おとっつぁんはどう考えているかしれないけど、あたしはいやです。にいさんが生きていればともかく、もう死んじまったんだもの。返した分の五十両まで返せとはいいませんけれど、そんなうその借金、もう払いたくありません。切られた三人だって、にいさんがその晩目と出たとかで、その金ほしさに途中で待ち伏せしていたというんですもの。こっちはちっとも悪くないんだわ」

お品はきれいな目をぎらぎらさせながら、きかない顔をする。もしそれが男だったら、やっぱり島吉に負けないきかんぼうになっていたかもしれぬ。

「それ聞いて、安心しました」
「あら、なにが安心なの」
「ねえさん、兄貴よりしっかりしているようだから、まさか鉄五郎なんかに負けて、おめかけにされることもあるまいと思ってね」
「だれが、だれがあんなやつの——にいさんのかたきじゃありませんか」
ぷっとふくれてみせた顔が一段とあざやかなのだから、よくまあ男がこの年まで生娘でおいておいたものだと、喜太郎はさっきの男のようなことを考え、我ながら苦笑させられた。
「さあ、ばくちうちはこれでおいとましますべ。ごちそうさまになりました」
喜太郎はあらためてそこへ両手をついた。
「あら、あたしどうしよう」
はっと中腰になって、父親のことばもあるてまえ、どう引きとめようもないようなお品だ。
「なあに、心配しないでもらいますべ。おやじさまが目がさめたら、喜太がよろしくいって帰ったと、耳に入れといてくだせえまし」
上がりかまちへ出て、手早くわらじをはきながら、喜太郎の声は軽い。
「これからどこへお帰りになるんです」
「おちつけたら、当分江戸でおちついてみたいと思っているが、さあ、どんなことになるものやら」
「もう一度きっとたずねてきてくださいね。にいさんの話ももっとうかがいたいし」
「うまく堅気になれたら、また敷居をまたがせてもらいますべ。おじゃましました」
「ほんとうに待っていますよ、喜太郎さん」
申しわけなさそうなお品の顔へおじぎをして、喜太郎はたそがれの表へ出た。
兼田の前だけ松飾りがとれて、その松がどこにも見えないのは、磯吉が前の神田川へでも投げこんでしまったのだろう。思ったよりつらい役だったが、これでどうやら一役すんだと思うと、喜太郎はほっとした気持ちだ。

飯屋で耳にした悪船頭の亀というやつのことは、きいてみもしなかったし、話してもこなかったが、おやじも娘もしっかり者ぞろいだし、とにかく五十両という金ができたのだから、もうそんな悪党のつけこむすきはなかろうと、喜太郎はわざと口にしなかったのだ。一つには、あんまりよけいなことにまで立ち入って、おためごかしに親切にすると、痛くもない腹をさぐられるのは、娘がずばぬけた器量だけにいやだったからである。
——はてな。
川っ風の寒い柳橋へかかって、同朋町のほうから足早に橋をわたってくるのは、着物の上から印ばんてんをひっかけたさっきの亀という野郎だ。
亀野郎はなにか鼻歌をうたいながら、こっちの顔には少しも見おぼえがないらしく、すれ違って、とっとと兼田のほうへ曲がっていく。どこへはいるだろうと見ていると、ためらいもせずいま喜太郎の出てきたばかりの油障子をあけて、兼田へはいっていった。やっぱり、そこの船頭だったのだ。
——お品ちゃん、だいじょうぶかな。
さすがにちょっと気にはなったが、あんな薄のろのような男の口車にうかうかのせられるお品ではあるまいと思い直し、喜太郎はそのまま馬喰町のほうへ歩きだした。

恋というもの

喜太郎を送り出して、もう行燈に灯を入れなくちゃと思いながら、お品は妙にその勢いがなく、ぼんやり炉ばたへすわってしまった。
泊まっていらっしゃいと、喜太郎を引きとめてやれなかったのが、ひどく薄情だったような気がして、すまなくてしようがない。
——どうして、おとっつぁん、あんなことをいったのだろう。
ばくちうちがきらいなのは、よくわかってい

る。兄の島吉がばくちで凶状持ちになり、それからの二年深川鉄五郎にさんざんいじめ抜かれたのだ。あたしだって、ばくちうちは大きらいだ。

けれど、きょうの喜太郎さんは違う。にいさんの兄弟分だというから、ばくちうちにはちがいないかもしれないが、せっかくにいさんの遺言と形見を持って、遠いところからわざわざ、わらじをはいてきてくれたのに、一晩も泊めずに追いかえすなんて、それで人の義理がすむだろうか。

「おとっつぁん、そんな薄情なことってありますか」

お品はかげへ父親を呼んで、おこってやろうかと何度も思ったが、そうする勇気がどうしても出なかった。

はじめに来たときけんか別れをして、田舎っぺのくせに、いやにずぶとい虫の好かないやつと思った男が、二度めにきて兄の話をするのを聞き、その行きとどいたもののいいようと、父親が変な意見をしても少しもおこった顔をしない。かえって心の奥底に絶えず深い情愛を持っているようだった。なによりも、兄のことはほめても、自分の自慢はひとことも口にしなかった。りっぱな男だなあと思ってしまったのが、自分でうしろめたくて、おとっつぁんはことによると、あたしが喜太郎さんを好きになるのがこわいんじゃないかしら、と変に気をまわしたとたん、もうなんにもいえなくなってしまった。

それに、ほんとうは自分の心がこわくもあった。ひょっと、この男が好きでたまらなくなるようなことにでもなると、あたしはおとっつぁんにそむかなくてはならなくなる。にいさんでさんざん苦労をした年寄りに、あたしまで親不孝する、とてもそんなことはできない。どんなことがあっても、この男を好きになってはいけないんだと、自分で自分にいい聞かせていた。それにはなまじ引きとめないほうがいい、そんな気持ちでもあった。

「喜太さんも凶状持ちだといっていた」

因果だなあ、と思う。兄の死んだのも悲しいことはむろん悲しいが、それはもう泣けるだけ泣いてしまった。

どうしたのだろう、今になって、父親にいいたいことをいわれ、御意見身にしみますと、神妙に涙ぐんでいた喜太郎がありありとまぶたに残って、かわいそうでたまらない気がしてくる。

二十で故郷を出て、足かけ五年になるというから、兄とは一つ下の二十四だ。さぞ親や弟に会いたいだろうに、それが会えない。きっと、兄とおなじように、旅の空でだれかに死に水をとられて、寂しく死んでいく男なんだ。

「一晩でも泊めてやって、親がわり、弟がわりに、やさしくなぐさめてやったら、どんなによろこんだろうに」

なんだか、あきらめきれない。元気よく出てはいった。だが、それは男の負け惜しみで、胸の中では今ごろ、薄情な親子だったとうらみながら、この寒空の下をしょんぼり歩いているのではなかろうか。身なりもあまりよくはなかったし、金は持っているんだろうか。

「おとっつぁんが悪いんだわ」

お品は泣きたいような気持ちにさえなってくる。

がらりと油障子があいた。

もしや引きかえしてきたのでは——、と思わず中腰になると、船頭の亀吉が帰ってきたのだった。

「お品さん、たいへんだぜ。うちの門松が盗まれてらあ」

ばか野郎と、つい腹がたって、

「いいんだよ。おとっつぁんがきっと捨てたんだろう」

と、相手になるのももものうい。

「捨てた——、じゃ、正月をしねえ気か」

「ああ、正月はしないよ」

「そうか。じゃ、お品さんいよいよ夜逃げかえ」
すっと炉ばたへよってきて声を落とすのだ。
「おお、お酒ください。いやだなあ」
いそいでそでで鼻をおおって、おおげさに顔をしかめてやったが、
「おやじさん、やっぱり金ができねえのか」
と、亀吉はいよいよ声をひそめてすわりこむのだ。
ああ、その夜逃げとまちがえたのかと気がつき、お品はあきれかえってしまった。
「どうだろうな、お品さん、おれにちょいとした話があるんだけどな」
「どんな話さ」
「おこりっこなしだぜ。こういっちゃなんだけどよう、おれもこのあいだじゅうから内々心配していたんだ。このみそかまでに五十両できなければ、店じまいをするか、お品さんが深川の野郎の人質に取られるか、二つに一つだ。店じまいだなんて、親孝行のお品さんにできるはずはなかろう。すると、やっぱり人質のほうだ。それを考えると、おれは腹がたってしようがねえ。おれだって、ここんちへやっかいになって、三年にもなるんだからな。なんとか恩返しができねえものか、苦労にしていたのよ。すると、ちょいとうまい話にぶつかってしまったんだ。ほんとうだぜ、お品さん」
「心にかけてくれて、ありがとうよ、亀吉さん。その話、あとでおとっつぁんとふたりのところで聞かしてもらうから、とにかく行燈に灯を入れておくれな」
「へえ」
亀吉はぽかんとお品の顔をながめて、
「灯は入れるがね、話ってのは、おやじさんの前じゃちょいといいにくいことなんだ」
と、あっさりしっぽを出してしまったようなものである。
「そうね。おとっつぁんの前でいえないような話じゃ、あたしが聞いたってしようがないんじゃないかしら」
「そ、そんなことはねえ。お品ちゃんの返事一つで、今夜にも右から左へ、ちゃんと五十両手にはいる、たしかな話なんだ」
「どうもありがとう。とにかく、灯をつけておくれな。せっかくの話が、こう暗くちゃ見えないからね」
「そうでござんすかね」
まだひやかされているんだとは気がつかないらしく、妙な顔をして立ち渋っている亀吉だ。
「お品、——お品」
奥で磯吉の呼ぶ声がする。
「あ、いけねえ。今の話は、おやじさんにはないしょだぜ、お品さん」
亀吉は首をすくめて、あわてて立ち上がった。

雪

行燈をつけて奥へ行ってみると、磯吉はさっきのところへ起き上がって、しょんぼりとなにか考えこんでいるようだ。
「どうかしたの、おとっつぁん」
「うむ、水を一杯くれ。お霜はまだ帰らねえのか」
「まだだけど、もう帰るでしょう」
女中はきょう家へやってくれといって、朝から出て、まだ帰らないのである。出したままの膳を台所へさげて、水を持ってきてやると、父親はうまそうにごくりごくりと飲み、もう酔いはおおかたさめているようだった。
「島吉は死んじまったのか。しようがねえ野郎だ」
ぽつんとつぶやきながら、急に年をとった姿である。
「愚痴をいったってしようがないわ。あっちでもう一杯飲みなおしたらどうね。今夜はにいさのお通夜なんだから」
「喜太さんは帰ったのか」
思い出したようにきく。

「さっき帰ったわ」
「おこってやしなかったか」
「べつにおこってやしなかったけど、こんど堅気になれたら、また敷居をまたがせてもらいます、おとっつぁんの目がさめたらよろしくって帰りました」
「そうか。親切な、しっかり者のようだった。口のきき方も筋が通っているし、生まれがいいんだろう。島吉のことを兄貴兄貴といっていたが、どうして、あの男のほうが一枚も二枚も上さ」
「そうかしら」
「旅の空でうまがあって、年が上だから、島のほうが兄貴になったんだろう。あんな遺言が出るくらいだから、きっと親身になって死に水を取ってくれたにちがいねえ。野郎の遺言をいうとき、目にいっぱい涙をためてやがった。情人なんだな、あの喜太さんて男は」
父親はぼんやり仏壇のほうを見ながら、ぽつりぽつりという。口ではあの男のことをいいながら、その実、胸の中ではせがれのおもかげをじっと抱きしめているのだろう。
「そりゃ情人でなくちゃ、遠いところをわざわざ、にいさんの形見なんか持ってきてくれやしないわ。三七忌がすむと、すぐ立ったっていってたもの」
お品にはその親切のほうが身にしみて、喜太郎の顔ばかりがまぶたにちらつく。これだけは口にすまいと思っていたが、
「どうして、おとっつぁん、喜太郎さんを一晩でも泊めてあげなかったの、おとっつぁんてば、ばくちうちはきらいだきらいだと、出ていけよがしのことばかしいって。——きっと、あの人、胸ん中では薄情な親子だとわらっていたにちがいないわ。いやだわ、あたし」
と、ついうらみ言が出てしまった。
「なあに、それでいいんだ」
「おとっつぁんは、もしや、ばくちうちのあの人を、あたしが好きになると困るって、そんなこと考えていたんじゃないの」
思いきってぶつかってみた。
「いくらおとっつぁんがばくちうちぎらいでも、それほどてまえがってじゃない。ばくちうちでも、凶状持ちでもせがれはせがれだから、島吉のことを一度だって憎いと思ったことはありゃしねえ。それとおんなじで、せがれの死に水まで取ってくれた男だ、うれしいからって、だれが毛ぎらいなんかするもんか。おとっつぁんのほうから、ぜひ泊まっていってくれって、ほんとうは何度も口まで出かかって、そのたびにおとっつぁんは、はっとそのことばを飲みこむのにほねをおっていたんだ」
「どうして、どうしてさ　おとっつぁん」
「わからねえか、お品」
「わかんないわ」
「勝ち気なようでも、女は女だな。おとっつぁんもおまえも、この年月、深川の野郎にずいぶんいじめられてきた。それが喜太さんにわかってみろ。ああいう気性の男だから、一度は兄貴と立てた島吉のためにも、黙っちゃいられなかろう。おとっつぁんはそれがこわかった。万一、喜太さんに凶状をかさねさせるようなことにでもなると、銚子の親御さんや弟さんに嘆きの上の嘆きをかける。それがつらいから、おとっつぁんは深川の野郎のことはひとこともあの男の耳に入れなかった。せがれの兄弟分なら、おとっつぁんにもせがれ同然、なんでばくちうちをきらうもんか」
がくりとうなだれてしまう磯吉だ。
あっとお品は顔色をかえて、父親にそんな深い考えがあるとは知らず、うっかり深川の話を耳に入れてしまっている。
「どうしよう、おとっつぁん。あたし、たいへんなことをしちまった」
思わず父親のひざへすがりついていくお品だ。

えだけいいおいて出てきてしまった。
それからきょうまで、喜太郎は本所のほうの安旅籠に泊まって、島吉のほうの用さえかたづいてしまえば、こんどは江戸でなんとか堅気で身を立てたいと思って出てきたのだから、見物かたがたそれとなく働く口を見つけて歩いていた。が、江戸にこれという身もと引受人は持たないし、前身をあらわれればけんか凶状があるから、なかなか思うような口はない。恵比寿屋でもたずねてみたらという気になって、きょうはふらりとそっちへ足が向いたのだ。
からりと晴れたおだやかな日で、江戸の町はまだ三ガ日のうちのこと、家ごとに門松が立ち、しし舞いの笛太鼓、三河万歳の鼓の音、さては鳥追い女の門づけなど、なんとなくのどかなにぎわいの中をめでたそうな顔をした人たちがうきうきと出歩いて、いっこうにめでたくないのは自分ひとりのような気がする。
――おれは旅がらすだからな、旅がらすには

「ただいま」
店でお霜の声がする。いま帰ってきたらしい。
「亀さん、とうとう雪がちらついてきたわ。おお寒い」
その亀吉はどこにいるのか、急には返事をしない。

恵比寿屋金兵衛

明けて正月三日の昼すぎ、喜太郎はあらためて馬喰町の恵比寿屋金兵衛をたずねることにした。
ここへ行けば国もとの様子がわかるし、またなにかのたよりの末に、自分の無事だけは父親に知らせてもらえる。そう考えたから、喜太郎は江戸の土を踏んだその日に恵比寿屋をたずねたのだが、表から泊まり客としてはいっていったのがまちがいのもとで、身なりがあまりぱっとしないいなかのあんちゃんとでも見たか、少しの親切げもない番頭の応対に腹をたて、名ま

じさまももう安心だろう。ひょっとすると、嫁をもらって、孫ができているかもしれないな。
そんなことを考えると、なんとなく胸があたたかくなる。
「ごめんくだせえまし」
まえの失敗があるから、喜太郎はきょうは恵比寿屋の台所口のほうへまわった。夕がたのしたくにはまだ早い時刻なので、がらんとよくかたづいた広い台所には人けもなかったが、はいと答えて、女中がひとりすぐに出てきた。
「わしは暮れに一度たずねたことのある銚子の灘屋の喜太郎という者ですが、御当家のだんなにお目にかかりたくてあがりました。おいでになるでござえましょうか」
「ちょっとお待ちくださいよ」
一度奥へひっこんだ女中が、まもなく出てきて、
「どうぞ表のほうへお回りくださいましということでございます」

盆も正月もこない。ただひとりで黙って、一つ年を取るだけのことだ。
そういう旅がらすの寂しい正月を、二十で故郷を飛び出して、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五とことしで五度むかえて、いつの間にか二十五になってしまった喜太郎である。さすがにしみじみと親兄弟のいる銚子の空がなつかしい。三つ下だから、弟の万吉は二十二になったはずだ。
「にいちゃん、おれ、留守中はおまえにかわって、どんなにもおとっつぁんに親孝行する。そのかわり、三年、五年とたって、ほとぼりがさめたら、おとっつぁんの目の黒いうちに、にいちゃん、きっと家へ帰ってきておくれ」
日ごろは無口で、こいつ少し薄のろじゃないのかと見ていた弟が、別れるときそんなきっぱりとした口をきいて、ぽろぽろと涙をこぼしていた。
――あいつはおれより芯じまりだから、おや

という行き届いたあいさつだった。
あらためて表口のほうからはいっていくと、いまの女中が待っていて奥座敷へ案内してくれた。
すぐに出てきたのは物堅そうな六十近い老人で、
「はじめてお目にかかります。てまえが恵比寿屋金兵衛ですが、――銚子の灘屋さんの御子息だそうですね」
と、親しみ深くむかえてくれた。これも国のおやじさまの徳のおかげだろうと、旅で苦労してきたから、そのくらいの分別はやっと持てるようになった喜太郎だ。
「はい、喜太郎という親不孝者でございます」
「暮れには番頭がとんだ失礼をしたそうで、申しわけないことをしました。じつは、きょうみえるか、あすはたずねてきなさるかと、あれから毎日心配していたところで、よくたずねてきてくれました」
「そういわれると、なんだか面目ねえです。わしのことばが足りなかったのです」
ことばが足りなかったのではなくて、ついむかっときた根性まがりが悪いと、喜太郎は自分でよく承知している。
「喜太郎さん、わしはあなたのおやじさま灘屋さんとは、稼業の徳とでもいうか、十年二十年、いや、三十年からのおつきあいだ。こうなると自然稼業ばなれがしてきて、もう親戚も同様です。その喜兵衛さんからくれぐれもたのむといわれているから、正直にいいますが、あなたはことばが足りなかったですね。しかし、せっかく一度家へたずねてきてくれながら、あのときは番頭も悪いが、わしに会ってくれずに、さっさと出ていってしまうのはいけません。それではわしがあんまり頼まれがいのない男になります。わかってくれますかね」
こう親身に出られると、喜太郎は一言もない。
「申しわけござえません」

と、心からわびのことばが出た。
「いや、わかってくれればそれでいいのです。江戸にいる間はこの金兵衛を親がわりだと思って、これからはなんでも相談しなくてはいけません」
「はい。どうかよろしくお願いいたします」
そこへ五十がらみの、若いときはさぞ美人だったろうと思われる品のいいおかみさんが、屠蘇のしたくをして出てきて、
「よくいらっしゃいました。金兵衛の家内、種といいます」
といってあいさつをした。
「喜太郎というです。これからはお世話になることと思います」
「それはおたがいさまのこと――さあ、お正月ですから、お屠蘇を一つどうぞ」
「いただきます」
喜太郎は慎んで朱塗りの木杯をとって、酌をうけた。
「おっかさん、わしにもはじめてお正月がきたようです」
「おや、なぜです」
「さっきも歩きながら考えていたですが、はたちのとき故郷を出て五年、五回とも旅がらすのお正月でした。旅がらすには盆も正月もない、屠蘇一つ祝ってくれる人があるわけでなし、また一つ黙って年を取っただけだと、正直にいえば、寂しかったです」
「おきのどくにねえ。じゃ、ずっと旅から旅だったのですか」
「明けて去年までは、やけでやくざのまねをして歩いて、半年とおなじ土地におちついたことはなかったのです。去年の春、これじゃいけないと自分でも気がついて、やくざの足を洗い、それからはずっと仙台の塩釜の網元さんの家で働かせてもらっていました。こんど少し訳があって、江戸へ出てこなければならない用ができたんで、ついでにこれからは江戸で働いて、な

んとか身を立てたいと思っているです」
「ずいぶん苦労したんですね」
「親不孝したばちだから、しようがないです」
そのわりに少しも悪ずれのしていない喜太郎のさばさばとした顔をながめながら、
「男はこれからですからね、お国の親御さまが安心なさるように、どうかしっかりやってくださいね」
と、お種は同情せずにはいられないようだ。
「わし、しっかりやります」
「ばあさん、うちの不孝者はまだ帰らないかえ」
金兵衛が女房にきいた。
「なんですねえ、不孝者だなんて。金五郎ならまだ帰りませんよ」
「しようのないやつだな」
「でも、あなた、お正月ぐらいは――」
「そんな甘いことをいうからつけ上がるんです。あれのはお正月だけじゃない。二月も三月も四月もただふらふらと遊んで歩いてばかりいる。あんまりいい気になっていると、しまいには勘当しますからね」
「ほ、ほ、なんですか、あたしが勘当されるみたいですね」
お種は物静かにわらっていて、うけようとしない。
「喜太郎さん、家にものらむすこがひとりいましてな、金五郎といって、ことし二十三にもなるんだが、親の稼業は少しも見習おうとしないで、このおふくろが甘いもんだから、外遊びばかりしたがる。困ったやつです」
「耳が痛いです」
「そこへいくと、あなたの弟さん、万吉さんといいましたかね、あの人は感心なものです。もうちゃんと親の代理をつとめていなさる」
「それじゃ、おじさん、万吉のやつは無事でごぜえましょうか」
国の話が出たので、喜太郎は思わず居ずまいを直して、目を輝かす。

恵比寿屋金五郎

――こんなことなら、もっと早くたずねてくればよかった。
まもなく恵比寿屋を辞した喜太郎は、しみじみとそう思ったほど、それは居ごこちのいい家であった。心からもてなしてくれるのが、金兵衛老人もおふくろさまもけっしてうわっつらばかりでなく、いうことにも実意がこもっている。
弟の万吉は、去年の秋、はじめておやじさまの代理で江戸へ出てきて、半月ばかり泊まっていったそうで、そのまえに三度ほどおやじさまも稼業のことで出てきている。そのたびに、せがれはまだこちらへ顔を出さないだろうかと、それをまっさきにきいて、いやまだみえませんと答えると、生きていてくれるものやら死んだものやらと、世にも暗い顔をしていたという。
「無事で顔を見せたと知らせてあげたら、どんなに灘屋さんよろこぶことか、顔を見るようだ。それにつけても、喜太郎さん、このうえのよろこびにはな、これこれで今はこんなところにまじめに働いていますと、早く書いてあげられるようになってもらいたいものだね。なんなら、これという口が見つかるまで、当分うちにいてみてはどうだ。お客さまではなく、なにも修業だから、番頭で働いてもらう」
「そうしてはどうなんです、喜太郎さん」
おふくろさままでそばから口をそえてくれた。
が、あんまり親切にいわれると、うれしいにはうれしいが、もしやこの人たちに迷惑をかけるようなことがあってはと、妙にそれが不安で、よく考えてみますと断って別れてきた。その別れぎわに、
「喜太郎さん、おまえさんが国を飛び出した年の暮れに、灘屋さんが出てきなすってな、事のいきさつはもう書面できいて知ってはいたが、あらためてわしにおまえさんのことをくれぐれ

もたのみ、ちゃんと金まであずけていきなすった。金額のことは、わざと今ここではいいません。喜兵衛さんの心は、いつどんな姿でおまえさんが恵比寿屋へきても、その日から困らないようにというつもりなのだ。そのときもわしは灘屋さんの親心に泣かされたが、その後おまえさんがいくら待っても来なさらない、あんまり長くなっては、大金のことではあるし、わしは何度か送りかえそうとしました。なあに、恵比寿屋も男だから、あなたのせがれがいったずねてきても、食うに困らせるようなまねはしないからといいそえてやりましたが、そのたびに、迷惑でももうしばらく預かっておいてくれ、どうかその金が一日も早くせがれの役にたつようにと、こっちはそればかりを神仏に祈っているという返事だった。喜太郎さん、親心のありがたさを忘れてはいけませんよ。わかったかね。そんなわけで、今でもその金はわしが預かっています。これこれで入用だからと、訳さえわかればいつでも出してあげるから、遠慮なく取りにおいでなさい」

と、打ち明けてくれた。

ありがたいことだと思う。来たときと帰るときとでは、まったく心のゆたかさが違っている。

——さあ、おれは石にかじりついても働かなくちゃなんねえぞ。

喜太郎はどっかりと大地を踏んで歩いていたが、さて、その働く口をどこに見つけたものか、それにきょうはまだ三ガ日の内ではあり、これからどこで日を送ったものか、それさえ当てのない喜太郎だ。

いや、ぜひ寄ってみたい家が一軒、この近くにないことはない。柳橋の兼田で、その後お品はどうしているか、深川の鉄五郎のほうとの話はうまくついたかそれも気になる。が、堅気になるまでは敷居をまたいでくれるなといわれ、自分もまたがないとりっぱにいいきって出てきている。

「まあ、当分は遠慮しておくべ」

喜太郎は柳橋のほうを横目にかけながら、両国橋へかかった。

東両国の盛り場には、正月を当てこんで小屋掛けの興行物がどんどこどんどこにぎやかな鳴り物に景気をそえている。正月を着かざった人人の足が、ぞろぞろと橋をわたって、みんなそっちへ引かれていく。

「わあっ、けんかだあ」

橋をわたりきると、すぐそこの広場で急に人の流れがうずをまきだした。向こうに黒山のような人がきができている。

「喜太さん、見ないふりをするがいいぞ」

「うむ、見ねえとも。けんかなんてものはばか野郎のすることだもんな」

「そうだとも。そんなばか野郎のけんかに、ついロを出したがるやつはもっと大ばか野郎だ」

「けど、ついロさえ出さなければ、ちょっと見物するくらいなら、よくはねえかな。木戸銭がいるわけではねえでしょ」

喜太郎は自問自答しながら、やっぱり横を向いては通りかねた。人がきのうしろからひょいと現場をのぞいてみて、

——あれえ。

思わず目をみはる。けんかの主は、この暮れに、横山町の桐生屋の前で喜太郎がさんざんからかって逃げたお相撲勝なのだ。しかも、勝のほうには取り巻きがふたりついていて、そのひとりはたしかに兼田の船頭の亀吉だ。

相手はたったひとり、縞物の対をきちんと着た堅気らしいいい若だんなふうだが、これが大の字なりに威勢よくひっくりかえって、

「さあ殺せ」

をきめこんでいる。胸ははだかり、羽織は飛び、髷はみだれてどろだらけだ。堅気のくせに、はだかった胸にまっしろなさらしをぐるぐる巻きつけているのがのぞけるのは、この若だんな江戸っ子で、いささかやくざっ気があるのかも

しれない。
「野郎、起きねえか。不精なけんかをするない。起きねえとどてっ腹をけやぶるぞ」
お相撲勝は小出しに若だんなのわきっ腹をけりながらおどかしている。憎ていな太い足だ。
「かってにしやがれ。殺せたら殺してみろ、こうなりゃ、ぐうの音も出すんじゃねえや」
殺されるのにいばっているのだから、これが人足やごろつきならともかく、この若だんなはやけのやんぱちを通り越していると、喜太郎はなんだかおかしい。
「かわいそうに、あのお相撲勝の足で、がんと一つ胸でも踏んづけられたら、若だんなもおしまいだな」
「だれか早く恵比寿屋さんへ知らせてやらないかな。五両もつかませれば、このけんかはすぐにおさまるんだ」
おやと、喜太郎は思った。すると、この若だんなは恵比寿屋の金五郎らしい。
「ちょっとうかがいてえだが、あの若だんなは恵比寿屋金兵衛さんのせがれ金五郎さんというんかね」
その男に喜太郎はきいてみた。
「そうだよ、あんちゃん。おまえ知っているんなら、すぐ知らせてやるといい」
「それまで、若だんなの命、だいじょうぶだろうか」
「たぶんだいじょうぶだろう。相手は金が目あてなんだから、めったに殺しっこはない」
なるほど、そういう見方もあるだろうが、こんなにおおぜい見物人があっても、ひとりとして仲裁にはいろうという者がない。
「江戸の人間はみんな薄情だね。そんなことってる間に、とめにはいってやるほうが早いにな。ああ、わかった、とめるとふところが痛むからな」
「おや、この野郎、人に物をきいておいて、きいたふうなことをぬかすない」

その男も気の早いやつで、いきなりぼかりと喜太郎の頭をなぐりつけてきた。あっという間のすばやさだ。
「おまえさんとのけんかはあとにすべ」
喜太郎はにやりと笑ってみせておいて、おや、けんかがこっちへも飛び火したと、そのあたりのやじうまが乱れたつのをかき分け、さっさと人がきの中へ出ていった。
けんかはしないつもりだったが、その人の親御たちにいまうれしい親切をうけてきたばかりだから、これだけは見殺しにはできないのである。
「やあ、関取、明けましておめでとうございます」
喜太郎はわざと突拍子もない大きな声でいった。お相撲勝の注意を完全にこっちへ引きつけるためだ。
「おんや」
勝はこっちを向いて、むろんこのあいださんざっぱらからかわれているのだから、見忘れるはずはなく、たちまち血相が変わった。
「野郎、おぼえてるぞ」
「ありがてえことでございます。旧年中は横山町でえらくお世話になりましたが、ことしも関取はあいかわらず商売繁盛で、けっこうなこってすね」
「なにをぬかしやがる。いいとこでてめえとぶつかった。さあ、いっちょうこい。きょうこそ、その素っ首をねじ折ってくれるぞ」
あのときのくやしさが身にしみているとみえ、お相撲勝はもう若だんなのほうはそっちのけで、ゆだんなくじりじりと喜太郎のほうへ向かってきた。一度はげらげらと笑っていたやじうまどもも、勝のみるみる殺気だってきた凶悪な形相に、しいんと鳴りをしずめる。
「関取、おれは仲裁に出てきたんだ。そうおこるもんではねえ。初春そうそうけんかはやめにすべ」

「こんちくしょう、だれがそんな口車にのるもんか」

両手を腰のあたりで構えていまにもおどりかかりそうなけんまくに、つかまってはひとたまりもないから、

「あれえ、おっかねえ顔だね」

喜太郎はゆだんなくさがる。

「動くな、野郎」

「生きてるから、そうはいかねえ」

「うぬっ」

だっと出足早に、最初は猛烈なもろ手突きにぶつかってきた。

「あぶねえ」

ひらりと喜太郎は横っ飛びに逃げる。

「くそっ」

それを追って、こんどは張り手だ。

「あぶねえ」

喜太郎がまた飛びさがった。

「この野郎っ」

こんどこそと大手をひろげてひっつかみにかかったが、またしてもするりと手の下をくぐって逃げる。

「なかなかつかまらないな、関取」

「え、くそっ、こんちくしょう」

そのたびに人がきの輪が移動して、喜太郎はとうとう川っぷちへ出てしまった。

「あとがない。若い衆、あとがない」

気をもんでどなってくれるやじうまがいたが、それを承知でわざとここまで誘ってきた喜太郎だ。

「関取、くたびれたかね」

からかうようににやりと笑ってみせると、一度つかまえてしまえばもうこっちのものだとじれきっているやつだから、

「よいしょう」

またしても血眼になって引っ組みにきた。

「どっこい」

敏捷な喜太郎がさっとあざやかに右へ飛びぬけると、お相撲勝のすぐ目の前は満々と潮をたたえた大川だ。さすがにあわてて、

「おっとと――」

と両手を泳がせながら、あやうく踏みとまろうとするところを、横へ飛んだ喜太郎がくるりと半身に立ち直るなり、

「よいしょう」

右手で勝の左肩のあたりをぴしゃりと一つ力いっぱいひっぱたいた。ひとたまりもない。

「わあっ、あぶねえ」

どぶんとお相撲勝は自分から大川へ飛びこんで、大きなずうたいだからおびただしい水しぶきをはね飛ばしていた。やじうまどもがわあっと手をたたいてよろこんでいる。

若だんな育ち

喜太郎はとっさにゆだんなくあたりを見まわしたが、勝についていたやくざふたりは、どこへ逃げたか、もうそこいらには見当たらなかった。向こうに若だんなが、まだ大の字なりにひっくりかえってふてくされているようだ。ひとりで起きあがるのは、なんとなくてれるのだろう。

「恵比寿屋の若だんな、ひとりでは起きられないかね」

喜太郎がそばへ行って、わらいながら声をかけると、

「なにをっ」

金五郎はむくりと起き直った。

「だれだ、てめえは――」

「あれえ、威勢がいいんだね。おれは銚子の喜太郎です。いま若だんなの親御さまたちにお目にかかってきたばかりだ」

「なあんだ、喜太郎ってのはおまえか」

急にきょとんとした顔をして、それでも人前があるから口だけは荒っぽい。

「さあ、もう立ちなせえ」

「野郎はどうした」

「さあ、そのへんで一杯やろう。勝ちいくさだ、いっしょに行きねえ」

と、さっさと両国橋のほうへ歩きだす。まったく、いい気なものだ。両国橋を西へわたってしまうと、もうだれも今のけんかを見ていた者はいなくなるから、みんな他人の顔ばかりである。

「喜太さん、けんかのことは、おやじにもおふくろにも、ないしょにたのむよ」

ひと足先を歩いていた金五郎が、ひょいと肩をならべてきていった。

「それはわかっているが、なんで若だんな、あんな化け物とけんかなんかしたんだね」

「野郎のほうからぶつかってきたんだ。なあに、一両もそっとつかませてやれば、野郎のほうからおせじをつかってくるのは知っていたんだが、ついているやつが気に入らなかったんでね、やい、もっと目をよくあいて歩けと、つい啖呵をきってしまったのさ」

「お相撲勝かね。ひとりで大川へ飛びこんで行水をつかっているだ」

「ふうむ」

「けんかはもうやめにするから、若だんなによろしくっていっていたです」

「そうか。案外いくじのねえ野郎だな。手を貸してくんな」

これはたいへんなみえ坊だと、喜太郎はあきれながら手を貸して、ぐいと引き起こしてやった。

「どこもけがしなかったかね」

着物についたどろを払ってやりながらきくと、

「冗談いうねえ。寝ていてけがをするほど、おれはまだもうろくはしねえ」

と、いばって衣紋をつくろっている。

「けんかは寝ながらするほうが楽だね」

ちょいとからかってやると、聞こえないふりをし、

「そういえば、ふたりばかり子分がついていたようだね」

「うむ、あの色の黒いたぬきみたいなつらをしたやつは、柳橋の兼田って船宿の船頭でね、亀ってやつなんだが、野郎の前じゃ絶対に弱みを見せたくないわけがあるんだ」

兼田の名が出たので、はあてなと、喜太郎はひそかに目をみはる。

「その亀ってたぬきがどうかしたんかね」

「いや、亀なんかどうだっていいんだが、兼田にお品って娘がいるんだ。これからおつな仲になろうと思っているのに、亀の口から変なことを耳に入れたくないやね。そのお品ってのがまたおそろしく勝ち気ときているんだ」

これはおどろき桃の木である。

「つまり、若だんなはそのお品ちゃんを張っているわけか」

「まあ、ちょいと」

「お品ちゃんのほうでも、まんざらでもないんだね」

「まあ、ちょいとね」

「若だんなはおれをこれからその船宿へつれていくんかね」

柳橋のほうへ曲がっていくところを見ると、どうやらそうらしいと見た。

「変に取りっこなしさ。おれはなにもお品を見せびらかす気はないんだ。喜太さんとは初対面だが、おやじから話によく聞いていた。変なところでお目にぶらさがっちまって、これもなにか深い縁があるからだろうと、他人のような気がしないんだ。だから、近づきのまねごとをしようってのが目的なんで、お品のことはついでに出た話なんだ。けど、喜太さん、もしそんなとこはいやだっていうんなら、万八へでも八百膳へでも案内するよ」

金五郎はさばさばとそんなことをいいだす。ひとりむすこでわがままそうだが、なかなか愛すべき点もありそうだ。

「なあに、おれは兼田でいいです、若だんなの張っている娘っ子ってのを見てやるべ」

その実、金五郎の客でまたぐ敷居ならお品にも文句はないだろう。ぜひ、その後の様子が聞いておきたい喜太郎なのだ。

「しかし、さすがに喜太さんは強いなあ、感心しちまった」

「いや、それほどでもないです」

「そうじゃない。お相撲勝をあんなふうに手玉にとるのはたいしたもんだ」

「あれえ、若だんな、寝ながら見物していたんかね」

「うむ。正直にいうと、うっかり起きるとまたてつだわなくちゃならない。といって、こそこそ逃げるのはしゃくだし、ひっくりかえっているよりしかたがなかったのさ」

「あは、は、もうあんな化け物とはけんかはしねえこったね」

柳橋をわたって左へ折れ、見おぼえの兼田の前には門松がない。金五郎は油障子をがらりとあけて、威勢よくひと足先に土間へはいっていった。

「おや、いらっしゃいまし」

おちついたお品の声がする。

「きょうは銚子の友だちをひとりつれてきたんだ。二階、あいてるか、お品ちゃん」

若だんなの声のほうがよっぽどはずんでいる。

「あいてますわ」

「そいつはありがてえ。おい、喜太公、はいれよ。いつまでそんなとこにぐずぐずしてるんだ」

好きな娘っ子の前だと、喜太さんがいきなり喜太公に変わっている。正直すぎる若だんなだと苦笑しながら、じつはこっちもお品との約束のてまえ、わざと呼びこまれるのを待っていたずるい喜太郎なのだから、のっそり土間へはいってうしろの戸をしめた。金五郎はもう炉ばたへ上がりこんですわり、そのさし向かいのところにすわっているお品が、びっくりしてこっちを見ている。みずみずしいつぶし島田に結って、少し顔はきついが、あいかわらず一枚絵から抜け出したような娘ぶりだ。

「わし銚子の喜太公で、きょうは恵比寿屋の若だんなのお供で敷居をまたぎました。悪く思わねえでもらいます」

喜太郎は上がりかまちのところへ行って、ていねいにお品のほうへ頭をさげた。

「なにをいってるんだ。寝言をいってねえで上がんな」

わきから金五郎が引き取って、

「お品ちゃん、この男は銚子の網元のせがれでね、家におとなしくしてれば灘屋の若だんなでいばっていられるものを、見かけによらねえ道楽者で、とうとうおやじに勘当されちまったといういわくつきのしろものなんだ。よろしくたのむぜ」

と、たいへんな引き合わせ方をする。

「そうお。この人、喜太公っていうの」

なにが気に入らなかったか、お品がつんと澄まして金五郎にきく。

「うむ、喜太郎だから喜太公さ。そうだな、喜太公」

「そのとおりでござえます」

「喜太公って呼んでもいいですか。いいんですね、若だんな」

「ああ、いいとも。——なあ、喜太公」

「そのとおりでござえます」

喜太郎はまだ土間に突ったったまま、にやにや笑っている。

「喜太さん、じゃあんた、恵比寿屋さんの家の番頭さんにしてもらったの」

「いいえ、それはこれからの話でござえます」

「でも、してもらえることはたしかなんでしょう」

「それは若だんなにきいてくだせえまし」

「若だんな、この人たしかにお宅の番頭さんにしてくださいますわね」
お品が金五郎のほうへ念を押す。
「うむ、そりゃ当人がなりたけりゃしてやってもいいさ」
おほんと長兵衛をきめこむように、そっくりかえってみせる若だんなだ。
「ありがとうございます。若だんな、あたしからもお願いいたしますから、どうぞその人をお宅の番頭さんにしてあげてくださいまし」
お品が急にそこへ両手をついておじぎをした。
「あれえ、お品ちゃん、変なことをいうな」
それにはかまわず、お品は喜太郎のほうを向いて、
「喜太さん、よかったわね、堅気になれて。もうだれに遠慮することもないわ。さあ、早くお上がりなさいってば。あたし、どんなに心配していたかしれやしない」
これはおかしい、この気の強い娘が、人前でつとそで口を目がしらへ持っていくのだ。そのお品の心意気が、じいんと清水のように喜太郎の胸へもしみこんでいく

むじゃきな仲

「お品さん、おやじさまの姿が見えねえようでござえますね」
喜太郎はまだ座敷へあがろうとはせずにきいてみた。去年の暮れきたとき、堅気にならないうちは敷居をまたいでくれるなといわれている。自分ではもうやくざはやめた気でいるが、黙ってあがって、あとで磯吉老人にいやな顔はされたくない。あがるまえに、ひとことあいさつをしておきたいと思ったからだ。
「あいにく、おとっつぁん出かけています。今までいた船頭に暇を出したもんだから」
「ああ、あの亀というやつね。あの野郎はあんまり感心しなかった。そうそう、そういえば、よけいなこったが、深川のほうはうまくかたがついたかね」
「ええ。まあ、ついたような、つかないような」
お品はあいまいに口をにごして、
「とにかく、あがったらどうなんです」
と、にらむような目をする。
「あとでおやじさまにしかられると困ると思ってね」
「だって、きょうはあんた若だんなのお供じゃありませんか。ねえ、若だんな」
お品はあらためて炉ばたの金五郎のほうへ同意をもとめた。
「やい、喜太公」
さっきからじろじろとふたりを見くらべていた金五郎は、やっとこいつおかしいと気がついたのだろう、ぐいとこっちへ開き直った。
「なんです、若だんな」
「若だんなじゃねえ、そらっとぼけやがって。おまえ、お品ちゃんとただの仲じゃなさそうじゃねえか」
「そ、それは困るだ。そんなこといっちゃお品さんが迷惑するです」
「いいのよ、喜太さん。あたしべつに迷惑なんかしないけど、——若だんな、この人はね、去年の暮れ、死んだにいさんの遺言と形見をとどけてくれたんです」
お品が中へはいって、いそいで言いわけをしてくれる。
「にいさんて、島さんのことか」
「ええ」
「じゃ、島さん死んだのか」
「ええ、去年の十一月、仙台の塩釜で病気で死んだんですって。そのとき、この人が死に水を取ってくれたんですって」
「ふうむ。そいつは知らなかったな。死んだのか、島さんは」
さすがに金五郎はぽかんとした顔だ。
「喜太さんはにいさんと兄弟分だったといいま

すから、うちには深い縁がある人なんです」
「そういえばそうだな」
金五郎はもう一度ふたりの顔を見くらべて、
「それでなにか、お品ちゃんは、つまり喜太公が好きになったってえわけか」
と、そこをはっきりさせておかなければ、どうにも気がすまないらしい。
「そんなこと、女に面と向かってきく人がありますか。いやだな、若だんなは」
つんとそっぽを向きながら、お品のほおへほんのり血の気がさしてきたのは、口でいうより、よっぽど深いものがあるようだ。
「こいつはがっかりだったな」
ほんとうにがっかりしたような顔をするのだから、若だんなも正直である。
「あら、なにをがっかりしたんです」
「まあ、いいや。こう見えてもおれは江戸っ子だからな——やい、喜太公、おれはきれいさっぱりあきらめたぜ。つまらねえことになりやがった」
「あいすんませんでござえます」
「なにをぬかしやがる。いいから上がれよ——お品ちゃん、早いとこ一本つけてくんな。ここでいいや。あっさりやっつけて、景気なおしに辰巳へでもくりこもう」
金五郎はそんな負け惜しみをいう。
「そういわないで、お正月なんですもの、ゆっくりしていってくださいましな」
お品が澄ました顔をしてからかう。
「と、それはお品ちゃん、喜太公にいうことばなんだろう」
「うれしいわ、若だんなは察しがいいんですもの」
「おだてるねえ」
腹ん中ではやっぱりおもしろくないらしい。
「お品さん、線香をあげさせてもらってもいいかね」
草履をぬいだ喜太郎は、すわるまえにきいた。

「どうぞ——」
お品が先に立って、茶の間のふすまをあけてくれる。
仏壇の前に立つと、花も水も新しく、みかんの盛り物にそえて焼いたもちが供えてあるのも、せつない親子の心づくしがしのばれて哀れ深い。線香をあげて、鈴を鳴らし、目をつむって合掌すると、島吉の顔がまだはっきりとまぶたに焼きついている。
——あんなに恋しがっていたおまえが、とうとう二度と江戸の正月に会えずにしまったのに、用でもねえおれが、こんなところへ来てふらふらしている。かわいそうに、どうしておまえはあんなにあっけなく死んじまったのかなあ。
それを思うと、やっぱり目がしらがじいんと熱くなってくる喜太郎だ。
「おい、いいかげんにかわれよ。おれに恥ばかりかかせやがる」
うしろから小声でいって、金五郎がこづく。
そうされてみて、ああそうだっけと気がつき、まの悪い思いをしたのだろう、それでもこうして立ってくるだけ、憎めない若だんなだ。
「ごめんなせえまし」
喜太郎は若だんなに場所をゆずって、店の炉ばたへ帰ってきた。
台所からちょうしを運んできたお品が、横目で仏壇のほうを見てくすりとわらう。
「若だんなったら、ほんとにむじゃきなんだから」
「おやじさまは稼業で出たんかね」
「ええ。亀戸の天神さまへおまいりする人がきたもんだから」
「寒いのに、年寄りがたいへんだな。地理がわかれば、おれ当分手だすけしてやってもいいんだが」
「ほんとう、喜太さん」
思わずうれしい手がひざにかかったとたん、ちんちんと仏壇の鈴がやけに鳴った。

「あら、若だんな、お鈴をこわさないでくださいまし」

くるりとそっちを向くと、ちゃんと背中が男の肩へしなだれかかったかっこうになっているんだから、金五郎は助からない。

「なにをぬかしやがる。兄貴が死んでまだ百カ日もたたねえのに、もう男にべたついてやがる。仏がおこりだすなああたりまえだ」

「そんなことないわ。喜太さんなら、にいさん安心してくれると思うんだけど」

「あれだ。当節は生娘のほうがあつかましくできているんだってね」

「ええ、あたしはつい一本気なもんですから」

「いったな、こいつ」

金五郎は、ずかずかと炉ばたへもどって、喜太郎とさしむかいにすわり、

「お品ちゃん、ことわっとくが、喜太公は船頭にゃしねえよ。おれんとこの番頭のほうが先口なんだから、そのつもりでいてもらいてえ。なあ、喜太公」

と、意地の悪い顔をする。

「ようござんすわ。そのかわり、若だんな、この人ふしあわせな人なんだから、いたわってやってくださいましね」

「いいとも、毎日いたわって、こき使ってやらあ」

「どうして若だんなはそうつむじ曲がりにできているのかしら」

「曲がってるなあおればかりじゃねえ。どうしてお品ちゃんのからだはそう喜太のほうへばかり曲がりたがるんだろうな」

「あら、ごめんなさい。ついあたしむじゃきなもんですから——はい、若だんな、お酌」

銅壺からちょうしをとって、ふきんでぬぐい、さすがにお品は金五郎のほうへ先に杯をすすめた。

「なるほど、お酌だけはおれのほうが先か。そうだろうな、勘定はおれが払うんだからな」

「いいえ、お毒味をしていただこうと思って」

「おこるぜ、おめえがそんなにあばずれだとは、今の今までおれも気がつかなかった」

「若だんな、あわててお嫁にしなくてようございましたね」

喜太郎がわきからにやにやわらいだす。

がらりと入り口の油障子があいて、

「ごめんよ」

どかどかとはいってきたやつがある。ちょうどそっちへ背を向けてすわっている喜太郎は、足音で、三人づれだな、ただの客じゃないと読みながら、わざとそっちには向かなかった。けんか凶状があるから、なるべくやくざから顔をそむける、そんな癖がいつの間にかついている喜太郎だった。

ほえる山犬

「あっ、いやなやつが来たわ」

うきうきしていたお品の顔から、急に血の気がひいたようだったが、それでもしゃっきりと上がりかまちのほうへ立っていく。

「おいでなさいまし」

「ごめんよ。おまえさんはここの娘さんのお品さんだね」

「はい」

「おれは深川の鉄五郎の使いできた石巻の佐助という者だが、おとっつぁんいなさるかね」

おやと喜太郎は思った。石巻の佐助なら、去年の夏、自分のやっかいになっていた塩釜の湊屋西五郎親分のところへふいに切り込みをかけて、湊屋のなわ張りを横取りしようとしたやつだ。そのときは死んだ島吉といっしょに、佐助一家をむかえ討って、思いきりあばれまわってやったが、あの切りこみに失敗して佐助はそのまま土地を売っている。すると、流れ流れて、今は深川の鉄五郎のところへ身を寄せているのだろうか。

「おとっつぁんは留守ですけれど、なんか御用

「はい。それはあたしも陰で聞いていました」
「その節、権太は、そんな虫のいいことはたぶん親分が承知しないだろうと思うが、おれは使いのことだから、一度帰って話してみよう、追って返事をするからといって引き取った。知っていなさるだろうね」
「知っています」
「きょうはおれがその返事にきたんだ。鉄五郎がいうには、賭場の貸借は証文がないかわりに首がかかっている。そのまま香典にはできない。香典は五十両うけとってからの話で、松がとれたら翌日、残りの五十両うけとりに行くから、そう思ってくれ、もしそのとき五十両こしらえないと、娘をつれていって金に替える。前もってことわっておくから、そのときになってじたばたしないようにと、こういう返事だ。おとっつぁんが帰ったら、きっと耳へ入れといてもらいたいな」
お品はじっとうつむいたまま答えない。

でしょうか」
「うむ、正月そうそうあんまりめでたくない使いで出向いてきたんだが、それじゃおとっつぁんが帰ってきたらことづけをしといてもらおう。明けて去年の暮れの三十日に、この権太という身内が鉄五郎の名代でお宅へきておとっつぁんに会った。三年ごしの貸し金百両のうち、五十両はすんだが、まだ五十両残っている、それを取りたてにきたんだが、そのときおとっつぁんがいうには、金を借りた本人の島吉は旅先で死んで、こんど位牌になって帰ってきた、もとはといえばせがれが賭場で借りた金だそうで、親の知らないことだ。ごらんのとおり、うちは堅気でやくざなせがれは勘当してあった。こんど位牌になってかえってきたから、仏になればもう罪はない、そう思って家へ入れてやったんで、そんなわけだから、残りの五十両は死んだせがれへの香典だと思って棒引きにしてくれまいか、こういう頼みだったそうだ」
「わかったろうね、お品さん。ほんとうなら、もう約束の期限の切れている金なんだ、こんなことわりをいうまでもなく、黙っておまえさんをつれていっても文句はないはずなんだが、まあ筋だけは通しておくがいいと、おれが鉄五郎親分にすすめて、使いに立ったってわけだ。この八日の暮れ六ツだから、忘れずにおとっつぁんの耳へ入れといてもらいてえ」
佐助はそんな恩きせがましいこともいう。
ばかを相手にしたってしようがないと思いながら、喜太郎はとうとうがまんできなくなってきた。
「石巻の親分さん、お久しぶりでございます」
くるりとそっちを向いてあいさつをする。
「あっ、てめえは銚子の喜太郎――」
思いがけなかったのだろう、佐助はぎょっとしたようにひと足さがって、長脇差の柄に手をかけた。
「親分さん、おぼえていてくれたかね」
喜太郎がにやりとわらってみせると、佐助はこんな若僧を相手にあまりにもおおげさにぎょっとしたのが、みんなのてまえ、我ながらいささかてれたのだろう。
「そうか、わかった。てめえがここへ島吉の位牌をしょってきやがったんだな」
と、柄にかけた手をそろりと放す。
「へえ、お察しのとおりでございます。おれはもうやくざはやめていますが、島吉とは兄弟分になっていましてね、ほんとに惜しい男を死なせてしまいました」
「ふうむ。そんな殊勝らしいことをぬかしやがって、てめえのお目あてはこのお品だろう」
佐助は毒々しくせせらわらう。
「どういたしまして――。おれは鉄五郎親分や親分さんなんかと違って、人がいいもんだから、とてもそんなあくどいまねはできねえです」
「なんだと、この野郎」
「気にさわったらごめんなせえまし。親分さん

は、島吉兄貴がなんで鉄五郎親分の子分衆をたたっ切って江戸を売るようになったか、そのわけを聞いていなさるでしょうね」

相手は佐助と、鉄五郎身内の権太と、もうひとりは佐助の子分で、佐助より強いといわれている向こう傷の定吉というやつ、すごい命知らず三人を向こうにまわして、喜太郎は平気で話をすすめていく。

さすがの金五郎も、きかない気のお品も、黙って息をのんでいるばかりだ。

「それを聞いていりゃ、どうだっていうんだ」

「聞いていれば、石巻の親分さんともあろう人が、こんなみっともない使いには来なかったと、おれは思うです」

「やいやい、田吾作のくせに大きな口をたたきやがると承知しねえぞ。いってみろ、なにがみっともねえ使いなんだ」

権太がそばから山犬のような目を光らせてほえついてくる。

「おまえさんは鉄五郎親分の子分だから、そのときのことをよく知っているだろう。あの晩、島吉兄貴は目と出て、洲崎の賭場を出たときはふところに七十両ばかり持っていた。さあたいへんだと兄貴は心配した。ここのおやじさまは大のばくちぎらいで、うっかりそんな大金を持ってかえると、かくし場に困る。といって捨てるのはもったいない話だし、あのときぐらい困ったことはないと、おれは兄貴からわらい話に聞いているです」

「日が短えんだ、わらい話なんかあとにしろ」

「なあに、すぐにこわい話になるです」

「なんだと――」

「洲崎の土手へかかると、いきなり切って出たやつがある。しかも三人だ。石巻の親分さんはよく知っていなさるだろうが、島吉兄貴は強いからね、うぬらぬすっとかといいながら、長脇差をふりまわして、ふたりをたたっ切ったら、ひとりはあわてて逃げてしまった。かぶり物を

取って、切ったやつの顔を見ると、それがぬすっとではなくて、鉄五郎親分の子分だった」

「うそをつきやがれ。てめえが持ちつけねえ金なんか持っていたから、島吉はぬすっとまちがえたんで、あの三人はまえから島吉といざこざがあった、その遺恨ばらしに洲崎の土手で待ち伏せしていたんだ」

「はあてね、たしかにそれに相違ごぜえませんね」

喜太郎がとぼけた顔をして念を押す。

「あたりめえよ。こう見えても深川の八百鉄一家だ、だれが人のふところなんかねらうもんか」

「そんなら、権太さん、おうかがいしますが、七十両からの大金を賭場で勝って帰った島吉兄貴が、どうしてその晩鉄五郎親分から百両借りるわけがあるんでごぜえましょうね」

「な、なにを――」

権太はあっと目をむいて、思わずことばに詰まったようだ。

「賭けの貸借は証文がいらないかわりに、期日にかえせないと首を持っていかれても文句はいえない。そんなあぶない金を七十両でさえどこへかくそうかと心配している島吉兄貴が、賭場から借りて帰るはずはない」

「なにをぬかしやがる。島吉が百両借りたのは、そのまえのときよ。おれはちゃんと知っているんだ」

「へえ、そのまえに百両借りがあるのに、七十両勝ったとき、よく黙ってそれをわたしましたね。どうしてそのとき差っ引かなかったんです」

「こんちくしょう、じゃてめえは、うちの親分をかたりだといいてえんだな」

「そんなことは、おれがここでいわなくたって、いまの権太さんのことばを証拠に、お白州へ訴えて出れば、お奉行さまがちゃんと白い黒いをつけてくれるです」

ことばはおだやかだが、きっぱりといいきる喜太郎の筋のとおった話には千鈞の重みがあ

る。
「さあ、承知できねえ。よくも親分をかたりにしやがったな。野郎、表へ出ろ」
権太はまっさおになってわめきだした。
「静かにしてもらいますべ。おれはつんぼではねえから、あたりまえの声でもよく話はわかるです」
「文句をいわずに、表へ出ろ。出ねえとここでたたっ切るぞ」
逆上しているから、いまにも引き抜きかねない勢いだ。
なんにも武器を持っていない喜太郎だから、お品がはっとして、思わず中腰になる。
「まあ、あわてることはねえだ。――石巻の親分さん」
喜太郎はおちついて佐助のほうを向く。
「聞いてのとおりのいきさつで、島吉兄貴の百両の借りというのは、ここのおやじさまのまったく知らない話だ。だいいち、賭場の貸借は当人どうしのことで、親兄弟にまで迷惑をかける性質のものじゃない。子の借金を親が払うとか、親の借金を子が払うとか、それは証文をとってやる金貸しのやることで、親分衆のすることじゃないと思う。だからこそ、賭場の貸借は証文がないかわりに首がかかる。その当人の島吉兄貴は、もう仏になっているんだ。首をとろうったって、死んだ者の首はとれない。どんなもんでござえましょうな、ここのおやじさまもせがれの首がかわいいと思えばこそ、苦しい思いをして、五十両だけはかえしたんだ。残りの五十両、これは島吉への香典として棒引きにしてくれるように、親分さんからいちおう鉄五郎親分に話してみてもらえますまいかね」
さすがに佐助も返事に詰まって、ちらっと傷定の顔を見る。
「親分、きょうはおとなしく引きあげやしょう」
傷定は佐助に目くばせして、
「おい、喜太郎、てめえの言いぶんはたしかに鉄五郎親分の耳に入れておく。だが、応か否かまでは引きうけねえから、そのつもりでいてもらおう」
と、念を押す。
「それでけっこうでござえます」
「そこで、それとは別に、てめえには塩釜以来のけんかの遺恨が残っている。いずれけんか状をつけるから、そのときはきっと出てこいよ」
「おれはもうやくざの足は洗ったつもりだが、それをいっても承知するおまえさんがたじゃなさそうだ。いかにも承知したです」
「野郎っ」
すきを見て、権太がだっと抜き打ちに切りつけてきた。
「あれえ、喜太さん」
と、金切り声をあげたのはお品で、ひらりと身をかわした喜太郎は、空を切った相手のきき腕をひっつかむなり、たちまち権太を上がりかまちへねじ伏せていた。
「なにをするんだ」
「うぬっ、こんちくしょう」
「もがいてもだめだ。これ、よく聞いておけ。てめえはたいせつな生き証人だから、命だけは助けて帰してやる。家へ帰ったら鉄五郎に、あんまりあこぎなまねをすると、善人にはお奉行さまという味方がある、こっちから恐れながらと訴え出るからそのつもりでいろとな。わかったか」
「なにをぬかしやがる――。いてえっ」
「痛ければわかったとぬかせ」
喜太郎は遠慮なく背中を押さえつけているひざがしらへぐいと力を入れる。
「いてえっ、いてえっ」
目を血走らせてじっと見ていた佐助と傷定は、ふたりでかかってもだめだと見たのだろう、黙ってすっと表へ出ていってしまった。
「野郎、まだわかったとはいわねえか」
「いてえ、こんちくしょう――わかったよ」

父親の腹

七草正月は朝からどんよりとした雪もよいの空だったが、昼すぎからとうとう白いものがちらつきだして、日暮れになっても降りつのるばかりだった。

浅草橋から柳橋へかけて、平右衛門町河岸に軒をならべている船宿も、こんな日にはもう客がないと見て大戸をおろしてしまった家もあるが、お品はいつものとおり門口の兼田の掛け行燈に灯を入れて、店の炉ばたへかえり、ふろからもどってくる父磯吉を待っていた。

あの三日の日以来、喜太郎と金五郎も、一度も顔を見せてくれない。

——やっぱり、あんなことをいわなかったほうがよかったのかしら。

お品は妙に寂しい。

あの日、喜太郎が深川の悪党どもを追いかえしてくれたあとで、ついうっかり、おとっつぁんが喜太さんを家へ泊めなかったのは、やくざぎらいだからというわけではない、深川の八百鉄との行きがかりがすまない間は、いつきょうのようなことが起こるかしれない。あの気性だから、もし喜太さんにまたけんかでもさせるようなことがあると銚子の親御さまに申しわけないからだと、父親のほんとうの気持ちを話してしまった。

喜太郎は急にしいんとした顔をして、

「すまねえことです。おれもう二度とけんかはしません。お品さん、きょうのこと、おとっつぁんが帰ってきても、黙っていてくれよな」

かたくそういいおいて、金五郎若だんなといっしょに帰ってしまった。

口ぐめはされていたけれど、あの日のことは父親の耳に入れておかないわけにはいかない。夕がたもどってきた父に、ありのままを話すと、

「そうか。しようがないな」

と、暗い顔をして、ただひとこといったきりだった。

おとっつぁんはしようがないなですましていられるけれど、あたしと喜太さんの仲はどうなるんだろうと、お品は毎日胸が重かった。

あきらめろったって、もうそんなわけにはいきやしない。あたしは喜太さんが死ぬほど好きなんだし、喜太さんだってあたしがきらいじゃないことは、そのロのきき方、あたしを見るときの目でちゃんとわかっている。

いちばんいいのは、喜太さんに家へきて船頭になってもらうことだ。そうすれば、おとっつぁんも助かるし、あたしはきっといいおかみさんになってみせるから、喜太さんはきっと堅気になれるのだ。

それをおとっつぁんが遠慮しているのは、八百鉄一家のことがあるからだろう。

それならなおさらのことだと思う。このあいだ石巻の佐助たちがいっていた八日の暮れ六ツ

「そうか。かんべんしてやるから、お白州へ出るまで命をたいせつにしろよ」

喜太郎は相手を放して、すっとあとへさがる。ぱっと門口まで逃げた権太は、そこで立ち止まって、

「やい、おぼえていろ」

すごい目をして、悪態をついて、さっとふたりのあとを追っていった。

「あれえ、あけっぱなしで行きやがった」

喜太郎は土間へおりていって、静かに油障子をしめる。

ひょいとお品のほうを見ると、ぼかんとそこに立って、燃えるような目がこっちを見ながら半分泣きべそをかいている。

——正月だっていうのになあ。

とうとうまたけんかをしてしまった。喜太郎は急にしいんと寂しくなってきた。

しし舞いの笛太鼓がこの町内へはいってきたらしく、にぎやかに近づいてくる。

というのは、もうあすのことだ。ほんとうに、あんなあばれ者たちに踏みこまれたら、おとっつぁんひとりでどうすることができるだろう。

喜太さんは、善人にはお奉行さまがついているから心配ないといっていたけれど、お奉行さまの前へ出るまえに、あたしがさらわれて、二度と取りかえしのつかないからだにされてしまったら、なにもかもおしまいになってしまうじゃないか。

——いやだ、あたし、そんな。いっそ、おとっつぁんに黙って、今のうちに喜太さんをたのんできちまおうかしら。

喜太さんも喜太さんだと思う。そんなに遠いところにいるわけじゃなし、つい目と鼻の間の馬喰町に、あの日から恵比寿屋の番頭さんになっているのだ。

まさかお品は自分が見に行くわけにもいかないから、きのうも女中のお霜に見に行ってもらったら、この寒空にせっせと店の腰高障子を洗わせられていたという。

「若だんなはなにをしていたの、お霜」

お品はかちんときたので、お霜にきいてみた。

「憎らしいってないんですよ、ねえさん。金五郎のやつはいつものぞろりとした身なりで、ふところ手なんかして、喜太公、まだすまねえのか、のろまだなあ、おれはさっきからじりじりして待っているんだぞ、早くかたづけろって、おこっているんです。そのくらいなら、自分もてつだってやればいいのにねえ」

「それで、喜太さん、なんていった」

「まっかな手をして、ぞうきんをしぼりながら、若だんな、そういそがせてもだめだ、これなかなかおしまいにならねえから、待ち遠しかったら先へ行っておくんなさい。——そうはいかねえ、恵比寿屋の若だんなが供をつれずにひとりで歩けるかって、こうなんですよ」

「ふうんだ、たかが旅籠屋のせがれのくせに、なにさまになった気でいるんだろう」

「あたしも、あんまりしゃくにさわるから、若だんな、こんにちはっていってやると、やあ、お霜か、どこへ行くんだ。お使いの帰りです。うそをつけ、お品にたのまれて、この男の様子を見にきたんだろう、帰ったらそういってくんな、喜太公はのろまだから、おれが早く一人まえになれるようにみっちり仕込んでいる、当分はどこへも出さねえとな、とこうなんです」

「おまえ、それで黙って帰ってきたの」

「黙ってなんか帰るもんですか。ええ、ええ、どうぞみっちり仕込んでやってくださいまし、若だんなのお仕込みなら、さぞりっぱな道楽者ができあがるでしょうっていってやりました」

「なんだか変ねえ」

お品はがっかりしてしまった。どうやら、お霜はふたりにからかわれて帰ってきたらしいからである。

それにしても、喜太さんがほんとうにあたしのことを心配してくれるんなら、今夜あたりそっと様子を見にきてくれるぐらいの実意があってもいいはずだとお品は思うのだ。

——今もしあの人がきてくれたら、ちょうどおとっつぁんは留守だし、お霜はあたしの味方だからかまやしない。もと亀のいた二階へそっとかくしておいて、おとっつぁんはお酒をのめばすぐ寝てしまうから、あたしはそれからお酒のしたくをして、あの人のところへ忍んでいく。

たのしいなあと、お品は考えただけでも胸がわくわくしてくる。

「寒かった、あんた」

「寒かったです」

「ごめんなさいね」

「しようがねえです」

「おこってるの、あんた」

あたしはいっしょうけんめいあの人のきげんをとらなければならない。

「ああ、わかった。あんたはあたしがこんなまねをしたんで、いたずら娘だと思ってるのね。

おこるわよ、あたし」
それでもあの人の心は解けないかもしれない。
「いやだわ、疑っちゃ。あたしはこの年になるまで、一度だって男なんか恋しいと思ったことはありゃしません。それだのに、あんただけは好きでたまらない、どうしてかしら。こんなことするのも、いたずらのつもりじゃないわ。あたしはもうあんたのおかみさんになったつもりなんだわ」
「ほんとうかね」
「ほんとうよ。あたしはもう気がちがいそうにあんたが好き」
あの人はきっとあたしを抱きしめてくれるにちがいない。どんなにうれしいかしら。きてくれるといいなあ、喜太さんがと、お品はからだじゅうがうっとりとなってくる。
とんとんと、門口で下駄の雪をはたく音がした。

——あっ、喜太さんだわ。
思えば思われると、おもわずお品が中腰になったとき、がらりと油障子があいて、父親がふろから帰ってきた。
「あら、がっかりだわ」
お品は我にもなく口に出てしまった。
「なにががっかりなんだ、お品」
「だって、だって、七日正月だっていうのに、雪なんか降るんだもの」
「天に愚痴をこぼしたってしようがねえだろう」
磯吉はわらいながら台所へ手ぬぐいをかけに行って、帰りに茶の間へはいる。
お品は思わず首をすくめてしまった。なんだか二階に喜太郎をかくしているような気がしてしようがない。
父親は仏壇に燈明をあげ、線香をたいてから、炉ばたへ出てきた。
「お霜、お酒のしたくできてるかえ」

「はあい——。おとっつぁん、まだ降ってるんでしょう」
「うむ、今夜はつもりそうだなあ」
「はい、お茶——」
娘がついでくれた茶わんをうけとって、ゆっくり一口のんでから、
「お品、きょうで松もとれたし、いつまで家へおいてもしようがねえから、あすは島吉を寺へおさめようと思うんだ」
と、父親は仏壇のほうへちらっと目をやった。悲しみを新たにしているような顔である。
「そうね。にいさんもいよいよおっかさんのところへ帰るのね」
「うむ。おまえとおれと、喜太郎さんも行ってくれるというから、あす船で送ってやろう」
「あら、喜太さんも行ってくれるんですって」
お品はどきりとして、さっきの胸の中を見すかされでもしたように、さっと顔が赤くなる。
「にいさん、よろこぶわね、きっと」
「おとっつぁんは、とんだまちがいをしていたんだな」
「どうして——」
「八百鉄にただで取られる百両、それがくやしくて、残りの五十両は島吉の香典にしてくれと、八百鉄を追いかえした。考えてみりゃ、その五十両は島吉がとどけてくれたものだ。けちな了見さ。島吉の五十両で喜太郎さんの無事を買う、どうして早くそこへ気がつかなかったか、いい年をして我ながらあさましいや」
あっとお品は目をみはった。なるほど、八百鉄に残りの五十両さえくれてやる気になれば、自分のからだもねらわれずにすむし、喜太さんもあんなけんかは買わずにすんだのだ。
「おそまきながら、やっとそこへ気がついたんで、おとっつぁんはさっき恵比寿屋さんへ行ってな、だんなに腹ん中を打ちあけて、喜太郎さんを一日貸してくれるようにたのんできたのさ」
「だんなは承知してくれたの」

「うむ。喜太郎さんは若いから、五十両かえすのは不服のようだったが、恵比寿屋のだんなはそれが上分別だと、たいそうよろこんでくれてな、おとっつぁんはあす寺の帰りに、八百鉄の家へ寄ることにきめている」

なにかほっとしたような父親の顔を見ると、それで事がうまくおさまってくれるなら、五十両なんか少しも惜しくないと、お品にも思えてきた。

「お金なんか、働けばできるんですものね」

「そうだとも」

「働くには、おとっつぁん、やっぱり船頭がいなくちゃ不自由じゃないかしら」

「それも今、考えているんだ。亀の野郎のようなんじゃ困るしな」

喜太さんがいちばんいいのにとは、さすがに娘気の口に出しかねるお品だ。じつはそれがいいたくて、わざわざ船頭のことをいいだしたのだけれど——

おどるてんびん棒

外には少し風が出て、降りしきる粉雪が暗い神田川にうずをまいていた。河岸っぷちの道はもうまっしろで、人っ子ひとり通ってはいない。兼田の掛けあんどんがそこだけぼうっと黄ばんだあかるみを作り、そこにも粉雪がうずをまいていた。

その兼田の桟橋へ、すうっと音もなくついた屋根船が一つあった。

「着きましたぜ」

簑笠をつけた船頭が、小声に船房のほうへ告げて、手早く船を杭にもやう。その間に船房から、ぬっと艫へ出てきたのはふたり。厳重な旅じたくをして、腰に長脇差をぶちこんでいるやくざだ。

「いいあんばいに降りやがる」

先に立ちながらそういったのは石巻の佐助で、

「親分、早いことやっつけべえ」

と答えたあとのは子分の傷定だ。

「権太、いいか」

「へえ」

簑笠をかなぐりすてた船頭は、八百鉄の子分の権太だ。これでこのあいだの晩の三人悪党がそろったわけだ。

「それ、行け」

どかどかと桟橋を駆けあがって、往来の雪をけたてながら、兼田の門口へ殺到する。

がらりと油障子を引きあけて、まっさきに土間へ踏んごんだのは権太だ。

「あれえ」

炉ばたの親子は、ちょうど膳が出て、これから磯吉の晩酌がはじまろうとしているところだった。びっくりしてお品が思わず金切り声をあげると、

「騒がなくたっていいや。おれたちはなにも強盗やなぐりこみじゃねえ」

と、権太はせせらわらい、

「とっつぁん、こんばんは——」

人をくった顔をして、磯吉のほうへあいさつをする。

「やあ、深川の権太さんだね」

さすがに磯吉は顔色ひとつ変えていない。

「うむ、その権太さんだ。約束の八日にゃ一日早いが、どうせ去年の暮れの三十日に期間は一度切れている金だ。こっちにもちょっとつごうがあるんで、今夜もらってこいと親分からいいつけられてやってきた。島吉に貸した百両の残りの五十両、耳をそろえてここへ出してくんな。ことわっとくが、言いわけはきかねえよ。金ができなければ、約束どおりお品のからだをもらっていく。どっちだね」

「権太さん、銚子の喜太郎をよけて、わざと一日早く催促かね」

磯吉がひやかすように、にやりとわらう。

「なんだと」

「まあ、まあ、そう目をむかなくたっていい。今のは冗談だ。どうせあすはこっちから八百鉄さんの家へとどけようと思っていたところなんだから、おまえさんに五十両おわたしししよう」
「ふうむ、できたのか、金が」
権太はちょっと当てのはずれた顔をする。ねらいはやっぱりお品のからだにあったのだろう。
「うむ、金はできている。そこでな、権太さん、この金をわたすについて、もともとこれは証文のない借金なんだから、証文をかえしてくれといっても無理だ。といって、こっちは弱い堅気なんだから、またあとでいざこざがおこっても困る。証文がわりに一つ、残金の五十両受け取ったうえは、今後いっさい兼田へは迷惑をかけないという受取書を、親分八百鉄さんの名義で一本入れてもらいたいんだが、どんなもんだろうな」
磯吉はおだやかに掛け合うのだ。
「おれに受取を書けっていうのか」
「そうなんだ」
「石巻の親分、どんなもんでしょうねえ」
権太はうしろに突っ立っている佐助に相談する。
「そりゃ書いてやるのがほんとうだろう。けれど、そいつは五十両という金を見てからのことだ。受取は書きました、じつは金は少し足りねえから、これでまけてくれといわれてもつまらねえからな」
佐助がりこうぶったことをいう。なるほど、こんなけちな了見の親分だから土地を売るようになると、磯吉は腹の中でけいべつしながら、
「そうかね。金のつらを見ないうちは安心できないのかね」
と、立ち上がって茶の間の仏壇のほうへ行った。島吉の五十両は仏壇の下の引き出しにしまってあるのだ。じつはそれが佐助の手だったらしい。

「よし、わかった。それっ」
佐助は子分の傷定に目くばせをして、土足のまま店へおどりあがり、いきなりお品に飛びかかっていく。
「あれえ、おとっつぁん」
お品は佐助と傷定に両方から腕を取られて金切り声をあげる。
「権太、ぼやぼやするな、おいぼれをたたき伏せて、早く金を取れ」
「ああ、そうか」
やっと気がついた権太は、
「なにをするんだ、おまえたち」
ぎょっと顔色をかえながら、茶の間から娘のほうへ駆けよる磯吉に力いっぱい組みついていく。
「おとっつぁん、助けてえ」
必死に身もがきするお品の口を、佐助がうしろからあわてて手でふさぎ、三つのからだがもつれあうように土間へおりてきたとき、がらっと表の油障子があいた。
「石巻の親分さん、それなんのまねだね」
てんびん棒を突いて、ぬっとそこに立ちふさがったのは、髪にも肩にも粉雪が点々と白い喜太郎である。
「あっ、てめえは喜太郎――」
「たぶん、おれ、こんなことだろうと思って来てみたが、親分さん、お江戸のまんなかへきて、山賊のまねはよくねえな。やめにするこった」
「ちくしょう」
佐助も傷定も、喜太郎の強いのは知っている。しかも、出入り口をふさがれているのだから、思わずお品を突っ放して長脇差の柄に手をかけ、おおかみのように目を光らせながらじりじりとあとへさがる。
「ここで刃物を抜いちゃいけねえな。やるんなら表へ出るべ」
「野郎っ」
傷定が、相手の得物はたかがてんびん棒一本

だと気がついて、だっと抜き打ちに切って出た。
「よいしょ」
と見た喜太郎のてんびん棒が、それより早く空を切って、びゅんと傷定の肩へおどった。たかがてんびん棒一本でも、荒海で育った喜太郎の腕力だから、肩の骨がくだけるばかり。
「わあっ」
傷定はたわいもなく前へ突んのめっていく。
「うぬっ」
佐助がうろたえぎみに長脇差を引き抜こうとしたときは、もうおそい。
「そうれ、一本」
矢のような突きが佐助のみぞおちへきまったのと、
「あれえ、喜太さん」
お品がありったけの悲鳴をあげたのと同時、
——それまであっけにとられて座敷にぽかんと突っ立っていた権太が、突きを入れて喜太郎の体勢が斜めに背をそっちへ向いたとたん、しめたとばかり上から拝み打ちに長脇差をふりかぶったからだ。
が、そんなことをうっかりしているほどけんかなれていない喜太郎ではなく、佐助に突きをくれたてんびん棒はつばめがえしにさっとうしろをなぎあげていたので、権太は刀をふりおろすひまがなく、そのあいた胴へしたたかてんびん棒をくらって、
「わっ」
どすんと土間へころげ落ちていた。
それはほんの一瞬の乱闘で、悪党三人は三人ともあざやかにたたきのめされて気を失っている。
「あれえ、とうとうまたやっちまった」
喜太郎は土間へながながとぶっ倒れている三人をちらっとながめてから、急に気がついたように、
「おやじさま、かんべんしてくだせえまし。つい、てんびん棒があばれたです。すみません」

これもあぜんと店へ立ちつくしている磯吉にぺこりと一つおじぎをすると、あけっぱなしの門口からすたこら雪の表へ逃げ出そうとする。
「あっ、喜太さん」
びっくりして、夢中ではだしで飛び出したお品が喜太郎をつかまえたのは、ちょうど往来へ出ようとする軒下で、
「いやだ、いやだ、帰っちゃいやだったら」
うしろから抱きすくめるように首っ玉へしがみつき、身もがきして、我ながらどうしていいかわからないお品だ。
目の前を粉雪がまだうずをまいて降っている。

嫁しらべ

恵比寿屋の番頭に住み込んだ喜太郎の毎日はなかなかいそがしい。
恵比寿屋は馬喰町でも上旅籠のほうで、のれんが古いからなじみ客が多く、公事商用で出てくる客、江戸見物の客など四季を通じて絶えず、短くてもたいてい二、三日、長いのは半月一ヵ月と逗留していく。客はみんな朝飯をすませて、それぞれ用たしに行き、夕がた帰ってくるから、宿屋のいそがしいのは朝と晩で、まるで戦場のようだ。
番頭になったとはいっても、喜太郎はまだしんまいで追いまわしだから、なんでもやらなくてはならない。朝に客の床あげからはじまって下足番、客がみんな出ていってしまうと、部屋のそうじから店のそうじ、膳下げもてつだえば、ふろたきもやる。夕がたから夜へかけては、客の送り迎えから膳運び、床敷き、読み書きそろばんができるからその間には帳場もてつだうし、宿帳つけにも出る。客に用をたのまれれば、走り使いもしなければならない。
自分から用をさがして働けば、いくらでも用はあるが、いやならなんにもやらなくてもいい。番頭に住み込んだとはいっても、

「働くところがなければ、うちで働いてみるのもいいでしょう」

そう親切に金兵衛がいってくれたことばにあまえて、自分から番頭にしてもらったので、まだ給金もきまっていなければ、年期もきめていない。つまり、奉公人ではなくて、恵比寿屋の居候なのだ。金兵衛のほうでも、おそらく親類の道楽むすこを当分あずかったつもりで、いつまでつづくか、つづけばたいしたものだと様子を見ているのだろう。

が、喜太郎は自分からまじめに働く気で、人間修業のため番頭においてもらったのだから、骨身を惜しまずよく働いた。これからも、なんとか身の振り方がきまるまでは、いっしょうけんめい働くつもりである。

ただ一つ喜太郎が困るのは、自分がいっしょうけんめい働いているのに、恵比寿屋のわがままむすこ金五郎がなんのかんのといってはときどき遊びにひっぱり出そうとすることである。

きょうもおおかたの泊まり客を送り出して、喜太郎が店の腰高障子をせっせとみがきこんでいると、金五郎がふところ手をして、ふらりとうしろへ立った。

「番頭、なにをしているんだえ」

「へえ、障子をふいていますんで」

きたなと思ったから、喜太郎はわざと振り向きもせずに答えた。町はまだ十五日をすぎたばかりだから正月気分で、手のあいた女中たちが往来へ出て追い羽根に興じている。どこからか三河万歳の鼓の音ものどかに聞こえていた。

「いいかっこうだな、喜太さん。この寒空にじんじんばしょりで手をまっかにして、やもりみたいに障子につかまって、兼田のお品ちゃんが泣いてるって話だぜ」

「そうでございますかねえ」

「うちへきてくれれば、ちゃんとこたつへ入れて、寒い風にもあてないようにたいせつにするのに、喜太さんはなにがよくて、恵比寿屋の番頭なんかになって、手をまっかにしているんだろってね」

「これおれの道楽だと、ついでのときそういっておいてくだせえまし」

「知らねえんだな、喜太さんは」

「へえ、なんにも知らねえです」

「あたりまえよ、まだなんにも話しゃしねえ」

「道理でなんにも聞こえなかったです」

「よせよ、掛け合いばなしをやっているんじゃねえや」

金五郎は寒そうに足ぶみをしながら、

「ときに、喜太さん、おれ、こんど嫁をもらうことになりそうだぜ。知ってるか」

と、突然いいだす。

「そりゃどうもおめでとうございます」

「うらやましいか」

「うらやましいです」

「じつは、これからその嫁を見に行くんだが、喜太さんいっしょに行ってくれねえかな」

「嫁は若だんながもらうんでしょう。おれが顔を見たってしようがねえもんな」

「そいつは少し薄情じゃねえか、おれははじめ兼田のお品を嫁にもらいたかったんだ。ところが、お品には変な虫がついちまって、おれなんか見向きもしねえ」

「おきのどくさまでございましたね」

喜太郎がくすりとわらう。

「わらいごとじゃねえや。くやしいから、おれはこんど、やっと代わりを見つけたんだ。その嫁の顔を、一度ぐらい見てくれたってばちは当たらねえぞ、喜太さん」

「あれえ、そのお嫁は若だんなが自分で見つけたんかね」

喜太郎ははじめてぞうきんを放して立ち上がった。

「あたりめえよ。おれの嫁だから自分で見つける。文句はいわせねえよ」

「じゃ、まだ親御さんたちはなんにも知らない

んかね」
「知らねえよ。だから、喜太さんに一度会ってもらって、よかったらおやじやおふくろに話をつけてもらいたいんだ。行ってくれよ、喜太さん。本気なんだぜ、おれは」
「そのお嫁ってのは、若だんな、どこかの娘さんかね、それとも商売女かね」
「そいつは見てのたのしみってことにしてもらいてえな」
口をにごすところを見ると、どうやら商売女らしい。
「もし、おれが見て、この女は若だんなのお嫁に向かないということになったら、あきらめるかね、若だんな」
「冗談いっちゃいけねえ、おれがそんなけちな女にほれるもんか。器量だってお品よりずっといいし、だいいち心意気がうれしいや。若だんなといっしょになれなけりゃ、あたしはいっそ死んじまいますっていうのぼせ方なんだ。冗談にも別れるなんていってみねえ、おれは人殺しにならなけりゃならねえ。喜太郎さんはおれに人殺しがさせてえのか」
困ったことになったぞと、喜太郎は思った。金五郎はわがままで、一本気で、女にほれっぽい。相手が商売女だとすると、金五郎がうぬぼれているほど、先方は金五郎にほれているのではなく、稼業から金持ちの若だんなと見て、金を巻きあげようとかかっているのかもしれないし、たとえほんとうにほれあっていたとしても、そういう女では物堅い金兵衛がすなおにうむといってせがれの嫁にするかどうか、それも心配になる。
「若だんなは案外そそっかしいでね」
「なにがそそっかしいんだ」
「気を悪くしちゃ困るけど、お品のときもそうだった。おれに首ったけだというから、そうかなと思っていると、お品のほうではそれほどでもなかった」

「喜太さん、おまえおれに恥をかかせる気か。お品のときは、おまえというじゃま者が飛びこんだから、せっかく首ったけになりかけているお品の気が変わったんじゃねえか」
「じゃ、こんどのはほんとうに首ったけなんかね」
「まあ、会ってみてくんな。ただの首ったけとは違うんだから」
「ふうむ。まさか、ろくろっ首じゃないだろうね」
「おれ、ほんとうにおこるぜ、喜太さん」
「わかった、わかった。いまいっしょに行くから、ちょっと待ってもらうべ」
喜太郎はわらいながら、手おけの水を往来へまいてそれをさげ、台所口へまわってきた。金五郎がそんなに夢中になっている女なら、一度会ってみてやろう。それが悪い女のようなら、金五郎のためにも、恵比寿屋のためにも、忠告してやるのがほんとうの友情だと考えたからである。
が、今はともかく恵比寿屋の番頭なのだから、黙って家を出るわけにはいかない。ちょうど主人金兵衛は留守だったので、もっとも金五郎はうるさい父親が留守だから、人のいいおふくろさまをまるめこんで逃げ出すところなのだろうが、喜太郎は一番番頭の藤助にちょっと若だんなのお供をしてきますからとことわって、羽織を着て表へ引きかえした。
「さあ、お供すべ。どこへ行くんだね、若だんな」
「いいから、黙ってついてきてくんな」
金五郎はうれしそうに、さっそうと広小路のほうへ歩きだす。やがて、その広小路を突っ切って柳橋のほうへはいっていくので、さては柳橋の芸者にでもなじみができたのかなと思っていると、橋をわたってすぐ川っぷちを左へ切れ、さっさと兼田へはいっていこうとする。
「さあ、わからねえ」

「心配しなくてもいいぜ。お品を横取りしようというんじゃねえ。船で行こうというんだ」
にやりとわらってみせる金五郎だ。

いやがらせ

喜太郎は、あの七草の雪の晩、兼田で石巻の佐助たち三人の悪党をてんびん棒でたたき伏せて逃げ出したが、その翌日、磯吉の迎えをうけて、お品と三人で深川の寺へ島吉の遺髪を葬りに行った。

そのときたたき伏せた三人は、お上へ突き出せば、軽くても遠島、重ければ死罪をまぬがれないところだが、磯吉はそれをしなかった。島吉の供養のために逃がしてやったのだといっているが、その実、事を荒だててもし喜太郎の名が出ると、喜太郎にはけんか凶状がある。とばっちりがかかってはたいへんだと考えて、穏便にすませたのだろう。

それがあるから、翌日も寺の帰りに喜太郎とお品を永代の船宿大島屋へ待たせておいて、自分だけひとり、八百鉄の家へみすみすかたり取られるとわかっている島吉の借金の残り五十両をかえしに行った。

「おとっつぁん、ひとりで行ってだいじょうぶかしら」

大島屋の二階でこたつにあたりながら、お品がしきりに心配する。

「だいじょうぶだとも。ゆうべの三人は助けているんだし、五十両という大金をわざわざこっちから返しに行くんだもんな。それでおこるやつがあったら、その野郎はよっぽどどうかしているんだ」

喜太郎はのんきにわらった。

「だって、よっぽどどうかしている八百鉄だから、にいさんが借りもしない百両を、おとっつぁんから取ろうと、難題を吹っかけているんじゃないかしら」

お品はなかなか頭のいいことをいう。

「ああ、そうか。八百鉄は金よりお品さんがほしかったんだっけな」

「そんなことといっちゃいやだったら」

「ごめんなせえまし。お品さん、きれいすぎるからな」

その日は法事だから、なるべくじみ好みにはしていたが、きちんとよそゆきに着替えて、髪も結いたてだし、さし向かいにこたつにあたっているお品は、まぶしいほどきれいに見えた。ただきれいだけでなく、恋をしているお品の二十一というからだには、あふれるようないろっぽさが見えるのだ。いや、相手が喜太郎だからわざとそれを見せていると、喜太郎にはちゃんとわかってもいる。

「あたしねえ、ゆうべ喜太さんがどうしてちょうどよくあんなところへ来あわせてくれたか、ふしぎでたまらないんです」

「ふしぎなことなんかあるもんか」

「あら、どうして――」

「馬喰町と柳橋とでは、つい目と鼻の間でございますからね」

「そうよ。だから、あんた、毎日一度はにいさんのところへお線香をあげにきてくれたってよかったんだわ」

お品はだんだん大胆になってきて、からみつくような熱ぼったい目をする、もっとも、ゆうべは雪の中で、うしろから首っ玉へしがみついて、ほおずりまでしてしまったのだから、いまさらほれているのを隠したってしようがないと、もう度胸をきめていたのだろう。

「あれえ、お品さん知らねえんだな」

「なにをさ――」

「石巻の佐助や権太が、はじめにあいさつにきたのは、正月の三日のことでございましたね」

「そうよ」

「あの翌晩から、おれ毎晩一度は兼田の表までお線香をあげに通っていたです」

「あら」

「野郎たちは八日の暮れ六ツといっていた。けど、いつふいにお品さんをさらいにくるかわからない。ことに、ゆうべはあの雪で、なんだか今晩はくさいと思ったから、しばらく屋根船の中へかくれて様子を見ていたです」

だから、喜太郎があそこへ飛び出したのは、けっして偶然ではなかったのだ。

「喜太さん」

お品がふいに立って、こっち側へまわってきた。

「それなら、それならどうして毎晩、あたしに声をかけてくれなかったんですよう」

腕をつかんで、くやしそうに目にいっぱい涙をためている。

「知らないから、あたしあんたがそんなに寒い思いをしていてくれるのに、こたつにあたっていたかもしれないじゃありませんか。くやしい、あたし」

「そんな遠慮はいらねえだ。おれ、たぶん今ごろお品さんこたつにあたっているだろうなと思って、自分まであったかかったです」

それは喜太郎の偽らざる告白だった。

喜太郎はお品を八百鉄に取られたくないから、毎晩兼田を見張りに行ったのである。いわば喜太郎もまた恋ねこになっていたのだ。

「ほんとう、喜太さん。あんたそんなにあたしのこと思っていてくれるの」

「うむ。おれ恋ねこかもしれねえな。恋ねこってものは、自分の雌をほかのねこにとられたくねえから、夜っぴて見張りをしているもんだ」

「うれしい、あたし。抱いて、喜太さん」

その日は正面から堂々と首っ玉へしがみついてくるお品のからだを、

「こうかね」

と、喜太郎はがっしりと胸へ抱いて、それだけでは気がすまず、思わずくちびるへかみついていた。

——あれえ、おれほんとうにねこになったかな。

喜太郎は我ながらちょいとびっくりしたが、お品がぐったりと目をつむって、息をはずませながら急におとなしくなってしまったので、いい気になって、何度も何度もそのかわいいくちびるへかみついてやった。

「お品、おれの嫁になるか」

「なるわ」

「おれ、凶状持ちだぞ」

「あたし、地獄でも、どこへでも、いっしょに行く」

とろんとした甘ったるい声だった。

「ああ、かわいい。おれのお嫁だ」

もう一度ぎゅっと抱きしめながら、喜太郎はふっと気がついた。

「さあ、たいへんなことをしてしまったです」

「どうしたの」

「きょうは島吉兄貴のおとむらいの帰りだった。こんなまねしちゃばちがあたる」

「いいのよ。にいさんきっとよろこんでるわ」

「だいいち、おやじさまに黙って、お品ちゃん抱いちまっては申しわけねえです」

「おとっつぁん、こうなるの、もう承知してるわ」

「さては見抜かれちまったかな」

「こうなって悪ければ、若い者をふたりっきりおいて出かけやしないもの」

やっぱりお品のほうが頭もいいし、度胸もすわっているようである。

ふたりはかたく夫婦約束をして、おとっつぁんにはいずれ喜太郎が堅気で身の立つようになってから話そう、それまではおたがいにいたずら者になるのはよそうと、その日はきれいないなずけの仲で別れた。その日以来、といってもまだ十日にならないのだが、喜太郎ははじめて兼田の敷居をまたぐのである。

「あら、若だんな、いらっしゃいまし。喜太さん、お供ですか」

店の炉ばたにいたお品が、すぐに立ってきて、如才なく迎えながら、ちらっと喜太郎の顔を見てにっこりする。そのにっこりがどうしても特別になるのは、ただの仲ではないのだからまたやむをえない。

「けっ、いやらしい色目だなあ」

さっそく金五郎がかみつく。

「すみません。つい胸におもいがあるもんですから」

お品も金五郎には遠慮をしない。

「あれだ。娘なんてものは、男ができるとこうもずうずうしくなるもんかな」

「あら、違いますわ、若だんな。あたしこのごろとてもおとなしくなったって、おとっつぁんにほめられているんです。やっぱり、いい人ができて、安心して、おちついたからなんですね」

「かってにしやがれ」

「さあ、どうぞお上がりになって――」

「きのどくだが、きょうはそうはいかねえ」

「あら、どうしてなんです」

「さっそく船のしたくをしてくんな、いつも喜太公に見せつけられるから、きょうは見せつけに出かけるんだ」

「あら――」

お品はほんとうにがっかりした顔になる。

「ああ、きのどくだ。どうもきのどくでたまらねえ」

「どこへ行くの、喜太さん」

「おれ、お供だから、どこへつれていかれるかわからねえです。わかっているのは、若だんながお嫁にしてえ女ができた、ぜひ見てくれっていうから、出かけてきたんでね」

「じゃ、お見合いってわけ」

「そのとおりだよ」

金五郎が引き取って答える。

「行く先はどこなんです」

「猪牙で行くのは深川がよいとね、歌の文句にあるとおりさ」

「すみませんが、喜太さんだけおいていってくださいな、お見合いなら若だんながなさればいいんでしょ」

「そうはいかねえ。きょうはおれがどんなにほれられているか、喜太公に見せつけてやらなくちゃ承知できねえ。喜太公は、女にほれられるのはおれひとりだと、うぬぼれていやがるんだ」

「そんなことありません。こんな田舎っぺにほれるの、あたしひとりぐらいのもんですわ。そんなにうらまないでくださいまし」

「いいから、黙って船を出しな。そのかわり、帰りにはゆっくりたのしませてやらあ」

金五郎も少しきのどくになったものとみえる。

「どうしても行くの、喜太さん」

「おれ、番頭で、お供だもんな」

「じゃ、いま気つけ薬持ってくるわ。当てられるとたいへんだから、ほんとうに用心してくれなくちゃ」

お品はいそいで茶の間へはいっていく。

「あれあれ、ほんとうに気つけ薬を取りに行ったぜ」

さすがの金五郎も目を丸くしてしまった。

気つけ薬

喜太郎が恵比寿屋の番頭になってしまったので、これだけはお品の思いどおりにはいかず、兼田では新しく久吉という若い船頭を雇っていた。

「若だんな、船のしたくができやした」

久吉に声をかけられて、よしきたと、金五郎は先に船へ行く。

「あんた、はい、気つけ薬――」

お品が茶の間から走り出てきて、土間へおり、喜太郎の手を取って、その手に握らせたのは、どうやら金包みらしい。たとえきょうは若だんなのお供でも、普通の奉公人とは違うのだから、

お品はわがたいせつな男に金でひけめはとらせたくない心なのだろう。
「金なら、おれだって用意している。心配しなくてもよかったのに」
「いくらあったって、じゃまにはならないでしょ」
店にはだれの人目もないから、お品は握った男の手をすぐには放そうとしない。
「うわきしちゃいやですよ」
「なにいうだ。おれにはここに、ちゃんといるでねえか」
「なにがいるの、喜太さん」
「かわいい嫁っ子がさ、くちびるかんでやるべか」
「いやだ、人が見るもの」
そうはいいながらも、うれしい仲だからかんでくれるのを待っているような熱ぼったい目だ。
十日も会わなかったのだから、喜太郎もなんだか胸がわくわくする。
思いきり肩を抱きよせて、くちびるへ吸いついて、かっとからだじゅうが熱くなってくる。
「かわいいおれの嫁っ子――」
「ねえ、十日も顔を見せてくれないなんていやだわ、薄情なんだもの、あんたは」
「がまんしているんだ。おれだって会いてえけど、用もないのに敷居をまたぐのは、おやじさまに恥ずかしいもんな」
「だいじょうぶよ。おとっつぁんきっと知らん顔していてくれるわ」
「じゃ、こんどそっと泊まりにくべ」
「いいわ、もう御夫婦なんだもの、かまやしないわ」
お品は自分にいってきかせるように、甘ったるい声を出しながら、顔をまっかにする。
なにもかも許す、どうされてもうれしい、そう誓っているような情熱的な目を見ると、喜太郎はもう一度、その燃えるようなくちびるへかみついていかずにはいられなかった。
「さあ、もう行くべ。若だんなが待ちかねているもんな」
やっと抱いていた肩を放すと、
「帰りに、ほんとに寄ってくれる」
と、お品はまだたもとをつかんで、なごり惜しそうだ。
「寄るとも、今夜は泊まっていくべ」
「うれしいわ」
あんまりうれしがっていると、ついまた別れたくなくなってくるから、喜太郎は思いきって表へ出た。
前の桟橋をとんとんとおりていくと、待っていた屋根船の障子ががらりとあいて、
「番頭、いつまで待たせやがるんだ、いいかげんかぜをひいちまうじゃねえか」
と、金五郎がやけにどなりつけた。
「すみません。いま気つけの薬をのませてもらっていたで、ついおそくなったです」
「ばかにするねえ、ここでおまえが気つけ薬をのむことはなかろう。おれのほうがのみてえぐらいのもんだ」
「若だんなは、あちらへいらしてから、気つけ薬でも、のぼせ薬でも、たんとのませておもらいなさいまし」
送って出たお品が澄ました顔でいって、喜太郎を見ながらくすりとわらった。
「かってにしやがれ」
ぴしゃりと、金五郎が障子をしめきる。
「船頭さん、御苦労さま」
喜太郎は、久吉をねぎらいながら、船へ移った。
「行ってらっしゃいまし」
稼業のしきたりで、お品はそうあいさつしながら、ふなべりへ手をかけて押し出すようにする。
それが合い図で、
「お客さん、出しやす」

と、船頭が棹でぐいと岸を一つ突く。ゆらりと船は岸離れした。そのまま巧みに船頭は棹を使って、船はたちまち柳橋の下へかかる。

喜太郎はまだ桟橋の上にすらりと立って見送っている絵にかいたように美しいお品に、手をふって別れを告げ、お品が白い手を振って別れを惜しむのをいとしいと見てから、静かに船房へはいった。

「喜太さん、おまえほんとにお品に気つけ薬をのませてもらったのか」

あんかにはいっていた金五郎が、わらいながらきいた。

「うそではねえです」

喜太郎もさし向かいにあんかへはいりながら、にこりとして答えた。

「いったい、どんな気つけ薬をのまされたんだ」

「いわねえです」

「いわねえ、——どうしてよう」

「恥ずかしいです」

「おかしいな。薬に恥ずかしい薬なんてあるのか」

「あるようでござえますね」

「もったいぶらねえで、いってみろよ、恥ずかしいってがらじゃないじゃねえか」

「そんならいうかな」

「いってみな、どんな気つけ薬なんだ」

「つばきみたいなもんなんだ」

「つばき——」

「うむ」

「湯のみでのむのか」

「ちがうだ。お品が口うつしでのませてくれたんだ」

「なあんだ。こんちくしょう、ばかにするねえ」

金五郎がどすんとあんかの上をなぐりつける。

「うわきしちゃいやだって、お品のやつ、おれのくちびるへかみついて放さねえんだ」

喜太郎はそっと口のあたりをなでまわしてみせる。

「わあっ」

金五郎はたまらなくなって、あおむけにひっくりかえってしまった。船は大川へ出たのだろう。棹が櫓にかわって、さざなみがひたひたとささやくようにふなばたを打っている。

「冗談は別としてな、喜太郎さん」

金五郎がむくりと起き直って、しんけんな顔をした。

「兼田のおやじは、このあいだ、残りの五十両まで八百鉄にかえしたんだってな」

「うむ、かえした」

「野郎、平気でその金を受け取ったのか」

「そりゃ受け取るさ。そんなことを遠慮するような悪党じゃなさそうだ」

「ひでえやつだな。喜太さんがひっぱたいた石巻の佐助と傷定は、どうしたろう」

「あのふたりは、江戸をずらかったようだ。凶状持ちだから、事が表ざたになるとおなわものだからね」

「権太は——」

「さあ、野郎まだ八百鉄の家にいるんだろう」

「どうも気に入らねえな。というより、おれは少し気になることがあるんだ」

一本気の金五郎の目がだんだん光りだしてくる。

佐賀町の家

喜太郎と金五郎をのせた久吉の船が深川永代の橋詰めの大島屋の桟橋へついたのは、やがてもう昼すぎごろであった。

大島屋はこのあいだの八日の日、おやじの磯吉が八百鉄のところへ五十両の金をかえしに行って帰ってくるまで、その二階で喜太郎はお品とふたりきりで長いこと待たされ、それをいいことにして、

「おとっつぁんは承知だわ。それでなくて、若いあたしたちをふたりきりで、こんなとこへ待

たせやしないわ」

と、かわいいお品のほうから首っ玉へしがみつかれ、こんどはこっちからそのくちびるへかみついてやったりして、喜太郎にとってはとてもうれしかった思い出の船宿だ。

そんなことは少しも知らない金五郎は、出迎えに出た中年のおかみさんに、

「帰りに寄るぜ」

と声をかけておいて、あっさり往来へ出てしまった。

その往来を右へ行けば、いわゆる辰巳（たつみ）とよばれる深川の色町、左へ行けば佐賀町、もっとも大島屋のあるところも佐賀町になっている。若だんなの金五郎は右へ行くと思いのほか、さっさと左へ歩きだした。

「あれえ、若だんな、道がちがいやしねえかね」

「ちがわねえよ」

「じゃ、若だんなに首ったけだ、お嫁にしてくれなくちゃ死んじまうって騒いでる女は、芸者さんじゃないんかね」

「きのどくだが、恵比寿屋の嫁にしようって女だ、そんなあばずれ女は選ばないよ」

「なるほど、むてっぽうでずぼらのようでも、やっぱり若だんなは考えている。おれ、感心しました、見直したです。じゃ、どこかの娘さんなんだね」

「冗談いいなさんな、そんな青くさいのはおれにゃ向かねえよ」

「あれえ。じゃ、どこかの女中さんかね」

「ばかにするねえ。ひびやあかぎれの切れた女なんか、おれはまっぴらだ」

「若だんな、いくら好きでも、人のおかみさんだけはいけねえぞ」

喜太郎はなんとなく心配になってきた。

「おれは間男はしねえ。安心して、黙ってついてきな」

若だんなはひとりでにやにやわらっている。とてもうれしそうだ。

——人の心配をしたってつまらない。もうよそう。

と、喜太郎は思った、たのしいことは喜太郎にだってあるのだ。

おれの嫁っ子は、このあいだの大島屋の二階で、うれしい、あたし夢みたいと、いいにおいのからだじゅうをでれでれにして、おれに抱かれていたもんな、現に、さっきだって、そんなに寂しければこんど泊まりにきてやるべかといったら、お品のやつ、熱ぼったい目をして、いいわ、もう御夫婦なんだものって、ほんとにおれを泊める気でいたっけ。

それを思い出したとたん、喜太郎はつい自分もでれっとなって我にもなくにやりとしてしまった。

「おや、わらったな、喜太さん」

目ざとく金五郎が見とがめる。

「すまねえです」

「おれをばかにする気なんだな」

「ちがうです。若だんながひとりでうれしそうに思い出しわらいしたから、おれもお品のことを考えて、思い出しわらいしたです」

「どんなこと思い出したんだ」

「いわねえです。罪だもんな」

「あれ、またわらってやがる。いやなやつだな。いえよう、喜太公」

「若だんな、気つけ薬持ってるかね」

「あっちへ行けば、おれの女がいくらでもくれらあ」

「じゃ、いってみるかな」

「まだもったいつけてやがる」

「お品のやつ、このあいだ大島屋の二階で——」

「ちょっと待った。それはいつのことだ」

「八日の日に、三人でお寺へ行ったときです」

「じゃ、おやじもいたんだな」

「それが、おやじさまはまだ八百鉄のとこへ行って帰ってこなかったです」

「ふたりっきりでか。そいつはあぶねえ」

「ほんとにあぶなかったです」
「なんだと――」
「お品のやつ、おれのひざに抱かれて、とろんとしちまって、もう御夫婦もおんなじなんだもの、といったです。ほんとにあのときはあぶなかったです」
「それから――」
「もうそれだけでございます」
「うそをつけ。そんなとこまで行って、それっきりって話があるもんか」
「ほんとうをいうと、もうほんのちょっぴり、その先があるんです」
「そうれみろ。そいつを白状しろ」
「若だんな、気つけ薬がなくてもだいじょうぶかね」
「あっちへ行ってもらうから　だいじょうぶだっていっているじゃねえか」
「それまで持つかな」
「まあ、いってみな」
「そのときおれが、お品のからだをぎゅうっと抱きしめて、かわいいお品の耳にかみつきながら――」
「待った」
「もう少しだから、その先をいわしてもらうべ」
「聞かなくたって、そのあとはもうわかってらあ。ばかにするねえ」
「そうぷんぷんするところを見ると、若だんなはその先を誤解してるようだな」
「なんだと――」
「女ってものは、妙ないたずらすると、すぐ身持ちになりたがるもんだ」
「あれえ、お品は身持ちになっているのか」
「あわてちゃいけねえです。お品はそのとき、喜太さんの赤んぼなら、身持ちになってみたいっていってくれたが、それだけは祝言してからにすべ、いたずら者にはなりたくないからとおれはお品をなだめて、またくちびるをかんでやって、きれいないいなずけの仲で別れたです」

「なあんだ、いやに気をもませやがったな。けど、喜太さん、そのときはおまえ、ほんとにふたりっきりでいたんだろう」
「うむ。まさかおやじさまの前じゃ、耳をかんだり、くちびるをかんだりはできねえもんな」
「だからよう、ふたりっきりで抱きついて、そんなまねまでしながら、おまえよくそれだけですませたもんだな」
「おかげで、ひどくほねがおれたです」
「おきやがれ。聞いてるおれのほうが、よっぽどほねがおれらあ」
気の合った若い者どうし、かってなことをしゃべりあいながらたのしく下ノ橋をわたる。まもなく右へ曲がる横町が見えてきた。
「ここを曲がるんだ、喜太さん」
「どこへでも好きなとこへ曲がってくだせえまし」
その横町の右側の何軒めかに、こいきな格子のはまった玄関があって、金五郎はおほんと一つせき払いをしながら、その格子をがらりとあけた。
この辺は軒並みそういったしもたや続きの閑静な横町で、中には見越しの松に黒板べいといったのも目につくから、おもに芸人、おめかけ、通い番頭、そんな種類の人たちが住んでいる一角なのだろう。
「師匠、いるかえ」
「どなた――」
奥から立ってきて、さらりと障子をあけ、
「あらまあ、若だんな、よくいらしてくれましたね。うれしいわ。さあ、どうぞお上がんなすって」
甘ったるい声を出しながら、手を取らんばかりに出迎えたのは、年ごろ二十二、三とも見える、いかにも遊芸の師匠といったそろりとした身なりの、すごいような美人だ。
――なるほど、若だんなのほれそうな女だ。
格子の外に立っている喜太郎は、ひと目で見

てとりながら、しかしお品とは段違いだなと思った。お品は町娘だから純潔で生地からきれいなのにひきかえ、この女は装いをこらし、こびを作っていつも男をとろかそうとかかっているふうがありありと見える。美人には美人だが、なんとなくはでで、不健康で、下品なところがある。

「お連れさんですか、若だんな――」

女も目ざとく格子の外の喜太郎を見て、金五郎にきく。

「うむ、うちの番頭だ。お目付役でね、おやじからいいつかったといって、きょうはどうしても離れねえんだ。なあに、おとなしいから、表で待たせておけばいいんだ」

金五郎はそんなひどいことをいう。まるで人を犬あつかいだ。

「かまわないじゃありませんか。外は寒うございますもの、上げておやんなさいよ」

「そうか。じゃ、喜太公、こっちへはいれよ」

「番頭さん、おはいんなさいな」

「へえ」

きょうは嫁しらべにきたのだから、喜太郎は遠慮なく入れてもらうことにした。

白ぎつね

玄関をあがって三畳、その奥が六畳の茶の間になっていて、ちゃんと置きごたつがこしらえてある。長火ばちも茶だんすも安物ではなく、壁に三味線が二丁かかっている。その奥にもう一部屋あるようだが、これはふすまがしめきってあって見えない。

「おや、若だんな、いらっしゃいまし」

そこにいたばあやが、ていねいにおじぎをする。

「ばあや、鼻紙でも買ってくんな」

金五郎はいくらかの紙包みをそこへ投げ出して、さっさと置きごたつへひざを入れる。

「いつもすみませんねえ、若だんな」

その横へ女もひざを入れながら、

「ばあや、寒いからすぐおしたくをしてね」

と、ばあやにいいつける。

「かしこまりました。若だんな、ごゆっくりなさいまし」

ばあやはいそいで台所へ立っていった。

「お師匠さん、若だんながいつもお世話になっています。おれ、恵比寿屋の番頭で喜太郎といいます。どうかよろしくたのみます」

喜太郎はこたつへはいれといわれないから、玄関のふすまぎわへすわってあいさつをした。

「いらっしゃいまし。あたしは文字富、いつも若だんなにお世話になっているんですよ」

「文字富さんといいますと、常磐津のお師匠さんでございますね」

「ええ、ほんの少しばかし――」

「失礼ですが、若だんなの話だと、お師匠さんは首ったけだそうでございますね」

喜太郎は遠慮なく顔を見てやる。

「あら、若だんなは、そんなことまで――」

文字富はしなやかなからだをくねらせるようにして、いろっぽく金五郎をにらみ、こたつの中でその手がすばやく男のひざをつねったらしい。

「いてえっ」

金五郎はうれしそうにわらいながら、

「喜太公、ちょいとふすまのほうを向いていな」

と、あごをしゃくってみせる。

「へえ、こうでございますか」

喜太郎がおとなしくふすまのほうを向いてすわると、

「いやだ、若だんなは。番頭さんの前で」

「かまわねえよ。あっちを向いてるからわからねえ」

「髪がこわれますってのに」

「あとで髪結いを呼びにやりゃいい」

どうやら金五郎は女の肩を抱きよせたらしい。さっきさんざん道で当ててやったから、負

けずに女のくちびるへかみついてみせようというのだろう。
「喜太公、こっちを向くと承知しねえぞ」
「へえ、気つけ薬持ってきたから、だいじょうぶでござえます」
「ふ、ふ」
と、女のわらう声がした。
「おとなしい番頭さん」
「いいから、もっとこっち寄んな」
「うれしいわ、あたし」
「こんどは耳だ」
「くすぐったいっていうのに」
あれえ、こいつはひでえことになりやがったと、喜太郎は苦笑せずにはいられない。
「うれしいか、お富」
「ねえ、若だんな、きっと夫婦になってくれますね」
「あたりめえよ」
「あれ持ってきてくだすった」
「うむ、持ってきた」
「きょうはゆっくりしてってくれるんでしょう」
「うむ」
「番頭さん、あとで先へ帰ってもらっちゃいけないの」
「いいとも」
「じゃ、あとでゆっくりね」
「身持ちにしてもらいてえか」
「ふ、ふ」
どうやらすっかりかたきを討たれてしまったようである。
「喜太公、もうこっちを向いてもいいぜ」
「ありがとうござえます」
もそりと喜太郎がそっちへ向き直ると、
「ごめんなさい、番頭さん」
文字富はわらいながら鬢にくしを入れている。
「どういたしまして。——あれえ、若だんな、

ほっぺたに白いものがついているです」
「大きなお世話だよ」
「口に口紅もついているです」
「かまわねえよ。ほれた女のだからね」
若だんなはにやにやしながら、どんなもんでえといいたげな顔つきだ。ばあやが酒肴のしたくをしてきて、こたつの上へならべる。喜太郎はあいかわらずひざのあたりの寒いふすまぎわにすわらせられて、ほんの二つ三つ杯をもらっただけだが、若だんなはこっちへ寄っていっしょにやれとはいわず、というより、喜太郎の存在などまったく忘れてしまったように、一つ杯を文字富とやったり取ったり、さしみを口へ入れてやったり、入れてもらったり、どうにもばからしくて見てはいられない。
「若だんな、おれちょっとたばこを買いにやらしてもらいます」
「ああ、そうか。ゆっくり行ってきな」
金五郎はもう目のふちをとろんとさせて、まったくうわのそらだ。女は聞こえないふりをしている。
「それでは、ゆっくり買いにやらせてもらいますべ」
喜太郎はおじぎをして、文字富の家を出た。
——おどろいたなあ。
こんなにおおっぴらに当てられようとは、喜太郎も思わなかった。
しかし、男にしても、女にしても、人前であたわいもなくでれでれするのは、あんまりみっともいいものではない。人のふりみてわがふり直せだ。お品にもよくいって聞かせて、おれはこれから人前ではきっと慎もうと、喜太郎はしみじみと思う。
「いやだわ。あたし、人前でなんか、あんたにでれついたこと、一度もないじゃありませんか」
お品はたぶんそういうだろう。それはたしかにそうにちがいない。お品のは思いうちにあふれて、目だけがときどきとろんとこっちを見と

れているだけだ。その目が喜太郎にはとてもうれしいのだが、人から見ればやっぱりでれっとしたいやらしい目に見えるにちがいない。

「そんな無理いったって、あたしのはひとりでにそうなってしまうんだもの」

「そこを慎むのが女のたしなみってもんだ。そのかわり、ふたりきりのときは、いつでもくちびるでも耳でもかんでやるべ」

「きっとね。じゃ、あたしこれから慎みます」

お品は勝ち気なうちにもとてもすなおなところがあるから、きっとそう納得するにちがいない。喜太郎はそんなことを考えて、ついにやりとしてしまった。

——あれえ、おれこそみっともねえや。

喜太郎ははっと我にかえって、きょうはそれどころじゃなかったぞと、顔をしめなおした。きょうは若だんなの嫁しらべにきているのである。お品のことはあとまわしにすべきだ。

さて、文字富という女だが、あれはただものではなさそうだなと喜太郎は思う。あのでれつき方は、わざとやっているようなところが見える。

だいいち、そのでれつきのさいちゅうに、あれ持ってきてくれたと金五郎にきいていた。あれとはたぶん金のことだろう。ほんとうに若だんなにのぼせている女なら、ああいうれしいとき、金のことなど考える暇はないはずだ。

それに、おれがたばこを買いに出るといったら、知らん顔をしていた。心のやさしい女なら、おせじにも、いいえ、ばあやにいいつけますからと、ひとことぐらい口に出なければならないところだ。いや、そんなことより、酒肴が出たとき、番頭さんもこっちへお寄りになったら、と必ずいいたくなるのが人情だ。

——お品なら、きっとそういうな。

いや、お品のことはあとまわしにしよう。どっちにしても、あの女はどうもくさい。

喜太郎はそう思ったから、佐賀町通りへ出て、

たばこを買って、そこの中年のおかみさんに、

「ちょっとうかがいますが、その横町に、たしか文字富さんとかいう若いきれいなお師匠さんが住んでいますね」

ときいてみた。

「ええ、いますよ」

「あのお師匠さん、いまはけいこ屋をやめているんですか」

「やめているようですね」

「御亭主はないようだが、だれかのおめかけさんなんですか」

「さあ、なんでしょう」

おかみさんは顔にうすわらいをうかべている。

「こんなことをいったらおかみさんにわらわれるかしれねえですが、おれあのお師匠さんを見そめたです。よかったら、国へつれて帰って、おやじさまにたのんで、嫁にしてもらおうと考えているだが、どんなもんでござえましょう。もしおれがおかみさんの弟だったら、おかみさんはどういうでしょうね」

「さあ、困りましたね」

おかみさんは当惑そうにいったが、喜太郎がしんけんな顔をしているので、少しきのどくになったのだろう。

「御近所の人のこと、あたしの口からはなんともいえませんが、あなたがほんとにそうお考えでしたら、二日三日の間、夜も昼もお師匠さんの家のまわりをそっと見ていてごらんなさいまし。そうすれば、御自分でどうすればいいか、きっとわかりますよ」

なかなかうまい返事だと、喜太郎は感心した。

「ありがとうござえました」

礼をいって、表へ出て、もとの横町をゆっくり引きかえしながら、さあとんだことになったぞと、喜太郎は思った。おかみさんがああいうようでは、あの女には悪いひもがついている。そうでなければ、何人もの男を手玉にとってそ

れで暮らしをたてている白ぎつねか。いずれにしても、若だんながだまされていることだけは、もうたしかだ。

はたして、そのころ、文字富の家ではたいへんな一幕がはじまっていた。

行徳の梅吉

「あの番頭さん、気がきいてるんですね、若だんな」

喜太郎が出ていって、ふたりっきりになると、文字富は金五郎のほうへつとにじり寄ってきた。それが当然のように若だんなは片手でやわらかい女の肩を抱いて、

「うむ、気がきいてるとも。あれであの男はなかなかいろ男でね、好いたどうしはふたりっきりがいちばんうれしいってことを、自分でやってみて、ちゃんと知っているのさ」

と、にやにやする。

「あら、あの番頭さんにもいいひとがあるの」

「うむ。ちょいとした女だが、女はすぐ身持ちになりたがるから、がまんするのにほねがおれたといってやがった」

「ふ、ふ。ねえ、若だんな」

「なんだ」

「あたしはもう若だんなのものなんだから、いつ身持ちになったってかまわないけれど、このあいだもいったとおり、あたしには悪い育ての母親がついていて、それと縁の切れないうちは、どうすることもできないんです。せっかくこうしてふたりっきりになれたのに、あたしくやしいわ」

「だからよう、その育ての親には、五十両の手切れ金をやりゃいいんだろう」

「そうなんです」

「安心しな。その五十両は、それ、このとおり持ってきている。取っておくがいいや」

金五郎はふところから二十五両包みを二つ出して、気まえよく女の白い手へつかませてやる。

「まあ、うれしい。これ、あたしに、ほんとうにくださるんですか」

飛び立つような目をしてみせる文字富だ。

「早くしまっときな。そいつがおれの結納がわりだ」

「恩にきます。若だんな。これであたし、やっとこれからはいやな思いをしないですみます」

文字富はその金を押しいただいてみせて、いそいそと立ち上がり、たんすの引き出しへしまった。

「さあ、若だんな、きょうはあたしにものませて。思いきり酔いつぶれてみたい」

もとの座へかえって、おおっぴらに金五郎にしなだれかかりながらちょうしを取りあげる。

「ようし、それなら三々九度の杯だ」

金五郎は右手で文字富の肩を抱き、左手で杯をほして酌をうけ、その杯を女の赤いくちびるへ持っていってやる。

「うれしいわ」

文字富がそれを干して、また酌をすると、こんどは金五郎がそれをのむ。

がらりと格子があいた。

「あら、番頭さんが帰ってきたわ」

「かまわねえよ。見せつけてやろう」

「でも、お床入りのときは帰ってもらいましょうね」

ふたりは喜太郎が帰ってきたのだと思っているから、そのままかまわず三々九度の杯をつづけていると、さらりと間のふすまがあいて、

「お富、こりゃなんのまねだ」

「あっ」

そこへ立ったのは喜太郎ではなく、ひげのそりあとの青い、いかにも苦み走った三十がらみのやくざふうな男だ。

「師匠、だれだね、この人は」

金五郎はまだ文字富の肩を放そうとはしない。

「あの、あたしのにいさんなんです。——ねえ、

にいさん」
　文字富がしきりに目でたのんでいるのを振り切るように、
「てめえは黙ってろ――おい、若僧、おまえはどこのなんて野郎だ」
　と、すごい目をして金五郎をにらむ。
「おれは両国馬喰町の金五郎って男だが、そういうおまえは、どこのなんて野郎だ」
「おれはこのお富の亭主で、行徳の梅吉ってえ者だ」
「お富の亭主――、ほんとうか、師匠」
　文字富は当惑したようにうなだれてしまう。
「ふうむ。じゃ、おまえのいったたちのよくねえ育ての親ってのは、おふくろではなくて、じつはこの亭主のことだったのか」
　金五郎にはほれた欲めというやつで、どうしてもこの女が美人局をやるとは思えないのである。
「やいやい、若僧、人の女房と不義密通、間男を働いときやがって、たちのよくねえ亭主とはなんてえ言いぐさだ。この野郎、まだおれの女房の肩を抱いてやがる。その手を放さねえか」
「まあ、待ちな。おまえとはいま話をつけてやらあ。――おい、お富、ほんとうのことをいってくれ。おれはおまえが美人局をやる女とは思えねえ。この亭主とほんとうに別れたかったんだろう」
　わが女房の顔をのぞくようにされては、行徳の梅吉も亭主としてもうがまんができなかったのだろう。
「こんちくしょう、人の女房といちゃついときやがって、なにをぬかしやがる」
　いきなりおどりかかってきて、ぽかぽかと金五郎の頭をなぐりつけた。
「やりやがったな、野郎」
　それでなくてさえけんかの早いむてっぽうな金五郎だから、かっとなってその胸倉を取り、こっちもぽかぽかと梅吉をなぐりかえす。

「うぬっ、もう承知できねえ」
　たちまちつかみあいのけんかになって、組んずほぐれつ、二、三回上になったり下になったりしていたが、いざとなるとやくざが稼業の梅吉のほうがはるかに強いらしく、とうとう金五郎はうつぶせられて、気が遠くなるほどさんざんにぶんなぐられてしまった。
「さあ殺せ」
「あきれた野郎だな。間男を働いときやがって、その間男のほうがいばってやがる。お富、なにかなわはねえか」
「そんなものをどうするのさ、おまえ」
「この野郎を縛って、駕籠へのせて、恵比寿屋へかつぎこむのよ」
「そんなことまでしなくたって、もうかんべんしておやりよ。取るものは取ってあるんだし、もういいじゃないか」
　けろりとして、文字富がそんなことをいっている。
――ああ、やっぱりぐるだったのか。おれは美人局にひっかかったんだ。
　組み敷かれている金五郎は、はじめて女の心がわかると、目の前がまっくらになってきた。
「ただいまもどりました」
　そこへ喜太郎が帰ってきた。
「あれえ、若だんな」
　さんばら髪で組み敷かれて、半分虫の息になっている金五郎を見ると、たぶんこんなことになりはしないかと心配していたところだけに、喜太郎ははっと胸をつかれずにはいられなかった。
「やいやい、てめえはだれだ」
　金五郎の上へ馬乗りになっている梅吉が、たちまちおおかみのような目をして食ってかかる。
「お師匠さん、この男はだれだね」
　喜太郎はわざとおおかみの相手にはならず、部屋のすみにぼんやりと突っ立っている文字富

のほうへきいた。
さすがに返事ができないらしく、文字富はそっぽを向く。
「この野郎、なんでおれのいうことに返事をしねえんだ」
梅吉はのそりと立ち上がる。
「おれは恵比寿屋の番頭だが、おまえさんこそだれだね。なんでうちの若だんなをこんなひどいめにあわせたんだね」
「ああ、恵比寿屋の番頭か。そいつはちょうどいいや。この野郎が今、おれの女房お富と間男を働いていたんで、このとおりしおきをしてやったんだ。いずれ恵比寿屋のほうへはこっちからあらためて掛け合いに出向くから、とにかくこの野郎をつれてかえれ」
梅吉はぐったりのびている金五郎を足で軽くけりながら、にくにくしげにいう。
「たぶんそんなことだろうと思った」
喜太郎はびくともしないつらだましいで、

「いまおまえさんは、師匠のことをおれの女房といったようだが、おまえさんはほんとうにこの文字富さんの御亭主なんかね」
と、念を押す目がなんとなく底光りをおびてくる。

美人局

「やいやい、いやに念なんか押しやがって、このお富がほんとうにおれの女房なら、てめえはどうしようっていうんだ」
行徳の梅吉はそこへ大あぐらをかいて、ぐいとおおかみのような目を向けてきた。そんな小悪党のすごみなどは、へとも思わない喜太郎だ。
「そんなら、こんどはお師匠さんにきくべ」
喜太郎は長火ばちに立てひざをして、ふてくされたようにたばこをふかしている文字富のほうを向いた。
「お富さん、この人はほんとうにおまえさんの御亭主かね」

お富はそっぽを向いて答えない。
「こんちくしょう、なんだって、てめえはそんなよけいなことをききやがるんだ」
梅吉ががんがんかみついてくる。
「よけいなことではねえです。おまえさんたちがほんとうの夫婦なら、この一幕は美人局（つつもたせ）ということになるんだ」
「なんだと――」
「その女の人は、さっき若だんなと口をなめたり、耳をなめたりしあったとき、べつに亭主があるとはいわなかったです。亭主のある女がほかの男とそんなまねをすれば、不義密通だもんな。うちの若だんなは女にほれっぽいが、けっして亭主のある女に手を出す男ではねえです」
「なにをぬかしやがる。現におれの女房に手を出しているじゃねえか」
「それは、その女の人が、あたしは亭主持ちだと若だんなにいわなかったから、つい若だんながひっかかったです」
「じゃ、てめえはこのお富が悪いっていうのか」
「悪いです。亭主のあるのをかくして、若だんなにほれたんなら、おまえさんは自分の女房もいっしょになぐっているはずだ。それをなぐらずに、うちの若だんなだけをこんなめにあわせるのは、おまえさんたちぐるで美人局をやったとしか思えねえ」
「こんちくしょう、おれが黙っていりゃいい気になりやがって――ようし、こうなりゃしようがねえ、お恐れながらとお奉行さまに訴えて出て、恵比寿屋の屋根へぺんぺん草をはやしてやるからそう思え」
「そのまえに、おまえさんは、ほんとうのところ、自分の女房が憎くないのかね。この女の人は、さっきおれの見ている前で、若だんな、うれしいわといって、若だんなにかじりついて、くちびるを吸わせていただ」
「お富、てめえそんなまねまでしたのか」
さすがに梅吉は、世にも苦い顔をして、文字

富をにらみつける。女はそっぽを向いたまま相手にならない。亭主としてはさぞつら憎い顔だろうに、それでも梅吉は、それ以上どなりつけようとも、なぐろうともしないのだ。

「ははあ、おかみさんがなぐれないところを見ると、やっぱりぐるだな」

喜太郎はなかなか意地が悪い。

「うぬっ、もう承知できねえ」

かっとなった梅吉は、いきなり喜太郎におどりかかった。ぽかぽかとなぐりにきた。

「なにをするんだ」

とっさにそのこぶしの手をつかみとめた喜太郎は、

「八つ当たりをしなさんな。おまえさんのなぐりたいのは、不義を働いたおかみさんのほうじゃないのかね。まちがわねえでもらいますべ」

と、軽く突っ放した。金五郎などとは段違いの腕力だから、梅吉はまるではじき飛ばされたようにどすんとそこへ大きなしりもちをつく。

「くそっ、やりやがったな」

むしゃくしゃ腹のところへ、女の見ている前で子どもあつかいにされた梅吉は、もうがまんができなかったのだろう、血相を変えてふところの匕首を引き抜くなり、だっと突っかけてくる。

「あぶねえ」

ひらりと身をかわした喜太郎は、流れる相手のきき腕をひっつかむなり、苦もなくそこへねじ伏せて、匕首の手を逆に取り、片ひざで梅吉の背をぐいと押さえつけてしまった。

「乱暴するでねえ」

ひざがしらでぐいぐい背骨をこづいてやると、

「あいてって、ちくしょう、さあ殺せ」

と、梅吉は悲鳴をあげ、いまにも背骨が折れそうな激痛に、たちまちぐったりと力が抜けてくる。

「おれは人殺しはしねえだ」

喜太郎はにやりとわらって、

「若だんな、おめえさんお師匠さんにいくら金を巻きあげられたんだね」

と、これもふてくされてさっきからまだそこへあおむけにひっくりかえっている金五郎にきいた。

すると、金五郎はなんと思ったか、むくりと顔をしかめながら起きあがって、

「金なんかもういいや。喜太公、帰ろう」

と、あっさりいった。

「そうかね。さすがは若だんなだ。おれ感心したです。それじゃ、もうなんにもいわずに帰るべ」

美人局にひっかかったとわかって、いまさらごたくをいうのは愚痴だし、恥の上塗りみたいなものだ、男らしくあきらめてしまうのが上分別である。

金五郎は立ち上がって、女のほうは見向きもせずふらふらと玄関へ出ていく。

喜太郎は梅吉の手から匕首をもぎとって、ぐさりと畳の上へ突っ立て、

「お師匠さん、お騒がせしてすみませんでしたね」

ひとこと文字富にあいさつをしてから、梅吉を放して、もそりと立ち上がった。

「どういたしまして、またいらっしゃいな」

女ははじめてこっちを向いて、人を小ばかにしたように、そんなふてぶてしいことをいう。

「ありがとうございます、気が向いたら、またやってきますべ」

にやりとわらいながら、喜太郎は若だんなのあとを追う。梅吉は背骨が痛んで、急にははね起きる元気さえないようだ。

「若だんな、歩けるかね」

「ばかにするねえ、江戸っ子でえ」

負け惜しみの強い金五郎は、顔に紫色のあざをこしらえながら、それでもしゃっきりと格子をあけて、文字富の家を出た。なんとなくびっ

こを引いているのが、喜太郎にはいじらしい。
「通りへ出たら、駕籠を拾ってやるべ」
「それにゃ及ばねえよ」
「強いなあ、若だんなは」
「あたりめえよ。酒さえのんでなけりゃ、あんな野郎に負けるんじゃねえんだ」
「そうだとも——。それに、あの女のくちびるには力のぬける毒がついていたかもしれねえもんな」
喜太郎はちょいとひやかしてみる。
「けど、喜太さん、ちょいといい女だったろう」
「あれえ、まだ若だんなはあの女が憎くないのかね」
「お富が悪いんじゃないんだ。かわいそうに、お富のやつ、あとであの野郎にいじめられなけりゃいいんだがな」
こいつは少し熱が高すぎると、喜太郎はいささかあきれてしまった。
「本気かね、若だんな」
「本気だよ」
「それで、いくらあの女に取られたんだね」
「五十両おいてきた。たちの悪い養い親との縁切り金だといっていたが、今から考えると、あの悪い亭主と縁が切りたかったんだな」
金五郎はまだ美人局にひっかかったとは考えられないようである。
それはまあそれとして、いくら恵比寿屋が大家でも、五十両は大金である。
「若だんな、五十両だなんて、そんな大金をおふくろさまがよく出してくれたもんだな」
「出してくれたんじゃねえ、黙って金だんすから持ち出したんだ」
「そいつはたいへんだ。そんなことおやじさまにわかったら、勘当されるかもしれねえだ」
「勘当は承知のうえなんだ。勘当されたら家へきてください、あたしがきっと養ってみせるからって、お富がいうんだ。まあ、どうにかならあね」

色恋とはこんなに人間を夢中にするものかと、喜太郎はまったくあいた口がふさがらない。
「若だんな、お富に養ってもらうったって、あの女にはちゃんと亭主がいるじゃないか」
「だからよう、五十両手切れ金をおいてきたんだ。なんとかお富がうまくやるだろう」
「美人局にひっかかったんだとは若だんなにはどうしても思えないんかね」
「おれもはじめはてっきりそうだと思って、かっとなったんだが、もう一度お富と会って、ふたりっきりでよく話してみねえと、なんだかふにおちねえところが出てきたんだ」
あんなに女の前でなぐられていながら、まだ目がさめない。よっぽどうまく女にだましこまれているんだろう。
——えらいことになった。このだだっ子をどう説得したものか。
喜太郎はだんだん胸が重くなってきた。

くやし涙

二月にはいって、そろそろ梅のうわさが人の口にのぼる季節になってきた。
つい目と鼻の間に住んでいながら、お品はここしばらく恋しい喜太郎の顔を見ない。もっとも、このあいだ、深川の帰りに顔へ紫色のあざをこしらえた金五郎といっしょに寄って、長いこと二階で話しこんで帰るとき、
「お品、おれ当分出てこられねえかもしれねえが、心がわりをしたかしらなんて、けっして心配するでねえだ」
と、念を押していった。
「どうして出てこられないの」
そのときはもう、お霜がそっと呼んできた大番頭の藤助につれられて、金五郎はひと足先に帰り、暮れかけた二階に、お品は喜太郎とふたりきりだった。
「じつは、きょう、若だんなは美人局にひっか

かったんだ」
喜太郎はその話をすっかりしてくれたあとで、
「そういうわけだから、いつ行徳の梅吉が恵比寿屋へ押しかけてくるかもしれないし、当分金五郎も外へ出さないほうがいいと思うんだ」
と、いつになく心配そうな顔をしていった。
「まあ、たいへんだったんですね」
お品はただあきれるほかはない。
「うむ、困ったことになったもんだ」
「それで、五十両なんて大金を黙って家から持ち出して、親御に知れたらどうする気なんでしょう」
「だから、さっき大番頭さんを呼びにやったんだが、あの物堅いだんなに知れれば、むろん勘当騒ぎになるにきまっている。さいわい、おれが、どこで死んでも恥をかかないようにと、死に金を三十両用意してあったんで、それを大番頭にあずけ、あとの二十両、なんとかならないだろうかと相談してみたんだ。さすがは長年勤めあげた大番頭さんだ、よろしゅうございます、そのくらいならてまえにも用意がありますからと、このほうはまあどうにか埋め合わせがついた」
「若だんな、なんていってました」
「すっかりしょげちまってね、きょうばかりは、すまねえと頭をさげていたっけ」
「あたりまえだわ。そんな女にみすみす五十両を巻きあげられるなんて、まったくしようがない人ねえ」
考えると腹さえたってくる。
「でも、あんた、一文なしになっちまって、困りゃしないんですか」
「だいじょうぶだよ。さっきおまえに——あれえ、まだおまえなんていっちゃ悪いな」
「いやっ、そんなみずくさいことといっちゃ」
「おれなあ、お品、よく考えてみると、こんどのことはおれたちにも少しは罪があると思うだ」
「どうして——」
「おれたちがあんまり仲がいいもんで、若だんな寂しかったんだな。それで、早くくちびるの吸いっこができる相手がほしかったんだ」
「だからって、なにもあんたの前でそんな女といちゃいちゃして見せなくたっていいと思うわ。おまけに、五十両も巻きあげられたり、ぶんなぐられたり、なんて人なんだろう」
「つまり、むじゃきなんだな」
「むじゃきすぎて、少しばからしい」
それにひきかえ、喜太郎は男らしくて、強くて、親切で、だれがなんといっても、男のなかの男だと思う。その喜太郎がもうちゃんと自分のものなんだから、お品はうれしい。
——でも、きょうでいったい幾日ぐらい会わないのかしら。
お品は店の炉ばたへすわって、白い指を折ってみた。十日のうえにもなる。
いやだなあ。いくら若だんなのためだって、こんなに会えなくちゃつまりやしない。
お品はなんだか情けなくなってきた。近いところなんだから、こっちからちょっと会いに行くのはぞうさもないが、それでは人目にたって、せっかくよく働いているのに女のほうから呼び出しにくると、恵比寿屋の人たちからいたずら娘のように思われては恥ずかしい。
あの人のほうから暇をみてちょっときてくれればいいのに、あの人あたしが恋しくないのかしら。いくら堅い約束はあっても、去る者は日日にうとしで、男なんてうわきなんだから、もっと近いところにいい女でもできていたらどうしよう。そう思ったとたん、どきりとして、急にお品は心配になってきたが、それはすぐ、
「しばらく顔を見せなくても、おれが心がわりしたなんて、よけいな心配するでねえぞ」
といっていたこのあいだの喜太郎のことばを

思い出し、ああそうだっけと、その心配だけはないことに気がついて安心した。

それより、あの人、あたしに会いにくると、ちょっとがちょっとですまなくなる。それで用心して出てこないんじゃないかしら。

そうにちがいないと思い、お品はふっとほおがほてってくる。このあいだも帰りぎわに、

「さあ、もう帰るべ。あんまりおそくなると、また若だんなが変な気をまわすからな」

と、一度立ちかけてから、そのさあもう帰るべを十度ぐらいくりかえさなければならなかった。一度は、

「あら、もう帰るの、喜太さん」

と、お品が浮かない顔をしたので、

「しようがねえさ。おれは主持ちだからな。よし、そのかわり、くちびるをかんでやるべ」

と、すわってしまったのである。それからつい今また少し話しこんで、さあ、こんどこそほんとうに帰るべと立ち上がろうとするのを、いやだわ、もう一度だけ抱いてくれなくちゃと、お品はねだり、また少し話しこんでしまった。

三度めはたしか、そんなに帰りたければかってにお帰んなさいよ、あんたはもうあたしのそばにいるのがうるさくなったんでしょと、お品のほうからいやみをいったので、ちょっと口げんかが始まって、また仲直りに抱き合わなくてはならなかった。

「お品、いっそもう泊まっていくべか」

喜太郎がお品をしっかりと抱きしめていった。あたりはもうすっかりたそがれて、あかりのほしいころになっていた。

「うれしいわ、喜太さん」

お品は夢うつつで、からだじゅうが甘ったるくなっている。

「身持ちになってもいいのか、お品」

「いいわ、いっそそのほうが早く所帯が持てるんだもの」

「けど、おとっつぁんに悪いな、祝言をしねえうちに」

「いいのよ。おとっつぁんきっとよろこぶわ。初孫なんですもの」

「そうかなあ、じゃ、身持ちにしてやるべ。ほんとうにいいんだな、お品」

「ほんとうにいいわ……」

そのときはほんとうにその気持ちで、もうどうされてもいいと思い、胸がくすぐったいようにせつなくて、うっとりと目をつむっていると、

「ねえさん、あんどんを持っていかなくてもようござんすか」

と、階下からお霜が遠慮そうに声をかけてきた。さすがにはっとして、

「ええ、すぐ持ってきておくれ」

と返事をしてしまったので、まさかもう抱きあっているわけにもいかない。

「あぶなかったなあ、お品」

喜太郎は夢からさめたように、にっとわらってみせる。

なんだかがっかりしてくやしいような、それでいてほっとしたような、あのときのことを思い出すと、今でもお品は胸がどきどきしてくる。

そして、思わず、

「会いたいなあ、喜太さんに」

と口に出て、やっぱりあたしは身持ちにしてもらいたいのかしらと、ひとりでにほおが赤くなったとき、がらりと表の油障子があいた。

「こんにちは――」

はいってきた客は、ぞろりとした身なりの、いかにも遊芸の師匠とでもいったふうのいきな女である。

「いらっしゃいまし」

お品がいそいで出迎えると、

「お宅は兼田さんですね」

と、女は念を押すようにきく。

「ええ、兼田ですけれど――」

「じゃ、馬喰町の恵比寿屋さんをよく御存じでしょう」

「じゃ、そうさせてもらおうかしら」
文字富は平気で二階へあがって、では、しばらくお待ちくださいましとお品がさがろうとすると、
「ああ、ちょっと――」
と、思い出したように呼びとめ、
「恵比寿屋さんにはたしか喜太郎とかいう番頭さんがいましたね」
じろりとこっちを見ながらきくのである。お品は胸の中を見すかされたような気がして、どきりとはしたが、
「ええ、喜太郎さんならいます」
と、なにくわぬ顔で答えた。
「その番頭さんの耳へは、なるべくあたしの名を入れてもらいたくないんです。いいでしょうね」
「かしこまりました」
口ではそう答えたが、わざとどうしてなのかしらという顔をしてみせると、

「知っています」
「すみませんけど、若だんなの金五郎さんをこっそと呼び出してもらえませんかしら」
はてなと、お品は思った。
「あなたはどなたさんでございましょう」
「深川の文字富だといってもらえばわかります」
やっぱりそうだった。それにしても、なんというずうずうしい女なんだろう。このあいだ美人局にかけて若だんなから五十両巻きあげたばかりなのに、どのつらさげてその若だんなに会う気なのかしら。いや、そのくらいだから、この女はきっとすごい腕なのにちがいない。どうせまた若だんなを呼び出して手玉に取ろうというのだろう。そうだ、喜太郎に相談するのがいちばんいいと、お品はとっさに気がついたので、
「どうぞお二階へおあがりくださいまし。今すぐ使いを出しますから」
と、如才なくいってみた。

「いいえ、はいったならはいったでかまやしないんですけど、あの番頭さん、若だんなにかくれてあたしにいやらしいことばかり持ちかけるから、うるさくってね」
と、わらいながらまゆをしかめるのだ。
「おや、そんな人なんですか、あの番頭さん」
お品は人が悪い。
「ええ、あんな田舎っぺのくせに、おれのいうことを聞かなければ、若だんなとの仲を大だんなにいいつけてじゃまをしてやるって、あたしをおどかして、手を握ったり、抱きついたり、あの男すこしいろきちがいじゃないのかしら」
「あら、そんなことをするんですか、あの人が」
「ほんとうにいやらしいやつって――このあいだなんか、あたしがこたつにあたっていたら、いきなりやってきて、うしろからあたしの胸へ手を入れようとするんです。あたしほっぺたを思いきりひっぱたいてやった」
うそとはわかっていても、そんなにひどいことをいわれれば、つい腹がたってくる。いっそからかわなければよかったと、お品は後悔して、
「では、とにかく若だんなに使いを出してみますから」
と、逃げるように階下へおりてきた。
――くやしいなあ、どうしてやったらいいだろう。
お品はいつの間にか目をつりあげている。

うれしい話

父の磯吉も、船頭久吉も、あいにく出払っていて留守だった。女中のお霜の使いでは、客の用が用だけにたよりない。
お品はいそいで帯を締め直して、
「お霜、あたしちょいとお客さんの御用で馬喰町まで行ってきますからね、留守番をたのみますよ」
そういいおいて家を出た。
――うまく喜太さんお店にいてくれればいい

んだけど。

外へ出てみると、なによりまずそれが心配になってくる。喜太郎がいてくれなければ、いやでも若だんなの金五郎を呼んでもらって、いちおうは文字富のことを耳に入れなければ、まさかひとりぎめに若だんなは留守でしたといって家へも帰れない。

「あんなお富なんかに用はない」

もし若だんながそういってくれれば、それこそおいばりで家へ帰って憎らしい文字富にありのままをいってやれるんだけど、喜太郎の話では、若だんなはまだ文字富にじゅうぶん未練があるんだというし、へたに会わせたらあとでどんなことになるか、考えるとそれも心配である。

——いやになっちまうな、五十両も金を巻きあげられて、その亭主だという男に、女の見ている前でさんざんなぐられて、それでもまだ目がさめないなんて、若だんなもあんまりだらしがなさすぎるわ。

お品はなんだか腹さえたってくる。

それにしても、あの女はなんというすごい度胸なのだろう。そんなあくどいまねをしておいて、いったいきょうはどんなふうに若だんなを手玉にとる気なのか。お品などにはとても想像さえつかない。

それに、憎らしいのは、喜太郎がうるさくつきまとってふところへ手を入れようとしたから、ほっぺたをひっぱたいてやったなんて、ありもしないことを平気でいい散らしていることだ。

——でも、喜太さん、ほんとうにそんなまねをしたのかしら。

まさかとは思うけれど、もしほんとうだったらどうしようと、お品はどきっとして、急に気が重くなる。男と女なんだもの、けっしてないとはいいきれないからだ。

——もし、もし喜太さんがそんなあさましい男だったら、あたしは神田川へ身を投げて死んでしまうからいい。

もう半分泣きたい気持ちで、お品はにぎやかな両国広小路を突っ切り、馬喰町の通りへはいっていった。

用があるんだからしようがないけれど、表からはいっていって人に顔を見られるのは恥ずかしいなと、お品はまたそれが気になりだしたが、さいわい喜太郎はじんじんばしょりになって、恵比寿屋のはんてんを着た番頭姿で、前の往来へ水をまいていてくれたから、それだけは助かった。いや、そんな気持ちより、十日ぶりで見る恋しい男の姿なのである。あ、喜太さんだと思ったとたん、もうかっとからだじゅうが熱くなってしまって、いきなり前へ駆けだしていた。

とたんに、喜太郎のひしゃくがさっとこっちを向いたので、なんのことはない、自分から水をぶっかけられに行ったようなものである。

「あれえ」

お品はすそから足を水だらけにして思わず飛びあがる。

「あっ、すまねえことをしました。あれ、お品でねえか」

「ひどいわ、喜太さん」

「悪かった、悪かった。おれ、ずいぶん気をつけていたつもりだけど、まさか水まいてるほうへ、わざわざ黙って近よる者もねえと思ったもんでな」

喜太郎はいそいで手ぬぐいを出して、ぬれた着物のすそをつまんで絞ってくれようとする。

「いやだあ、喜太さん」

「じっとしているだ。逃げるからすそがまくれるんでねえか。それ、こんどはあんよ——」

往来の目がみんなわらって通る。

「番頭、うまくやってるぜ」

声までかけて、ひやかして通る物好きもいる。

「へえ、おかげさまでね」

喜太郎はいっこう平気だが、お品はまっかに

「ふうむ。ずうずうしい白ぎつねだな」
「だから、あたし、これはあんたに相談するのがいちばんいいと思って、あのひとを二階へ案内しておいて、すぐに飛んできたんです」
「そうか、それはよく気がついた。さすがお品あねごさんだ」
「おだてたってだめだわ」
急にお品の目がちかりと光る。
「あれえ、どうかしたんかね」
「あんた、あのひとのうしろから抱きついて、いきなり胸へ手を突っこもうとして、ほっぺたをいやというほどひっぱたかれたんですってね」
「へえ、このおれがね」
「そらっとぼけないで、白状してくれなくちゃいやだ。あのひとは、あんたがうるさくつきまとって困るから、きょうは番頭さんの耳へは入れないでおくれっていってるんです」
「まあ、そうだろうな。おれの耳へはいると、なってしまった。
「もういいったら——ちょっとこっちへ来て」
いつまでも往来のさらしものになっているのは恥ずかしいから、お品は喜太郎のそでをつかんで、ぐんぐん恵比寿屋の横の路地へひっぱりこんでいった。
「おれになんか用があってきたのか、お品」
喜太郎は片手にからの手おけをぶらさげながら、心配そうにきく。
ああ、この人は、ふいにあたしがきたもんだから、また八百鉄じゃないかと思って心配してくれるんだと、お品はじいんと胸が熱くなって、
「そうじゃないんだけど、このあいだの文字富ってひとがきたんです」
と、つい手が男の腕へかかっている。
「なんだって——、文字富がどこへきたんだね」
喜太郎はびっくりしたように目をみはる。
「いまうちへきて、若だんなに話があるんだから、ぜひ呼んできてくれっていってるんです」

若だんなは出さない。だからそんなことをいうのさ。あの白ぎつねは、人をだますのが稼業なんだもんな」
「ほんとう——、じゃ、胸へ手を突っこんだなんてのも、きっとうそなんですね」
わかりきっていることながら、やっぱりほっとするお品だ。
「おれが胸へ手を突っこんだのは、お品っ子のだけさ」
「いやっ、そんなこといっちゃ」
お品はあわてて自分の乳ぶさを押さえて、ぼうっと赤い顔になる。それは、このあいだの二階で、もう少しであぶなくなりかけたときのことだった。いつの間にか喜太郎の手がふところを探って、乳ぶさをおもちゃにしている。はじめはただくすぐったいと思ったけれど、そのうちにからだじゅうがしびれたように甘ったるくなってきて、女の命がそこにあったことにはじめて気がつき、その女の命を好きな男になぶらせているのだなと思うと、夢のようで、とてもうれしかった。が、それはふたりっきりのないしょごとなんだから、こんな表で口にされると、やっぱり恥ずかしい。
「とにかく、いっしょに行くべ。おれ、この手おけ置いてくるから、ここにおとなしく待っているだ」
喜太郎はわらいながら路地を出ていったが、まもなく、べつに着替えもせず、しりっぱしょりだけをおろして帰ってきた。
「さあ、行くべ」
「若だんなに見つからなかった——」
「うむ、奥でこたつにでもあたって寝っころがっているんだろう。このごろは、おれと大番頭さんとふたりで、出かけようとするとにらみつけるもんだから、すっかり腐っているだ」
「少しかわいそうなようねえ」
表通りをふたりで歩いては目だつから、なるべく路地から横町へと、お品は気をつけて道を

拾っていく。十日の上も会えなかったのだから、とてもうれしい。

「少しかわいそうなのは、おれとおんなじさ」

「あら、どうして――」

「おれだって、ときどきはだれかさんの胸へ手を突っこみに行きてえと思っても、若だんなのこと考えると、そうはいかねえもんな」

「だって、遠いところじゃないんだもの、夜ぐらいちょっとぬけ出せないのかしら。あたしとても恨んでいたわ」

お品はつい恨みごとが出る。

「おれなあ、お品、ほんとうは二、三度、そう思って家をぬけ出したことがあるだ」

「いやだあ、どうしてきてくれなかったのさ」

「途中で考えたんさ。こんど会えば、またきっと胸へ手を突っこみたくなる。そうすると、ただじゃすまなくなるもんな」

「そうかしら」

「おれ、きっとお品を身持ちにしちまうかもしれねえ。ほんとうに、おれ、ほれているんだもんな」

「あたしだって――だから、かまわないって、あたしいつもいってるのに」

「うむ、それはかまわねえけど、それでは若だんなばかしいじめつけているようで、義理が悪いだ。だから、おれ、じっとしんぼうして、いつも途中から引っかえしたんだ。そのかわりな、若だんながお嫁もらったら、こんどこそおれもお品を嫁にしちまおうと、すっかり腹をきめたんだ」

「だって、若だんなはいつお嫁さんもらうの」

「いまその縁談が持ちあがっているから、それがきまれば花が咲くころかな。ああいう若だんなのことだし、お嫁でももらったら身がかたまるだろうって、親御さんたちもとても急いでいなさるだ」

「花が咲くころって、じゃ来月ね」

若だんなのお嫁なんかどっちでもいい、来月花の咲くころ、喜太さんのお嫁になれたらどんなにうれしいだろうと、お品はなんだか急に胸がわくわくしてきた。

行きちがい

お品が喜太郎といっしょに家へ帰って土間へはいっていくと、

「お帰んなさいまし」

店番をしていたお霜がいそいで出迎えた。

「お客さんは二階だね、お霜」

「いいえ、若だんなとさっきいっしょに帰りました」

「なんですって――」

道理で土間に文字富の下駄がない。

「あら、ねえさん、若だんなに会ったんじゃないんですか」

お霜は変な顔をしている。

「会いやしません。若だんなって、金五郎さんのことかえ」

「そうなんです。ねえさんが出ていくと、入れちがいのように恵比寿屋の若だんながはいってきましたから、あたしはてっきり外でねえさんに出会って、お客さんのことできたんだろうと思いましたから、若だんな、文字富お師匠さんなら二階ですよ、うちのねえさんに会ったんでしょうっていうと、うむ、そうか、わかったといって、ずんずんひとりで二階へ上がっていきました。それからまもなくふたりで降りてきて、ちょっとそこまで行ってくるから、ねえさんが帰ったら、帰りにまた寄るといっておいてくれって、出かけていったんです」

「どうしよう、喜太さん」

お品は青くなって喜太郎の顔を見た。まるでねこに晩のさかなをさらわれたような気持ちである。いや、それどころではない、もっとたいへんかもしれないのだ。それはめったに動じたことのない喜太郎の顔色でもわかる。

「あら、あたしいけなかったんですか」

ふたりの顔色を見て、お霜は泣きだしそうになってしまった。

「いや、お霜さんが悪いんじゃない。心配しなくてもいいだ。それで、若だんな、どんな身なりをしていたね」

喜太郎がつとめていつもの顔になってきいた。

「あのう、よくうちへくるときのふだん着でした」

「ふうむ」

すると、どこかへ遠出をする気で家を出たのではないようだ。あんまりたいくつなので、ふらりと台所口からでも表へ出て、どこへ行く当てもないから兼田へきて、お品を相手に一杯やる気になったものか。ここなら銭を持たなくても、わがままをいっていくらでも遊べるのだ。来てみたら、意外にも文字富が二階で待っていたということになるのだろう。

「どうするのよう、あんた、いやだ、そんなむずかしい顔をしちゃ」

お品もだんだん心細くなってくる。

「まあ、お茶でも一つもらうべ」

「じゃ、お上がんなさいよ」

「そうだな」

喜太郎はお品にひっぱられるままにもそりと上へあがって、炉ばたへすわった。いったい、文字富が金五郎をひっぱり出した目的はなんだろう。まさか、また美人局をやる気でもあるまい。たとえやったところで、金五郎はきょうはこづかい銭ぐらいしかふところにないはずだ。むろん、あの文字富がほんとうに亭主の行徳の梅吉と縁を切って、金五郎と夫婦になる気になったとは考えられない。

すると、目的はやっぱり金だ。金五郎をだまして、また家から金を引き出させる。そんなことはこっちに自分の目が光っている間はできない相談だと、向こうでも知っているだろう。

とすると、残る一つは、金五郎をどこかへ監

禁して、恵比寿屋へ脅迫状を突きつける。

「まず、その辺のとこかなあ。こいつは困ったことになったようだぞ」

喜太郎は思わず暗い顔をして、腕を組んでしまった。

「どうしたのさ、あんた。なにが困ったの」

「あの文字富にはすごい悪の亭主がついているでね」

「行徳の梅吉ってやつでしょう」

「うむ」

「それが若だんなをどうしようっていうの」

「ことによると、若だんなを縛っておいて、恵比寿屋へ大金のゆすり状をよこす気かもしれねえ。あいにく、若だんなにはいい縁談が持ちあがっているとこだし、悪党どもはそんなところまで調べているかもしれないな」

「そうそう、その若だんなの縁談って、先方はどんなおうちなんです」

「おれはまだくわしいことは聞いていないが、なんでも深川のほうの大きな材木屋さんで、丸屋十兵衛、丸十さんとかいう家の娘さんだそうだ。ことし十九で、お杉さんとかいう話だ」

「娘さんにしては、少し年を取りすぎているんじゃないかしら、人のことはいえないけど」

そういうお品は、ことしはたちになるのだ。

「うむ、そのかわりしっかり者で、器量だってなんとか小町といわれるくらいだ。きっと若だんなの気に入るだろうと仲人はいっているとかで、まあ、お品のような娘なんだろうな」

「あたしはなんとか小町でなくておきのどくさま」

あんまり喜太郎がよその娘をほめると、お品はちょいとすねてみたくなる。

「そんなことあるもんか、お品は柳橋小町さ。だれがなんといったって、おれはそう思っているのだ。その柳橋小町がこんな田舎者のおれの嫁っ子になってくれるんだもんな。おれたいせつにするです」

喜太郎がほんとうにうれしそうな顔をすると、

「ばかばっかし」

と、お品はすぐとろんとした目になってしまうのだから世話はない。

「それで、若だんなは、もうそのなんとか小町とお見合いしたの」

「それはこれからの話さ。その話はつい近ごろのことで、しっかり者だってのが親御さんたちの気に入ってね、大だんなもおふくろさまも大乗り気なんだが、若だんなはまだ文字富に未練があるもんだから、おれは女房のしりに敷かれたくねえ、しっかり者なんか大きらいだって、へそを曲げているようだ」

「しようがない人ねえ、あの人。そのくせ、何人も男のある文字富なんかに手玉に取られて、きたならしいと思わないのかしら」

「きたならしいと思えば、くちびるなんかみっこできねえさ。そこへいくと、お品、おれはしあわせ者だな。ほんとうのことをいえば、おれは凶状持ちのくせに、柳橋小町のくちびるをわが物にして、胸へ手を突っこませてもらったり――」

「いやだったら、そんなことといっちゃ、恥ずかしいじゃないか」

口ではいって赤くなりながらも、ここが店でなければ、いまにも立って男のひざのそばへ行きたそうなお品のからだつきだ。

「あっ、いけねえ。きょうはそれどころじゃなかった。文字富のやつ、どこへ若だんなを連れ出しやがったんだろうな」

さすがに喜太郎はすぐ現実へ引きもどされて、きりっとした顔つきに返る。

「子どもじゃあるまいし、ほっといたって、いまに帰ってくるんじゃないかしら。帰りに寄るっていってたっていうんだから、もう少し待ってみたら」

お品は道楽者の若だんなのことなどより、十日ぶりでこうしてうれしい喜太郎に会えたのだから、また二階へ誘いたそうな口ぶりだ。

「いや、これはただごとじゃなさそうだ。お品、おれこれからちょっと文字富の家へひとっ走り行ってみてくる」

はたして佐賀町の家へつれこんだかどうかはわからないが、今のところそこよりほかにこれという当てもないし、近所へ行ってきけば、また思いがけない手がかりが拾えないとはかぎらない。けっして、むだ足にはならないと、喜太郎は考えたのだ。

「あんただいじょうぶ、ひとりで」

お品は急に心配になってきた。

「だいじょうぶさ。喜太さんはこれで案外強いもんな」

「でも、相手がおおぜいだったら、心配だわ、あたし」

「なあに、めったにへたなけんかはしねえから、心配しなくてもいいだ」

男らしくわらってみせながら、喜太郎はもうさっさと立ち上がる。

「おこづかい持ってるの、あんた」

上がりかまちのところまであとを追ったお品は、とうとうこのまま行かれちまうのかと思うと、なんだか情けなくて、ついたもとをつかまずにはいられなかった。

「うむ、こづかいは持ってる」

「こっちをお向きなさいってば」

「こうかね」

くるりと振り向いて、お品の肩を抱いて、お霜はけっしてふたりのじゃまをしない小娘だから、安心してほおを寄せて、

「お品、帰りにまたきっと寄る、そのときは二階へ行くべ」

と、半分は冗談のように甘くささやく喜太郎だ。

「ほんとうよ、喜太さん」

「ほんとうだとも、また胸へ手を突っこんでや

るべ」
「かまわないわ。みんなあんたのものなんだもの」
「じゃ、行ってくる」
お品はせつなくやるせなく、いやいやをしてみせる。
「ああ、忘れてた」
ぎゅっと抱きしめて、くちびるへかみついてくれる喜太郎だ。お品はいそいで目をつむりながら、このまま死んでもいいから、男を放したくないと思う。義理のためなら命がけだ。どんなところへでも飛びこんでいく男らしさが、なんだか不安でたまらないのだ。

手がかり

兼田を出た喜太郎は、その足ですぐ佐賀町へまわってみようかと思ったが、事は金五郎の問題なので、せめて大番頭藤助の耳にだけは入れておいたほうが、あとでなにか起こった場合に手段がつきやすいと思い直し、一度恵比寿屋へもどった。
「困った若だんなだねえ。承知しました。御苦労でも、喜太さん、よろしくたのみますよ」
まゆをひそめながらも、大番頭があとを引きうけてくれたので——敵地へ乗りこむのに恵比寿屋のはんてんを着ていくのはまずいと喜太郎は気がつき、それに、いざというときにはなにか武器がいる、いっそ近在の百姓が小買い物にでも出たというかっこうで、てんびん棒をかついでいこうと、てんびん棒の先へ小ぶろしき包みを結びつけ、じんじんばしょりになって、それをかついでふらりと恵比寿屋を出た。
新大橋へ道を取って、深川へわたり、川っぷちを右へ折れると万年橋、上ノ橋から中ノ橋をわたって佐賀町へはいるころは、もう夕がたになっていた。
心おぼえのたばこ屋のかどを曲がって、文字富の家の前へ立ってみると、意外にも雨戸を締めきって、貸家の札がはってある。
——さあ困ったぞ。
当てにしてきたただ一筋の望みの綱が、ここでふっつり切れたことになる。
両隣へ寄って、ひっこした先をきいてみたが、
「さあ、ひっこしたのはたしか七、八日まえだが、どこへ行きましたかねえ。うちじゃあんまりおつきあいがなかったから」
と、両隣の至極冷淡な口ぶりだった。どうにもとりつく島がない。
——けっきょくむだ足になったか。
がっかりして、もとの佐賀町通りへ出てくると、
「おい、兄い、恵比寿屋の番頭さん」
ふっと、うしろから呼び止める者がある。
「おれかね」
振りかえってみると、去年の暮れまで兼田の船頭だった亀吉が、いつもながらあまりぱっとしないはんてんも引き姿で、にやにやわらいながら突っ立っている。
「おまえは喜太郎さんていうんだろう」
「そうでござえます。兄いさんはたしか柳橋の兼田にいた亀さんでしたね」
「よく知ってるなあ。おれはおまえと口をきくのははじめてだぜ」
「若だんなに聞きました。この正月若だんなとお相撲勝さんとけんかをしたとき、亀さんはあっちの組だったからね」
「そうそう、そんなことがあったっけな。おまえの強いのにゃおれもあきれちまった。あとで聞くと、おまえは死んだ兼田の島吉と兄弟分だってな」
「旅先でしばらくいっしょに暮らしたことがあるんでね」
「うまくやってやがる。その縁で、おまえ、兼田のお品をとうとうくどき落としたっていうじゃねえか」
「それはちがうです。ほんとうはお品にくどか

れて、お品のほうがどうしてもおれに婿になってくれっていうもんだから」

喜太郎はわざと人のいい顔をして、にやりとわらってみせる。

「けっ、手放しか、おい。田舎っぺのくせに、すみにおけねえな」

「なあに、おれいつも遠慮して、なるべくすみっこにいるようにしているです」

「おきやがれ。そういや、おまえ、いまどこへ行ってきたんだ」

「ちょっとそこまで、人をたずねてきたです」

喜太郎は用心深い。

「隠さなくたっていいやな、あき家になってたろう」

なんでも知ってるぞといいたげな亀吉の顔つきだ。

「あれえ、亀さん見ていたんかね」

「見ちゃいねえさ。けど、おまえがこの横町から出てくれば、どこへ行ってきたか、おれには

ちゃんと顔色で読める。こう見えても、おれは人相見をやったことがあるんだ」

「たまげたなあ。じゃ、おれがどこへ行ってきたか当ててみてもらうべ。当たったら一杯おごってもいい」

「きっとだな」

「おれ、うそはいわねえです」

こいつなにか知っている様子だと早くも見て取ったから、喜太郎はすかさずうまく持ちかけていく。

「おまえ、この横町の文字富の家をたずねていったんだろう」

「当たった。どうして亀さんそんなことがわかるんだ。ほんとうに兄いさんは人相を見るんかね」

「あたりめえよ。人相手相、運勢縁談金談、なんでもひと目見ればぴたりと当たるんだ」

「一杯おごるべ。おれ、ぜひ見てもらいてえことがあるだ」

「よし、なんでも見てやらあ。そのかわり、ただじゃいやだぜ。こっちは稼業だからな」

「いいとも、それだけの見料はきっと払うだ」

乗せられたように見せかけて、喜太郎は永代橋の近くの一杯のみ屋へ亀吉をつれこんだが、案外この泥亀め、逆におれを乗せようとしているかもしれないと、そこはすこしもゆだんはしない喜太郎だ。

切り落としの小座敷へおさまって、さっそく一杯やりながら、

「ときに、兄いさん、文字富師匠のひっこした先は知らねえだろうか」

と、なに食わぬ顔をしてきいてみる。

「知ってるよ」

泥亀がそらきたというように、にやりとわらう。

「どこへひっこしたんだね。教えてくれねえかなあ」

「はは あ、おまえの人相で見ると、おまえは若だんなの金五郎をさがしているんだな」

「驚いたなあ。亀兄いさんは、なんでもよく知ってるんだなあ」

「知ってるとも。おい、喜太公、黙って一両出しな。おれの知ってることは、なんでも教えてやるぜ」

「ありがてえ。そうしてもらえば助かるです」

せっかくお品のくれたこづかいの中から一両はもったいないような気もするが、金五郎の命にはかえられない。

喜太郎はふところからさいふを出して、小判を一枚泥亀の前へ差し出す。

「ふうむ。おまえいいさいふを持ってるな。おれはさいふなんて久しく持ったことがねえ。そのさいふもくれねえか」

「気に入ったんならやるべ」

「ぐんと気に入ったんだ。しまのさいふに五十両、じゃなかった、しまのさいふにたった一両、ありがてえありがてえ」

泥亀はもらったさいふにもらった小判一枚を投げこんで、くるくると巻いて腹掛けのどんぶりの中へ突っこむ。

「大きな声じゃいえねえが、文字富の亭主みたいになっている行徳の梅吉な、あの野郎がこのあいだ八百鉄さんの賭場で、五十両すってんてんになりやがった。なんでもその五十両は文字富が金五郎の二本棒から巻き上げた金で、だから文字富がおこって、こんどは所帯道具をみんなたたき売って、やけで八百鉄さんの賭場へ張りに行ったのさ。あの女、すごい度胸だからな」

「それで、うまく五十両取りかえしたんかね」

「そううまくいくもんかな。どうせすってんてんよ。けど、負け惜しみの強い女だから、あたしにゃ恵比寿屋の若だんなっていう金の成る木がついているんだ、またおじゃましますよ、とかなんとか啖呵をきって引きあげたって話だ。そんなことを小耳にはさんでいたんで、あそこでばったりおまえの顔を見たとたん、ははあ、文字富のやつまた金五郎をおびき出しやがったなと、おれはすぐ勘ぐった。どうでえ、おれの目は高いだろう」

ぐいとそり身になってみせる泥亀だ。

「なるほどなあ。それで、文字富さんの家は、いまどこなんだね、ひっこした先は」

「洲崎だよ。洲崎の弁天さまの裏のほうだ」

「やっぱり。梅吉さんといっしょにいるんかね」

「うむ、腐れ縁なんだな、しじゅうけんかばかりしてるくせに、どうしても別れられねえ。またいっしょになってるそうだ——けど、おまえ、おれからこんな話を聞いたって、だれにもいいっこなしだぜ。行徳のに知れると、あいつは命知らずだからなあ」

ちょいと首をすくめてみせる泥亀だ。

——どこまでがほんとうの話かな。

喜太郎はそれとなく泥亀の顔へ目をすえている。

洲崎の待ち伏せ

これから洲崎の文字富の家へ行ってみても、はたしてそこに金五郎がいるかどうかはちょっとわからない。が、たとえむだ足になっても、手がかりがついた以上、黙って帰るという手はないから、喜太郎はともかく泥亀に別れ、その足で洲崎へ行ってみることにした。

日はもうとっぷりと暮れて、空におぼろ月はあったが、妙に底冷えのする夜になっていた。

用心のためにてんびん棒を肩にかついだ喜太郎は、深川の色町をぬけ、汐見橋をわたるとその辺から町は急に暗くひっそりとしてくる。六角越前守の下屋敷へ突きあたって、右へ切れ、泥亀に教えられたとおり平野橋をわたると、海が見えて、波の音が耳につきだす。

——海を見るのも久しぶりだなあ。

銚子育ちの喜太郎は、なんとなく故郷が思い出される。海づたいにさくさくと砂を踏んで、洲崎弁天はこの浜の東のはずれだとおそわってきたから、そっちへ向かって歩いていった。浜にはまったく人かげ一つない。はるか向こうの森のあたりに、人家のあかりらしいものがちらちらとまたたいている。それを目あてに、知らない土地ってものは妙にたよりないものだと、半分道ほども進んだところだろうか、

「やい、待て」

「待たねえか、野郎」

その砂浜に引きあげてある船のかげから、突然ばらばらと五、六人の男が飛び出してきて、行く手へ立ちふさがった。いずれもやくざふうのやつで、顔をぬすっとかむりで包み、長脇差を腰にぶちこんでいるやつもある。

「待てって、おれのことかね」

喜太郎はびっくりして立ち止まった。

「あたりめえよ、てめえのほかに人らしいやつはひとりも歩いちゃいねえ」

「おまえさんたち、おいはぎさんのようでもね

えが、おれになんの用だね」
はじめての土地へきて、うらみをうけるようなおぼえもないと、喜太郎は思うのだ。
「なにをぬかしやがる。てめえを銚子の喜太郎、今は馬喰町の恵比寿屋の番頭と知っていて待っていたんだ。命をもらうから、そう思え」
「待っていたといったね。おまえさんたちはだれなんだ」
待っていたというからには、自分が今夜ここへくるのを知っていたことになる。それを知っているのは泥亀と自分のふたりだけど、しかもここへ来ようときまったのは、ついさっきのことである。
「だれでもいい。こっちはてめえをやみ討ちにしてしまいさえすりゃ、それで用はすむんだ」
「そんな乱暴な話ってない。だれかにたのまれたんかね」
「むだ口をたたくな。黙って死んじまえばいいんだ」
敵は殺気だって、だれかひとりがきっかけをつけるのを待っているようだ。
「おれ、ほんとうにおこるぞ」
喜太郎はむらむらっと腹がたってきた。いきなり人をつかまえて、黙って死んじまえという法はない。もっとも、やみ討ちにするんだとはいっているが、べつに人からそんなうらみをうけるおぼえもないのだ。
「ふん、てめえがおこりゃどうなるんだ」
相手は五人、口々にむだ口をたたいているのは、どうやらこっちが強いと知っていて、大事を取っている、いざとなると多少気おくれがしているというふうにも見える。すると、このなかに知った顔がたしかにまじっているはずだ。
「おまえさんたち、男らしく名を名のったらどうなんだ。おれ、おこると、ついこのてんびん棒に力がはいりすぎて、脳天をたたきわるかしれねえぞ」
てんびん棒を地について、じりじりとあとじさりはしているが、おどりこんでくるやつがあればいつでもたたき伏せる、そういう気魄が五体にみなぎって、一分のゆだんもない不敵な喜太郎なのだ。
「くそっ、やっちまえ」
「たたっ切れ」
五人のうち三人までが長脇差で、あとのふたりはふところの匕首に手をかけ、五人が五人ともすきあらば打って出ようとひしめきたっているが、どうにも手が出せないらしい。
「わかった、おまえは向こう傷の定吉だな」
長脇差の柄を握りしめて、なかでもいちばん殺気だっているのは、石巻の佐助の子分、傷定だとずばしをさしたとたん、
「野郎っ」
定吉がだっと抜き打ちにおどりこんできた。ひらりと飛びさがった喜太郎のてんびん棒が、
「えいっ」
空を切って前のめりになった傷定の肩先へ、びしりと火のように飛ぶ。
「わあっ」
傷定はもろくも前へつんのめっていった。
「野郎っ」
「くそっ」
あとの長脇差は二本、引き抜いて同時に左右から切りこんできたが、たかがけんかじこみの度胸剣術、それなら喜太郎もたびたび長脇差の下をくぐって場数を踏んでいるからびくともしない。びゅん、びゅんと持って生まれた強力で真一文字に右をたたき伏せ、左を打ちのめす。
「わあっ」
どこへ当たってもただではすまないすごいてんびん棒だから、ひとたまりもない。ふたりとも長脇差をすっ飛ばされて、どすんとしりもちをついている。
残る匕首のふたりは、たわいもなくいっさんに逃げだした。
と見て、前へつんのめった傷定も、しりもち

をついたふたりも、一度に飛びおきて、命からがら三方へ駆けだしているのだ。

「はあてな、あの長脇差のひとりは、行徳の梅吉ってやつじゃなかったかな」

それならつかまえておいて、金五郎の居どころを吐かせてやるんだったと思ったが、逃がしてしまったあとではどうにもしようがない。

そして、喜太郎はふっと気がついた。泥亀はやっぱりやつらとぐるだったのだ。文字富が洲崎弁天の裏へひっこしたというのも、自分をここへおびき出す口から出まかせだったにちがいない。しかも、やつらのうちに傷定がいたところを見ると、こんどの金五郎誘拐の黒幕は八百鉄が一役買っているのではなかろうか——。

——そういえば、泥亀のやつ、おれのさいふをねだっていたぞ。

喜太郎はぱっとした。八百鉄はまえまえからお品のからだをねらっている。泥亀を使って、もしお品までつれ出させようとたくらんでいるとすれば、あのさいふでどんな小細工をやるかわかったものではない。

「こうしちゃいられねえ。とにかく一度柳橋へ引っかえしてみよう」

喜太郎はいきなり今きた道のほうへ駆けだした。駆けだしながら、おれのこととなるとお品のやつすぐ目の色を変えるんだもんなと思うと、いよいよ気が気ではなくなった。

血みどろの顔

そのころ——。

お品は店の炉ばたで心ひそかに喜太郎の帰りを待ちながら、ひとりで気をもんでいた。

喜太さんは強いし、頭もいいから、めったなことではまちがいはないと思うが、なんといっても相手は悪党のことだ。どんなわなにかけられないとはかぎらないし、いくら強くても多勢に無勢では、しまいに力がつきてしまう。

思うまいと思っても、まげを振り乱して、血だらけになっている喜太郎の顔が、ひょいと目にうかんでくるのだ。

「お品、おれはもうだめだ」

その血だらけの顔が、悲しそうにお品を見ていう。

「どうしたのよう、喜太さん。しっかりしてくれなくちゃいやだ」

「やつらにやられちまって。おれは死ぬ」

「いやだ、いやだ、死んじゃいやだ」

あたしはあの人にすがりついて、身も世もなく泣き狂うにちがいない。そう思って、急に涙が出そうになりながら、なんだ、それはあたしの考えだけで、まだなんでもないんじゃないかと気がつき、

「鶴亀、鶴亀」

と、あわてて右手で両肩を払いながら、目がさめたようになる。

——どうして今夜はこんなに悲しいことばかり考えるんだろう。

ことによると前兆というやつかもしれないと、またしても頭が不吉のほうへ行きかけるので、

「もうあたし、なんにも考えない。ばからしい」

と、声に出して自分をしかってみる。

そういえば、あの人、来月若だんながお嫁をもらうから、そうしたらあたしといっしょになるといっていたっけ。

やっとうれしいことを思い出す。そして、うれしいなあと、ほんとうにうれしくなってくる。

あたしはまゆを落として、赤いてがらをかけた丸まげに結って、ここへむりしてすわっている。あの人はこの前へあぐらをかいて、うれしそうにあたしを見ながらたばこをすっている。

「お品、よく似合うぜ」

「なにがさ」

「その髪だよ。ほんとうによく似合うぜ」

「いやだあ、そんなに見ちゃ」

「へえ、じゃほかに見せたい男があんのかね」

あの人がちょいとやきもちをやく。
「なにいってるんですよう。あたしの心も、からだも、ここの家も、もうみんなあんたのものなんじゃありませんか。だれに見せたくって、あたしが紅かねつけるもんですか。そんなことというと、おこるから」
「ほんとうにお品はおれのものなんだな」
「そうよ。あたしはもうあんたのおかみさんじゃありませんか」
「そんなら胸へ手を突っこんでもいいかね」
「おかしいわ、お店でそんなことしちゃ」
「かまうもんか。おれのものをおれがおもちゃにするんだ、だれにも文句はいわせねえ」
あの人はがむしゃらなんだから、一度いいだしたら、きっと胸へ手を突っこまないうちは承知しないだろう。恥ずかしいけれど、あたしはあの人のいうなりになるほかはないのだ。
そうなれたらどんなにたのしいだろうと、考えただけでも胸が痛いほどどきどきしてくるお品だ。
——けど、それも来月恵比寿屋の若だんながお嫁さんをもらってからの話なんだわ。
あの人は義理がたいから、金五郎さんがお嫁をもらうまでは、あたしに会わないようにしているんだとさえ、さっきいっていた。
これまでにだって、二度も三度もわざわざ会いに出てきていながら、途中から引きかえしてしまったんだという。
会えばきっと胸へ手を突っこみたくなるし、ひょっとすると、それだけではすまなくなるんだ、ともいっていた。それは、たぶんそれだけではすまなくなるだろうと、あたしも思う。女の命の乳ぶさをあの人につかまれると、からだじゅうがしびれたように甘くなってきて、あたしはただせつなくなり、もうどうされたってかまわないという気になってしまうのだ。
ほんとうはもうどうされたってあたしはかまわないのだけれど、あの人は若だんながお嫁をもらわないうちに自分たちだけそんなことになっては、若だんなに義理がたたないと考えている。それほどあの人は若だんなのことを思って、いっしょうけんめいあの人に義理をたてているのに、金五郎さんときたら、あんなにきたならしい文字富なんかにだまされて、うかうかとつれ出されていってしまった。
いったい、どこへつれていかれてしまったのだろう。
文字富の家は深川の佐賀町だというから、ここを出ると船にのったにちがいない。酒、さかなの用意をさせて屋根船に乗り、若だんなは十日も外出をとめられていたのだから、もうすっかりでれっとしてしまって、
「お富、胸へ手を突っこんでもいいか」
と、あの人のまねをしたにちがいない。
どうせ何人もの男を手玉に取っている毒婦なんだから、文字富は平気で女の命をあてがっておいて、まさか正気では大の男ひとりどうしようもないから、いつの間にかしびれ薬をのませてしまう。そして、若だんながぐったりと意識を失ってのびてしまうと、
「ふん、ざまあみやがれ」
とせせらわらって、船をどこかの岸へつける。そこに悪党たちが待っている。若だんなを縛りあげ、どこかへ運んでいったのだ。
——きっと、しびれ薬だわ。そうにちがいない。
お品は青くならずにはいられなかった。
そうなると、それを助けに行ったあの人はどうなるんだろう。
深川の佐賀町なら、ここからそう遠いというところじゃない。あの人が出ていったのは、まだ八ツ（二時）すぎだった。どんなに手間取っても、夕がたまでには帰ってこなければならないはずである。それなのに、今はもうかれこれ宵すぎだ。
——どうしたんだろうな、あの人。

お品は居ても立ってもいられなくなってくる。どこかで悪党どもに取りまかれて、ずいぶん戦ったのだけれど、とうとうたたきのめされて、いまごろ半死半生にされているのではないだろうか。

「お品、水をくれ、水を」

またしても血みどろの喜太郎の顔が出てきて、そういう声まではっきりと耳につく。

あの人はもう意識を失いかけて、あたしがそこにいるかいないかさえわからなくなっているのだ。そして、あたしのことばかり考えて、あたしがそこにいはすまいかと、名を呼びながら、手さぐりをしているのだ。

「喜太さん、あたしはここにいるのに」

「ああ、お品、おれはもうだめだ。もうじき死ぬ」

「死んじゃいやだったら」

「おれも死にたくはねえ、おまえを残していくのは心のこりだが、こうなっちゃもうだめだ。せめて、せめてこの手をしっかり握っていてくれ。おれはひとりで死ぬのが寂しい」

「死んじゃいやだったら。ちくしょう、だれが、だれが、あんたをこんなめにあわせたのさ」

お品は思わず炉の中の火ばしを握りしめながら、はっと油障子のほうへ目をやった。

そろりそろりと音のしないように、出入り口の油障子があいているのである。

「あっ、喜太さん」

血みどろになった喜太郎が、やっとここまで逃げてきて、力つきて倒れ、それでもなんとかして障子をあけてはいろうともがいている。そんな姿を思いうかべたとたん、お品はわなわなとからだじゅうがふるえながら、夢中で土間へはだしのまま飛びおりていた。

お品半狂乱

「喜太さん――」

がらりと油障子を引きあけると、黒い影がぱっと飛びあがるように往来までうしろっ飛びにして、

「ああ、びっくりした」

と、そこへ立ちながら、胸をたたいている。手ぬぐいでほおかむりはしているが、このあいだ暇を出した船頭の亀だとは、そのまのぬけたかっこうでひと目でわかった。

「なあんだ、亀さんじゃないか」

ほっと安心したような、がっかりしたような、一瞬お品は世にもぽかんとした気持ちである。

「こんばんは、お品さん」

そろりと泥亀はお品のほうへ寄ってくる。

「亀さん、どろぼうねこみたいに、いま変な戸のあけ方をしていたわね。あれ、なんのまね」

お品は急に強い顔になってにらみつけてやる。喜太郎にだけは甘いが、ほかの男にはとらのように強いお品なのだ。

「しっ、大きな声を出しちゃいけねえや」

「おや、居直るつもり、亀さん」

「そ、そうじゃねえんで――。なるべく親方の耳へは入れたくないことなんだ」

亀はしきりに家の中を気にしている様子である。

「変ねえ。じゃ、あたしになんか用なの」

「いま、お品さん、ここをあけるとき、喜太さんかえといっていたね。喜太さんを待っているんかね」

にやりとわらいながら、亀はそろそろずぶとい顔になりかける。

「大きなお世話じゃないか。よけいなことをいわないで、用があるんならさっさとおいいなさいよ」

「ところが、よけいなことじゃないんだ。じつは、その喜太さんにたのまれてきたのさ」

「そうお――。なにをたのまれてきたの」

どきりとはしたが、こんな小悪党のいうことは、うっかり信用できない。わざと冷淡な顔をしてやる。

「お品さん、知らねえんだな」
「なにをさ」
「まさか、喜太さんがきょう佐賀町へ行ったことは知っているんだろうね」
「知ってるわ」
「おれはその佐賀町の文字富って師匠の家の近所で、夕がたばったり喜太さんに会っちまったんだ。やあ、見た顔だな、喜太郎さんじゃねえかって声をかけると、ああ、兼田の亀さんかと、向こうでも知っていてね、こんなところへなんの用できたんだえときくと、じつは文字富の家へ用があってきたんだが、ひっこしている、そのひっこした先がわからないんで困っているところだというのさ」
どうやらありそうな話なので、お品は用心しながらも、だんだん本気な顔になる。
「文字富のひっこした先なら知ってるぜ、あの女の亭主みたいな行徳の梅吉ってのとは、おれの賭場友だちなんだと話してやると、そうか、それはちょうどいい、少し聞きたいことがあるんだが、立ち話もできないからって、近所の一杯屋へ誘いこまれたんだ。すると、あの話なんだ」
「なにさ、あの話って」
「知ってるんだろう、金五郎若だんながきょう文字富に誘い出された話は」
またしても、にやりとわらってみせる亀だ。
「それなら知ってるわ」
「だからよう、はあてなと、おれは首をひねったんだ。さっき仙台堀の八百鉄親分の家の前へ屋根船がついたぜ。船から文字富があがってきて、親分の家へはいると、中から子分が四、五人飛び出してきて、妙にあたりを見まわしながら、屋根船へおりていき、まもなく病人かけが人か知らねえが、正体のない若い男を家へかつぎこんでいったが、それが若だんなだったかなっておれがいうと、喜太さんも、きっとそうにちがいねえということになったんだ」

「まあ。じゃ、若だんな、やっぱりしびれ薬かなにかのまされたのね」
今も今そんなことを考えていたばかりのところだから、お品は思わずまゆをひそめずにはいられない。
「そうなんだ。文字富って女は、あんな虫も殺さねえ顔をしていながら、どうしてすごい悪だからね。それで喜太さんがいうんだ。おれはこれから八百鉄の家へ若だんなを取りかえしに行くが、お品さんのことで八百鉄から恨まれている、ひょっとすると命がけになるかもしれねえ。おれにもしものことがあったら、おまえそっと見ていて、すぐにお品に知らせてやってくれねえか、証拠にこれをわたしておくといってね、中へお使い賃を一両入れて、このさいふをわたしてくれたんだ」
亀はふところから縞のさいふを出してみせる。手に取ってみるまでもなく、それはこのあいだ自分が喜太郎にこづかいを入れてわたしておいたさいふなのだ。
「それで、それであの人、ひとりで八百鉄の家へ乗りこんだの」
さあたいへんなことになったと、お品は胸がふるえてくる。
「うむ。そいつは乱暴だ。ひとりじゃ喜太さんがいくら強くても、とてもかないっこねえからと、おれは何度もとめたんだが、喜太さんとくると度胸がよすぎるからね、とうとうひとりで仙台堀へのりこんでしまったんだ」
「それで、それで、どうなったの、あの人」
「おれはこっちからそっと見ていたんだが、上がりロの土間でえらい物音がしだしてね、ずいぶん長いこと喜太さん大あばれにあばれていたようだが、なんたって多勢に無勢だ、とうとうたたきのめされて、子分のやつらにかつぎ出され、上ノ橋のそばへほうり出されちまったんだ」
「どうしよう、あたし」
お品はかあっと頭へ血がのぼってきて、いま

にもめまいがしそうである。
「おれは殺されちまったのかとずいぶん心配したんだが、子分のやつらが帰っちまったあとで、喜太さん、どうした、しっかりしろと、そばへ寄ってみると、なあにまだ死にゃしねえ、だいじょうぶだ。けど、くやしいが足腰が立たねえ、すまねえが船でつれてってくれっていうんでね、おれはいそいで船を用意して、やっとそこまで船をこいできたんだ」
「どこ、——どこなの、その船」
「おれはかまわねえから、兼田の桟橋へつけようっていったんだが、そいつはいけねえと喜太さんはいうんだ。兼田のとっつぁんは大のばくちぎらいだ。そのばくちうちとけんかをしてこんな血だらけな姿を見せたら、どんなに情けながるかしれねえ。年寄りには心配させたくねえから、船は柳橋の下へつけて、とっつぁんに知れねえようにお品さんだけ呼んでくれってね、じつは、もう喜太さん、虫の息なんだ」
「亀さんのまぬけ。なんだってそれから先にいってくれなかったんですよう」
血相を変えたお品は、いきなり亀を突き飛ばして、ばたばたと柳橋のほうへ駆けだした。
「お品、水をくれ、水を」
血だらけの喜太郎が呼んでいるのが今こそはっきりとまぶたにうかんで、もう半狂乱のお品だ。

喜太郎怒る

「亀さん、どの船——」
夢中で柳橋にいちばん近い桟橋まで走ったお品は、気もそぞろにそこに立ち止まって、あとからついてくる亀吉を振りかえった。
宵をすぎて、空に春めいたおぼろ月はあるが、夜はまだ川風がはだに冷たく、船遊びという季節には早いから、どこの桟橋にも暗い屋根船や猪牙がのっそりとつないである。その船のどれかに、血だらけの喜太郎がうめいているはずなのだ。
「あの船だ、お品さん」
亀吉はすぐそこの船を指さして、それとなくお品のたもとをつかみ、一気に桟橋を駆けおりようとした。
「待て、泥亀。お品をどこへつれていくんだ」
その泥亀のえりくびを、ふいにうしろから引っつかんで、ぐいと引きもどした者がある。恐ろしい力だ。
「な、なにをするんだ」
びっくりして振りかえった亀吉が、あっと青くなったのと、
「まあ、喜太さん——」
そこに片手でてんびん棒をつき、片手で亀吉のえりくびをひっつかんで、さっそうと突っ立っている喜太郎を見て、一瞬お品がぽかんとあいた口のふさがらなかったのと同時だった。
「お品、おまえ泥亀にだまされたな、どこへ行く気だったんだ」
はっとお品は我にかえって、いっさいが亀吉のうそであったのを悟り、
「喜太さん——」
と、思わず喜太郎のてんびん棒の手へすがりついていく。
その間にも泥亀はえりくびの手を振り切って逃げようともがいたが、喜太郎の手が放れればこそ——。
「助けてくれえ、兄いたち」
とうとう船のほうへ悲鳴をあげて、それこそ亀の子のように手足をばたばたやりだした。
「この野郎、仲間がいるんだな」
見ると、桟橋の下の屋根船から、ぬすっとかぶりのやつがふたりはい出して、ひとりがあわてて船のもやいを解く間に、ひとりが棹を取ってぐんと一つ岸へ突っ張り、船はたちまちゆらゆらと柳橋の下のほうへ岸放れしていく。
「待ってくれよう、兄いたち」
泥亀は情けない声を出したが、ぬすっとかぶ

りたちは薄情にも返事一つしようとせず、大川のほうへぐんぐん逃げだしていくのだ。
「亀、だれだ、あの野郎たちは」
「知るもんか」
「よし、——お品、これ持っててくれ」
喜太郎はてんびん棒をお品に預けて、逃げた船は追うすべもないし、泥亀さえつかまえておけば、船の野郎も、金五郎の行くえもわかると思ったから、いきなり亀吉の腕を取ってねじあげる。
「あいてて——。ちくしょう、さあ、殺せ」
顔をしかめてのけぞりながらも、口だけは達者な泥亀だ。
「黙って歩け、ばか」
いくら夜でも色町だから、往来ばたでは人だかりがする。喜太郎はうしろから亀吉の背中をこづきながら、兼田の店へ引きかえすことにした。
——ほんとに、あぶないところだった。
お品はいまさらのように足ががくがくする。もうひと足喜太郎の来てくれようがおそかったら、いまごろはあの悪党たちの船へ乗せられて、どこかへつれていかれ、どんなめにあわされたか、考えただけでもぞっと背筋が寒くなる。それにもましてうれしいのは、喜太郎が無事でいてくれたことだ。しっかりとその男のたもとにつかまって歩きながら、あれを思い、これを考え、お品はただわくわくと感情が高ぶるばかりで、口もきけない。
「さあ、はいれ、野郎」
油障子をあけて亀吉を土間へ押しこみながら、今夜の喜太郎はほんとうにおこっているようだ。
お霜が台所口から顔を出して、びっくりしている。
「泥亀、おまえだれにたのまれて、さっきおれを洲崎へひっぱり出したんだ」
喜太郎は容赦なくすぐ亀吉を土間へねじ伏せて片ひざでぐいと背筋を押さえつけながら責めだす。
「あいてて——知るもんかい」
「野郎っ、これでも知らねえか」
ねじあげている手と、押さえつけているひざへじわじわと力がはいる。
「わっ、いてて、こんちくしょう、さあ、殺せ」
「よし、殺してやる。おまえのような悪党は、世間のためにも殺しちまったほうがいいんだ」
低いが、その忿怒のこもった声音がいつもの喜太郎とちがうので、ぐったりと上がりかまちに腰をおろして見ていたお品は、
——まあ、喜太さんはほんとうに亀を殺す気じゃないのかしら。
と、さすがに心配になってきた。
「ううむ、ちくしょう、う、む、いてて。助けてくれえ」
泥亀は、からだじゅうの骨がめりめりいいだすと、まっさおになった額にあぶら汗をうかべて、とうとう泣き声を出しはじめた。
「そんなら、なにもかも白状するか」
「する、白状する。手をゆるめてくれ」
「よし」
喜太郎は手とひざをいっしょに放して、すっと立ち上がった。
亀吉はまだぐったりとなったまま、せいせい肩で息を切っている。
「起きろ、泥亀」
「もう少し寝かしといてくんな、からだが動かねえや」
泥亀はそんなふてくされたことをいいながら、まだ心から降参はしていないようだ。すきがあったら逃げ出してやろうと考えているのだろう。
「そうか、ほんとうに起きられねえか。——お品、そのやかんを取ってくれ」
喜太郎は炉の上でたぎっている銅の大やかんを指さす。

「どうするの、喜太さん」
「いちいちきくでねえ」
こわい顔だ。
「いやだ、そんなににらんじゃ」
お品はこわくなって、いそいでいうなりに大やかんをおろしてくる。
「はい、あんた」
「おまえは目をつぶっているだ」
喜太郎はやかんをうけとって、まだ寝そべっている泥亀の背中の上へ持っていく。
「亀、起きねえと、これをぶっかけるぞ」
「わあっ、起きます、起きます」
煮え湯をぶっかけられてはたまらないし、まったほんとうにぶっかけそうな喜太郎のつらだましいなので、亀吉は肝をつぶして、ぴょこんとそこへひざっ小僧をそろえて起きなおる。
「さあ、だれにたのまれて、おれをだましたんだ。いえ」
喜太郎はやかんをお品にわたして、じいっと泥亀の目を見すえる。
「権太に、権太にたのまれたんだ」
「八百鉄の子分だな。梅吉といっしょだろう」
「うむ、梅吉もいた」
「いま船で逃げた兄いたちってのはだれだ」
「子分なんだ」
「やっぱり八百鉄の子分か」
「うむ、子分だ」
「恵比寿屋の金五郎は、いまどこに押しこめられているんだ」
「そいつは知らねえ」
「じゃ、梅吉はいまどこにいるんだ」
「そいつも知らねえ」
「おまえはきょう権太や梅吉とどこで会ったんだ」
「洲崎の賭場で会ったんだ」
「八百鉄の賭場だな」
「そうだ」
「お品をさらって、どこへつれていくところだったんだ」
「知らねえ。おれは船までつれこむ役なんだ」
「今までいったことにうそはねえだろうな」
「うそはねえ」
喜太郎はじっと泥亀の目をにらんでいたが、どうもそれ以上のことは知らぬらしい。また、こんな吹けば飛ぶような三下奴に、八百鉄や梅吉が肝心のことをしゃべるということも考えられない。
「亀、かんべんしてやるから、もう帰れ」
「ほんとうか、喜太さん」
亀吉はきょとんとしたようだ。一度はやみ討ちの手引きをし、いままたお品をさらう手先を働いているのだ。番屋へ突き出されてもしようがないし、そうまではされないまでも、半殺しのめにあわされたうえ、この野郎はくそ力があるから、腕の一本ぐらいは折られるかもしれないと観念していたのだろう。
「うむ、憎いやつじゃあるが、これ以上おまえのような頭の足りないやつをいくら責めてみたところではじまらねえだろうからな」
「へえ、そのとおりでござんす」
なんといわれても、痛い思いはしないほうがありがたい亀吉なのだ。
「そのかわり、亀、おまえこんど八百鉄の一家の者につかまると命がねえぞ。おまえはもう裏切り者と見られているんだ。やつらは義理も人情もないけだものだから、きっとおまえを殺す。よく覚えておくがいいぞ」
「へえ、よく覚えておくでござんす」
「わかったら、さっさと出ていけ」
「ありがとうござんす。助かりますでござんす」
泥亀はぺこぺことおじぎをしながら、こわそうに喜太郎のそばをよけて通り、がらっ、ぴしゃっと油障子をあけて閉めて、いっさんに表へ駆けだしたようだ。

人切り稼業

亀吉が出ていってしまうと、喜太郎はむっくりと上がりかまちへ腰をおろして、考えこんでしまった。

きょうは昼すぎから今まで駆けずりまわって、やっとわかったことは、こんどの金五郎誘拐は行徳の梅吉と八百鉄とがぐるで、八百鉄はついでにお品までねらっているということだけだ。肝心の金五郎がどこに監禁されているかは、まるっきり見当がつかない。

——いったい、これからどうすればいいんだろう。

さすがに喜太郎も途方にくれざるをえない。いや、手段がないわけではない。事を明るみへさらけ出して、お上の手で八百鉄や梅吉をつかまえて調べてもらえばいちばん早い。が、それでは文字富などという悪い女にひっかかった金五郎のだらしなさが世間に知れて、これからの一生に傷がつく。それもあるし、こっちがお上の手を借りたと敵に知れると、相手は冷酷むざんな八百鉄一家だから、破れかぶれで金五郎のからだへどんなまねをするかもしれない。それがこわいのだ。

残る手段はたった一つ、これからひとりで八百鉄の家へ乗りこみ、いちかばちか命がけの掛け合いをやってみることだ。が、これはことによると刀を抜かなければおさまらないことになるだろう。自分が切られるか、相手を切って凶状の罪をもう一つ重ねるか、どっちにしても故郷に待っているおやじさまや弟に、またしても嘆きを見せることになる。

「どうしたのよう、喜太さん」

いつまでたっても喜太郎が石のように黙りこくって、やさしいことば一つかけてくれようとしないので、お品はたまらなくなり、とうとう泣き声を出しながら喜太郎の背中へすがりついていった。

「お品、あの野郎、おれのさいふ持って、おまえをだましにきたんかね」

喜太郎はやっと我にかえったようにきく。

「しかっちゃいやだ。あいつ、あんたのさいふを見せて、あんたが八百鉄の家へあばれこんで大けがをした、それをどうにか船で柳橋の下までつれてきたけど、おとっつぁんに心配かけたくないってあんたがいうから、そっとあたしを迎えにきたっていうんだもの」

「うまいうそをつくなあ、たぶんそんなことじゃないかと思ったんで、おれ飛んで帰ってきてみたが、まにあってよかった」

どうやらおこっているんじゃないと思うと、お品はほっとして、

「今まであんたどこにいたのよう」

と、声まで甘くなって、ほおを押しつけていかずにはいられない。

「おれも泥亀のやつに、文字富は洲崎弁天の裏へひっこしたとうまくだまされて、洲崎の海っぱたまで行くと、八百鉄一家のやつが五人ばかりで待ち伏せしていたんだ」

「まあ、あぶない」

「なあに、そのためにわざわざてんびん棒をかついで出かけたんだから、五人や十人には負けねえけれど、困ったのは若だんなだ」

「あんた、御飯まだなんでしょう」

「うむ、あんまり腹もすかねえんだ」

さっき泥亀をやっつけたときの勢いとうってかわって、からきし元気がなくなっている喜太郎なのだ。やっぱり、金五郎のことが気になるのだろう。

「ねえ、あがったらどうなの。少しお酒でものんでみたら、気が晴れるんじゃないかしら」

「そうもしていられないんだ」

「どうしてさ。これからまたどこかへ出かける気なの」

「うむ、ちょっと行ってくる」

「どこへさ」

「お品、ここんちに兄貴の長脇差はしまってないかなあ」
お品はどきりと目をみはって、
「あんた、あんたは八百鉄の家へ押しこむ気なんですね」
と、思わず顔色が変わってくる。
「いやだ、あたし、やらない。そんなことしたら、あんた、自分から殺されに行くようなものじゃありませんか。いやだ、あたし」
「なあに、めったに殺されはしねえけれど、江戸にいられなくはなるかもしれねえな」
「いやだったら——あんたはあたしがかわいそうだと思わないんですか。あたしは放さない。そんなあぶないとこへなんか、だれがやるもんか」
お品は首っ玉へしがみついてぎゅうぎゅう抱きしめながら、
「ねえ、お願いだから、行かないといって。行かないでしょう、あんた。やめてくれますね」
と、もう半分泣き声になっている。
喜太郎はお品のなすにまかせながら、黙ってじいっと足もとを見ているのだ。
ちらっとその横顔を見て、お品ははっとした。喜太郎の決心は、女の愚痴では動かないと、その顔色でわかったからだ。無理にとめれば、黙って行ってしまうだろう。
「あんた、どうしても、あたしをおいていく気なのね」
お品はぺたんとそこへすわって、思わずたもとを顔へあててしまった。
「あたしは若だんながうらめしい」
あんな女にだまされるなんて、若だんなのばかと、お品はほんとうに金五郎が憎くてたまらなくなる。
「おれはな、お品、もうがまんできなくなってきたんだ。ここのおとっつぁんは、おれに二度と凶状をかさねさせたくないと思って、払わなくてもいい言いがかりの借金を黙って五十両八百鉄にとどけたんだ。いってみれば、人の親の慈悲だ。それを黙ってぬけぬけと取っておきやがって、まだお品をねらう。今夜もしおまえのからだにまちがいでもあったら、おとっつぁんはどんな気がするだろうと考えたから、おれはどうにも腹がたってきて、あの野郎を生かしておけなくなってきたんだ」
喜太郎はたぎってくる義憤をじっと抑えているようである。
「金五郎の親御さんたちだっておなじことだ。女にだまされたせがれをばかと思うより、だました女が憎い、しかもやつらはちゃんともう金五郎から五十両巻きあげているんだ。そのうえまだ親たちに難儀をかけようなんて、あんまりすることがあくどすぎる。黙っていればどこまでつけあがるかわかりゃしねえ。どうせおれは一度親に泣きを見せたからだなんだから、せめてこんどは人の親たちのために、このからだを張ってみようという気になった。だから、お品、おまえにはすまねえが、おれのことはあきらめてくれ。たのみます」
「いやだ、あたしはいやだ」
理屈はわかっても、一生にたった一度の恋、その恋しい男がどうして死ににやれるものかと、お品は泣きながら強くかぶりを振る。
「おこるぞ、おれ」
「おこっちゃいやだ」
お品がまたしてもだだっ子のようにすがりついていこうとしたとき、がらりと油障子があいた。
「あ、いやあがった、先生」
ひょいと顔を出した権太が、喜太郎を見てすばやく身をひいたと見ると、五分月代、着流し、雪駄ばきといった御家人くずれらしいやつが、ぬっともう土間へはいってきた。
「おい、恵比寿屋の喜太郎というのはおまえか」
じろりと見すえるように、頭からおうへいな口をきく。

「お晩でございます。どなたさまでございましたっけね」
喜太郎はわざとていねいにおじぎをした。
「お品というのはおまえか」
人を人くさくも思っていないつら構えで、思わず喜太郎にぴたりと寄りそっているお品のほうへ目を移す。
お品は黙ってにらみかえしてやった。
「なるほど、いい女だな。これじゃだれかがあくどくほれるわけだ。おい、そうおこっていないで、もう少し男のそばを離れちゃどうだ。人前ではもっと遠慮をするもんだぞ」
「お目ざわりでしたら、どうぞおひき取りくださいまし」
「あは、は、なかなかやるな。泣いたような目をしているが、店先で痴話げんかでもやっていたのか」
「ちがいます。目にごみがはいったので、いまこの人に取っていてもらったんです」
「もう取れたのか」
「人のお世話にはなりません」
「そうもいかねえようだ。ぜひおまえを世話してえという熱心な男がある。どうだ、世話になってみる気はないか」
「お断りいたします。あたしにはもうきまった人があるんです」
「この喜太郎という男かね」
「そうです」
「きのどくだなあ。この男はもうすぐ首がなくなる」
「お武家さま、あんまりからかわねえでくださえまし。お品は気が弱いから、虫をおこすと困るです」
喜太郎がわらいながら、そばから口を入れた。
「そうか。それじゃ表へ出てもらおうかな」
「おれになんか用ですかね」
「うむ。おれは御家人くずれで、人切りを稼業にしている桜井鬼五郎だ。見知りおいてくれ」

「あんまり自慢になる稼業じゃねえようですね」
「これも稼業ならやむをえねえ。とにかく、表へ出よう。気の弱い女の前で、人切りの掛け合いでもあるめえ」
「それもそうでございますね。承知したです」
口から出ほうだいを並べているが、こいつは手ごわい。目のくばりでわかる。てんびん棒じゃあぶないと見たので、
「お品、兄貴の長脇差があったら出してくんな」
と、わざと亭主づらをしてみせる。
「はい」
目の前に強敵があらわれたのでは、死んじゃいやだとも甘ったれてはいられない。恋しい男の一大事なのだ。お品も覚悟をきめて、しゃっきりと立ち上がった。
外にまだ何人待っているのか、それとも案内役は権太ひとりか、春の夜はひっそりとして、ようやくたけていくようだ。

度胸剣術

「はい、これ――」
お品は仏壇の下の押入から死んだ兄島吉の長脇差を出してきて、たもとでぬぐいながら、土間に待っている喜太郎にわたした。その手がかすかにふるえているのは、
――にいさん、喜太さんの命を守ってあげて。
と、せつなく胸の中で念じているからだ。
「ありがとう。ちょいと見せてもらうよ」
喜太郎はそうことわって、長い間しまってあった長脇差だから、念のためにすぐ鞘を払ってみる。よく手入れが行きとどいていて、一点のくもりさえない。
「たった一つのにいさんの形見だもんだから、おとっつぁんがときどきそっと出して見ているんです」
そばからお品が説明してくれた。
「すまねえなあ、そいつを持ち出しちゃ」

「いいのよ。役にたてばにいさんもきっとよろこぶわ」

ふっと涙が出そうになるのを、桜井鬼五郎の前だから、お品は歯をくいしばってがまんする。

「きのどくだが、そんなものはあんまり役にたんだろう」

入り口のそばで、ふところ手をして待っている鬼五郎が、せせらわらうようにいった。

「じゃ、お品、借りるよ」

喜太郎は相手にならず、刀を鞘におさめて、しっかりと腰にさし、

「兄貴といっしょだと思うと、心じょうぶだ」

と、にっとわらってみせる。

「死ねばあたしもいっしょなんだから——。忘れちゃいやだ」

人目がなければすがりつきたいのにと、お品の目が火のように燃える。

喜太郎はうなずいて、くるりと鬼五郎のほうを向いた。

「桜井さん、お待たせしたです」

「在郷のいろ男、おまえいいところを見せつけるな」

「おかげで苦労が絶えねえです」

「なあに、もうすぐおれが楽にしてやる」

「まあ、表へ出てからのことにしますべ」

「よかろう。またぐ敷居が死出の旅か」

鼻歌まじりに鬼五郎はのっそりとひと足先へ出る。

「お品、出るんじゃねえぞ」

振りかえって、お品にいいおいてから、喜太郎はあとにつづいた。すばやくあたりを見まわしたが、河岸っぷちに立っているのは案内役の権太ひとりで、ほかにはだれもいないようだ。

「おや、桜井さん、ひとりかね」

喜太郎はちょっと口うらをひいてみる。

「大きく出たな、奴、おれひとりじゃ不服だといいてえのか」

「ちがうです。桜井さんはやせても枯れてもお

武家さんだからそんなことはねえでしょうが、八百鉄だの、その身内だのってのは義理も仁義も知らねえけだものたちばかりだから、桜井さんにおれをひっぱり出させておいて、あとでどんな小細工をするかもしれない。それじゃお品がかわいそうだから、できればこの家の前で話をつけてくれねえでしょうか」

喜太郎はなるべく兼田のあたりを離れたくないのだ。

「そうか。じゃ、早いとこここでやるか。おれはどこでやっても、おまえさえかたわにすれば、それで役目はすむんだ」

「深川の八百鉄にたのまれてきたんですね」

「そいつは口にしないのが悪党の仁義だ。しかし、たとえここでやっても、おまえがかたわになってしまえばお品は守りきれない。どうだ、いっそ、おまえ、おとなしくお品を相手にゆずる気はないか。相手もまさかお品を取って食おうというんじゃない。うむといいさえすれば、したいざんまいにかわいがって、そのうえおやじのめんどうも見てやろうというんだ。お品さえその気になれば、おれもよけいな殺生をしないですむ。ひとつ相談してみる気はないか」

「むだだと思いますねえ。たとえ相手が公方さまでも、おれの目の黒いうちは、お品はうむといわねえでしょう。なにしろ、おれに首ったけなんでねえ」

「そうか。じゃしようがねえ、ここでかたわにすることにするから、刀を抜け」

鬼五郎はにたりとわらいながら、目くぎにしめりをくれる。

「いよいよやるかね」

びくともしない喜太郎だ。

「来いっ」

さっと抜刀して、鬼五郎はいきなり大上段に振りかぶった。腕に自信があるから、てんで喜太郎ぐらいはのんでかかっているのである。

「おうっ」

ぱっと飛びすさって長脇差を抜きあわせた喜太郎は、むろん青眼だ。

——こいつはすごい。

案の定、人切り鬼五郎と自称するだけあって、桜井の上段には一撃必殺のすごみがひそんでいるようだ。加うるに、性格は世をすねて冷酷残忍、人を人臭くも思わず、わが腕を誇って、むしろ人を切ることをたのしんでいるようだから始末が悪い。こっちに少しでもこわいとか、かなわぬとか、そういう動揺の色があれば、容赦なくのしかかってくるだろう。

腕まえからいっても、桜井は心形刀流の免許、正式に道場で何年も修業しているのだから、田舎修業の喜太郎など、竹刀を持っての試合ではとうてい足もとへも及ばない。

が、喜太郎ははじめから捨て身だった。切るか切られるかの真剣勝負となると、腕より度胸がものをいう。

切るなら切ってみろ、ただ切られるものか。

そっちが切ってくれば、こっちも捨て身の突きに出て相打ちに行ってやる、上段から振りおろすそっちの太刀が早いか、まっしぐらに突いて出るこっちの長脇差のほうが早いか、勝負は一瞬できまるのだ。

わざではかなわなくても、持って生まれたくそ度胸のうえに、けんか場の白刃の下を何度となくくぐってきている喜太郎だ、全身に不敵な闘志をみなぎらせて、じっと鬼五郎のしかけを待っている。

しまった。侮って上段に取った鬼五郎は、とっさに後悔していた。相手の腕はそう恐れるに足りないが、すさまじい気魄だ。うっかり切って出ると、敵はよけもかわしもせず、逆に火の玉となってからだごと突きに飛びこむ。へたをすると相打ちだ。

人の命に対しては冷酷残忍になれても、自分の命は惜しい。こんなやつと命の取りかえっこじゃつまらないと考えると、それだけ鬼五郎の

弱みになる。

「えいっ」

その弱みを見せまいとして、鬼五郎は気合いっぱいにぐいとひと足踏み出す。

喜太郎は無言で受けて動かない。へたに動くとうわての敵のわざにひっかかるおそれがあるし、こっちは突いて出る機会さえつかめばいいのだから、動く必要はないのだ。むしろ、敵が一歩近くなった。こっちから飛びこんでやるからという不敵なつらだましいさえ見える。

あぶないと見た鬼五郎は、すっともとの位置へさがってしまった。くそっ、とは思ったが、どうにも手におえない。といって、勝負が長びけば近所の者が出てくるから、こっちの不利になる。いや、すでに兼田の両隣の船宿の入り口に、いくつかの顔がかさなって、じいっとこっちを見ているのだ。こいつらが同業のよしみで騒ぎだすと、事めんどうになる。人切り稼業は、早いところ切って、さっと引きあげるところに妙味があるのだ。

——あっ、喜太さんがあぶない。

出るなといわれたが、むろん出ずにはいられないお品である。はだしで家の軒下まで飛び出して、もう魂も身にそわぬ。堂々たる鬼五郎の上段は、見た目には喜太郎を頭から圧倒して、喜太郎のかっこうはへびに見こまれたかえる、そんなふうにしか見えない。

——どうしよう、あたし。

いまにもだいじな男が切り倒されるのではないかと思うと、居ても立ってもいられない気持ちだ。

と、目の前の自分の家の桟橋から、ぬっと三人ばかりぬすっとかむりの男があがってきて、そこに立っている権太となにかうなずきあっている。さっき船で逃げた八百鉄の子分たちにちがいない。きっと鬼五郎に加勢しようというのだろう。

——たいへんなことになった。

喜太さんは鬼五郎ひとりでももてあましているのにと、お品がまっさおになったとき、権太が先だちで、四人いっしょにふいにばらばらっと自分のほうへおどりかかってきた。
「あっ、な、なにを――」
「おとなしくしてろっ」
ふたりが両方から腕をつかみ、ひとりがうしろから肩をおして、ぐいぐい桟橋のほうへ引っ立てようとする。
「助けてえ、喜太郎さん」
必死に身もがきして金切り声をあげたが、その口もたちまちうしろのやつの手でふさがれている。
そのお品の悲しい金切り声を耳に聞いて、くそ、やりやがったなと、喜太郎が歯がみをしたとたん、
「待て、喜太公」
ひょいと人切り鬼五郎が飛びさがって刀をひいた。
「待てたあなんだ」
「まあ、待て」
鬼五郎はそういって、くるりとお品をさらっていく子分たちのほうを向く。
「おいおい、てめえたちはなにものだ」
「冗談じゃねえ、先生、あっしたちだ」
権太がわかってるじゃねえかといわぬばかりの顔つきで答える。
「ふうむ。てめえたちはその娘をどうしようっていうんだ」
「親分のところへつれていくんでさ」
「人さらいか――」
「なんですって」
「おれは喜太郎を切ってくれと頼まれはしたが、かどわかしのてつだいをしてくれと頼まれたおぼえはねえぜ」
「だから、先生、そっちはそっち、こっちはこっちなんでさ」
「ならねえ」

鬼五郎が一喝した。
「やせても枯れても、おれは武士の端くれだ。かどわかしやぬすっとのてつだいは断る。なんでおれと喜太郎の勝負がつくまで黙って見ていなかったんだ」
「そんなこと、どっちだっておんなじだと思うがなあ」
権太は目をぱちくりさせている。
「ばかをいえ。おれがまだ喜太郎と勝負をしている間に、てめえたちがお品をさらっていったんでは、おれも承知でかどわかしのてつだいをしたことになる。今もいうとおり、おれはぬすっとやかどわかしはまっぴらだ。この仕事は断るから、あとはてめえたちでかってにしろ」
鬼五郎は鍔鳴りの声高く刀を鞘におさめ、
「喜太公、聞いてのとおりだ。今夜はおれは手をひく、いずれまたそのうちに、おりがあったら今夜の勝負をつけよう」
そういい捨てて、ぬすっとかむりどもがあっけにとられている間に、さっさと浅草橋のほうへ歩き去る。
「おい、かどわかし野郎、行くぞ」
あまりにもあくどすぎる八百鉄一家の卑劣さに、さっきから煮えかえるような怒りが腹にたぎっている喜太郎は、すかさずだっと権太に切りつけていった。
「わっ、あぶねえ」
権太はびっくりして、夢中で横っ飛びに逃げ、その逃げたほうがあいにく河岸っぷちだったので、たちまちどぶうんと川の中へ水しぶきをあげている。
「やっちまえ」
「たたっ切れ」
お品を押さえていたやつらも、今はそれどころでなく、うろたえて長脇差を引き抜いたが、自分たち三人きりではとても喜太郎にかなわないと見たのだろう、だれからともなく、ばたばたっと柳橋のほうへ逃げだした。

「待てっ、野郎」
猛然とあとを追いかけようとする喜太郎の胸の中へ、
「いけない、喜太さん」
髪も衣紋も振り乱してまっしぐらに走って出たお品が、はじかれたようにしがみついていった。
「のけっ、お品」
「いいえ、待って、行っちゃいやだ」
その間にぬすっとかむりどもはどんどん逃げのびてしまう。気がついてみると、近所の軒下へみんな人が出てきて立っているのだ。こんなところでいつまでもごたごたしていてはみっともない。
「もういい、お品、おれ行かねえから、家へはいれ」
喜太郎は追うのをあきらめて、長脇差を鞘におさめ、
「御近所さま、お騒がせして申しわけねえです」
軒下の人たちにあいさつをして、いそいで家へはいった。

女のしあわせ

「お品、どこもなんともしなかったか」
はだしでしょんぼりとついて土間へはいりながら、それでもまだたもとをしっかりつかんで放そうとしないお品の姿を見ると、喜太郎はさすがにいじらしくなる。
「あたしもう、ひとりで家にいるのこわい」
「だから、おれ、おやじさまが帰ってくるまでいっしょにいてやるべ」
「ほんとう、喜太さん」
「うむ、ほんとうだ」
今夜のように執拗にねらわれたのでは、お品ひとりおいていくのは心配だし、八百鉄一家へ切りこむのはもっと夜がふけてからでもいいと、喜太郎はとっさに腹をきめたのだ。
「ねえさん、水を持ってきました」

女中のお霜が気をきかせて、台所から小だらいに水を取って持ってきてくれた。
「ありがとう。あんたから先へ洗って」
お品はあくまで喜太郎を帰さない用心をする。
「おれは上がらなくてもいいだ」
おやじの留守に娘ひとりのところへ上がりこんでいるのは、やっぱり気のひける喜太郎だ。
「そんなこと、いやだったら」
お品は上がりかまちへ喜太郎を押しつけていって腰かけさせ、さっさと足もとへしゃがんで、わらじのひもを解いてやる。あさぎの結い綿をかけた島田の根がかっくりと落ちていたいたしい。
「髪がこわれちまったぞ、お品」
「四人がかりで、あたしを押さえつけるんだもの」
「悪いやつらだ。おれのだいじな嫁っ子をこんなにいじめやがって」
「さあ、いいわ」
足を洗って、ちゃんと手ぬぐいでふいてくれて、喜太郎はもったいないような気がする。
「どうもすみません。おかえしに、こんどはおれ洗ってやるべかな」
「そんなことおとっつぁんに知れたら、女のくせにって、あたし勘当されるわ」
「そういえば、おやじさま、今夜はばかにおそいようだな」
「お客さまのお供で、綾瀬の夜網へ出かけたんだから、どうせ帰りは九ツ（十二時）すぎでしょう」
お品は洗った足を横すわりになって、器用にふきながら答える。
「そいつはたいへんだ」
それまでお品の番をしてから深川へ乗りこんだのでは、真夜中になってしまう。
「なにがたいへんなの」
敏感なお品がたちまち聞きとがめる。

「年寄りに夜露は毒だのになあ」
うまくごまかす喜太郎だ。
「稼業ですもの、慣れてるから」
お品は小だらいをお霜にいいつけてかたづけさせ、自分は髪を直しに茶の間へはいっていく。
「あんた、おなかがすいたんでしょう」
「うむ、少しすいてきたな」
「いますぐしたくするわ——ああ、あんた、その物騒な長脇差、押入へしまっといて」
よく気のまわるお品だ。これがなくては深川へなぐりこみはかけられない。
「今から御亭主をそうあごで使うようじゃ、先が案じられるな」
「ごめんなさい。あたし髪を直してるもんだから、手がよごれているんですもの」
しめた、お品は仏壇とは反対のほうにいて、仏壇に背を向けているようだ。今のうちに長脇差を押入へしまったふりをして、どこかへかくしておこう。喜太郎はふっとそう思いついたので、
「しようがねえです。好きで嫁っ子にするだから、いうことを聞いてやるべ」
と、軽口をたたきながら立ち上がった。
長脇差を持って茶の間へはいってみると、案の定、お品は反対側の窓下のほうにうしろ向きになっているが、ちゃんと鏡台がこっちを向いている。
「あ、いけねえ」
鏡の中で顔を見あわせて、喜太郎は思わず苦笑してしまった。
「どうしたの？」
お品の目がいぶかしげにまたたいている。
「おれ、なんだかお品がかわいがってやりたくなっただ」
なんとかごまかしてしまわなくては、このままでは細工がきかぬ。
「だって、手がよごれているんだもの」
ぽっと赤くなりながら、髪をくし巻きにした

手の油をいそいでふところ紙でふきはじめる。
かわいがってもらうのを、からだじゅうで待っているような姿だ。義理でも一度は抱いてやらなくてはおさまりそうもない。
喜太郎は長脇差をすばやく茶の間の外へおいて、そっとふすまをしめる。
「さあ、かわいがってやるべ」
わらいながらそばへ寄って、うしろから肩を抱き、顔をあおむけにぐいと胸の中へかかえこむようにする。
「お霜、こないかしら」
舌の先まで甘ったるくなって、うっとり目をつむるくちびるへ、おおいかぶさるようにくちびるをあわせて、そこまではもう何度も経験のあるふたりである。
「お品、ちょっと待ってくれ」
「なあに」
すぐ目の下で細く目をあいて、その目が燃えるようにうるんでいる。
「おれ、ちょっと表を見てくる」
「どうして——」
「権太のやつが川からあがっているかもしれねえ」
「もうとっくに逃げてるわ」
「けど、こんなとこへふいに飛びこまれると困っちまうからな」
それを口実に、長脇差をどこかへかくしてこようという腹だ。
「だいじょうぶだったら」
「けど、安心はできねえ」
「いやだ、放しちゃ」
かむりをふって、わきの下から背へからみついている右手が男を放そうとしない。
「さあ、たいへんだ」
「どうしたのよう」
「おれ、ちょいと表へ行って見てくる」
「いやっ、いやっ」
「お霜がきたらどうする」

「こやしないわ」
ひっそりとふけていく家の中は、物音一つしない。
「お品」
「なあに」
「おれたちはまだいいなずけの仲でいる約束だったっけな」
「ええ」
「祝言もしねえのに、赤ん坊ができるとたいへんだ」
「ええ」
「さあ、もう店へ行くべ」
「ええ」
お品の返事はうわのそらだ。ぐったりと全身から力がぬけてしまって、なにか甘い夢の中へ酔いとろけている。
——しまった。
いつの間にか喜太郎のあいた手がお品の胸へすべりこんで、乳ぶさをなぶっていたのだ。

——喜太郎、おまえは今夜切り死にをするからだかもしれねえんだぞ、あとでお品を泣かせるようなまねをしてもいいのか。
きびしい反省のむちが、びしりと耳もとで鳴る。
——男ならすぐに立て。たとえお品が泣いても、突っ放して深川へ走れ。
が、女のしあわせを男の腕の中へまかせきって夢うつつに目を閉じているお品のいとしい顔を見ると、喜太郎はどうにも鬼にはなりきれない。

どろを吐く泥亀

「こんばんは——」
店の油障子がおずおずとあいて、遠慮そうにだれか土間へはいってきたようだ。
はっと聞き耳を立てた喜太郎は、胸の中へ抱いていた夢うつつのお品を思いきりよくそこへすわらせて、

「お品、だれか来たようだな」
と、その目はもうゆだんのない男の目にかえっていた。
「いやだあ、あたし」
せっかく今夜はふたりきりで、甘い夢の世界へからだごと溶けこんで、ほんとうの御夫婦になれそうだと、うっとりと喜太郎のなすにまかせていたお品は、どうにもまだその夢があきらめきれない。熱ぼったい目をうるませたまま、くずれるように男の肩へすがりついていく。
「こんばんは——」
「それみろ。放さねえか、お品」
「いやだなあ、あたし」
「いや、おれが出てみる」
今夜は再三、あくどい八百鉄一家の襲撃をうけているのだ。喜太郎はむりにお品を放して、茶の間を出ながら、すばやくそこに置いてあった長脇差を取る。
「ああ、喜太さん、いてくれたね」

「なんだ、亀吉じゃねえか。どうしたんだ、そのざまは」
さっき悪態をついて逃げて帰った泥亀が、頭からぬれねずみになって、寒そうにそこに立ってふるえているのだ。
「どうもすんません。兄貴のいうとおりになっちまやがったんで」
「ふうむ。じゃ、仲間にやられたんかね」
「ばかにしてやがる。さんざん人をおだてやがって、身内にしてやるからとこき使っておいて、こっちはもう身内も同然だから、黙って見ていちゃ悪いと思って、さっき権太たちが桜井鬼五郎を案内してくるあとから、のこのこと黙ってついてきたんでさ」
「なんだ、それじゃさっきのほおかむりの三人のうちにおまえもいたんだな」
この野郎と、喜太郎は泥亀をにらみつける。
「ちがうんだ、兄貴。おれはもう喜太兄いの強いのはいやというほど知っているから、柳橋の

ところからただ見物していたんだ。けど、兄貴はまったく強いねえ」
「おだてたってだめだ。てめえは、おれがもし桜井に切られたら、手をたたいてわらってやろうという了見だったろう」
「それも少しちがうんだ。もし兄貴が桜井にやられて、みんながお品さんを船の中へかつぎこむようなら、足ぐらいは持っててつだわなくちゃ義理が悪いと思ったんだ」
「あきれた野郎だなあ」
「喜太郎さん、なんだってそんなやつといつまで話しているんですよう。——亀公、さっさと出ていけ。憎らしい」
お品がたまりかねたように茶の間から出てきて、泥亀に浴びせかけた。
「こんばんは、お品さん。えへ、へ」
泥亀はお品を見あげて、変なわらい方をする。
「知らないってば、いやらしい。なにさ、その目つきは」
「髪がくし巻きになりましたね、ねえさん」
「大きなお世話じゃないか」
「うらやましいなあ。茶の間でふたりっきりで、島田がくし巻きにかわるほど喜太さんにかわいがられて——えへ、へ、道理で店は留守だと思った」
「ぶんなぐるから」
お品はさっと白いこぶしを振りあげたが、半分はいい当てられているので、思わず顔がまっかになる。
「亀、人の心配なんかしていると、かぜをひくぞ」
喜太郎が苦笑する。
「いけねえ、おお寒い。こっちもとんだぬれ場でござんしてね、どぶうんときやがった」
「どこでぬれてきたんだ」
「なあに、三人のやつがどんどん両国橋をわたろうとするんで、黙っていたんじゃせっかくのこっちの働きがわからねえと思って、兄いたち、

とんだことでござんしたねえと、ちょいとおせじを使ったんです。おや、野郎、どこにいやがったんだ。へえ、兄いたちのおてつだいをしようと思って、柳橋んとこへ立って見ていやしたというと、この野郎、てめえがしょっぱなにどじを踏むからこんなことになるんだ、てめえは喜太郎につかまってなにもかもしゃべっちまったんだろうと、ここで負けた腹いせに、三人でおれを袋だたきにしやがって、どぶうんと大川へほうりこみやがった。おれが船頭でなけりゃ、あぶなくお陀仏にされちまうとこだったんです」
泥亀はさすがにくやしそうな顔をする。
「あいつらはそういうやつらなんだ。義理も人情もてまえがってなときばかりで、つごうが悪ければすぐ敵にまわる。それをやつらの身内にしてもらおうなんて考えた自分がばかだったと、まあ、あきらめるよりしようがねえな」
ばかじゃ楽はできないと、喜太郎はなんだかおかしい。
「あきらめるとも。だれが、くそ、もうあんなやつらの身内なんかになってやるもんか。おれは腹をきめちまったんだ。喜太さん、金五郎のいるところ、教えてやろうか」
「なにっ」
「おれ、しゃくにさわるから、みんなしゃべっちまう。文字富のひっこした先は、すぐそこの本所一つ目の橋の近くで、金五郎はそこの二階へ押しこめられているんだ。こんどは八百鉄がしり押しで、どうせ恵比寿屋から大金をゆすろうって魂胆なんだろ。行徳の梅吉は、もう自分が五十両もうけちまったから、こんどはあんまり気乗りがしなかったんだが、親分の八百鉄がそれを耳にして、恵比寿屋ならもっとゆすれる、おれが一役買ってやるからぜひやれって、半分は梅吉をむりにおどかしてやらせたんだ」
「どんなふうに恵比寿屋をゆすろうってんだね」

喜太郎は念のためにきいてみる。
「くわしいことは知らねえが、身内の話じゃ、文字富と金五郎を縛って並べておいて、そこへ親を呼び出す。梅吉はどうしても番所へ突き出すといっているが、だんなはどうするねって、八百鉄が口きき役にまわってすごもうって筋書きらしいね」
「金五郎は文字富の二階で縛られているんかね」
「はじめは船ん中で、文字富がしびれ薬をのませて二階へ運んだんだが、もう縛られたかもしれねえな」
「そうか。八百鉄はおれがいちばんじゃまになるんで、それで何度も眠らせようとしたんだな」
「そうなんだ。だいいち、喜太さんがいちゃ、お品さんをどうすることもできないからね」
「文字富の家は、一つ目の橋の近くのどこなんだ」
「相生町一丁目と二丁目の間の横町の紺屋の裏だからすぐわからあ。喜太さん、なぐりこみをかけるのか。ひとりじゃあぶねえぜ。今夜は八百鉄が自分でがんばってるかもしれねえからな」
喜太郎はそれには答えず、
「お品、なんかおとっつぁんの着古しを亀に一枚出してやってくれ。こんなぬれねずみで歩いていちゃかぜをひく」
と、お品にいいつける。
「そんなやつ、かぜひいたって自業自得だわ」
お品はまだおこっている。
「そうか。じゃ、おれのをやるからいい」
喜太郎はいきなり自分の着物をぬごうとする。
「なにをするんですよ」
お品はびっくりして、うしろから喜太郎の両腕を抱きとめ、
「だれも出してやらないっていってやしないじゃありませんか。どうして、あんたきょうそうすぐむかっ腹をたてるんですよ」
と、もう半分泣き声になっている。
「そんなら早く出してやれよ。悪いやつだって後悔すれば真人間だ。人がかぜをひくのを、ざまあみやがれって見ているのは、あんまり感心できねえ。そんなのはおれはきらいだ」
「わかったってば。あたしが悪かったんだから、おこっちゃいやだ」
「べつにおこっちゃいねえ」
「いますぐ出してくるわ」
お品はいそいで茶の間へはいっていく。
「なるほどねえ。喜太さん、女にもすごい腕だなあ」
「ひやかしちゃいけねえ」
「ひやかしゃしねえけれど、お品さんほんとうに首ったけなんだなあ。喜太さんにかかると、まるでぐにゃぐにゃだぜ」
泥亀はぺろりと赤い舌を出して首をすくめてみせる。

喜太郎はもう相手にならず、むっつりと炉ばたへすわってなにか考えこんでいた。

八百鉄の月

それからまもなく、喜太郎は黙々と夜ふけの両国橋を東両国のほうへわたっていた。
江戸へきてまだ六十日にもならないのに、またけんか凶状をかさねて旅へ出なければならないのかと思うと、われながらわが運命がのろわしい。
が、金五郎の行くえがわかった以上、もうぐずぐずはしていられなかった。それでなくてさえ、今夜は八百鉄の家へ切りこむ決心でいたのだ。
「お品、なんにもいわずにこの島吉兄貴の長脇差を今夜おれにくれ」
泥亀に父親の着物を出してきてやって、こっちの顔色を見ながら前へきてすわったお品にいきなりいうと、お品はさっと青ざめてうなだれ

てしまった。
「おれはどうしても八百鉄を切る。どう考えても、あいつを生かしておいては、恵比寿屋の親御たちが泣かなければならないし、しまいにはおまえの身に災いがかかって、おとっつぁんの今までのがまんもむだになるだろう。いや、ただ恵比寿屋やここの家ばかりではない。だれかが身を捨ててあいつを切らなければ、これから先、幾人の人間が泣かされるかわからないんだ。おれはもう覚悟をきめた。おまえも覚悟してくれ」
止めてもむだだと思ったのだろう、お品は黙ってうなずいた。
「よし、そう話がきまったら、塩むすびを二つばかりこしらえてもらうべ。腹がすいていちゃいくさはできねえからな」
着物を着替え終わった亀吉が、あきれてぼかんとそこに突っ立っていた。
「亀さんも食べる」
台所へ立ちながら、お品がきく。
「ごちそうしてくれるんかね。ありがてえな」
喜太郎が二つ、亀吉が二つ、そしてお品が一つ、別れの杯ではなくて、別れの塩むすびだった。
「喜太さん、ほんとうにあたしをおかみさんだと思っていてくれるんでしょ」
上がりかまちに腰かけてわらじをはきだすと、お品がうしろへきて、あらためて念を押した。
「女房だと思ってもいない者に、死ぬ相談はしねえ」
きっぱりと答えてやると、もう亀吉の前もにもなかったらしい。ひしと背中へしがみついてきて、
「あたし、あんたが今夜無事にここへ帰ってこなかったら、あたしもきっと死ぬ。忘れちゃいやだ」
ほおずりしながら、わなわなとふるえていた。涙を見せては門出の不吉になると思って、いっ

しょうけんめいがまんしているのだろう。
「よくいってくれた、お品」
なまじ止めても、これだけは思いとまりそうもないと見たので、喜太郎も正直に本心を口にする。
「うれしいわ。三途の川はいっしょにわたれるのね」
「お品、おれは八百鉄を切りに行くんで、切られに行くんではねえだ。たいていは無事に帰ってくるからな、けっしてあわてるんじゃねえぞ」
「きっと、きっとですよ」
どっとお品のほおへ涙があふれてきた。
「喜太さん、おれ文字富の家まで案内するよ」
泥亀がもそりといった。
「そんなことしてくれなくたっていい。それより、こんどこそおまえ八百鉄の身内に見つかると命がないぞ。しばらくどこかへ姿をかくしているがいいだ」
「そうはいかねえ。着物をもらったり、むすびをもらったり、一宿一飯ってことがあらあ。ほんとうなら、おれ、兄貴に助太刀と大きく出てえところなんだが、おれはあんまり弱すぎるんでね、せめて道案内だけさせてくれよ」
「そうか。じゃ、たのむ」
亀吉が自分で道案内するというくらいなら、こんどはうそではないという自信もできた。
「お品、行ってくる」
喜太郎はお品を押しやるように立ち上がった。
「喜太さん――」
お品はひとこと名を呼んだだけだった。その世にも必死なまなざしに、喜太郎はうなずきかえして、足早に兼田を出てきてしまったのである。
「兄貴、兄貴のようなのが、男の中の男っていうんだろうな。お品坊が首ったけになるわけだ」
あとからついてくる亀吉がひとりで感心していたが、喜太郎はもうむだ口はきかなかった。

どこから敵が飛び出すかわからないからである。

そのころ――。

八百鉄は文字富の家の長火ばちの前へどっかりと陣取って、差し向かいの文字富に酌をさせながら一杯やっていた。八百鉄は四十五、六の、やや贅肉のついた苦み走った大男で、堂々たる親分ぶりだが、その細い切れ長な目がかみそりのように光りだすと、なにをやるかわからない陰険冷酷な男で、腕力も強いには強いが、その世の人とも知れぬ凶暴な性格が、いつの間にかあばれ者たちを征服して、彼をこの世界の親分にのしあげていたのだ。

彼には義理だの人情だのという人間なみのものは露ほどもない。ときとして人に情けをかけるのは、なにか目的があるからで、義理を口にするときか自我を押しとおそうとするときだ。常にあくことなく金と女をねらい、一度ねらったものは手段を選ばず今まではかならず物にしてきた。それだけ多くの人を泣かせ、世間をふるえあがらせてきたことはいうまでもない。

今もかれは恵比寿屋の金をねらい、女は兼田のお品をねらいつづけている。

そして、気の多い八百鉄は、子分の女房も同然の文字富にも心をひかれ、

「お富、おれのめかけにならねえか」

と、おくめんもなく持ちかけて、梅吉の知らないうちにわがものにしてしまい、多情な文字富の口から金五郎とのいきさつを耳にして、ぬけめなくきょうの筋書きを書いたのだ。

とも知らず、八百鉄の手先になって、洲崎で喜太郎待ち伏せに失敗した行徳の梅吉が、傷定たちと仙台堀の八百鉄の家へ帰ってみると、

「親分は一つ目のおまえの家へ行っているぜ」

ということだった。

一つ目の家の二階へは、文字富がうまく金五郎をおびき出し、船の中でしびれ薬を一服盛って監禁してるはずである。親分はそのさしずにてきた。

自分で出張ったのだと思い、傷定たちといそいで駆けつけてみると、八百鉄はいつも自分がすわる長火ばちの前で、文字富に酌をさせている。それは親分のことだからどこへすわろうとがまんできるにしても、女房の文字富が立ってきてお帰りなさいといおうとしないのだ。

「お富、いいかげんにしねえか、お身内衆のてまえもあらあ。亭主が帰ってきたら、お帰りなさいと出迎えぐらいしたらどうなんだ」

むっとして茶の間へはいるなり梅吉がどなりつけると、

「梅、それよりまえに、てめえ、おれにただいま帰りやしたと手をついてあいさつをするのが、親分子分の礼儀だろうぜ」

と、八百鉄がきらっと細い目を光らせる。

「すんません。親分、ただいま帰りやした」

「そうか、御苦労だった。それで、首尾はどうだった」

「へえ、申しわけありません」

五人の先頭に口を切ってしまったんだから、梅吉は五人を代表して返事をするほかはない。

「なんだ、てめえたち、五人もそろって行って、まだ喜太郎って若僧に歯が立たなかったか」

八百鉄はじろりと五人をにらみまわす。

「こっちが弱いってわけじゃねえんですが、あの野郎はまったく化け物みたいに底の知れねえやつなんで、――なあ、兄いたち」

いちばん末席の権太がとりなし顔に頭をかく。

「ばか野郎。権太、むだ口をたたいていねえで、桜井先生をたのめ。野郎はたぶん兼田へ帰るだろうから、てめえすぐ訳を話して兼田へ案内するんだ」

「なあるほど。桜井先生なら、いくら喜太郎が化け物でも、こいつはかなわねえ」

「三下は口先よりからだを使え。早くしねえか」

「へえ、行ってまいりやす」

権太はふたたび風のように飛び出していっ

た。

ここの家は、下は玄関の三畳と、茶の間の六畳と二間きりのせまい家で、三畳のほうに八百鉄がつれてきた子分がふたり玄関をしめ、茶の間へ残った四人は、親分がいいといわないから、あぐらをかくことも、三畳のほうへさがることもできない。

「親分は、喜太郎よりお品って娘のほうが気になるんでしょ」

文字富がわざとつんと澄ましながら酌をする。

「なんだ、お富、おまえやいているのか」

「やきますさ。あたしだって女のはしくれだもの、あんな地娘のどこがいいんだろう」

文字富が亭主のほうは見向きもせず、おだやかならぬことを口走るので、はっと梅吉の目が光りだした。

「まあ、そうやくな。お品って娘は、まえからの意地で、ただ一度おもちゃにしてやりさえすればそれで気がすむんだ。おまえのほうがよっぽど情が深いし、おれはすっかり気に入っているんだ」

「うそばっかり——それがほんとうなら、みんなの前でちゃんと話をつけて、あたしをあねごと呼ばせてくださいよ。約束を忘れちゃいやだわ」

「ああ、そうだったな。こいつはうっかりしていた」

八百鉄は好色そうな目じりをさげてわらいながら、ふっと四人のほうを向く。

「おい、梅吉——」

「へえ」

「文字富はおれが気に入ったから、きょうからめかけにする、そう思ってくれ」

さすがに梅吉はくちびるをかんで、黙って下を向く。

「不承知か、梅吉」

梅吉は返事ができない。

「不服そうだな、梅吉。よし、それなら親分子分の縁を切ってやるから、ここを出ていけ。くやしかったらいつでも相手になってやるから、あらためてなぐりこみでも呼びだしでもかけろ。ちゃんと申し渡したぜ」

八百鉄はそんなずぶといことを放言して、にやりと冷酷な微笑をうかべた。

さすがに、ほかの子分たちも、だれひとり顔をあげている者はない。

殺意

「どうした、返事をしねえか、梅」

子分の女房を寝取っておきながら、破廉恥な八百鉄はあくまでもおうへいである。

行徳の梅吉も平気で女房に美人局をやらせるようなやつだから、けっして人間並みの口はきける男ではないが、こうまで人の前で踏みつけにされては、もう黙ってはいられなかった。

それにもまして腹にすえかねるのは、きのうまでわが女房であった文字富が、いつの間にかほかの男に心を移し、恥ずかしい顔ひとつするどころか、その亭主をけろりと忘れたように、こっちを見向こうともしない冷淡な態度だ。

「親分、お富はおまえさんにあげましょう」

「そうか、べつに礼はいわねえぜ」

八百鉄はふふんと鼻の先であざわらってみせる。

「ようござんすとも、そんな腹の腐った女でよけりゃ、かってに持ってお帰んなさい」

「なんだと——」

「ついでに、あっしも今夜かぎり、親分子分の杯をおかえししやす。腐ったさかなをよろこんでくわえこむような、そんな山犬の子分なんざまっぴらでさ」

くやしさにぶるぶると身をふるわせながら、それがせいいっぱいの梅吉の悪態だった。

「野郎っ」

八百鉄の手から、持っていた杯がさっと梅吉

の眉間へ飛んだ。向こう見ずの腕っ節にものをいわせて深川一の悪親分になりあがった男だから、ねらいそこなうようなことはめったにない。

「あっ」

梅吉が思わず眉間を押さえ、その手のひらを見なおすと、べっとり血がついていた。

「ざまあ見やがれ。いくじなしのくせに、とっとと出てうせろ。まごまご泣きごとをならべていやがると、そのやせ腕をへし折ってくれるぞ」

「ここはおれの家だ」

「大きく出たよ。おまえに買ってもらった物なんか、なに一つないじゃないか。あたしの物をこそこそと持ち出してばかりいたくせに」

そっぽを向いたまま、文字富が冷笑する。

「ぬかしやがったな、あま」

どうにも引っこみがつかなくなって、長脇差をひっつかみながらかっと立ちあがるのを、

「梅、待て——。まあ、こっちへこい」

見かねた傷定が押さえて、そのまま表へ連れ出していった。刀をふりまわしたってとうてい八百鉄にはかなわない男だし、ひっつかまってねじ伏せられ、大の男がひいひい音をあげるのを、黙って見ていなければならないのもつらいからだ。

「ばかな野郎だ。お富、これでいいか」

ふたりが出ていってしまうと、八百鉄は文字富にそうききながらわらった。

「やっぱり貫祿がちがうんですね、親分」

「まあ、そんなもんかな」

「あたし、これでさっぱりしたわ。今夜からだれに気がねもなく、晴れて親分のおかみさんになれるんですものね」

「うむ、かわいがってやるぜ」

「じゃ、親分の子分は、みんなあたしの子分だと思っていいんでしょう」

「ああ、いいとも」

ふたりともけろりとして、杯をさしたりさされたり、そこに残ったふたりの子分たちのほうが顔負けして、半分はあきれながら、困ったようにもじもじしている。

梅吉を連れ出した向こう傷の定吉は、もと石巻の佐助の子分だった。親分とふたりで江戸へきて、深川の八百鉄のところへわらじをぬいだ一宿一飯の恩義があるから、お品ひっさらいの一役を買って柳橋の兼田へ押しかけたが、そこでまた因縁つきの喜太郎に敗北して追っ払われ、恥ずかしくて八百鉄に顔向けができないからといって、佐助は傷定だけを残し、自分はそのまま江戸を落ちてしまった。傷定がひとりであとへ残ったのは、親分佐助にかわってなにか八百鉄一家へみやげが残していきたかったからで、いわば客分としてやっかいになっていたのだ。

が、いま八百鉄が子分の女房を平気で寝取ったやり方のあさましくも乱暴きわまる所業を見せつけられて、すっかりあいそがつきたらしい。黙って梅吉を両国橋のたもとまでつれ出し、

「梅、おれはおまえをここまでひっぱってきたが、べつになんにもいうことはねえんだ。ここで別れよう」

と、ふいに立ち止まっていった。

「どうするんだね、兄貴は」

「おれは今夜の八百鉄親分のやり方は好かねえから、このまま江戸を売ることにする」

「ああ、そうだったのか」

「考えてみりゃ、おれもおまえもあんまりいいことはしてきていない。ずいぶん世間を泣かしているんだから、いまさら人らしく意見なんかしようとは思わないが、文字富のような女だけはあきらめたほうがいいぜ。腹をたてるだけ、こっちが損だ」

「うむ、あんなちくしょうみたいなあま、おれはもうあきらめている」

「そうか。おめえにいいてえことはこれだけだ。じゃ、達者で暮らしな」

傷定はそういうや、もうさっさと吾妻橋のほ

うへ別れていった。
「すまねえ、兄貴」
やみに消えていくそのうしろ姿を見送っていた梅吉は、さむざむと川風が腹の底まで吹きぬけていく気持ちだった。
——傷定がいうとおり、おれだってけっしてこれまで人間並みのまねはしちゃこなかった。自分が泣かされる身になって、人を泣かす悪事というものがどんなに罪なものか、梅吉ははじめて身にしみてくるのである。
それにしても、ああまで冷淡にお富にそむかれたくやしさ、きっぱりあきらめたと傷定にはいいきったものの、まるで胸が煮えくりかえるようで、いても立ってもいられない気持ちである。
あんな女に、おれははじめからほれていたわけじゃなかったんだ。お富が、女ばかりじゃ寂しい、どろぼうがこわくってとおれに持ちかけてきたから、それなら泊まっていってやっても

いいぜと、おれも木や石じゃねえから、ついいい気持ちになった。
——そうだ、あの晩おれは目が出て、二十両ばかりふところにあった。
そうか、してみると、お富は、おれという男より、あの金が目あてだったんだな。
「梅さん、あたしは執念深いんですからね、捨てると承知しないよ」
「だれが捨てるもんか」
「でも、心配だねえ。様子はいいし、ほどはいいし、こんなにお金を持たせておくと、どこへ行ってうわきをするかわかりゃしない。このお金はあたしがあずかっときますからね」
「ああ、いいとも。金なんざ一度目が出りゃ、いくらでもふところへころげこんでくらあな」
いい気になってあっさり二十両渡してしまったが、ほどのいいのはお富のほうで、あのときからおれはもういいように手玉に取られていたんだ。

その後、こっちはばったりと目が出なくなり、いつも手ぶらで帰ると、
「男のくせに、おまえって案外いくじがないんだね。賭場で目が出なかったら、ぬすっとでもゆすりでも、金のはいる道はいくらでもあるじゃないか」
と、平気でぬかしていた。こっちは冗談だと思い、
「ふざけちゃいけねえ、ぬすっとをすりゃ手がうしろへまわるぜ」
とやりかえすと、
「じゃ、手がうしろへまわらない筋書きをあたしが書いてやろうか」
そういって仕組んだのが、恵比寿屋の金五郎をひっぱりこんでの、あの美人局だった。
あのときの五十両だって、仲間はみんなおれがばくちでとられたようにいっているが、じつはそれもお富の知恵で、
「少しまとまった金がはいったとわかると、仲間が借りにきてうるさいからね、みんなばくちで負けたといいふらしておかなくちゃいけないよ」
といって、おれがこづかいにもらったのはたった三両だった。
いや、金のことなんかどっちだっていい。あたしはどうしてこうおまえがかわいいんだろうと、それだけ毎晩口ぐせのようにいってやがったくせに、あれもおれをうまく使うための手だったんだろうか。
「ちくしょう、もう承知できねえ」
あの燃えるようなはだを八百鉄に寝取られたんだと思うと、取った八百鉄も、取らせたお富も、生かしちゃおけないと思う。
「よし、姦夫姦婦、おれはふたりならべておいて、きっと首をたたきおとしてやる」
梅吉の胸へむらむらっと殺意が燃えあがってきた。

忍び寄る影

暗い両国橋を、どかどかと駆けわたってくるやつがある。

はっと梅吉が目をみはっていると、向こうも前まできて、ぎょっとしたように立ち止まり、やみをすかしてみて、

「なんだ、行徳の兄貴じゃねえか」

と、安心したように声をかけてきた。

熊松、ひょろ辰、岩吉の三人で、亀吉を使って船でお品をさらいに行った帰りである。

「どうした、熊」

「面目ねえが、兄貴、またしくじった」

「そうか」

「なあにね、はじめは亀がのろまだから、もうひと足でお品を船ん中へひきずりこもうというところへ、あいにくあの土百姓が深川から帰ってきやがった」

ああ、そうか、こいつらはお品をさらいに行ったのかとはじめてわかったが、もうそんなことはどっちでもいい梅吉だ。

「兄貴の前だが、あの喜太郎って野郎は、まるで化け物みたいに強いなあ。おれたちあわてて逃げだして、さっき一つ目のところから船をあがると、ばったり桜井先生と権太に出会ってね、先生はこれから喜太郎を切りに乗りこむんだっていうから、それじゃいくら喜太郎が強くても、こんどはのがしっこねえだろう、それ行けってんで、こっちはまた船で柳橋へ引きかえしたんでさ」

「うまくいったか」

「それがいけねえ。桜井先生どう気が変わったか、真剣勝負のさいちゅうに、もうよしたといって、ふいとどっかへ行っちまったんで」

「そうか。仕事があんまりあくどすぎるからなあ、だれだっていやけがささあな」

「なんだって、兄貴」

「なあに、こっちのことだ。桜井先生は侍だから、百姓なんか相手にしたくなかったんだろう」

「けがをしちゃつまらねえからね。どうも喜太郎のほうが強いようだったからな」

「それで、どうした」

「またしくじりで、命からがらの逃げだしで、あんまりしゃくにさわるから、亀吉のやつを三人で川ん中へほうりこんで、いま引き揚げの途中ってわけでさ。兄貴はこれからどこへ行くとこなんですね」

「おれは親分のいいつけで馬喰町の恵比寿屋へ行くところだから、ああ、そうそう、親分は今、仙台堀の家へお帰んなすった。しくじりのときは、なるべく早く飛んで帰ってあやまっちまうにかぎるぜ」

姦夫姦婦をやっつけるには、できるだけ子分たちのすくないほうがいいから、梅吉はとっさにうそをつく。

「そいつはちょいとまずかったなあ」

「どうして――」

「親分は文字富とでれついてるときのほうが、きげんが――」

「なんだと――」

「あわ、わ、わ」

熊公はあっと気がついたらしく、あわてて逃げだす。

「兄貴、気にしなさんな。熊は夢でも見ているんだろう」

ひょろ辰がきのどくそうに取りなそうとする口の下から、

「そうだとも、京の夢は間男の夢ってね。あっ、いけねえ」

と、岩吉がうっかりまぜかえして、ふたりいっしょに熊松のあとを追っていく。

――そうか、知らぬは亭主ばかりなりで、もうみんな知っていたのか。

梅吉はまたしてもくちびるをかみしめずにはいられない。

梅吉は手ぬぐいをぬすっとかむりにしてもとの道を引きかえし、わが家の茶の間の窓下へ、足音をしのばせてそっと忍び寄った。雨戸のすきまからあかりがもれ、なにを話しているのかはよく聞き取れないが、たしかに話し声はする。八百鉄がお富を相手にまだ飲んでいるにちがいない。

——ちくしょうめ。

梅吉は、いまに見ろと、歯をくいしばった。

二階に金五郎を縛ってころがしてあるはずだから、それをなんとかするまでは、八百鉄はここが動けないはずだ。ことによると泊まるかもしれない。泊まるようなら、寝ごみへ踏んごんでやろう。もし帰るようなら、あとをつけて、うしろからふいに切り倒し、取ってかえして、文字富をたたっ切ってやる。

どっちにしても、命がけの大仕事だ。よっぽどうまくやらないと、あべこべにやられてしまう。憎いふたりをやっつけたあとなら、たとえ死んでもそれまでの命とあきらめもつくが、こっちだけ殺されたんでは、それこそ死んでも死にきれない。

梅吉はごみ箱のかげへうずくまって、しんぼう強く時のくるのを待っていた。

と、中から玄関の格子があいて、だれか出てきたようだ。三下らしい。なにか鼻歌をうたいながら、竹がきの破れめから前の紺屋の広場へはいっていって、立ち小便をやりだした。

——おや。

やみではっきりとわからないが、だれかそのうしろへ、ふっと黒い人影が立ち止まったようである。

梅吉は地をはうようにして、少しそっちへ近づいていってみた。

「おい、声をたてると命をもらうぞ」

黒い人かげのいうのが聞こえた。

「あっ」

「いいから、用をたしてしまえ。話は用をたしながらでもできる」

「へえ」

「八百鉄はまだあの家にいるだろうな」

「おりやす。おまえさんはどなたさんで」

「恵比寿屋の番頭喜太郎って者だ」

あっと驚いたのは三下ばかりではなく、さてはきたなと、梅吉も思わず息をのむ。

「おまえ、おれを知っているかね」

「へえ。た、たすけておくんなさい」

「おまえが声さえたてなければ、なんにもしねえだ」

「おとなしくしやす。けっして大きな声はたてやせん」

三下はがたがたふるえているようだ。

どうやら、喜太郎は用心深く、その三下の背中を、おどしに長脇差の柄頭でこづいているようだ。喜太郎の強いのを知っている三下は、それだけで身動きができなくなったのだろう。

「あの家に、いま身内のものは何人いるね」

「玄関の三畳に、あっしと、もうひとり半太がいやす。茶の間に親分がお富と長火ばちを中にして一杯やっていやす。そのすみっこに兄貴分の者がふたりかしこまっていやす。下にはそれだけでござんして——」

「二階には——」

「金五郎さんがひとり、縛ってころがしてありやす。あっしがやったんじゃありやせん」

「そうか。まだ動いちゃいけねえぞ」

喜太郎はそういって、ちょっと思案しているようである。

切り込み

喜太郎がちょっと心配になるのは、こっちはひとりだ、階下で八百鉄をとっちめている間に、もし子分のうちに気のきいたやつがいて、二階の金五郎を枷にでも取られると、こっちの負けになる。

亀吉が案内役を買って出ていっしょについて

きてはいるが、この男にあぶないまねはさせたくない。

あとで一家の者にいじめられてはかわいそうだからだ。

そうかといって、二階の金五郎を先に助けに行ったのでは、八百鉄に逃げられるおそれがある。

——しようがない、いちかばちか、こっちが早く八百鉄を押さえつけて枷に取る、その一手だ。

喜太郎の思案がそうきまったとき、

「あっ、喜太兄貴、行徳の梅吉だ」

と、ふいにうしろで泥亀が教えた。

「しっ」

その梅吉はいそいで泥亀を制して、

「大きな声をたてるな。おれはもう八百鉄の子分じゃねえや」

と、低い声にひどく恨みがこもっているようだ。

そうか、梅吉は八百鉄に女房を横取りされて、ことによると自分が八百鉄をやっつけたいところかもしれぬと喜太郎は早くも察したが、それをいいことに梅吉の手を借りようなどと、そんなけちな了見は露ほどもおこさぬ喜太郎だ。

「おい、三下」

「へえ」

まだうしろを向いて立っている三下が、おとなしく返事をする。

「おれはこれから家の中へあばれこむ。おまえ、けがをしたくなかったら、しばらくここを動くんじゃねえぞ」

「へえ、動きやせん」

喜太郎は三下のそばを離れて、大またに文字富の玄関のほうへ歩きだした。

「兄貴、いよいよやるのか」

亀吉がはっとしたようについてくる。

「亀、あぶないから、おまえも外で待ってろ」

「すまねえなあ、喜太兄貴。おれがもっと強いと、こんなときばかにたのもしいんだが、あいにくちっとも強くないんでね」

喜太郎は亀吉の変な言いわけを聞き流しながら、そこだけぼんやりとあかるい玄関の前へ立って、がらりと格子をあけた。

「弥あ公か」

中から玄関番の半太がきく。

黙って障子をあけて、あっと半太が目を丸くしたときには、喜太郎はもうつかつかと茶の間へ押しこんでいた。

なるほど、すみっこに子分がふたり、長火ばちの前に文字富と差し向かいになっているのが八百鉄だろう。

「だれだ、てめえは——」

さすがにすばやく長脇差をひっつかんで立ち上がる。

が、いざとなると敏捷無類の喜太郎だから、八百鉄が立ち上がったときにはもうそのふところへ飛びこんで、敵に長脇差を抜くすきを与えず、胸倉をしっかりと両手で取っていた。

「おれは兼田の喜太郎だ」

恵比寿屋といわなかったのは、なるべく子分たちに二階の金五郎を思い出させない用心である。

「うぬっ、てめえか、喜太郎っていう銚子の土百姓は」

腕力には自信のある八百鉄だから、くそっ、小僧と、長脇差を捨てて、両手で喜太郎の腕をつかみ、ねじ放そうと満身の力をこめたが、喜太郎は五人力といわれるくそ力のうえに、ただ胸倉をつかんでいるのではない、柔らの手でえり締めに出ているのだから、八百鉄は思うように力が出しきれない。

「野郎っ、——くそっ」

「じたばたするでねえ、この悪党野郎め。てめえのようなあくどい毒虫を生かしておくと、これから先も善人がどれほど泣かされるかわからねえ、天に代わっておれが引導わたしてやるか

ら、おとなしく地獄へ行っちまえ」
「うぬっ、――てめえなんか」
「だめなこった。そら、締めるぞ」
じわじわとえりの手に力がはいる。まるで万力にはさまれたようで、八百鉄も手足を死にもの狂いにばたつかせたが、さっきから酒はまわっているし、たちまち息が苦しくなってくる。
「やい、てめえたち、早く、早く野郎をたたっ切らねえか」
「だめなこった」
喜太郎はちゃんと自分の背を壁でまもって、八百鉄のからだを盾にしているのだ。
「野郎っ」
「うぬっ」
ふたりの子分どもは長脇差の柄に手をかけて、八百鉄のうしろでうろうろするばかりである。
「ちくしょう、く、くるしい」
「そうら、死相が出てきた。てめえは地獄へ行くんだ」
「た、たすけてくれ」
八百鉄は醜悪な顔をゆがめて、はじめて死の恐怖におびえてきた。
「だれが助けてやるもんか。てめえを恨み死にした怨霊が、この家いっぱいに集まってきて、手をたたいてよろこんでいらあ。てめえにはその顔が見えねえか」
「た、たすけてくれ」
八百鉄はもう身もがきするばかりだ。
子分たちも、長火ばちの前の文字富も、いまはぼうぜんと親分の身もがきをながめているばかりだ。
「そうら、怨霊が迎えにきたぞ」
「た、たすけてくれ」
「てめえが殺した怨霊たちにきいてみろ」
喜太郎はわざと低い声で責めつける。事実、ひとりの悪党の死の断末魔だけに、怨霊がその肩のあたりにすがりついて手招きしているのが

子分たちには目に見えるようで、なんとなく背筋が寒くなってくる。
「お、おれが悪かった」
「いまさら、その手にのるもんか」
「く、くるしい。助けてくれ」
喜太郎はさっきから一度に八百鉄を絞めおとそうとはせず、心から後悔するようなら命だけは助けてやってもいいと思いはじめているのだ。それだけに、八百鉄の苦痛は長びくことにもなる。
「ふん。喜太郎は強いんだね」
それまで黙って喜太郎をにらみつけていた文字富が、いかにも小ばかにしたようにいいながら、すっと立ち上がった。
おやと見ているうちに、そのまま茶の間を出ていこうとする。
「あっ、文字富、どこへ行く」
二階の金五郎をねらう気だなと見たから、喜太郎の声が思わず大きくなったとき、ぱっと玄関から抜き身を持って行徳の梅吉がおどりこんできた。
「あれえ、梅さん」
お富がさすがにぎょっとあとへさがるのを、
「なにをぬかしやがる、淫婦め」
梅吉はかまわずだっと長脇差をお富の肩先へたたきつけた。
「ああっ、人殺しい」
悲鳴をあげてのけぞるお富を、
「こんちくしょう――」
と、梅吉は足をあげてけたおし、次の瞬間、
「てめえもくたばれ」
おなじ血刀で、喜太郎に押さえられている八百鉄のうしろから、背中を一刺しにした。
あっと喜太郎が手を放して、横へ逃げたので、
「ううむ」
急所の痛手に八百鉄はひとたまりもなく、どすんとそこへしりもちをついてしまった。
「やったな、梅吉」

ふたりの子分はあっけに取られて、親分が悪いのはわかっているし、いまさらどうしようもなく、ぽかんと突っ立ったきりだ。

「喜太さん」

梅吉は目をぎらぎらさせながら、

「ここはおれが引きうけた。お富と八百鉄を殺したのはおれだ。おまえさんはかまわず二階の金五郎を助けて帰ってくんな」

と、まだ息をはずませている。

「そうか、じゃおれは帰る」

ふたりが梅吉に切られたのは自業自得で、喜太郎の知ったことではない。すぐに二階へあがってみると、はたして金五郎が手足を縛られて、ふとんの中にころがされていた。いそいで縛(いましめ)を解いて、

「どうした、若だんな。しっかりしてもらいてえな」

と、抱き起こしてみると、さいわいしびれ薬はさめていたらしい。

「すまねえな、喜太さん。色男もこれでなかなか楽なもんじゃねえや」

てれかくしに金五郎はそんなことをいって、しかし、まだひどくからだが大儀そうだ。

「しようがねえな。よし、それじゃ、おれが楽な色男にしてやろう」

けっきょくは喜太郎は金五郎をおぶって帰るほかはなかった。

けんかよけのお守り

そのころ——。

お品は、おりよく父親の磯吉が夜づりの供からもどってきたので、ひとりの胸にはおさめておききれない今夜の話を洗いざらい耳に入れて、

「おとっつぁん、喜太さん死んだら、あたしも死んじまいます」

と、たもとを顔にあてて、子どものように泣きだしてしまった。

「そうか、喜太さんとうとうそんな気になってしまったんか」

無意識にたばこを詰めようとするきせるの手がひどくふるえて、

「お品、ここで泣いたってしようがなかろう」

娘をしかってはみたものの、磯吉もまた居ても立ってもいられない気持ちだった。

喜太郎にそんなまねをさせたくないから、磯吉はみすみすかたり取られるような五十両の借金も黙って八百鉄にかえしてあるのだ。それをあくまで執念深くお品をねらう八百鉄もあくどすぎるが、それならそれで江戸には町奉行所というものがあるのに、自分にひとことの相談もなく、たったひとりでそんなところへ切りこんでいった喜太郎の血気もうらめしい。

「いったい、喜太さんはいつごろ家を出ていったんだ」

「もうずっとさっきだわ」

「それじゃ、これからその一つ目の文字富の家をさがしていって、まにあうかどうかわからないが、おとっつぁんこれからひとっ走り行ってみてこよう」

どうにもほっておけない気がするのだ。

「おとっつぁん、あたしも、あたしも行く」

「ばかいうな。女がそんなところへ行って、なんの役にたつんだ」

「いやっ、いやっ、あたしも行かせて」

かわいそうにと、磯吉はその娘の必死な顔を見て、またしても老いの胸が迫る。もし喜太郎の身にまちがいでもあればむろんのこと、たとえうまく八百鉄を切っても、喜太郎にはまえのけんか凶状があるから、今夜のうちに江戸を立たせなければならないのだ。

追われて逃げる者に、足弱の女は足手まとい、いっしょに落としてやりたくても、喜太郎が迷惑するのだ。鬼になってもお品をとめて、時のくるのを待たせなくてはならない。それならなまじ顔を見せないほうが、おたがいにあきらめ

がいいだろう。
「お品、おまえは行っちゃなんねえ」
「おとっつぁんはどうしてそう意地が悪いのよう。あたしが、あたしがどんなに喜太さんのことを思っているか、ちゃんと知ってるんじゃありませんか」
まったく手がつけられない。磯吉が立つにも立ちきれず、当惑しているとき、がらりと表の油障子があいた。
「あっ、親方――」
勢いよく土間へ飛びこんできたのは亀吉だ、――亀吉はそこに磯吉がすわっているのを見ると、このあいだ悪いことをして追い出されたばかりなのだから、
「へ、へ、こんばんは」
と、急にしりごみをする。
「亀さん、あの人は、――喜太さんは」
いっしょに行った亀吉がひとりで先に帰ってくるようではと、お品の顔がさっと青ざめる。
「御注進、御注進、たいへんだぜ、お品ちゃん」
「あっ、やっぱり――」
「そのとおりなんだ。喜太郎兄貴は強いのなんのって」
「なんですって――」
「いま、恵比寿屋の若だんなをおぶって、そこへ帰ってきまさあ」
「ばか野郎、なぜそれから先へ早くいわねえんだ」
磯吉がほっとして、思わず亀吉をどなりつけている間に、お品はもう足もとから鳥が立つように、ひらりとはだしで土間へ飛びおり、あけっぱなしの入り口から風のように表へ走りだしていた。
「亀、喜太さんは八百鉄を切ったのか」
こんどはそれが心配になりだす磯吉だ。
「いいえね、親方、喜太兄貴が八百鉄の胸倉をとってぎゅうぎゅういわせているところへ、――八百鉄に女房のお富を横取りされた行徳の梅吉

が飛びこんでいって、あっという間にお富をたたっ切り、八百鉄の背中を刺し殺してしまったんです」
「そうか、そうか。じゃ、下手人はその行徳の梅吉って男なんだな」
磯吉は、やれ助かったと、我にもなく涙がこぼれそうになる。
「お品、おまえまでおれにぶらさがっちゃ重いよう」
金五郎をおぶった喜太郎が、そんなことをいいながら、やっと土間へはいってきた。
「うそばっかり――。ぶらさがりもしないのに」
お品はもう舌がとけてしまったように喜太郎をこづいておいて、いそいで台所のほうへ足を洗いに逃げていく。
「おやじさま、御心配をかけたです」
「うむ、まあいい、まあいい。それで、若だんなはどうしたんだね」
「まだ薬がさめたばかりで、からだがだるい、頭も痛いっていうんで、このまま家へつれていって、親だんなが心配してもいけねえと思ったもんだから」
「そうか、そりゃいいところへ気がついた。二階で少しお寝かせ申してな、なあに、恵比寿屋さんへは、そうだ、ちょっと話もあるから、あとでおやじがお知らせにあがるとしよう。亀、手を貸しな」
「へえ」
磯吉は亀吉にてつだわせて、かいがいしく金五郎を二階へかかえていく。
なんともまの悪い金五郎は、眠っているふりをして、ひとことも口をきこうとはしなかった。
足を洗ってきたお品は、台所からすぐに茶の間へはいって、仏壇にあかしをあげ、そのままそこで急にたもとを顔にあてている。うれしくて涙がとまらないのだろう。
「あれえ、お品、泣いてるのか」
「知らない、人の気も知らないで」

「そんなことはねえだ。おれお品の気持ちちゃんとわかってるから、こうやって無事に帰ってきたんだけどな」

磯吉が二階からおりてきて、喜太郎とさし向かいの炉ばたへすわった。

「喜太さん、これだけは年寄りのいうことをぜひひとつ聞いてもらいたい」

「どんなことでございましょう」

「聞けば、おまえさんは八百鉄を手にかけてはいないそうだ。けど、八百鉄にはほかに身内がたくさんいるし、今夜の桜井鬼五郎という御家人くずれも、けっして喜太さんにいい気持ちは持っていなかろうと思う。それやこれやで、おまえさんがこのまま江戸にいると、まためんどうが起こる。今夜のうちといってもなんだから、あす夜のあけないうちに江戸を立って、三月か半年、上方見物でもしてきてもらいたいと思うんだが、どんなもんだろうね」

なるほど、そういわれてみると、たしかにそのとおりだ。あれだけはでなことをやってのけたのだから、悪い親分でもなかにはほんとうに恩をうけた子分も何人かはいるだろう。それらにねらわれると、べつにこわくはないが、また刃物ざんまいにならないとはかぎらない。

「よくわかったです。おやじさまのいうとおり、わし、今夜にも江戸を立ちます」

お品がびっくりしたように仏壇の前に立ちつくしている。

「そうか、そうか。そう話がわかってくれれば年寄りも安心だ。そこでな、喜太さん、おまえさんひとりを手放すと、またどこでどんなけんかをやるかわからない。それではせっかく仏作って魂入れずになる。けんかよけのおまもりにうちのお品をつけてやるから、そう思ってもらいましょう」

「けど、それじゃ年寄りのおやじさまがひとりになって――」

「いいや、あとのことはなんにもいってもらわなくてもいい。ここのところは年寄りのいうことを、ただはいはいと聞いてもらいます」

「わかったです。ありがたく、わし、おまもりをいただいていくです」

「そうか、いうことをきいてくれるか。ありがたい。それじゃな、喜太さん、おれはこれから恵比寿屋へ行って、親だんなにようく今夜のわけを話して、いろいろお願いもしてくるから、お品と、忘れ物のないように旅じたくをしておくがいい。――お品、おとっつぁんちょっと恵比寿屋さんへ行ってくるよ」

磯吉は気軽に立ち上がって、さっさと家を出ていく。

「さあ、たいへんだ」

喜太郎は承知はしたものの、いささかめんくらった形で、したくといっても何をどうしていいのか見当がつかず、思わずお品のほうを見る。

「今夜駆け落ちだとよ、お品」

「そんなこといったって、あたし」

お品はうれしい。うれしいにはうれしいが、これもあんまり急で、ただぼうっと喜太郎の顔をながめている。

おかしなことには、ふたりはまだ茶の間と炉ばたに別れて、そばへ寄ることも忘れているようだ。いや、忘れているのではなく、いよいよ晴れていっしょになれるのだときまったとたん、ふたりともなんだか安心して、そばへ寄るのがちょっと気恥ずかしくなっているのかもしれない。

江戸おもしろ事典

江戸町火消し

江戸町火消しは何組あったか

「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるほど、江戸の町には火事と喧嘩が多かったが、火事場における花形スターは、なんといっても威勢のよい町火消したちであった。

この町火消しは、享保四年（一七一九）に、例の「大岡裁き」で知られる名奉行、大岡越前守忠相の考案によって創設されたもので、いろは四十八組が制定された。

もっとも、ひとくちに「いろは四十八組」とはいうものの、実はそのうちの「へ」「ひ」「ら」の三組は字音がきらわれ、「百」「千」「万」の三字に換えられているため、いろは文字を頭にいただく組は、正確には四十五組ということになる。

その各組の編成はつぎのようになっており、その持ち場もきちんと分けられていた。

一番組　い、よ、は、に、万。
二番組　ろ、せ、も、め、す、百、千。
三番組　て、あ、さ、き、ゆ、み、本。
五番組　く、や、ま、け、ふ、こ、え、し、ゑ。
六番組　な、む、う、ゐ、の、お。
八番組　ほ、わ、か、た。
九番組　れ、そ、つ、ね。
十番組　と、ち、り、ぬ、る、を。

四番組が欠けているのは、「四」が「死」に通じるのがきらわれ、また七番組が欠けているのは江戸っ子の訛りで、「火地」と「死地」が混同するためらしい。なお、「京」の代わりに「本」をあてたのは単に縁起によるようだ。

また、その持ち場は、たとえば一番組は浅草橋、筋違橋の川筋から飯田町、小川町、神田橋をへて呉服橋に至るまでの堀端から、呉服橋通り一丁目、四日市、江戸橋から大川端通り、両国川通りまで——といったようになっていた。

そして、それぞれの組の組織はつぎのとおりであった。

頭取　各組の総取締役。組頭ならびに全消防夫の上にある。

頭　これは組頭のことであり、各町内に何人という定員があった。

纏　いわゆる纏持ちで、組中の花形スターである。

梯子平人　梯子を持つ役。

火消しの隊員で、鳶口を持って働く。

人足　火消しの員数外で、雑用役。

以上のうち、頭取は世襲組と一代立身組の別があり、また一老、二老、お職の三段階に分かれていて、普通、俗に「顔役」と呼ばれたのは、お職の頭取なのである。

なお、平人以上頭までは、その働きと人望によって出世でき、もし頭となるべき器量、働きをもちながらも、町内に頭の空席がないときには、頭と同格の「世話役」に取り立てられるようになっていた。

纏持ちはなぜ花形スターか

纏は軍隊における連隊旗であり、纏持ちは連隊旗手のようなものである。彼ら消防夫たちは、組の頭取の下に、信義を重んじ、廉恥をとうとび、つねに纏を汚さぬよう心がけた。中でも纏持ちは、ひとたび持ち場に纏を立てたからには、たとえ猛火の渦に巻かれようとも、断じて退却しようとはしなかった。

そのような、纏と運命を共にする覚悟を定めた纏持ちの姿は、まさに戦場にのぞむ武士をしのばせるものがあり、そのため他の消防夫たちも、いちだんと奮いたって消火に力をつくした

ものなのである。

天保十四年（一八四三）十一月二十六日、湯島五丁目から燃えだした火は、たちまち定火消し（武家火消し）の屋敷にまで延焼した。ここは聖堂に近い。そのため、定火消しでありながら、万一にも聖堂を焼いたりしては上に対して申しわけが立たぬというので、時の定火消役、室賀兵庫なる五千五百石の旗本も、部下を督励して必死に消火に当たった。

しかし、火勢はいよいよ強くなり、もはや鎮火の手段はないとあきらめかけたとき、勢いよく乗り込んできた一隊があった。見ると、これが一番組の「に」組の頭、八右衛門のひきいる町火消しで、八右衛門が定火消し屋敷の長屋の棟を指さして、「それ梯子！」と命令するや、即座に「おう」とこたえた纏持ちは、猿のような素早さで屋根にのぼり、渦巻く猛火の中に「に」組の纏を押し立てた。

そうした間にも、火はいちだんと火勢を強め、紅蓮の炎は長屋の棟をもなめだしたが、纏持ちはビクとも動じない。炎はもはや足もとまで迫っている。と見た二番組の「ろ」組の頭が、「もう危ない、纏を下ろせ！」と怒鳴った。

ところが、屋上の纏持ちは、「ろ」組の頭に対し、「纏持ちが逃げられるか、倒すならこのまま倒してくれ」と怒鳴り返し、どうしても降りようとしない。もはやむをえぬと、纏持ちを屋上にのせたまま、長屋はひき倒しにかけられ、メリメリとすさまじい音響をたてて倒壊した。

このような纏持ちである。その俠気、いさぎよさが江戸っ子の気風に合い、花形視されたのも当然といってよいだろう。

なぜ一番組は景気がよいか

文化七年（一八四二）に、一番組と十番組が十五年間にわたる大喧嘩の仲直りをした時のこと。まず十番組が手打ちの会場に、これぐらいが相場と踏んだ三百両を持ち出した。ところが、一番組の持ち出したのをみて、さすがの勇肌の兄哥連もさっと顔色を変えた。なんと、一番組は千両を積み上げたのである。

なにしろ、一両もあれば、長屋住まいの職人程度なら、親子五人ぐらいは、寝酒の一杯も飲んでのんきに暮らせた時代である。十番組としては三百両でも大いに奮発したつもりであったのに、その三倍余もの大金を積まれては、面目まるつぶれといってよい。といって、一番組と同額といっても、鳶の者風情においそれとかき集められるような金額ではないから、

「畜生、一番組め、恥をかかしゃがった！」

と騒ぎだし、またまた喧嘩になりそうになった。

これは幸いに調停する者があって、無事に仲直りをすますことができた。一番組が千両を三百両に減らすことで話がついたのだ。

それにしても、一番組は千両などという途方もない大金を、いったいどこから調達したのであろうか。この秘密は、一番組の消火責任区域にある。つまり、その持ち場である日本橋・京橋・神田には、江戸の富豪があつまっているため、いわば場末の十番組などには、手のおよばぬほどの寄付を仰ぐことができたもので、ことに一番組のパトロンが、竹原という幕府御用達をつとめた豪商であったことが、この場合の資金源であった。

火消しの給料はだれが支払うのか

町火消しには月給などない。むろん、火事場で大活躍をしたからといって、格別に給金が支払われるわけでもない。火消しが火事場で消火作業にあたるのは、当然至極の役目だったからである。

では、彼らはただ働きをしたのか？　また、彼らの生活費は一体どこから出たのか？　という疑問が当然出てくると思う。年に一度、町内の印袢纏をもらい、盆暮れの二回、町の各商店

から心づけをもらったぐらいでは、女房子持ちの火消しはむろんのこと、独身者の暮らしだって成り立つはずはない。

実は、彼らはたしかに給料はもらえないが、町内から給料と同じくらいの収入が得られる仕組みになっていたのである。

その仕組みというのは、町内における大工や壁職の足場、地固め、道路修理、溝の掃除、祭礼の軒飾り、正月の門松など、すべてが彼らの独占的作業とされており、絶対に他の者が手を出すことを禁じられていたため、結構、毎日が多忙であり、また収入の道が断たれるようなことはなかったのだ。

このように、生活費の一切が町内から出たため、彼らはその役目たる消火作業には、身命を賭して働いた。いや、彼らが町内のためにつくしたのは、火事場における消火ばかりではない。町内に発生するあらゆる事件——泥棒、ゆすり、万引、乱暴狼藉などに対しては、たとえ相手が武士であろうとなんであろうと、命がけでこれを取りおさえ、これを自身番に引き渡すという、いわば町内お抱えの巡査的な役割も果たしたのであった。

天保のころ、芝伊皿子の三番組に留吉というのがいた。これが升屋という酒屋のお抱えであったが、江戸でも知られた魚籃観音の縁日に、一人の武士が抜刀して乱暴におよんだ際、騒ぎをきくなり両肌脱ぎとなった彼は、その狼藉者にパッと組みついた。

すると、一瞬白刃がきらめいたとみるや、留吉の右腕が宙に飛んだ。しかし、彼はそれでもひるまず、左腕のみで武士を捕らえ、自身番まで引きずっていき、最後に溝の中へまっさかさまにたたき込んだというので、当時、江戸中の評判をとった。この三番組の留吉の行為など、町内における火消し鳶の者の役割を、もっとも端的に示しているといってよい。

（永岡慶之助）

山手樹一郎長編時代小説全集13
鳶のぼんくら松　他二編
発行——一九七八年五月二五日初版
著者——山手樹一郎©
装画——国貞（静嘉堂文庫提供）
装丁——玉井ヒロテル
発行者——和田欣之介
発行所——株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三一四一一六
〒一〇三　☎東京二七一一〇〇五一　振替東京〇一六一七
印刷製本——城北印刷製本センター
◆——定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします